来たる艱難期：黙示録の歴史

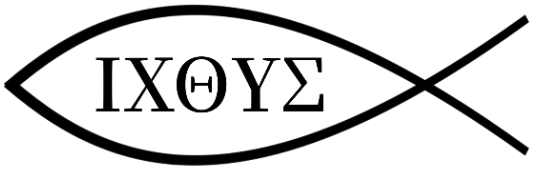
第 5 部：

ハルマゲドンと再臨

黙示録 16 章 1 節 – 19 章 21 節

https://ichthys.com/Tribulation-Part5.htm

ロバート・D・ルギンビル博士著



内容

I.　鉢の裁き: 黙示録 16 章 1-21 節 2
1. でき物 (1-2 節) 4
2. 血に変わる海 (3 節) 6
3. 血に変わる水 (4-7 節) 6
4. 激しい炎熱(8-9 節) 7
5. 闇 (10-11 節) 9
6. ハルマゲドンへの備え (12-16 節) 17
7. 地震と雹 (17-21 節) 28
II. バビロンへの裁き: 黙示録 17 章 1 節-19 章 4 節 32
1.　獣に乗る女、バビロン:黙示録 17 章 1-14 節 32
A. 獣に乗る女バビロン(1-6 節) 33
B.　バビロンが乗っている獣(7-14 節) 36
2. バビロンへの憎しみ　黙示録 17 章 15-18 節 39
3.　バビロンは滅びた 黙示録 18 章 1-3 節 41
4. バビロンから離れ去れ: 黙示録 18 章 4 節 43
5.　バビロンが滅ぼされる: 黙示録 18 章 5-8 節 51
6.　バビロンのための哀歌 : 黙示録 18 章 9-19 節 64
7.　バビロンに対する天の歓喜　黙示録 18 章 20 節-19 章 4 節 67
III.　獣のハルマゲドンの十字軍 70
IV.　再臨の兆し 黙示録 19 章 5 節 92
V. 小羊の花嫁の復活:黙示録 19 章 6-10 節 99
VI. イスラエルの悔い改め 119
VII. 再臨とハルマゲドン: 黙示録 19 章 11-21 節 122
1.　神の言葉の到来: 黙示録 19 章 11-16 節 123
2.　殺戮への誘い　黙示録 19 章 17-18 節 130
3.　反キリストとその軍勢　黙示録 19 章 19 節 132
4.　獣と偽預言者の捕縛　黙示録 19 章 20 節 134
5.　ハルマゲドンの戦い　黙示録 19 章 21 節 136
a.イエス・キリストのオリーブ山での再臨(ゼカリヤ 14 章 2-7 節)。 136
b. 恐るべきしるしと驚異: 140
c.　イスラエルの戦い 141
d. 大いなる殺戮 : 146
6.　悪者の屈辱と贖われた者の喜び 156

序文：

艱難期の後半における最も重要な出来事は、私たちの敵である悪魔が獣を遣わして、地上から信仰と信者たちを完全に根絶やしにしようとしているので、信者たちの観点から見ると、それは大迫害とそれに伴う殉教です。もしこの邪悪な仕業と反キリストの体制が、それ以上妨げられることなく継続するとしたら、地上において信仰を持つ残りの者たちが絶滅するだけでなく、「肉ある者は誰一人として生き残れない」ことになっていたでしょう。まさに「選ばれた者のため」に、私たちの主は「その期間を縮められる」のです（マルコ 13 章 20 節）。神は人間のしている事に直接かつ強力に介入され、艱難期の最後の年の鉢の裁きに始まり、サタンと獣の世界支配を困難にし、やがては逃れることも妨げることもできない主イエス・キリストの、ハルマゲドンでの栄光と裁きの再臨へ導きます。そして、その際に、信者たちに休息が与えられるのです。 ここまで生き残った人々へのメッセージは明確です。「強くあれ、恐れてはならない。見よ、あなたがたの神は報復をもって臨み、神の報いをもってこられる。神は来て、あなたがたを救われる」（イザヤ書 35 章 4 節後半）。

(25)また日と月と星とに、しるしが現れるであろう。そして、地上では、諸国民が[大いに]悩み、海と大波とのとどろきに[大いに]おじ惑い、(26)人々は世界に起ろうとする事を思い、恐怖と不安で気絶するであろう。もろもろの天体が[激しく]揺り動かされるからである。(27)そのとき、大いなる力と栄光とをもって、人の子が雲に乗って来るのを、人々は見るであろう。(28)**これらの事が起りはじめたら、身を起し頭をもたげなさい。あなたがたの救が近づいているのだから**」。(29)それから一つの譬を話された、「いちじくの木を、またすべての木を見なさい。(30)はや芽を出せば、あなたがたはそれを見て、夏がすでに近いと、自分で気づくのである。(31)このようにあなたがたも、これらの事が起るのを見たなら、神の国が近いのだとさとりなさい。(ルカ 21 章 25-31 節)

I.　鉢の裁き: 黙示録 16 章 1-21 節

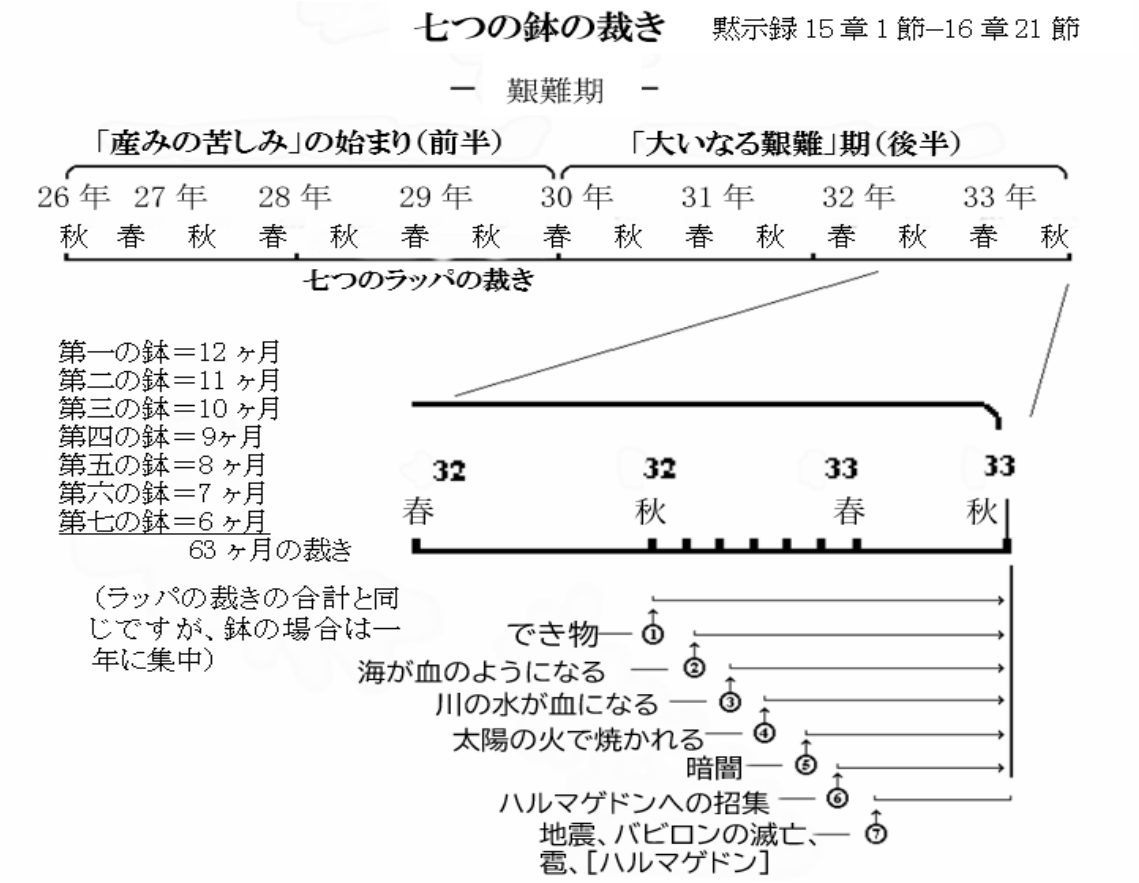
大艱難期の年表の中での鉢の裁きの正確な位置づけに関して、聖書はそれらの出来事の理に適うタイムラインを予測できるようにいくつかの手がかりを提供しています。16 章を通して明らかにされているように、鉢の裁きの正確な終点はハルマゲドンと再臨です(特に、黙示録 16 章 16-17 節参照)。なぜなら、これらの出来事とそれに至る過程は、第六と第七の鉢であり、またそれに含まれるからです。 さらに、これらの七つの鉢の裁きの開始点は、大艱難期の最後の三年半の間のある時点であるはずです(黙示録 11 章 15-19 節に続き、19 章でのキリストの再臨に先立つ他のすべての出来事とともに、大艱難期を表す第七のラッパの一部であることは明らかです)。ですから、七つの警告の裁きと七つの刑罰の裁きの間には、明らかに関係がありますが、(大艱難である第七のラッパの 42 月を含めば)ラッパの裁きの警告の月数は合計 63 ヶ月ですから、一見すると、鉢がラッパと並列することは不可能に見えます。一方、大艱難期の開始点と終了点から得られる期間は、せいぜい 42 ケ月です。もちろん、実際の日数の合計は42ヶ月よりも遥かに少なくあるべきです。というのは、大艱難期の始まりには、大迫害のためにかなりの時間が必要だからです(大迫害に対する神の対処として鉢があるからです;参照:黙示録 16 章 5-7 節)。 正しい解決策は、鉢の裁きの効果を重複することです(つまり、次の裁きが始まっても、それぞれの裁きの効果は継続し、キリストの再臨まで七つすべての効果が継続するということです)。 このように、「ラッパの裁き」が表す 63 ヶ月の(順次的な)警告と平行して、合計 63 ヶ月の裁き(部分的に重なる)が行われ、同時に「鉢の裁き」を大艱難期の後半に合理的かつ実行可能な方法で組み入れることができます。

この図式は、警告の裁き＜七つのラッパの裁き＞における段階的で(比較的)耐えられる苦難とは対照的に、耐え難いほどの罰を課すという、高まり続ける罰の厳しさに確かに沿ったものです。ハルマゲドンの戦い全体と再臨に先立つ他のすべての出来事からなる第六と第七の鉢は、この図の軸となるものです。 すでに見たように、ハルマゲドンと主の再臨は(贖罪の日に象徴されるように)[1] 秋に起こり、第六と第七の鉢の出来事は、その前の夏と春の大部分を必要とするので(世界中から獣の軍隊をイスラエルに召集し移動させることは、特に時間のかかる計略を要する仕事です)、第七と第六の鉢の裁きをそれぞれ 6 ヶ月と 7 ヶ月とすることは、出来事の流れに合致しています。

また、この図式は、鉢の審判を一つ重ねるごとに、さらに一ヶ月を追加することによって(つまり、7 回目から 1 回目までの鉢の審判の合計が 6 ヶ月、7 ヶ月、8 ヶ月、9 ヶ

[1] 『サタンの反逆第 5 部「裁き・回復・置き換え)」.III.8.c 節「ユダヤの祭儀暦」を参照ください。

月、10 ヶ月、11 ヶ月、そして最後に 12 ヶ月)、合計 63 ヶ月になり、しかも、時系列的にはわずか 12 ヶ月になるということも有利な点です(上の図から分かるとおりです)。



＜七つのラッパの裁きのチャートは、「来たる艱難期第3部 B:反キリストとその王国」の印刷本 182 頁参照; リンク先のファイルでは 76 頁参照＞

この鉢の裁きの年代を推定するモデルには、次のような利点があります:

1) 七つのラッパが大艱難期の前段階であるように、七つの鉢は主の再臨とハルマゲドンの戦いでの獣と悪魔とその手下たちを裁かれることを予期して、裁きの高まるクレッシェンドを表しています。

2) これらの裁きは大迫害に対して与えられる神の対処であるため(黙示録 14-15 章と 16 章 5-7 節; 参照.イザヤ 35 章 4 節と黙示録 19 章 15 節)、鉢の裁きが始まる前に、まずそうした迫害が起こるのには十分な時間が必要です(見てきたように、迫害が許されるためのかなりの時間を要します)。この図式ではその時間を持たせることができます。

3) 大迫害とハルマゲドンの間に鉢の裁きを入れることができます(これは、艱難期の最終年の年表に提案されているものより長いとは考えにくいことです)。

4) これ＜図表のモデル＞だと、第五と第六の鉢の裁きの対象である全世界の軍隊が艱難期の最終年の春と夏にかけてハルマゲドンに集結し、ハルマゲドン自体は(贖罪の日と重なる)秋に行われ、また獣の侵入軍とイスラエルの間の預言された戦争に必要な時間も充てることができます。

5) この最後の一年間に起こると預言されている他の出来事、すなわち、(獣を一時的にエルサレムから連れ出す出来事となる)獣の王国が闇に覆われること、バビロンとイスラエルの反乱、バビロンの破壊と略奪、ハルマゲドンに備えたイスラエルの侵攻などのため、＜この図表のモデルだと＞十分な時間があります。

それは【主】の復讐の日であり、シオンの訴え[2]のために**仇を返す年**である。(新改訳Ⅲイザヤ 34 章 8 節)(参照:イザヤ書 63 章 4 節)

この懲罰的な裁きの期間は、最初から最後まで 12 か月間だけですが、この事実から、鉢の裁きがそれほど激しくないという考えを導き出すべきではありません。全く逆です。 このような考えは、ヨハネの黙示録第 16 章をざっと読んだだけでも明らかなように、この第二の裁きの性質と効果によって簡単に否定されます。さらに、重なり合うことなく順番に行われるラッパの裁きとは対照的に、それぞれの鉢の裁きの影響は、ハルマゲドンの戦いと主イエス・キリストの再臨による艱難期の終わりの時まで継続します。 この「容赦ない一撃が次々と加えられる」という積み重ねは、神の怒りの対象が神の慈悲を断固として明確に拒絶した場合の、神の罰のパターンの特徴です(申命記 28 章 16-68 節; 第二テサロニケ 1 章 9 節参照)。したがって、これらの最後の七つの裁きが執行される方法には、その懲罰的な性質が反映されています(ラッパの裁きの警告的な性質とは対照的です。黙示録 15 章 1 節, 15 章 8 節, 16 章 1 節を参照)。

1. でき物 (1-2 節)

(1)それから、大きな声が[天の]聖所から出て、七人の御使にむかい、「さあ行って、神の激しい怒りの七つの鉢を、地に傾けよ」と言うのを聞いた。(2)そして、第一の者[天使]が出て行って、その鉢を地に傾けた。すると、獣の刻印を持つ人々と、その像を拝む人々とのからだに、ひどい悪性のでき物ができた。(黙示録 16 章 1-2 節)

---

[2] このシリーズの第 1 部、第 IV 章 1.b 節 2 項「報復の日」＜73 頁＞で説明されているように、この「日」と「年」は、厳密に言えば、艱難期全体、すなわち「主の日」を指しています。＜印刷本「来たる艱難期 第一部」73 頁参照＞

鉢: ギリシヤ語のフィアレ(φιάλη)<鉢>は、ラテン語のパテラ(patella の指小語)に相当し、大きくて深い受け皿(中くらいの深さのピザ鍋の大きさ)です。この深皿は古代では一般的に神酒に使われたので、一般的にお供えものを捧げるために使われていました。椀や杯、壺といった実用的な道具の代わりにこの皿が選ばれたのは、間違いなく、香りの発散、噴出の可視性、そして湿らせる面積を最大化するために、液体を分散させるのに適していたためです。ですから、この例えの場合、このような特殊な儀式用具を使うことによって、私たちが理解すべきイメージは、裁きの広範で具体的な性質です:鉢の裁きの結果は、ラッパの裁きよりもさらに強調された広範なものであることを意味しています。

七人の天使: 七という数字は、ラッパの裁きの場合と同様に、大天使が再びこの一連の裁きを管理することを示唆しています[3]。ラッパを吹き鳴らす際と同様に、鉢が注ぎ出されるのは開始の命令を構成しています。この命令を受けて、各大天使の指揮下にある多くの選ばれた天使たちが、それぞれの裁きを実行する責任を負うことが理解できます。ラッパの裁きと鉢の裁きの重要な違いは、前者では各天使が個別にラッパを吹くように命令されたのに対し、ここでは七人の大天使が同時に「神の怒りの七つの鉢を地の上に注ぐ」ように命令されていることです(このことは、上記の鉢の裁きの期間が重なっていることをさらに証明するものです)。

でき物: 肉体的な苦痛だけでなく、皮膚の傷は心理的に大きな負担となります。なぜなら、それらは簡単に頭から離れないと同時に、他人には一目瞭然だからです。悪魔はヨブを肉体的に攻撃する機会を与えられたとき、人間の性質を鋭敏に見抜いて、「頭から足まで痛む腫れ物」を選んでヨブを撃ちました。ここで問題になっている腫れ物は、出エジプト記の第六の災いの時にエジプト人を苦しめた「腫れ物」(出エジプト 9 章 8-12 節)を思い起こさせ、最初の鉢が注がれた直後に、獣に従う者たちに「起こる」のです。この聖句は彼らを対象としているため、信者は免除されることになるので安心できます(これまで見たラッパの裁きの多くの効果と同様に、出エジプト 15 章 26 節参照)。腫れ物は「ひどい悪性の」と表現されています。このギリシヤ語の単語(カコス κακός とポネロス πονηρός)は一般的なもので、前者は醜い外見を、後者は不快な性質を指していると思われます。これらのでき物は、主が栄光のうちに再臨されるまで、獣を崇拝するすべての人々に、神に喜ばれていないことを常に思い起こさせるものとして機能していると言えば、十分でしょう。

---

[3] このシリーズの第 3 部 A.I.1「七つのラッパを持つ七人の大天使」参照<印刷本の 2 頁参照>。

2. 血に変わる海 (3 節)

そして、第二の[天使]がその鉢を海に注ぐと、それは死んだ[人]の血のような血となり、海に接していたすべての生き物が死んだ。(英文訳:黙示録 16 章 3 節)

この第二の鉢の裁きは、海の三分の一が血になった結果、海の中の生き物の三分の一だけ、死ぬという第二のラッパの裁きを、明確に激化したものです(黙示録 8 章 8-9 節)。 海の**中の**すべてのものが滅びるのではなく、この裁きが下る時に海と接触しているすべての生き物が滅びるので、人間の死をも意味します(黙示録 8 章 9 節後半参照)。獣の従者全員に現れるでき物と同様に、この地球の海の災いは、パロとエジプト人がイスラエル人を迫害した時の災いを思い起こさせるものとなっています(出エジプト 9 章 8-12 節と出エジプト 7 章 14-24 節を比較してください)。そして、パロとその軍隊がその一連の裁きの終了後すぐに滅ぼされたように、主がハルマゲドンの戦いで反キリストとその大軍を全滅させるときにも、そうなるのです。しかし、その時が来るまでは、この血の裁きと、食糧源としての海の剥奪は、最初の鉢の裁きによるでき物のように、世界の反神派の人々にとって、その祝福された終わりが訪れるまで重くのしかかり続けるでしょう。最後に、この 3 つの事例では、血は文字どおりの血であり、現実への復帰や悔い改めができないほど硬化した心(反キリストとその信奉者に共通する状態)を除いては、この裁きの源が神であることの現実を反論することは不可能であることに注意すべきです。この裁きには神の力と義がはっきりと表れていて、否定できない悪の証拠があるにもかかわらず、世界は頑なに悔い改めることを拒むのです。

3. 血に変わる水 (4-7 節)

(4)第三の者[天使]がその鉢を川と水の源とに傾けた。すると、みな(すなわち、すべての淡水は)血になった。(5)それから、水をつかさどる御使(すなわち、第三の天使)がこう言うのを、聞いた、「今いまし、昔いませる聖なる者よ。このように[七つの鉢のさばきを]お定めになったあなたは、正しいかたであります。(6)[あなたの]聖徒と預言者との血を流した[地に住む]者たちに、血をお飲ませになりましたが、それは当然のことであります」。(7)わたしはまた祭壇がこう言うのを聞いた、「全能者にして主なる神よ。しかり、あなたのさばきは真実で、かつ正しいさばきであります」。(黙示録 16 章 4-7 節)

前回の鉢の審判が地球上の海に影響を与えたように、今回の第三の裁きは淡水に影響を与えます。ちょうどイスラエル人がナイル川の呪いの時に守られたように(出エジプト記 7 章 18 節と 7 章 21 節「**エジプト人**はその水を飲むことができない」)、

この時まだ生きているクリスチャンは、何らかの猶予を与えられると期待してもよいでしょう。獣の崇拝に屈しなかった人々の救済の方法や手段はここでは明確に示されていませんが、上記の節から、この刑罰は反キリストの信者たちに特に向けられたものであることは明らかです(5b-6 節は、この原則を七つの鉢の裁きすべてに適用しています)。忘れてならないのは、水は神の言葉の命を与える真理の象徴です(イザヤ 55 章 1 節; ヨハネ 3 章 5 節; 3 章 8 節 [ギリシヤ語]; ヨハネ 4 章 10 節, 4 章 13-14 節, 7 章 37-39 節; 第一コリント 10 章 4 節; エペソ 5 章 26 節; ヘブル 10 章 22 節; 第一ヨハネ 5 章 8 節; 黙示録 7 章 17 節, 21 章 6 節, 22 章 1 節, 22 章 17 節; 参照. 出エジプト 17 章 5-6 節; 民数記 20 章 8 節; 詩篇 36 篇 8-9 節, 42 篇 1-2 節, 63 篇 1 節, 84 篇 5-7 節; イザヤ 8 章 6 節, 12 章 3 節, 41 章 17 節, 44 章 3 節, 55 章 10-11 節; エレミヤ 2 章 13 節, 17 章 13 節; 第一コリント 3 章 6-7 節; ヘブル 6 章 7 節)。 したがって、世界の清水が裁きの象徴である飲めない水に変えられるという、この裁きの妥当性は非常に明確であるはずです。獣を崇拝する者たちが真理の甘い水を拒み、それを愛する者たちの血を流したように、真理を象徴する新鮮な水への入手手段も奪われ、飲めない血に取って代えられたからです。ここで、神の正義について一言述べておくべきです。世界中の無数の人々に恐ろしい、考えられないような裁きが下っているように見えるかもしれませんが、第三の天使はここで、獣に従い、獣を崇拝することによって、真の教会、イエス・キリストを信じる人々への大規模な迫害を促進した世界の悪の責任を課す、神のまさにその正義を讃美しているのです。確かに第 6 節では、「聖徒と預言者」の血を流す罪を問われているのは「地の住民」です。現代に蔓延する道徳的なあやふやさからすれば、海の生物のすべてを滅ぼし、すべての淡水を汚染し、多くの人々を痛みを伴うできものによって厳しく罰することは、間違いなく大きな非難の的となるでしょうが、神は完全に「これらの裁きを下すことにふさわしい」のです。天使の賛美歌によれば、それらは純粋で、善良で、正しいものであり、この評価は、十字架の祭壇で全人類のために死なれた人の子自身、(すなわち、ここに描かれている天上の香の祭壇によって象徴されている犠牲となられた)私たちの愛する主、救い主イエス・キリストによって支持されています。「全能の神、主よ、あなたのさばきは真実で正しいです。」

4. 激しい炎熱(8-9 節)

(8)第四の者が、その鉢を太陽に傾けた。すると、太陽は火で人々を焼くことを許された。(9)人々は、激しい炎熱で焼かれたが、これらの災害を支配する神の御名を汚し、悔い改めて神に栄光を帰することをしなかった。(黙示録 16 章 8-9 節)

最初の裁きのでき物と同様に、この災いもまた、獣を拝む者たちの皮膚(上で指摘し

たように、目に見え、集中的な苦しみを受ける場所)に、でき物の災いよりもさらに大きな即時性と激しさで影響を及ぼします。 これらの聖句に記されている灼熱の種類と、それが不信仰な世界全体に影響を及ぼすという事実は、人がどのような予防措置を取ろうとしても、この災いが超自然的に影響することを論証しています。 出エジプト記の災いのカエル、ハエ、ブヨ、イナゴがエジプト人の家の奥深くまで入り込んだように(そして、彼らはそれを防ぐことができませんでした)、反キリストの信奉者たちにとって、このやけどを完全に避けることは不可能だと思われます(出エジプト 8 章 3 節, 8 章 17 節, 8 章 21 節, 10 章 6 節参照)。 一方、ここでも、イエスに忠実であり続ける人々に対する主の神の保護が予想されます(第一テサロニケ 1 章 10 節):

> 主はあなたを守る者、主はあなたの右の手をおおう陰である。 昼は太陽があなたを撃つことなく、夜は月があなたを撃つことはない。(詩篇 121 篇 5-6 節)

この第四の鉢のさばきの時までに、呪いの累積的な影響と蓄積、すなわち、でき物、海の荒廃、飲めない淡水、そしてこの灼熱の暑さによって、反キリストの信奉者たちの反抗心が、ついに挫かれることになると人は予想するかもしれません。というのも、これらすべての出来事が同時に、これほどの力と効果をもって押し寄せてくれば、天地を造られ、私たちの命そのものをその手に握っておられる神に逆らうことの非常識さを、疑う余地はないだろうと思うからです。 ところが、この真理に屈服することなく、神の優越の明白な事実を認めて叫ぶことなく、悔い改め、神の御名にふさわしい栄光を神に帰することなく、獣を崇拝する者たちは、このようなどうしようもない裁きを前にして、その聖なる御名を冒涜する厚かましさを持っているのです！ おそらくパロの例を除いては、悪を受け入れることによって心が硬くなって盲目になることを示す、より強力な証拠は聖書の中に見当たりません[4]。実際、パロこそ、同じような盲目の傲慢さの中で、同じように抵抗できない災いに直面しても、言い逃れできないほど反抗的に天の神に反対し続けた人物です(出エジプト 9 章 16 節)。 しかし、パロの容赦ない抵抗が、神の力を示すと同時に、パロの傲慢な性格の頑なさ、深さ、取り返しのつかなさを疑問の余地なく証明することで、神の計画を促進する役割を果たしたのと同じように、今、神に向けられたこの呪いは、非常に無力であると同時に、非常に恐ろしいものであり、獣の従者たちをその邪悪な道から振り向かせるには、どんな憐れみや裁きも決して十分ではないことを示す役割を果たすだけなのです。 この信じがたいほど傲慢な振る舞いは、以前の世界の支配者であった「金の頭」ネブカデネザルが、畏敬の念を抱かせる神の力に自ら直面したとき、主の懲らしめに応えてへりくだったのとは対照的です(ダニエル 4 章 28-36 節):

---

[4] 出エジプト記 14 章:「パロの心を堅くする」シリーズ、および本シリーズのパート 3A「苦難の始まり」II.c「背教のプロセス」参照

そこでわれネブカデネザルは今、天の王をほめたたえ、かつあがめたてまつる。そのみわざはことごとく真実で、その道は正しく、高ぶり歩む者を低くされる。(ダニエル 4 章 37 節)

5. 闇 (10-11 節)

(10)第五の者[天使]が、その鉢を獣の座に傾けた。すると、獣の国は暗くなり、人々[住民]は苦痛のあまり舌をかみ、(11)その苦痛とでき物とのゆえに、天の神をのろった。そして、自分の行いを悔い改めなかった。(黙示録 16 章 10-11 節)

闇はすべての神の裁きの中で、最も著しいものの一つです(例:出エジプト 10 章 21-23 節, 14 章 20 節; イザヤ 8 章 22 節; マタイ 8 章 12 節, 22 章 13 節, 25 章 30 節; ルカ 16 章 24 節; 第二ペテロ 2 章 4 節, 2 章 17 節; ユダ 1 章 6 節, 1 章 13 節)。神は光であり、神の中に闇はない(第一ヨハネ 1 章 5-7 節; 参照. ヨハネ 1 章 3-9 節)からです。光、つまり神の真理に対する反応は、このように、被造物の真の性格の普遍的なリトマス試験です。ですから、サタンの謀反に応えて宇宙の光を消されたように(創世記 1 章 2 節)[5] 神はこの暗闇の裁きを、ご自身の御力と、そしてその裁きを被る人々の真の性質を明らかに表すために用いられます。反キリストとその最も熱心な信奉者たちには、完全に盲目な、光を失った行為によって受けるにふさわしい、彼らが本当に愛した暗闇が与えられるのです(創世記 19 章 11 節; 申命 28 章 28-29 節; 列王記下 6 章 18-; 使徒行伝 13 章 11 節を参照)。

そのさばきというのは、光(イエス・キリスト)がこの世にきたのに、人々はそのおこないが悪いために、光よりもやみの方を愛したことである。 悪を行っている者はみな光を憎む。そして、そのおこないが明るみに出されるのを恐れて、光にこようとはしない。 しかし、真理を行っている者は光に来る。その人のおこないの、神にあってなされたということ(すなわち、神の御心に適ったこと)が、明らかにされるためである。(ヨハネ 3 章 19-21 節)

第 4 のラッパの裁き(黙示録 8 章 12 節)の暗闇と同様に、獣の王国(地球の約 4 分の 1 を占める)が、ここで言われているような、少なくとも完全な暗闇に投げ込まれることを、その時、人々が合理的に説明することは不可能でしょう。しかし、繰り返しになり

[5] 「サタンの反乱」第 2 部参照: 艱難期の背景 「創世記のギャップ」II.2「闇」 。

ますが、この裁きには紛れもなく神の力が現れており、この裁きがもたらす痛みと苦しみは、謙遜と悔い改めの反応を引き起こすべきですが[6]、反キリストの崇拝者たちの完全に硬化した心には、天と地を創造し維持される方に対する無力な冒涜しか引き起こさないでしょう(参照.エレミヤ 6 章 27-30 節; エセキエル 22 章 17-19 節)。この点でも、この鉢の裁きの超自然的な暗闇は、少なくとも再臨の直前の暗闇を予見しています。この時、獣とその従者たちは光ではなく、暗闇に熱心に仕えたことで、ついに滅ぼされます(イザヤ 13 章 9-13 節, 34 章 4 節, 60 章 1-3 節; エゼキエル 32 章 7-10 節; ヨエル 2 章 2 節, 2 章 10 節, 2 章 31 節, 3 章 15 節; ゼパニヤ 1 章 15-18 節; ゼカリヤ 14 章 6-8 節; マタイ 24 章 29 節; マルコ 13 章 24-25 節; 使徒行伝 2 章 17-21 節; 黙示録 6 章 12-13 節)[7].

ここで言及されている暗闇が「獣の王国」だけに影響を与えることは、非常に重要なことです。 第四のラッパの裁きは、太陽、月、星からの光の放出が三分の一に減少したのに対して、ここでは暗闇が絶対的に描写されているので、一見、激しくないように見えますが、地球全体が悪影響を受ける最初の裁きであったことが思い出されます。それとは対照的に、この暗黒は、直接被害を受けた地域では全体的であるものの、ある特定の地域、すなわち獣の「王座」と「王国」にのみ、影響を及ぼすと言われています。艱難期のこの時点では、反キリストは全世界をある程度支配しており、例えば、地球上のあらゆる場所で大迫害を組織することができるほどです。しかし、ここで使われている「王座」と「王国」という用語は、正確には全世界を意味するわけではありません。具体的には、黙示録 16 章 10 節は、バビロンを占領した後、獣の世界支配の権力基盤を構成するようになった十カ国連合(すなわちヨーロッパ大陸)の原初の七カ国を指しているはずです。

> (40b) そして、[獣は][南方同盟の]国々に侵入し、[彼らに]大水のように押し寄せ、[彼らを]一掃し、 (41) 麗しい国(すなわち、イスラエル)へと進んで行くであろう。 さて多くの国が彼の前に倒れるが、これらは彼の支配から逃れる: エドム、モアブ、そしてアモン人の子らの最初の領土[の一部]である。 (42)また、[反キリストは]その支配を(南方同盟の)諸地域に広げ、エジプトの地さえも逃れることはないだろう。(43) こうして、[反キリストは]金銀の貯蔵所のすべてを支配し、エジプトの財宝のすべてをも支配し、リビア(=北アフリカの代表)とクシュ(=スーダン・エチオピア)はそのあとに[服従して]従うであろう。(44)**しかし、東と北から**

---

[6] 第 4 のラッパの裁きに関する本シリーズの第 3 部 AIII.4「天体の光が撃たれる」<印刷本では「第3部 A:艱難期の始まり」210 頁->参照

[7] 「サタンの反乱」第 2 部: 艱難期の背景 「創世記の空白期」、II.2.d.3、「再臨の際の超自然的暗闇」参照。

[来る]知らせが彼を煩わせ、その結果、彼は大激怒して[イスラエルを]出発し、多くの者を滅ぼし、絶滅させるであろう。(45)それから[イスラエルへ戻って]、海(地中海と死海)の間の、聖なる麗しい山(エルサレムの神殿の山)の近くに、自分の[王宮の]天幕を張るのである。しかし、[(ハルマゲドンの戦いでの彼の成功への)希望にもかかわらず、]彼は最期を迎え、誰も彼を助けることはできない。(ダニエル 11 章 40 節後半-45 節/ESV)

先に見たように、上記の 40 節後半-43 節は、獣が南方連合を征服し、艱難期の後半にその勢力を拡大することを述べています。そして、44 節では、反キリストのその後の行動、特に現在学んでいる第五の鉢の裁きの時の行動について、さらに重要な情報が与えられています。そのとき獣は、「知らせ」が「彼を煩わせる」ので、エルサレムを去ります。その「知らせ」は、「東と北」から発せられると言われています。その知らせによって、獣は「激しい怒り」に襲われ、「多くの者を滅ぼし、絶滅させる」ようになるのです。次の 45 節の文脈は、ハルマゲドンの戦いに明らかに言及しており、それは獣が、帰還する勝利の主の手によって、最期を迎える場面です。つまり、44 節の反キリストのエルサレムからの急な出発は、この二つの出来事の戦に挟まれなければならず、与えられた記述では、再臨の直前に起こるように見えます(ゼカリヤ 9 章 8 節;「通り過ぎて帰る者(すなわち反キリスト)」という訳もあり-NASB 訳)。このように獣を激怒させ、エルサレム神殿にある新しい世界本部を放棄させて、広範囲に及ぶ破壊的な懲罰キャンペーンを行わせるこれらの「報告」の原因を、第五の鉢の裁きの闇であるとの解釈を促す多くのものがあります[8]。ダニエル 11 章 40-45 節では、大艱難期の後半とキリストの再臨の間に<エルサレムを離れる>出発があるように、黙示録 16 章では、第五の鉢の裁きはハルマゲドンの作戦(第 6 の鉢の裁き)の直前に起こり、同様に大艱難期の後半に位置します(例として、大艱難期と四つの鉢の裁きに続きます)。第七の鉢の裁きでバビロンが特別に扱われるのと同じように、ここでは地球の四分円北方部(基本的に反キリストのヨーロッパ七カ国連合と同義ですが、地理的な理由でイスラエルを省きます)が同様に特別に扱われます-バビロンのように破壊されるのではなく、暗闇に陥れられます。このようにヨーロッパ大陸全体が闇に包まれることは、特に反キリストの社会・経済政策の恐ろしさを考えれば、多くの政治的・社会的混乱の原因となることは間違いありません(つまりこの機会を利用して、彼の支配から逃れようとする人が大勢いることは間違いありません)[9]。 このとき、反キリストが世界の東半球を支配する程度は、前

---

[8] イザヤ書 37 章 9 節に描かれている、同様の「うわさ」によってアッシリアの王(このシリーズの第 3 部 B で見てきたように、反キリストを予型的に連想させます)がイスラエルの地を去るという状況を比較してみてください。

[9] このシリーズの第 2 部 B.IV「7 つの封印」、および第 3 部 B.II.2.c、「反キリストの政策から得られるもの」参照。

に述べたように、全体的な軍事、政治、経済の支配に基づいており、大規模な軍事占領ではなく、主に代理人ら(すなわち、「東方の王たち」)を通して行使されます(これにおいても、実質的な海軍の優位性を展開することは否定できませんが)。したがって、暗闇になるという裁きを受けるわけではないけれども、この未曾有の事態がもたらす世界的な指揮統制の混乱は、少なくともこれらの東方の政権に、政治的独立の度合いが高まるようなうわさを巻き起こすと考えるのが妥当でしょう。 自分の権力と地位を脅かすものに対して、特に今回のような潜在的に深刻な事態になると、精力的かつ冷酷に反応するのは、確かに反キリストの性格に沿ったものです。このような状況において、恐怖政治によって北方の反乱の兆候を鎮め、東方の政治的独立の動きを封じることは、44 節に用いられている言葉から理解することができます。つまり、反キリストが一時的にエルサレムを離れる際に「激怒して」、世界帝国の欠陥を修復するために「多くのものを破壊し絶滅させる」方法を取るということです。

ダニエル 11 章 45 節では、反キリストがイスラエルに戻り、エルサレムの中にではなく、むしろエルサレムに**対して、**不吉な意図をもって陣取る様子が描かれています。44 節と同様に、この描写は黙示録 16 章にある、第五の鉢の裁きで北の方が暗くなった直後に、「東の王たち」は、反抗を続けるどころか、今や反神のハルマゲドン作戦に本格的に参加することと完全に調和しています(黙示録 16 章 12 節)。 このような展開と、間もなく再臨される主イエス・キリストと戦うために世界中の軍隊が集結すること(下記 VII 章に詳述)は、暗闇によって支配が乱された後、北と東に再び権威を確立しようとする反キリストの努力が、完全に有効であったことを示すに十分です。

ユダヤ人の反乱:

このシリーズの第 3 部 B で、反キリストの第二次南方作戦(エルサレムの神殿に居を構える作戦)について述べましたが、バラムの預言によれば、このときイスラエルは「厳しい扱い」を受けると言われています(民数記 24 章 23-24 節)。 この「厳しい仕打ち」の多くは、反キリストがエジプトからイスラエルに帰還した後、彼に対する企てが失敗した時の「怒り」を預言したものであることは間違いありません(ダニエル 11 章 30 節)。 したがって、その時にイスラエルで受ける虐待の大部分は、反キリストが自分を暗殺しようとした罪を償わせるために、身代わりとして選んだモーセとエリヤと 144,000 人に対する獣の戦いと密接に関係しているのです(黙示録 11 章 7-13 節)。また、このような展開の結果、特にこの時点から獣がエルサレムに居を構えるという事実を考慮すると、この時点のイスラエルにおける個人の自由は、反キリスト帝国の他の地域よりもさらに制限されると予想されます。モーセとエリヤのメッセージに抵抗しながらも、反キリストを神として心から受け入れるには至らなかった保守的な不信心者と熱心党者らは、獣が自

らをイスラエルの聖なる者として称することに、非常に憤慨することになります。実際、3B で示唆したように、前回の暗殺未遂の原因はこれらの界隈にある可能性が高く、艱難期の中頃に起こる彼とイスラエルとの間の「(偽メシヤ)条約の破棄」は、不穏が続く大きな原因となるでしょう(ダニエル 9 章 27 節)。

しかし大艱難期の間、イスラエルには政治的自由はないかもしれませんが、世界の他の地域と比べると、エルサレムが世界の首都になったおかげで、少なくともある程度の物質的繁栄を経験することになるでしょう。 こうして、寺院への巡礼や大迫害に関連した使節団が生まれる一方、また獣が主張するメシヤ的約束の擬似的な成就の一環として、「自分の足元」を輝かせたいという願望(イザヤ 60 章 13 節)により、物質的にはある程度豊かになりますが(ハルマゲドン前に比較的豊かに見えるエゼキエル 38 章 7-16 節参照)、霊的にはこれ以上ないほど卑しい時代となることでしょう。 しかし聖書は、物質的に比較的繁栄していても、国民の大部分は獣の支配階級によって、極端な搾取と虐待を受けることも示しています。特に「十人の王」の一人で、この期間のイスラエルの支配者である「偽りの羊飼い」がそうです。

したがって、この時代のユダヤ社会の多くの要素が、反キリストの本国が超自然的に暗くなり、彼が軍の大部分とともにイスラエルを去ることを、獣のくびきをきっぱりと断ち切る絶好の機会と考えることは容易に理解できます。しかしこの行動が、獣がその不忠誠に対する報復としてイスラエルを永遠に破壊しようと世界のすべての軍勢を呼び寄せ、ハルマゲドン作戦をすぐに開始させることは理解していないし、想定できていません。 この反抗とそれによって引き起こされる反応が、主が戻られるまで続く、戦争と荒廃の預言を成就することになるのです(ダニエル 9 章 26 節; 参照. ルカ 21 章 9 節)。

ここで、預言されているこの反乱におけるバビロン(すなわち、反キリストの本国であるアメリカ)の役割についても、一言述べておく必要があります。反キリストはバビロンの「王」ですが、聖書は獣が海外にいる間(艱難期の大部分はそうなります)、バビロンには摂政がいることも示しています[10]。この「摂政」は、真の「王」反キリストと対照的です(エゼキエル 28 章 2-10 節は前者を、エゼキエル 28 章 12-19 節は後者を意味します)。 獣とその帝国軍の大部分が、ヨーロッパを包む闇の中に消えている今、独立を考えているのは、イスラエルと獣の帝国の東側地域だけではないことは十分に想像できます。したがって、反キリストの新しい首都を中心とする反乱は、あらゆる地域からそのような＜独立を＞支持する反応をもたらすと思われますが、バビロンとその摂政ほど、そうした展開に自然に同調するものはないでしょう。このシリーズの第 3 部 B で思い起

[10] つまり、マゴグ(すなわち終末論的バビロン)が滅ぼされるまでは、マゴグの[長ではない]第二の王子も存在するからです(エゼキエル 39 章 6 節参照)。

こされるように、バビロンとイスラエルの間の感情的な絆が、そもそも反キリストの世界支配につながる二つの戦いをもたらすのに大いに貢献したのです。バビロンの副支配者については、聖書は、その傲慢さから--自分が獣の後継者であり、その危機は--その後継を以前の予想以上に早めてくれる機会であると考えている可能性が非常に高いことを示しています。しかし、もちろん、この考え方は極めて大きな誤算です。

(1) それから主のことばが私に臨んで、こう言われた。(2) 「人の子よ、ツロの**君主**〔摂政〕(※12 節に出てくる『王』とは区別される存在)に告げよ。『主なる神はこう言われる。 あなたの心は高ぶり〔高慢に満ち〕、 あなたは言った、「私は神であり、海のまっただ中で神のような座に着いている」と。しかし、あなたは神ではなく人間である。 それにもかかわらず、あなたは自分の心を〔神の特権を持つかのように〕神の心のように振る舞わせてきた。……(3) 見よ、あなたはダニエルよりも賢い！あなたに隠されている秘め事は何一つない！(4) あなたは自分の知恵と悟りによって富を得、自分の倉に金銀を積み上げた。(5) あなたは自分の豊かな知恵と、自分の交易によって財を増やした。しかし〔実のところ〕、あなたの心は、その〔まさに〕自分の富のゆえに高ぶった〔高慢になった〕。』」(エゼキエル 28 章 1-5 節/ESV)

ここで描かれているのは、反キリストの本拠地であるバビロンの摂政的支配者であり、その人物が「ツロの君主(摂政)」として表現されています。ツロという名称は、同じ終末的な将来国家を指し示す別の象徴表現であり、軍事力よりも経済力を強調するために用いられています(エゼキエル 28 章 12 節-参照。そこでは「ツロの**王**」が、反キリストとサタンの両方の型として描かれています)。この時、獣の副支配者が示した不忠誠な態度は、その後間もなくもたらされるバビロン滅亡のきっかけと大いに関係するでしょう。[11]__

(46)この地に対する知らせ(すなわち、反キリストがイスラエルに敵対して下すハルマゲドンへの招集命令: 黙示録 16 章 12-16 節,15-16 節)によって、あなたがたの心が弱り、恐れを抱かないようにせよ。この知らせが来る年には、その後に、同じ年にもう一つの知らせが来る; 一つは(イスラエルの)国に対する暴力、他は**支配者**(すなわち、バビロンの王子)**に敵対する**支配者(すなわち、反キリスト)についての知らせである。(47)見よ、来たるべき日に、わたしはバビロンの偶像にさばきを下す。 その国全体は恥じ、その中で殺される者はすべて倒れる。(エレ

[11] エレミヤ 50 章 21 節のペコデとメラタイムの呼称はこの点を物語っており、前者は彼女の滅亡を表す「訪問」を意味し、後者は反キリストへの反逆を表す「二重の反逆」を意味します。

ミヤ 51 章 46-47 節)

エジプトとパロが預言的な文脈でアッシリアとその王と対比される場合、この副支配者の別称は「パロ」です。 このような場合、アッシリアとその王は復活したローマとその支配者反キリストを表し、エジプトとパロはそれぞれ預言的なバビロンと反キリストの不従順な副支配者を表します[12]。この時イスラエルが、少し前までイスラエルに大きな問題を引き起こしていた異教の国、預言的バビロンに頼るのは、過去にエジプトに頼っていた時と不気味なほど似ています。どちらの場合も、そのような信頼はまったく見当違いであったことが証明されただけでなく、イスラエルが彼女を創造された主以外の**ところ**に助けを求めることの愚かさを示しています。

(1)主は言われる、災いだ、反抗的な子供たちよ。罪を重ねるために計画を実行し(しかし、それはわたしからではない)、同盟を結ぼうとする(しかし, わたしの霊はあなた方を[そうするようには]導いていない)。(2)[あなたがた]エジプトに下って行くことを進める(しかし、わたしの意見を聞かない)者たちはパロの保護を求め、エジプトの陰に隠れ場所を得ようとしている。(3)しかし、パロの保護は恥に、エジプトの陰に身を寄せることは屈辱に終わる。(4) [イスラエルの]役人がゾアンに現れ、その使者がハネスにまで行っても、(5)[彼らの]すべての者は、何の益にもならない民のために、みな恥をかく。(6)これは助けにもならず、利益にもならず、ただ恥辱と非難を受けるだけである。(イザヤ 30 章 1～6 節/ESV)

(1)助けを得るためにエジプトに下り、馬にたよる者はわざわいだ。彼らは戦車が多いので、これに信頼し、騎兵がはなはだ強いので、これに信頼する。しかしイスラエルの聖者を仰がず、また主にはかることをしない。(2)それにもかかわらず、主もまた賢くいらせられ、必ず災をくだし、その言葉を取り消すことなく、立って悪をなす者の家を攻め、また不義を行う者を助ける者(＝反キリストを支持した)を攻められる。(3)かのエジプトびとは人であって、神ではない。その馬は肉であって、霊ではない。主がみ手を伸ばされるとき、助ける者はつまずき、助けられる者も倒れて、皆ともに滅びる。(イザヤ書 31 章 1-3 節)

われわれの目は、むなしく助けを待ち望んで疲れ衰えた。われわれは待ち望んだが、救を与え得ない国びとを待ち望んだ。(哀歌 4 章 17 節)

---

[12] もちろん、多くの場合、パロは獣の予型です。 その予型論の説明については、このシリーズの第 3 部 B、第 I.3 節「預言における予型」と II「反キリストの起源、性格、台頭」を参照。

(6b)[パロよ、わたしはこのようにあなたを滅ぼそう]。あなたはイスラエルの家にとって[ただの]葦の杖であったからだ。(7)彼らがあなたをつかんだ時、あなたは彼らの手の中で裂け、[あなたに寄りかかった]すべての人の背中を折った。(エゼキエル 29 章 6 節後半-7 節/ESV)

したがってこの時期、反キリストの母国とイスラエル国内の反乱勢力との間で、双方の政治的な利権を理由とする新たな対話が行われ、イスラエル国内の反乱陣営を大いに勇気づけることになりますが、バビロンがこの反乱に与える物質的な支援は、すべて無駄に終わるでしょう。 バビロンはその後すぐに滅ぼされ、この反乱はその滅亡とそれに続くハルマゲドンの動機と口実にしかならないからです。

(13)それから、わたしはひとりの聖者の語っているのを聞いた。またひとりの聖者があって、その語っている聖者にむかって言った、「常供の燔祭と、荒すことをなす罪(すなわち背教)と、聖所(すなわち内庭)とその衆群がわたされて、足の下に踏みつけられることについて、幻にあらわれたことは、いつまでだろうか」と。(14)彼は言った、「二千三百の夕と朝の間である。そして聖所は清められてその正しい状態に復する」。(ダニエル 8 章 13-14 節)

ダニエル書のこの箇所を読むと、反乱の時期を具体的に再現することができます。先に挙げた鉢のさばきの図から分かるように、復活したローマの獣の王国を襲う超自然的な暗闇は、大艱難期の終わりに主が再臨される前の、八ヶ月目の初めに起こります。つまり、第五の鉢の裁きは、大艱難期の始まりの 1,020 日後、大艱難期の終結の 240 日前に起こることになります[13]。上記のダニエルの預言にある情報は、獣による神殿の汚染が、大艱難期の開始時に始まり、1,150 日間(すなわち、1,150 日の夕方と 1,150 日の朝)続くことを明確に示しています。つまり、第五の鉢の裁きが始まってから、ユダヤの反逆者たちが神殿の丘を再占領し、聖所を清めるに必要な儀式を完了するまでには、4 ヶ月余り(130 日)かかります(この作業にはヒゼキヤの時代の祭司たちは半月かかりました:歴代誌下 29 章 17 節)。このように、獣のイスラエルからの出発、武装した抵抗運動が組織される(あるいは公然化する)こと、神殿の丘が奪還されること、

---

[13] すなわち、聖書においてこの期間を記述する際に一貫して用いられている「1 年=30 日×12 か月」という預言年の尺度に基づくものです(ダニエル 7 章 25 節, 9 章 27 節, 12 章 7 節; 黙示録 11 章 2 節, 12 章 6 節, 12 章 14 節, 13 章 5 節)。もちろん、必要な「太陽の日」が追加され、艱難期の終わりが「選民のために縮められる」(マタイ 24 章 22 節;マルコ 13 章 20 節)という事実を考慮すると、主が語られた「その日、その時がいつであるかは、だれも知らない」という御言葉は、文字どおりに受け取るべきであることが分かります。それは、「昼も夜もない特別な一日、その日は主のみが知っておられる。夕べになると光がある」という日だからです「ゼカリヤ 14 章 7 節; マタイ 24 章 36 節; マルコ 13 章 32 節参照)。

聖所を清めるための儀式、そしてそれに対抗して反キリストがハルマゲドンの作戦を開始すること、これらすべてが、艱難期の終わりに向けて加速する出来事の流れの中で、矢継ぎ早に起こります。もっとも、神殿の丘の再奪還が、イスラエル国内での武力闘争の終結を意味するものではありません。反キリストの世界的な支配の手口の一つは、「要害」(ダニエル 11 章 38-39 節)を使って支配を強固にすることであり、忠実な配下を配置した拠点によって、体制への反抗を抑え込むことにあります。聖書は、このことがイスラエルにおいても同様であることを示しています(イザヤ 2 章 15 節, 25 章 12 節, 30 章 25 節; ゼパニヤ 1 章 16 節, 3 章 6 節, 3 章 15 節[ヘブル語のみ])。反乱が始まると、これらの要害には、獣の残存部隊だけでなく、すでに反キリストへの忠誠が後戻りできない段階に達しているユダヤ人たち――たとえばイスラエルの「王」と呼ばれる人物――も加わることになるでしょう。ハルマゲドンの作戦の進行を考えると(後述第 Ⅶ 章参照)、反キリストがハルマゲドンのために戻ってくるまで、これらの軍事拠点の多くが持ちこたえ、その結果、主の再臨(ダニエル 9 章 26 節)まで闘争が続くと予想できます。というのも、獣を打ち滅ぼしイスラエルを解放するのは、人間による拙速な自己解放の試みではなく、主イエス・キリストの再臨そのものだからです。

(6)わたしは、かの亜麻布を着て川の水の上に[浮かんで]いる人(すなわち天使)にむかって言った、「この異常なできごとは、いつになって終るでしょうか」と。(7)かの亜麻布を着て、川の水の上にいた人(すなわち、天使)が、天に向かって、その右の手と左の手をあげ、永遠に生ける者をさして誓い、それは、ひと時とふた時と半時(すなわち、大艱難期の三年半)である。聖なる民を打ち砕く力が消え去る時に、これらの事はみな成就するだろうと言うのを、わたしは聞いた。(ダニエル 12 章 6-7 節)

その六十二週の後にメシヤは断たれるでしょう。ただし自分のためにではありません(参照:イザヤ 53 章 8 節)。またきたるべき君(すなわち、反キリスト)の民は、町と聖所とを滅ぼすでしょう。<彼の>その終りは洪水(ハルマゲドンにおける彼の軍隊の「氾濫」)のように臨むでしょう。そして**その終りまで戦争が続き、**荒廃は定められています。(ダニエル 9 章 26 節)

6. ハルマゲドンへの備え(12-16 節)

(12)第六の[天使]がその鉢を大河ユーフラテスに注ぐと、その水が干上がったのは、東方(「日の出ずる地」)の王たちの道が整えられるためであった。(13) わたしは、偽預言者の口から、蛙のような三つの汚れた霊が出るのを見た。(14)これらは、「しるし」を出す悪霊で、全能の神の大いなる日の戦いのために、全地の

王たちのもとに出て行って、彼らを集めようとするものである。(15) - 見よ、彼(すなわち、私たちの主イエス)は盗人のように来る。裸で歩き回り、その恥を見られることのないように、起きていて、自分の衣を守る者は幸いである。- (16)そして、彼ら(すなわち、悪霊ども)は、彼ら(すなわち、地の王たちとその軍勢)を集めて、ヘブル語で「ハルマゲドン」と呼ばれる場所に連れて行った。(黙示録 16 章 12-16 節/ESV)

東方の王たち: すでに触れたとおり、東方および北方の双方から伝えられてきた報告によって、反キリストは自らの支配基盤を再び固める必要に迫られ、新たに世界の首都として定めていたエルサレムを一時的に離れざるを得ませんでした。北の「獣の王国」だけが超自然的な闇に包まれましたが、その地域で引き起こされた混乱は、地球の東の地域にも反乱の兆しをもたらしました。そして、わずか 一ヶ月も経たないうちに、状況は完全に逆転しました。典型的な「豹変」ぶりで(黙示録 13 章 2 節)、獣は自身の王国で起こりかけた反乱に対して、猛烈な勢いで瞬く間に対処し、その時の拠点である北部の支配権を完全に回復するだけでなく、東の「王たち」を完全に威圧し、彼らの忠誠と服従の証として、自国の大規模ながらも劣った軍事力を提供することを、快く承諾させることになるようです(おそらく、自分たちに向けられた同様の懲罰的な攻撃を阻止する意図もあることでしょう)。

その頭の一つが、死ぬほどの傷を受けたが、その致命的な傷もなおってしまった。そこで、全地の人々は驚きおそれて、その獣に従い、 また、龍がその権威を獣に与えたので、人々は龍を拝み、さらに、その獣を拝んで言った、「だれが、この獣に匹敵し得ようか。だれが、これと戦うことができようか」。(黙示録13 章3-4 節)

こうして反乱のうわさは、反キリストによって迅速かつ容赦なく鎮圧され、ほとんど抵抗もせずに消え去ります。イスラエルの中の反逆者たちは、獣の支配から脱却するための世界規模の反乱によってその行動が隠蔽されるどころか、かつての同盟国(バビロンは一時的に例外)を失うだけでなく、今や全世界の残された軍事力の主な標的となってしまいます。反キリストはこの時には、地球の四隅から全ての稼働可能な部隊を召集しています。以前は南部を支配し、北部も奪還した反キリストは、この時には東部の軍事力をも支配下に置いているのです。このプロセスが展開し始める中、私たちはこの時点で、ハルマゲドンの戦いのクライマックスとなる主の再臨から約 6、7 ヶ月前にいます。東の軍隊の大規模な移動の描写から判断すると、時間を味方につけた獣は、イスラエルを粉砕するために、これまでとはやや異なる戦略を選ぶことと思われます。彼は限られた兵力で即座に攻撃を仕掛けるのではなく、イスラエルとその周辺に世界中の軍隊を集結させ、イスラエルを根絶やしにするため、エルサレムに対して最終的

な大規模攻撃を仕掛けることを選択するでしょう(そして、彼は、この作戦を壮大な形で実現するために、その膨大な政治的、社会的影響力のあらゆる側面を利用すると予想されます)[14]。このようにユダヤ人の反乱は、新たに奪還した神殿を中心にその勢力を固めていきますが、一方、反キリストの巨獣はその規模をますます拡大させながら勢いを増し、世界中からイスラエルの国境に集結していくでしょう。最後に、バビロンについて言えば、イスラエルが北の侵略者に対してエジプトとパロに頼って支援を求めた際に、歴史的にエジプトとパロがイスラエルにとって一貫して失望を与えるものであったように、バビロンの名目上の支配下にある西の勢力は、具体的な支援を提供することはないでしょう(その理由は、以下のセクション II で説明します)。そのため、彼らのそれまでの支援は、世俗的なイスラエルを、この絶望的な戦いに挑むように仕向けるにとどまります。つまり、これらの反乱軍が予期してもいなかった特別な神の介入がなければ、彼らにとって絶望的な戦いとなるでしょう。

第六の鉢: ユーフラテス川が干上がることの意味は象徴的です(参照.イザヤ 11 章 15 節)。 純粋に地理的な障壁として、乾いていようと洪水であろうと、大規模な近代の軍隊の通過には、大きな障害にはなりません。 しかし、このユーフラテス川は東と西の伝統的な境界線を示しており、古代にはこの境界線を越えて何らかの影響を与えることは、ほとんどありませんでした。「干上がる」ということは、これまで中東の紛争の場から「東方」の関与を妨げたり抑制したりしてきたすべての要因が、神の介入によって取り除かれたことを意味しているのでしょう。中東の紛争に、東の王が参加することを躊躇させるという抑制が取り除かれ、反キリストの思うつぼになったように見えるこの第六の鉢の裁きは、いささか奇妙に思われるかもしれません。しかし、世界中から聖霊の抑制が取り除かれることは、「封印が開かれ」、大艱難期が始まるために必要な措置であったのと同じように[15]、東の王たちの関与に対する障壁が取り除かれることは、すべての地上の悪の勢力が、主の大いなる日、すなわちハルマゲドンの戦いに集結することを可能にするために必要な措置です。これはまさに裁きでもあります。なぜなら、これまで大艱難期の軍事行動に直接関与していなかった世界の最後の四分の一である東方も、私たちの主イエス・キリストの再臨によって降りかかる滅亡に巻き込まれることになるからです。

---

[14] ペルシャ帝国の類似した動員計画と比較してください。 最盛期には、完全な軍事動員には少なくとも 1 年を要しましたが、動員が発令されると、当時のどの帝国をも凌駕する規模の兵力を動員することができました。この特徴は、黙示録 13 章 2 節の「熊の足」のイメージに反映されています。この熊は極めて強力ですが、ダニエル書 7 章で言及されている他の象徴的な獣(翼のある獅子と豹)に比べてはるかに動きが遅いです。

[15] このシリーズの 第 2 部 B. III「聖霊の抑制的働き」参照。

三つの汚れた霊: 上記の翻訳文についてまず注目すべき点は、三つの汚れた霊の起源としての龍や獣の言及は、元々の 13 節には一切言及されてないことです。「龍と獣」という言葉は、最も信頼できる写本にはなく、後からの追加で、三つの霊を三つの源と一致させるために付け加えられたことは間違いないでしょう。 しかし、この非聖書的な補足は、他の不適切な補足の場合と同様、誤解を招くものです。これまで見てきたように、偽預言者は獣の使者として、獣のプロパガンダを世界中に広めるだけでなく、獣の名で「偽りのしるし」を行う者です(黙示録 13 章 11-17 節; 参照:マタイ 24 章 24 節; 第二テサロニケ 2 章 9-12 節)[16]。

> しかし、獣は捕えられ、また、この**獣の前でしるしを行って、獣の刻印を受けた者とその像を拝む者とを惑わしたにせ預言者**も、獣と共に捕えられた。そして、この両者とも、生きながら、硫黄の燃えている火の池に投げ込まれた。(黙示録 19 章 20 節)

14 節にある三つの霊の働きには、この二つの要素が存在していることがわかります。この「三つの霊」はそれぞれ、エルサレムでの艱難期の最後の戦いのために、世界の軍隊を集めるために出て行く多数の悪霊どもです。いわゆる「汚れた三位一体」と同一視することは、これらの悪魔の力が、三つのグループに分かれている本当の理由を見えなくするだけです。つまり、世界の残りの三つの象限すべての軍隊を、ハルマゲドンに集結させるためです(四番目の象限、バビロンに代表される西方の運命は後述します)。 とはいえ、獣が神に選ばれた人々に敵対するこの「十字軍」を率い、悪魔がこの出来事の背後にある究極の意思の力であることはもちろん事実であり、悪者が世界から一掃されるまで、人々の信仰に対するあらゆる攻撃はこのように行われるのです。

> 千年の期間が終ると、サタンはその獄から解放される。 そして、出て行き、地の**四方**(字義どおりには、「四方の隅」)にいる**諸国民**、すなわちゴグ、マゴグ**を惑わし**、彼らを戦いのために召集する。その数は、海の砂のように多い。(黙示録 20 章 7-8 節)

黙示録 16 章 13 節で蛙の比喩、すなわち、この三つの悪霊の部隊が蛙の**ように**見えたという記述は、ヨハネが実際の存在を表すために、非常に象徴的な表現を使って描写しているもう一つの例です(「女」、「獣」、「龍」を参照)。しかし他の例と同様に、聖霊の導きによって、これらの比喩が何を表しているのか、私たちには疑う余地を残しません。「蛙」はモーセの律法では忌み嫌われる動物であり(レビ 11 章 9-12 節)、エジプ

[16] このシリーズの第四部.VI.2「偽りの預言者」参照

トの災い(出エジプト記 8 章 1-14 節)を連想させる「蛙」は、悪魔が世界に呼びかけている「ユダヤ人の完全消滅」という任務の醜さを表現するのに、特に効果的な選択であると言えるでしょう。

盗人のように: 15 節は信者たちに向けた挿入句で、14 節のハルマゲドンへの呼びかけを、16 節の地上の王たちと彼らの軍勢が集まる様子と分けています。16 節に、地上の王たちと彼らの軍勢が集まる様子が描かれています。前述したように、反キリストがこの新しい目的、すなわちイスラエルの完全な破壊に心を奪われ、大迫害の執行を一時的に中止する可能性があります。しかし、この 15 節に挿入されている「目を覚ましていなさい」という信徒への命令は、生きていてイエス・キリストを主と告白し続けるすべての人にとって、最も困難な時代が続くことを明確に示しています。多くの信者はこのとき、獣が全世界の軍隊を動員して行う、前例のない大規模な軍事作戦の対象であるイスラエルに、身を置くことになります(以下で説明します)。イスラエルのより広範で大半が不信仰な共同体の中の、反キリストの世界支配が崩壊し始めているという期待に基づく「興奮の高まり」は、世界中から無数の軍隊がエルサレムに向かって押し寄せ始めると、すぐに恐怖に取って代わるでしょう。

したがって 15 節は、信者たちに、このようないずれかの目先の感情的な反応に流されることの、愚かさと危険性を思い起こさせる役割を果たしています。この世の問題を解決するのは、イエス・キリストだけです。それは常にそうです(ヘブル 13 章 8 節)。そして、大艱難期の終わりの日ほど、この原則を思い出すことが重要になることはないでしょう。なぜなら、再臨は、誰もそれが可能だとは考えもせず、その可能性さえも期待していないとき、そして多くの人々が、それが起こるかもしれないという希望を捨てたときに起こるからです。まさに最も予想されない時に、夜中に泥棒が来るように、もはや救いの望みがないと思われる時をはるかに過ぎた後、信じられないほどの力と栄光をもって、まったく不意に、私たちの主が再びやって来られるのです!

ですから、私たちはこの真理を覚えておき、自分の目で見たものや、自分の感情によって判断するのではなく、神の言葉によって疑いなく真実であると知っているものによって判断するように、前もって警告され、ここで厳粛に命じられているのです。 マタイ 25 章 1-13 節の賢いおとめたちのように、私たちは「起きていて」、信仰のうちに眠ってはいけないのです(ここで言われている眠りとは、艱難期の信者が信仰を失うことを意味します)。眠ってしまうと、衣服が失われてしまうのです。 黙示録 3 章 18 節のように、霊的な失敗の結果は、この「裸の状態」が露呈することです。これは信仰を捨てたことで、私たちが長年努力して築き上げてきたすべてを失うという、非常に具体的な描写です。いかなる時代においても悲劇的なことですが、特に、大艱難期の最終日に特徴

的な、激動の渦のなかにあって、これほど多くの苦難を経験した末に信仰を失うことは、まさに悲惨なことです。その時には、他のいかなる時よりも、信者たちは政治的な解決策に目を向けることを避け、地上の動向に視線を向けないことが重要になります。むしろ—その時には—これまで以上に、私たちの心を主と、主だけが提供できる天よりの解決策に集中させなければなりません[17]。

ハルマゲドン： ハルマゲドンは艱難期の最後の戦いの舞台であり、「全能の神の偉大な日」に、イスラエルとその国境内に避難してきたすべての人々を滅ぼそうとしている反キリストの大軍を、主が滅ぼす場所です。一般に信じられているのとは異なり、ハルマゲドンは今日のイスラエル国家の北に位置する古代都市「メギド」とは、何の関係もありません。そうではなく、ハルマゲドンはエルサレムの預言的名称です。不信心な反逆者とバビロンから逃れたばかりの聖徒の「最後の抵抗」の場所です。

一般に広く流布している「アルマゲドン＝メギド」という結び付けは、実のところ誤った理解に基づいており、その根拠はこの二つの固有名詞のつづりが似ているという点に尽きます。これは、「アルマゲドン」という名称が聖書で何を意味しているのかを考える出発点として、決して不合理なものではありません(なお、「アルマゲドン」という語が登場するのは黙示録 16 章 16 節のみです)。しかし、さらに詳しく検討していくと、この語源的なつながりだと考えられてきたものは実際には幻想にすぎないことが分かります。その一方で、聖書そのものは、最終的な艱難期の戦いがどこで起こるのかについて、少しの疑いも残していません。予想されるとおり、その最終決戦の舞台はエルサレムです。これに対して、メギドについては、この点に関して聖書はまったく何も語っていません。詩篇 2 篇 1-6 節; イザヤ 4 章 3 節, 22 章 1-14 節, 25 章 6-7 節, 31 章 9 節, 33 章 3-5 節, 33 章 10-22 節, 40 章 1-2 節, 40 章 9-10 節, 52 章 1-8 節, 60 章 1-3 節, 62 章 11 節; ヨエル 3 章 1-2 節; ゼパニヤ 3 章 14-17 節; ローマ 11 章 26 節を参照)。

(1)ああ＜わざわいだ＞、アリエルよ、アリエルよ、ダビデが営をかまえた町(すなわち、エルサレム)よ、年に年を加え、祭をめぐりこさせよ。(2)その時わたしはアリエルを悩ます。そこには悲しみと嘆きとがあって、アリエル(字義的には「神の[犠牲の]祭壇」)のようなものとなる。(3)わたしはあなたのまわりに営を構え、やぐらをもってあなたを囲み、塁を築いてあなたを攻める。(4)その時あなたは深い地の中から物言い、低いちりの中から言葉を出す。あなたの声は亡霊の声のように地から出、あなたの言葉はちりの中から、さえずるようである。(5)しか

[17] このシリーズの第七部「艱難期のための備え」ではこの課題について特別に取り上げられます。

しあなたのあだの群れは細かなちりのようになり、あらぶる者の群れは吹き去られるもみがらのようになる。また、にわかに、またたくまに、この事がある。(6)すなわち万軍の主は雷、地震、大いなる叫び、つむじ風、暴風および焼きつくす火の炎をもって臨まれる。(7)そしてアリエルを攻めて戦う国々の群れ、すなわちアリエルとその城を攻めて戦い、これを悩ます者はみな夢のように、夜の幻のようになる。(8)飢えた者が食べることを夢みても、さめると、その飢えがいえないように、あるいは、かわいた者が飲むことを夢みても、さめると、疲れてそのかわきがとまらないように、**シオンの山**を攻めて戦う国々の群れもそのようになる。(イザヤ 29 章 1-8 節)

(9)**エルサレム**の荒れすたれた所よ、声を放って共に歌え。主はその民を慰め、**エルサレム**をあがなわれたからだ。(10)主はその聖なるかいなを、もろもろの国びとの前にあらわされた。地のすべての果は、われわれの神の救を見る。(イザヤ 52 章 9-10 節)

(18)彼らがしたように、神は彼らに報いる。敵には怒りを、敵対者には報いを。島々(すなわち、西の最も遠い土地)にまで、神は彼らに報いを与える。(19)そうして、西の人々は主の御名を恐れ、日の昇る方(すなわち、東)から主の栄光を畏れるようになる。 なぜなら、敵(すなわち反キリスト)は川(すなわち大ナイル川またはユーフラテス川;ダニエル 11 章 22 節, 11 章 26 節参照)のように襲いかかるが、主の霊が彼を退散させるからである。(20)贖い主は**シオン**に来られ、ヤコブのうちの罪を離れる者たちに来られるからである。(イザヤ 59 章 18-20 節/ESV)

(30)わたしは天と地に不思議を示し、血と火と煙の柱を現すからだ。(31)その偉大で恐ろしい[日]である主の日の前に、太陽は暗黒に、月は血に変えられる。(32)そして、主の名を呼び求める者はみな救われるようになる。**シオン山とエルサレム**では、主が言われたとおりに、主が召される生存者の間にも救いがあるからである。(ヨエル 2 章 30-32/ESV)

(12)もろもろの国民をふるい立たせ、ヨシャパテの谷にのぼらせよ。わたしはそこに座して、周囲のすべての国民をさばく。(13)かまを入れよ、作物は熟した。来て踏め、酒ぶねは満ち、石がめはあふれている。彼らの悪が大きいからだ。(14)群衆また群衆は、さばきの谷におる。主の日がさばきの谷に近いからである。(15)日も月も暗くなり、星もその光を失う。(16)主は**シオン**から大声で叫び、**エルサレム**から声を出される。天も地もふるい動く。しかし主はその民の避け所、イスラエルの人々のとりでである。(ヨエル 3 章 12-16 節)

(15)主の日が万国の民に臨むのは近い。あなたがしたようにあなたもされる。あなたの報いはあなたのこうべに帰する。(16)あなたがたがわが聖なる山で飲んだように、周囲のもろもろの民も飲む。すなわち彼らは[主の怒りの杯を]飲んでよろめき、かつてなかったようになる。(17)しかしシオンの山には、のがれる者がいて、聖なる所となる。(オバデヤ 1 章 15-17 節前半)

(2)「見よ、わたしは**エルサレム**を、その周囲にあるすべての民をよろめかす杯にしようとしている。これはエルサレムの攻め囲まれる時、ユダにも及ぶ。(3)その日には、わたしは**エルサレム**をすべての民に対して重い石とする。これを持ちあげる者はみな大傷を受ける。地の国々の民は皆集まって、これ(すなわち、**エルサレム**)を攻める。(ゼカリヤ 12 章 2-3 節)

その日には、わたしは**エルサレム**に攻めて来る国民を、ことごとく滅ぼそうと努める。(ゼカリヤ 12 章 9 節)
これは、主が**エルサレム**を攻めるどの民にも加えられる疫病である。彼らの肉は、まだ足で立っているうちに腐る。彼らの目はまぶたの中で腐り、彼らの下は口の中で腐る。(新改訳　ゼカリヤ 14 章 12 節)

このように主が十字架につけられ、復活された場所、そして主が戻られると預言されている場所が、この艱難期の最後の戦いが行われる場所なのです(使徒行伝 1 章 11 節参照)。

(1)主はわが主に言われる、「わたしがあなたのもろもろの敵をあなたの足台とするまで、わたしの右に座せよ」と。(2)主はあなたの力あるつえを**シオン**から出される。あなたはもろもろの敵のなかで治めよ。(3)あなたの民は、あなたがその軍勢(すなわち、イスラエルの軍勢)を聖なる山々に導く日に心から喜んでおのれをささげるであろう。あなたの若者[軍隊](すなわち、新たに復活した者の軍隊)は朝の胎から出る露のようにあなたに来るであろう。(4)主は誓いを立てて、み心を変えられることはない、「あなたはメルキゼデクの位にしたがってとこしえに祭司である」。(5)主はあなたの右におられて、その怒りの日に王たちを打ち破られる。(6)主はもろもろの国のなかでさばきを行い、しかばねをもって満たし、広い地を治める首領たち(の頭;参照.創世記 3 章 15 節)を打ち破られる。(7)彼[の軍隊]は道のほとりの川からくんで飲み、それによって、そのこうべをあげるであろう。(詩篇 110 篇 1-7 節)

主はこう仰せられる、『わたしは**シオン**に帰って、**エルサレム**の中に住む。**エルサレム**は忠信な町ととなえられ、万軍の主の山は聖なる山と、となえられる』。(ゼカリヤ 8 章 3 節)

シオンの娘よ、大いに喜べ、**エルサレム**の娘よ、呼ばわれ[喜びの声をあげよ]。見よ、あなたの王はあなたの所に来る。彼は義なる者であって勝利を得、柔和であって、ろばに乗る。すなわち、ろばの子である子馬に乗る。(ゼカリヤ 9 章 9 節)

(2)わたしは万国の民を集めて、エルサレムを攻め撃たせる。町は取られ、家はかすめられ、女は犯され、町の半ばは捕えられて行く。しかし残りの民は町から断たれることはない。(3)その時、主は出てきて、いくさの日にみずから戦われる時のように、それらの国びとと戦われる。(4)その日には彼の足が、東の方エルサレムの前にあるオリブ山の上に立つ。そしてオリブ山は、非常に広い一つの谷によって、東から西に二つに裂け、その山の半ばは北に、半ばは南に移り、(ゼカリヤ 14 章 2-4 節前半)

なお、わたしが見ていると、見よ、小羊がシオンの山に立っていた。また、十四万四千の人々が小羊と共におり、その額に小羊の名とその父の名とが書かれていた。(黙示録 14 章 1 節)

そして、その[ハルマゲドンの殺戮の]酒ぶねが都[エルサレム]の外で踏まれた。すると、血が酒ぶねから流れ出て、馬のくつわにとどくほどになり、一千六百丁にわたってひろがった。(黙示録 14 章 20 節)

艱難期の最終的な戦いの中心がエルサレムであることについて、聖書全体が圧倒的なまでに明確な証言を与えているにもかかわらず、黙示録 16 章 16 節に一度だけ登場する「アルマゲドン」という名称(いわゆるハパックス・レゴメノン)に対する誤解が、これらの出来事の正しい解釈に対して、これほどまでに大きく、しかも否定的な影響を及ぼしてきたという事実は、実に不可解であると言わざるを得ません。そこで、この言葉の本当の語源について少し説明する必要があります。 まず、「メギド」と「ハルマゲドン」の類似性は、七十人訳で最も一般的なメギドの音訳(例:ヨシュア 12 章 21 節)と黙示録 16 章 16 節にある音訳(マゲドンΜαγεδών 対ハルマゲドンἈρμαγεδών)にあるということです。しかし七十人訳では、メギドの他の訳語が数多く挙げられています(すなわち、メゲドーΜεγεδδω、 マゲドーンΜαγεδων、マゲドーΜαγεδδω、マゲドールΜαγεδωρ、マケドーΜακεδω、マグドーΜαγδω、マゲドーン Μαγεδων、マケドード

Μακεδδωδ、マゲドーΜαγεδδΩ、マゲデイ Μαγεδει)であり、この多様な表記は、メギド-ハルマゲドンの同一視をする前に、少なくともある程度の注意が必要であることを示すのに十分でしょう。上記のリストの中では、最初の音訳であるメゲド Μεγεδδω が、最も興味深いものです。この場所のヘブル語の単語(מגדו,メギド Megiddo)は、この最初の訳語メゲド Μεγεδδω / Megeddo に最もよく反映されているからです[18]。実際、この地名の英語訳「メギド(Megiddo)」は、実際には、七十人訳のどの訳よりも、ヘブル語を正確に音訳したものです。このことから、この二つの「**メギド Megiddo**」と「ハル-**マゲドン Har-Mageddon**」の地名の違いは容易に見受けられます。後者<マゲドン Mageddon>の前部にある文字「a」、また中央の「e」と、前者の文字「i」の違い、そして末尾に付いている文字「n」は、決して些細な違いではありません。これらの違いは、単独で見ても「ハルマゲドン」のより当てはまる語源を探るよう促すものであり、特にヨハネが聖霊の導きを受けて「**これはヘブル語で**『アルマゲドン』と呼ばれる場所である」とコメントしていることから、その必要性はさらに高まります。ですから、語源的な手がかりを得るためには、七十人訳のギリシヤ語訳ではなく、ヘブル語訳に注目しなければならないのです。

ほとんどの解釈者は、ハルマゲドンの「ハル」(ギリシヤ語では「h」の音は残念なことに、この名前の伝統的な[英語圏での]音訳では一般的に省略されています)は、ヘブル語で「山」を意味する言葉であることに同意しています(ちなみに、聖書注釈者たちがメギドを推定地として支持している理由が、その地理的な特徴である「山」ではなく、その広大な平野であることに注意すべきです)。そこで、この地名の後部の「マゲドン」について考えてみましょう。 まずこの点に関しては、Ma を、ここでは「場所」の意味で用いられる接頭辞 mem と捉えるのが最も適切です。つまり、「_____の場所である山」という意味になります。文字「m」を、それが付く語幹の「場所」を示す接頭辞として用いることは、セム語族の言語においてよく見られる現象です[19]。これにより、「-geddon」は、「二重のアイン」の語根 gdd גד、あるいは二根字弱動詞 gud (גוד) のいずれかと関連する場所と結論付けることができます。この区別はここではほとんど学術的なものであり、どちらの語源も「攻撃する、切る、軍隊や群衆で進む」という本質的な意味を同様に持っています。どちらの語幹からも最もよく確認される名詞である ghedhudh (גדוד)

---

[18] 12 回の出現のうち、この形がヘブル文字の「ン(n)」またはヌン(nun)で終わっているのは 1 回だけです(מגדון Megiddon)。それはゼカリヤ書 12 章 11 節で、そこでの言及は「メギド」をまったく指していない可能性も十分にあります(例えば、七十人訳で はゼカリヤ書 12 章 11 節で「メギド」とはまったく見なされていません)。

[19] S. Moscati ほか、『セム語族の比較文法入門』(Wiesbaden 1969) 80-81 ページを参照してください。ここにあるのは、おそらく chashal(כשל、「落ちる、つまずく」)から派生した machshelah (מכשלה、「廃墟」、「転落する場所」)のような maqtil「基本形」です。Gensenius, Hebrew Grammar, ed. E. Kautzsch(オックスフォード、1980 年)237 ページを参照してください。

は、一般的に軍事編成を指すことを考えると、アルマゲドンの最も可能性の高い意味は、「軍隊の山」または「[召集された] 軍隊の山」であると考えられます。このように、これは、世界中から反キリストのすべての勢力がエルサレムに集結することへの、非常に明確な言及です。彼らは預言的に、そして適切に、「軍勢の[集合の]山」と呼ばれるエルサレムに終結します[20]。ここで獣の軍隊が、私たちの主によって滅ぼされるからです。まさにこの目的のため、彼らはこのように集められたのです。

> 飢えた者が食べることを夢みても、さめると、その飢えがいえないように、あるいは、かわいた者が飲むことを夢みても、さめると、疲れてそのかわきがとまらないように、**シオンの山を攻めて戦う国々の群れ**もそのようになる。(イザヤ 29 章 8 節)

> (2)「見よ、わたしはエルサレムを、その周囲にあるすべての民をよろめかす杯にしようとしている。これはエルサレムの攻め囲まれる時、ユダにも及ぶ。(3)その日には、わたしはエルサレムをすべての民に対して重い石とする。これを持ちあげる者はみな大傷を受ける。**地の国々の民は皆集まって、これを攻める。**(ゼカリヤ 12 章 2-3 節)

> **エルサレムを攻撃したもろもろの民**を、主は災をもって撃たれる。すなわち彼らはなお足で立っているうちに、その肉は腐れ、目はその穴の中で腐れ、舌はその口の中で腐れる。(ゼカリヤ 14 章 12 節)

このように理解するなら、ミカ書 5 章 1 節～5 節前半にこそ、「アルマゲドン」に関する決定的な聖書箇所(ラテン語で locus classicus)を見ることができます。すなわち、この箇所こそ、ヨハネが御霊の導きのもとで、この預言的名称「アルマゲドン」を用いる際に念頭に置いていた聖書箇所なのです。ミカ書 5 章 1 節～5 節前半を見ると、そこでは主に再臨を扱う預言でありながら、同時に主の初臨についての証言も含まれており、この二つの出来事が見事に、詩的に織り合わされています。このように初臨と再臨を一体として描く手法は、これまで見てきたとおり、ヘブル的預言に非常によく見られる特徴です[21]。

---

[20] Alan Johnston "Revelation" in The Expositor's Bible Commentary ed. F.E. Gaebelein (Grand Rapids 1981) v.12, p. 552.参照

[21] このシリーズの 第 1 部、セクション IV.1.a「予言的な短縮表現」を参照。

(1)しかし、軍勢(<gdd, גדד>)の町(直訳:「娘」)よ、(あなたに対して軍勢を張っている)軍勢(<gedhudh, גדוד>)を今こそ招集しなさい。彼らはわたしたちを包囲したから。彼らは棒でイスラエルの裁き主の頬を打ったから。(2) しかし、ベツレヘム・エフラタよ、ユダの氏族の中に数えられるには小さすぎるが、わたしはあなたから、イスラエルを治めるべき方を引き出そう。その出で立ちは、はるか昔から、永遠の昔からである。(3)エルサレムが産婦のように産み落とすときまで、彼は彼らを[抑圧者に]引き渡す。その時、その兄弟たちの残りは、イスラエルの子らのもとに戻る(すなわち、再臨の前、下記セクションⅡ参照)。(4)彼(すなわち、再臨の主イエス)は、主の力とその神である主の御名の威厳とをもって、立ち上がり、彼らの羊飼いとなられるからである。そして、彼ら(すなわち、彼の群れ)は留まるであろう。そのとき、彼は地の果てまでも、偉大になるであろう。(5) この方は私たちの平和となられるからです。(ミカ 5 章 1 節-5 節前半/ESV)

7. 地震と雹 (17-21 節)

(17)第七の者[第七の天使]が、その鉢を空中に傾けた。すると、大きな声が聖所の中から、[神の]御座から出て、「**事はすでに成った**」と言った。(18)すると、いなずまと、もろもろの声と、雷鳴とが起り、また激しい地震があった。それは人間が地上にあらわれて以来、かつてなかったようなもので、それほどに激しい地震であった。(19)大いなる都(すなわち、エルサレム)は三つに裂かれ、諸国民の町々は倒れた。神は大いなるバビロンを思い起し、これに神の激しい怒りのぶどう酒の杯を与えられた(エレミヤ 25 章 19-32 節;オバデヤ 1 章 16 節;ゼカリヤ 12 章 2-3 節;エレミヤ 51 章 7 節;第二テサロニケ 1 章 8-10 節;黙示録 17 章 4 節, 18 章 6 節を参照)。(20)島々はみな逃げ去り、山々は見えなくなった。(21)また一タラント(=約 34 キログラム)の重さほどの大きな雹が、天から人々の上に降ってきた。人々は、この雹の災害のゆえに神をのろった。その災害が、非常に大きかったからである。(黙示録 16 章 17-21 節)

「事はすでに成った!」: 第七の鉢は、大艱難期の最後の出来事のすべてを含み、私たちの主の再臨と、ハルマゲドンにおける獣とその軍勢の滅亡で最高潮に達します。この記述の中には、特に(神の)雷のような声、稲妻、地震、雹など、これまでにも見たことがあるものもあります。(黙示録 4 章 5 節, 8 章 5 節, 11 章 19 節)。ここで言及されているすべての徴候は、主の到来を予告しています。これらの奇跡的な徴候は、以前の徴候と同様に、世界中で知覚され、想像もできないほど今までになく凄まじい体験と

なります[22]。さらに、その強度は劇的に増大します(「人が地上に存在して以来起こったことのないような」地震と「1 タラントの大きさの」雹を参照。この二つの徴候は以下で個別に取り上げます)。 この増大する凄まじさは、「事はすでに成った!」という言葉が示すように、主の到来が今や間近に迫っていることを示しています。実際、主が天に昇られた後の歴史は、神の視点から見ると、警告の強度が増大する一連の準備期間が、どんどん短い期間に圧縮されているのです。教会時代(2000 年)の最後の時代はラオデキヤ時代(144 年間)であり、それは艱難期(7 年)という頂点に達し、その最も激しくなる段階は大艱難期(3 年半)であり、そしてそれは第 7 の鉢の裁き(6 ヶ月)で終わり、それ自体は再臨(特別な連続した一日である「主の日」:ゼカリヤ 14 章 1-7 節参照)で終了します。シナイ山への主の降臨に先立ったしるし(出エジプト記 19 章 16-20 節)のように、これらのしるしもまた、間もなく裁きのために地上に戻ってくる神ご自身の驚くべき、恐ろしい臨在の切迫した兆候です[23]。「事はすでに成った!」という言葉によって、大艱難期が最終段階に入ったという神の保証が与えられているのです。

地震: 地震は主の再臨に至る、ますます短くなっている警告期間の顕著な前兆です(マタイ 24 章 7 節;マルコ 13 章 8 節;ルカ 21 章 11 節; 参照. アモス 1 章 2 節とアモス 1 章 1 節; ハガイ 2 章 6-7 節; ヘブル 12 章 26-29 節)。そして、この前例のない地震が示すように、その威力の激しさは、その期間の激しさに見合ったものです。なぜなら、次の時代の始まりを特徴づけ、その始まりを示す特異な地震を見つけることができるからです: #1. 教会時代の始まり(2000 年間続く:マタイ 27 章 51 節, 27 章 54 節, 28 章 2 節;使徒行伝 4 章 31 節;参照:使徒行伝 2 章 1-2 節);[#2. おそらくラオデキヤの時代の始まり(144 年間)];[24] #3. 艱難期の始まり(7 年間:黙示録 8 章 5 節); #4. 大艱難期の始まり(3 年半:黙示録 11 章 13 節, 11 章 19 節); #5. 第七の鉢の裁き(および再臨の 6 か月前の期間:黙示録 16 章 18-20 節)を伴うこの地震; #6.再臨そのものに伴う(主の日の公式な開始日と一致します:イザヤ 29 章 6 節; エゼキエル 38 章 19 節; ハバクク 3 章 6 節; 参照. ゼカリヤ 14 章 3-5 節; 黙示録 6 章 12 節); そして最後に、7) 永遠の始まり(ハガイ 2 章 6-7 節, 2 章 20-21 節; 第二ペテロ 3 章 10-13 節; 黙示録 6 章 12-17 節, 20 章 11 節)において地震があります。 艱

---

[22] このシリーズの 3 部 A.I.5.「雷鳴、稲妻、地震」を参照ください。これらの声が発せられる王座の物凄さとその象徴については、このシリーズの 第 2 部 B.I.3.b「王座」を参照ください。

[23] もちろん、シナイ山では裁きの基準(すなわち十戒)が与えられましたが、再臨の際には、主は完全な神の正義の基準に基づいて一連の義なる裁きを行われるでしょう。

[24] 聖書にはその記述がないため、あくまで仮定ですが、ラオデキヤ時代のはじめに起こった 1883 年のクラカタウ火山(Mt.Krakatoa)の爆発は、この点において単なる偶然ではないかもしれません(このシリーズの第 2 部 A で述べたように、ラオデキヤ時代は 1882 年頃に始まったと推定されています)。

難期の恐ろしい出来事の多くがそうであるように、この地震の大きさと実際に経験した時の恐怖を理解するのは難しいです(ルカ 21 章 25-31 節参照)。 聖書は、この地震が人類の歴史と経験の中で比類のないものであり、「異邦人の町々」を崩壊させるほどの、人の理解を超えた力を持っていることを明確に示しています。

バビロンはしばしば「大いなる都」と表現されますが(黙示録 14 章 8 節; 17 章 1 節, 17 章 5 節, 18 章 2 節, 18 章 10 節, 18 章 16 節, 18 章 18-19 節, 18 章 21 節, 19 章 2 節参照)、この文脈では、彼女の罰は、第七の鉢の裁きを構成する一連の出来事の中で、雷と地震に続いて第三番目の出来事として関連付けられています。 その裁きは独特で、黙示録 17 章 15 節-19 章 3 節に詳述されています(以下のセクション II で扱います)。 その頃の反キリストの世界首都であるエルサレムは、ここで言及されている「大いなる都」です(黙示録 11 章 8 節でも、局所的な大地震の文脈で描写されています、上記 4: 黙示録 11 章 13 節)。 艱難期の前半が終わる時点で地震の裁きを受け(黙示録 11 章 13 節)、再臨に伴う大地震が予告されているので(イザヤ 29 章 6 節; エゼキエル 38 章 19 節; 参照.ゼカリヤ 14 章 1-7 節; 黙示録 6 章 12 節)、この時にエルサレムは物理的に三つに分かれるでしょう。モーセとエリヤと 144,000 人の働きに応えたユダヤ人は、この時、砂漠で安全な避難生活を送っていることを思い出してください(このシリーズの第 4 部、第 4 節「龍は、イスラエルの信者たちを迫害する」参照)。したがって、この地震は、まだ信じていないイスラエルの人々に対して、神から離れて救いを求めることの無益さを示すもう一つのしるしとなるのです。 この巨大な地震は、獣がハルマゲドンに向けて軍を集め始めたときに、獣に抵抗するためのすべての計画を深刻に混乱させると予想されるからです。しかし、エルサレムを三つに分割する地震は、二つの有益な効果をもたらします。1)イスラエル軍の全体的な戦力を低下させる一方で、エルサレム自体の防御力を高める(大量の産業廃棄物と瓦礫によってスターリングラードのドイツの攻撃が複雑になったことを参照)、2)地震による混乱は、バビロンからの難民の流入に道を開く結果になる(この出来事によって行政機関が混乱していなければ、入国を拒否されるかもしれません;下記Ⅱ.4 節参照)。

上記のように、第七の鉢は主の再臨の 6 ヶ月前に始まり、主の再臨で頂点に達する一連の神の裁きを意味するので、ここに記述されている最後の出来事である雹の災害と主の再臨の間には、ほとんど時間がないと考えてもよいでしょう。この点については、その後の「すべての島は逃げ去り、山も見当たらなくなった」という言葉は、その帰還に伴う次の大地震に当てはめる必要があります。(つまり、上記の#5＜第七の鉢の裁きに伴う地震＞ではなく、#6＜再臨そのものに伴う地震＞です)。この「再臨」の地震は巨大なものであり、その巨大でグローバルな衝撃波の影響を受けない地理的地物はほとんどないことを、この言葉は示しています。世界の島々や海岸は、この世界的な出来

事の津波によって押し流され、その激しい振動は世界のすべての山々にも影響を与え、その結果、多くの高層ビルが地上に崩れ落ちることになります。ですから、第七の鉢の裁きの第四の出来事は、第六の封印(黙示録 6 章 12-17 節)の再臨の記述で言及されている地震と同じであり、主の再臨の前兆として預言にしばしば言及されている出来事です(イザヤ 2 章 21 節, 24 章 18-20 節, 29 章 6 節; エゼキエル 38 章 19-20 節; ヨエル 3 章 16 節; ハガイ 2 章 6-7 節, 2 章 21 節; 参照. ゼカリヤ 14 章 1-7 節)山、島、地、空が「逃げる」ことは、裁きを行うために主が来られた時に伴う現象です(黙示録 20 章 11 節; 第二ペテロ 3 章 10 節参照)。

小羊が第六の封印を解いた時、わたしが見ていると、大地震が起って、太陽は毛織の荒布のように黒くなり、月は全面、血のようになり、 天の星は、いちじくのまだ青い実が大風に揺られて振り落されるように、地に落ちた。 天は巻物が巻かれるように消えていき、**すべての山と島とはその場所から移されてしまった。** 地の王たち、高官、千卒長、富める者、勇者、奴隷、自由人らはみな、ほら穴や山の岩かげに、身をかくした。 そして、山と岩とにむかって言った、「さあ、われわれをおおって、御座にいますかたの御顔と小羊の怒りとから、かくまってくれ。御怒りの大いなる日が、すでにきたのだ。だれが、その前に立つことができようか」。(黙示録 6 章 12-17 節)

雹(ひょう): 世界中で大粒の雹が降ったのは、大艱難期の始まりを告げる第七のラッパが吹かれた時にも伴ったものです(黙示録 11 章 19 節)。しかし、第七の鉢の審判の地震がその前の地震より指数関数的に大きく、比較にならないほど破壊的であるように、この世界的な雹の嵐は、出エジプト記の七番目の災い(出エジプト 9 章 13-35 節)とギベオンでカナン人の王たちに主が降らせた雹(ヨシュア 10 章 11 節参照)を凌ぐ、世界史上類がないものになるでしょう。それはその猛威だけでなく、この二つの裁きのように特定の地域に限定されないからです。地上のすべての人がこの神の裁きの激しさを感じるでしょう(信者たちは、いつものようにある程度は免れます:イザヤ 26 章 20-21 節, 32 章 19-20 節を参照)。

およそ 34 キログラムもの重さの雹が降り注ぐことで生じる恐怖や被害を、私たちはほとんど想像することもできませんが、この裁きについて最も注目すべきことは、世界の不信者たちの執念深い心の頑なさでしょう。大地震が起きても、雹が降っても、警告の声や雷や稲妻があっても、悔い改めようとは微塵も思わないのです。彼らの反応は、まさに神を冒涜することだけです。確かに、このすべてにおいて--神は、ご自分の行ないのすべてにおいて、また、悔い改めず、救いようのない悪に満ちたこの世にこれから行なうことすべてにおいて、ご自分の正義を明らかにされるのです。

(5)地はその住む民の下に汚された。これは彼らが[神の]律法にそむき、[神の]定めを犯し、とこしえの契約を破ったからだ。(6)それゆえ、のろいは地をのみつくし、そこに住む者はその罪に苦しみ、また地の民は焼かれて、わずかの者が残される。(イザヤ書 24 章 5-6 節)

II. バビロンへの裁き: 黙示録 17 章 1 節-19 章 4 節

1. 獣に乗る女、バビロン:黙示録 17 章 1-14 節

(1)それから、七つの鉢を持つ七人の御使のひとりがきて、わたしに語って言った、「さあ、きなさい。多くの水の上にすわっている大淫婦に対するさばきを、見せよう。(2)地の王たちはこの女と姦淫を行い、地に住む人々はこの女の姦淫のぶどう酒に酔いしれている」。(3)御使は、わたしを御霊に感じたまま[25]、荒野へ連れて行った。わたしは、そこでひとりの女が赤い獣に乗っているのを見た。その獣は神を汚すかずかずの名でおおわれ[26]、また、それに七つの頭と十の角とがあった。(4)この女は紫と赤の衣をまとい、金と宝石と真珠とで身を飾り、憎むべきものと自分の姦淫の汚れとで満ちている金の杯を手に持ち(エレミヤ 51 章 7 節; 黙示録 18 章 6 節; エレミヤ 25 章 19-32 節; オバデヤ 1 章 16 節; ゼカリヤ 12 章 2-3 節を参照)、(5)その額には、一つの名がしるされていた。それは奥義であって、「大いなるバビロン、淫婦どもと地の憎むべきものらとの母」というのであった。(6)わたしは、この女が聖徒の血とイエスの証人の血に酔いしれているのを見た。この女を見た時、わたしは非常に驚きあやしんだ。(7)すると、御使はわたしに言った、「なぜそんなに驚くのか。この女の奥義と、女を乗せている七つの頭と十の角のある獣の奥義とを、話してあげよう。(8)あなたの見た獣は、昔はいた(すなわち、「存在していた」)が、今はおらず(すなわち、「存在しない」ようになった)、そして、やがて底知れぬ所から(すなわち、一方ではローマの復活、他方では反キリストの明白な蘇生から)上ってきて、ついには滅びに至るものである。

---

[25] このシリーズの 2B 部の 黙示録 4 章 2 節 の説明をご覧ください。ここで使用されている「御霊に感じ」という表現は、1 章 10 節 のようなまったく新しい霊的な状態に入ることを指すのではなく、4 章 2 節 や 21 章 10 節 のような、聖霊による新しい啓示が与えられたことを指しています。

[26] 比べてみて下さい。黙示録 13 章 1 節では、単一の顕著な「冒涜の名」(反キリストが「キリスト」という称号を自分に付けている行為)を付けていますが、獣の＜七つの＞それぞれの頭部に分散して記されています。これに対し、ここでの記述では、獣の体に冒涜的な様々の名がついていることが説明されています。

地に住む者のうち、世の初めからいのちの書に名をしるされていない者たちは、この獣が、昔はいた(すなわち、「存在していた」)が今はおらず(すなわち、「存在しない」ようになった)、やがて来る(すなわち、一方ではローマの復活、他方では反キリストの明らかな蘇生する)のを見て、驚きあやしむであろう。(9)ここに、知恵のある心が必要である。[(参照.3 節と 13 章 1 節の)獣の]七つの頭は、この女のすわっている七つの山であり、また、七人の王のことである。(10)そのうちの五人はすでに倒れ、ひとり[次の者、すなわち第六番目の王]は今おり、もうひとり(すなわち、反キリスト)は、まだきていない。それが来れば、しばらくの間(すなわち、艱難期の間)だけおることになっている。(11)昔はいたが今はいないという獣は、すなわち第八のもの[王]であるが、またそれは、かの七人の中のひとりであって、ついには滅びに至るものである。(12)あなたの見た十の角は、十人の王のことであって、彼らはまだ国を受けてはいないが、獣と共に、一時(すなわち、一つの期間、具体的には艱難期)だけ王としての権威を受ける。(13)彼らは心をひとつにしている。そして、自分たちの力と権威とを獣に与える[ことになる]。(14)彼らは小羊に戦いをいどんでくるが、小羊は、主の主、王の王であるから、彼らにうち勝つ。また、小羊と共にいる召された、選ばれた、忠実な者たちも、勝利を得る。(黙示録 17 章 1-14 節)

17 章の大部分は、このシリーズの第 3 部 B の「反キリスト」ですでに説明されているので、読者にはその復習をお勧めします。しかし、17 章の主要な焦点であるバビロンへの裁きを検討するために、これらの節に注目することが必要です。 2 節でヨハネと話す天使は、この幻の目的が「多くの水の上に座っている大娼婦(=バビロン)の裁きをあなたに示すこと」であることをはっきりと述べています。この章はバビロンの裁きを主なテーマとしていますが、バビロンの滅亡は反キリストとの関わりを抜きにしては説明できないので、獣を含めることが必要なのです。

A. 獣に乗る女バビロン(1-6 節)

6 章の四騎士や 12 章の女と龍と同様に、ヨハネが見たこのバビロンと獣の幻も、寓話、つまり、未来に関する印象的で凝縮された内容を含む、象徴的な表現です。バビロンは、すでに指摘したように(第 3 部 B 参照)、獣の故郷であり、経済、軍事、文化の超大国であり、反キリストの王国の初期の国家であり、彼の軍事征服と世界規模の宗教の踏み台となったところです。15 節にあるように、女が座っている「水」は「民族、群衆、国、言語」であり、これは明らかにバビロンの世界的な権力と影響力を語っています(参照:エレミヤ 51 章 12-13 節)。

しかし、ヨハネが見たのは「多くの水の上に座っている」女ではありません。「多くの水の上に座っている」のは、 2 節でヨハネに幻を見せる前の、 1 節で天使が述べている説明です。ヨハネがこのマボロシで見たのは、七つの頭を持つ赤い獣の上に座っている、派手な姿の娼婦でした[27]。

バビロンという女の外見と行動は、売春と姦淫という点から、反キリストの世界支配とサタンの偽千年王国設立の計画における彼女の役割の特徴をよく表しています。 ここでの比喩では、売春と姦淫は一般的に、敬神的行いとは対照的な非合法で罪深い、邪悪な行動や関係を指しています。具体的にはこの比喩は、バビロンが悪魔の偽メシヤ(反キリスト、獣)と悪魔の偽の神の王国(その首都を自称している)を取り込み、不正取引をする様子を売春に例えています。娼婦が、うわべだけは魅力的だが中身のない誘惑の手口を用いて客を引き寄せるのと同じように、バビロンもまた、反キリストの思想と偽りの宗教を「売り込む」役割を果たすことになります。バビロンの手段は文化、経済、技術、軍事的なものであり、獣の世界征服と支配のために、政治的、社会的、宗教的な結果をもたらします。バビロンは、彼女の真の夫であるべき方、すなわち全世界が真の忠誠を誓うべき主イエス・キリストに仕える代わりに、その不忠を極めて巧妙に発展させ、悪魔の恐ろしい目的を遂行するために、悪魔の油注がれた者たちに身を売ったのです。バビロンに対する獣の影響力と権力の助長は、地の「王たち」だけでなく「住民たち」にも及んでいるとされています。バビロンの影響力の魔女の混ぜもの、すなわち彼女が犠牲者のために調合した「ぶどう酒」が、戦略的(軍事・政治的な大局)にも戦術的(文化、宗教、技術・経済面での影響による個人のレベル)にも大きな影響を与えたことを示しています。ここで注意しなければならないのは、現在のアメリカの文化やその他の影響力の罪深い悪の側面は、艱難期のバビロンが行うこととは、量的にも質的にも比較にならない、ということです。その最後の終末の日の「姦淫」は、意識的で意図的なものであり、現在想像できるものとは桁違いに過激なものだからです。したがって彼女は、黙示録 17 章から 19 章で述べられている神の裁きの前に、まったく弁明の余地のない状態になります。バビロンに対する神よりの最初の罪状は、バビロンが反キリストの腐敗、世界全体の奪取と虐待を露骨に助長し、幇助することです。バビロンに対する第二の罪状は、反キリストの世界宗教の総本山として大迫害を促進させることです。これが 6 節で彼女を「聖徒の血とイエスの証人の血に酔いしれている」と表現している意味であり、この強い酒が彼女を酔わせているという事実は、バビロンが大迫害に不本意ながら参加しているのではなく、この酒に「酔いしれている」、つまり、そ

[27] 獣の七つの頭と十本の角(バビロンに加えて、反キリストの王国を構成する国々を指します)の象徴と意味については、このシリーズの 第 3 部 B. III.1「獣の十本の角」で詳しく説明しています。

の迫害を病的に楽しんでいることを示唆しています。

「荒野」は、女が獣の背に乗っている場所として描かれていますが、これは反キリストの支配下にある世界の霊的荒廃を象徴しています。そして、その霊的に荒廃した世界を作り出すうえで、霊的に荒れ果てたバビロンが決定的な役割を果たしてきました。
さらに、この象徴はバビロンにとって二重の意味を持っています。というのも、彼女が広め、助長してきた霊的荒廃そのものが、今まさに、神が彼女に下そうとしておられる裁きによって、現実の、物理的な荒廃を彼女自身にもたらそうとしているからです。

獣の緋色(ひいろ)は、反キリストの支配が特徴とする、前例のない大量殺戮を象徴しています[28]。そして、女バビロンが身にまとっている緋色の衣も、同じ点において対応しています。というのも、彼女は、反キリストが行う迫害と殺戮において、全面的にそれを助け、後押ししてきたからです。すなわち、反キリストに敵対する者たちの虐殺全般において、そして特に、信者たちを殉教へと追いやる行為において、バビロンは共犯者として加担してきたのです。

> (バビロンよ)**あなたは言った、「わたしは、とこしえに女王となる」と。そして、あなたはこれらの事**(すなわち、自分の悪い行いの結果)**を心にとめず、またその**[自分の行いの]**終りを思わなかった。**(イザヤ 47 章 7 節; 参照.イザヤ 47 章 3 節)

> **彼女が自ら高ぶり、ぜいたくをほしいままにしたので、それに対して、同じほどの苦しみと悲しみとを味わわせてやれ。彼女は心の中で『わたしは女王の位についている者であって、やもめではないのだから、悲しみを知らない』と言っている。**(黙示録 18 章 7 節)

宝石と真珠で飾られた金の杯でありながら、その中身は淫行と忌まわしいものに満ちている――この杯の描写によって、バビロンという存在の象徴は決定的に示されています。これらの要素はすべて、獣に仕えるバビロンが、世界に及ぼす悪の影響の本質を物語っています。 彼女は反キリストのために売春をし、この杯とその内容物の描写は、すべて反キリストのための奉仕に関連しています。

---

[28] 赤は血の色であるためです(参照:黙示録 6 章 4 節, 12 章 3 節、および イザヤ 1 章 15 節 と 1 章 18 節 を比較)。ヘブル語で「血」を意味する dham (דם) は、おそらく 'adham (אדם)、すなわち「アダム」に由来し、その名前は「赤」または「血色」を意味します。

姦淫の「ぶどう酒」、政治的「解放」と宗教的「献身」に関する反キリストのメッセージは強力で[29]、それを飲む世界の国々と王たちの知恵を奪い(エレミヤ 51 章 7 節; 黙示録 18 章 6 節) 、しかも、魅力的な代理人の手によって、非常に魅力的なパッケージ(印象的な杯)で届けられます(ただし、最終的には神の怒りの杯をもたらすことになります: エレミヤ 25 章 19-32 節; オバデヤ 1 章 16 節; ゼカリヤ 12 章 2-3 節)。バビロンは美しく完璧な伴侶のように見えますが、実際は恥知らずな娼婦なのです。これらの象徴は、神を知り、神に忠実に従う者以外は、この売春婦とその策略に抵抗することは難しいことを明確に示しています。

B. バビロンが乗っている獣(7-14 節)

7 節から 14 節は、獣とその王国に焦点を戻し、その台頭の歴史を再現し、大艱難期の終わりの入口、すなわち、再臨に先立つ一連の最終的な出来事、その中でも重要な意味を持つバビロンの滅亡へと話を進めます。バビロンの場合と同じように本シリーズでは、すでに獣、反キリスト、その王国について、17 章にあるこれらの節のほとんどについても、詳細に取り上げてきました(本シリーズ第 3 部 B「反キリストとその王国」参照)。したがって、以下は主に要約および復習の目的で提供されています。

7 節: ここで「奥義」という言葉が使われているのは、ヨハネが見た獣に乗る女の姿は、説明を要する寓話であるからです。女はバビロン、獣は反キリスト、七つの山と十の頭はそれぞれ獣の元のヨーロッパ連合と征服後の複合帝国の十人の支配者を表しています。この時点で、獣がバビロンを「乗せている」とあるのは、反キリストが世界を征服し、もはや政治的反対勢力がないため、バビロンの支援はもはや必要ではなくなっている状態(その結果、バビロンは、以下で述べる裁きにさらされることになる)だからです。

8 節: 死の象徴的場所である底知れぬ所(死んだ不信心者の実際に現在いる所)から甦ることは、反キリストの擬似的な復活と彼のヨーロッパ帝国の奇跡的とも思える再建を表現しています。このように、「昔はいたが今はおらず、やがて来る」という三重の表現は、個人的な獣である反キリストと、領土的な獣である復活したローマ帝国の両方を描写しています。この帝国は、反キリストの元の王国バビロンに加えて、そこから世界を

---

[29] バビロンは、彼女が乗っている獣であるその主人とよく似ています。 ハバクク 2 章 5 節 を参照してください。「ワインが人を惑わすと思うなら、彼(すなわち反キリスト)はなおさらであろう」。 このシリーズの第 3B 部、セクション II.2.b、「反キリストの性格」<A5 サイズの印刷本では 95 頁>をご覧ください。

支配する権力基盤を構成しています。領土を持つ獣に適用される三重の表現は、規模、権力、位置の点でローマ帝国によく似た汎ヨーロッパ的な権力ブロックの現代的な形での復活を意味します。個人的な獣に適用される三つの記述は、獣の見かけ上の死と擬似的な復活を意味し、それによって、世界の不信心な人々の多くに、彼が真のメシヤであるという偽りの確信を抱かせるでしょう。欺かれた結果、これらの不信者たちはキリストへの救いの信仰に至りません。なぜなら、彼らの名前は「世の初めから」命の書に記されていたにもかかわらず、反キリストに従うことを選び、積極的にイエス・キリストを拒否したために、抹消されるからです[30]。この描写は、これまでに起こってきたすべての出来事にもかかわらず、それでもなお獣(反キリスト)に信仰を置かない不信者たちが存在することを想定しています。その中には、現時点ではまだ信じていないものの、やがてキリストの再臨を目の当たりにしたときにキリストへと立ち返る多くのユダヤ人の不信者たちも含まれています。(ゼカリヤ 12 章 10-14 節)。

9-11 節: 獣の七つの頭は、復活したローマ帝国内の七つの「山」または権力ブロック(参照:エレミヤ 51 章 25 節; 地理的な特定については 3B を参照)を表しています。ヨハネが見た赤い獣の幻からすると、この獣は歴史的なローマ帝国の支配者たちをも表しています。この絵像は、反キリストの地位を説明するために使われています。この獣は、ローマ帝国の初代支配者であるユリオ=クラウディア家が持っていたのと同様に、ローマが支配する地域に対して完全な権力と権威を持つようになるという意味で、絶対的支配者、あるいは「カエサル」の系統の「第七」です[31]。 この五人の皇帝は、ヨハネが『黙示録』を書いた時点では亡くなっていましたが、六人目のネロは生きていました。アンチキリストは、その系列の次の者である(すなわち、ユリオ=クラウディア人が歴史的ローマに対して行ったのと同様に、復活したローマに対して強力で絶対的な支配者となる)と同時に、「八人目」でもあると述べられています。なぜなら、彼は復活したローマの新しい皇帝であるだけでなく、バビロンの王でもあるからです。バビロンは復活したローマを支配する、反キリストの独自の王国であり帝国です。

12-14 節: 十の角は復活ローマの融合帝国の十人の王を表し、そのうちの七人は七つの「山」(もともとのヨーロッパの権力基盤とイスラエル)の摂政らとなり、三人は、獣が艱難期の前半に征服する南の同盟の三つの権力ブロックの摂政らとなります(パート

---

[30] 「消し去られる」とは、「来たる艱難期 第 4 部:大艱難期.第 VI.1.39「いのちの書」を参照のこと<A5 印刷本では 110 頁>。

[31] この数字は、ユリウス・クラウディウス王朝の 6 人の皇帝を表しており、王朝の創始者であり、最初の真の皇帝であるジュリアス・シーザーも含まれています。「来るべき苦難 3B:反キリストとその王国」の II.1.c.4 <A5 印刷本では 68 頁>を参照してください。

3B 参照)。 この点については以前の記事で述べたように、これら十人の副支配者はすべてサタンのしもべであり、最初から反キリストと手を組むことになります。このことは、13 節にある「目的は一つで、その力と権威を獣に与えようとする」と言われていることからも分かります。このように艱難期の半ばまでに、地球全体がある程度は反キリストの支配下に入り、「大艱難期」というその後半を特徴づける名称の由来となった大迫害への道が開かれることになります。14 節では、この幻とたとえが示す鳥瞰図は、ヨハネが 13 章-16 章で詳述した艱難期後半の出来事を経て、艱難期の最後を飾るハルマゲドンの戦いと再臨へと一気に突き進みます。しかし、その時には全世界の軍事力が結集

して、この方＜イエス・キリスト＞に対抗することになりますが、神の小羊の勢力には全くかないません。なぜなら、彼は「主の主、王の王」であり、真の神と真の人間として、永遠に唯一のお方だからです。私たちに代わって十字架上で死なれたことによって死に勝利された小羊は、将来の栄光の再臨の日に、ご自分に敵対する悪の軍勢を速やかに退けられるのです。ここでは、特別で恵まれた励ましの言葉が与えられています: イエスを信じる者であれば、艱難期が始まる前に主のもとに連れて行かれようと、その激しい試練の間に主のために殉教者として死のうと、主の再臨まで耐えようと、いずれにせよ、私たちは主の帰還の時点で復活し、主と共になり、その偉大で輝かしい日の勝利に与りながら、主と共に永遠に栄光のうちに生きることになるのです。さらに、私たちは「召され、選ばれ、忠実な者たち」と表現されています。これは私たちの救いが、召され、信じて神の家族に選ばれ、何が起ころうとも最後までその信仰を堅く保つという私たちの救いの経過を表しています。なぜなら、私たちは人生の終わりか復活のどちらかが先に来たとしても、その時まで信仰を堅く保って、その信仰によって「第一の復活」(参照:黙示録 20 章 5 節)に与り、再臨される勝利の主にお会いし、主と共になるために復活するからです。これらの言葉は、世界がこれまで経験したことのない最も激しい苦難、すなわち大艱難期に直面しても、最後まで信仰を堅く保つことの重要性を、すべての信者に強く印象づける重要なメッセージとなっています。

2. バビロンに対する憎しみ　黙示録 17 章 15-18 節

(15)御使はまた、わたしに言った、「あなたの見た水、すなわち、淫婦のすわっている所は、あらゆる民族、群衆、国民、国語である。(16)あなたの見た十の角と獣とは、この淫婦[バビロン]を憎み、みじめな者にし、裸にし、彼女の肉を食い、火で焼き尽すであろう。(17)神は、御言が成就する時まで、彼らの心の中に、御旨を行い、思いをひとつにし、彼らの支配権を獣に与える思いを持つようにされたからである。(18)あなたの見たかの女は、地の王たちを支配する大いなる都のことである」。(黙示録 17 章 15-18 節)

15 節: この節ではバビロンの権力と影響力が、世界中に及んでいることが示されています。これはバビロンが嫉妬心を掻き立てる大きなポイントですが、特に獣は、自分の栄光と競合するような地上の栄光を、何人あるいは何物にも認めることができないエゴを持っています。バビロンとその政治的、経済的、軍事的、そして文化的影響力がなければ、自分が現在享受している世界の支配を達成することはできなかったという事実は、反キリストにとってはほとんど重要なことではないでしょう。悪魔の真の息子として、その獣の石のような心には感謝の気持ちなど微塵も存在しません。この事実は、彼や彼の主であるサタンに仕えることを考えている者たち、たとえそれが純粋に世俗

的な観点からの判断であっても、すべての人々に考え直させるべきものです。

16-17 節: これはバビロンがどのように滅びるかを示す、黙示録における最初の記述です。旧約聖書の中で、バビロンの(歴史的、終末的)滅亡について書かれている箇所では、神がその原因ですが、そのような場合、神は地上の手段を用いています(以下のII.3-5 節参照)。 ヨーロッパの七人の支配者と南方同盟の三人の支配者らは、バビロンの地位、権力、影響力、富を同様に妬むでしょう。この時点まで、バビロンは艱難期の最悪の影響をほとんど受けずに済んだことをすでに見ているので、なおさらでしょう。(この章の前の娼婦の富について明らかに記されている)経済的混乱、(彼女の戸口から遠く離れた場所で行われる紛争のため)戦禍、そして、獣の故郷であり、寵愛される国土として、反キリストの最悪の社会、宗教、経済、政治体制および「改革」の影響を受ける事態から免れることになるからです。 獣自身の＜バビロンに対する＞憎しみも、間違いなく、バビロンが少し前に彼に不忠誠であったことに基づいています。少し前の第五の鉢の裁きの際に、バビロンは暗闇によって生じた、七つの王国の混乱を利用して、獣に対して陰謀を企てたことを思い出してください。

この時、バビロンを支配していた獣の副支配者が見せた不忠誠が、バビロン破壊の動機に大きく関わってきます。反キリストが反逆の北の闇へと緊急遠征を行った際、バビロンの支配者がイスラエルと共謀を企てたことに対して、バビロンの権力者や一般民衆が、別の指導者の可能性を探ることに反対する様子はまったく見られません。これまでバビロンが獣の蛮行の対象外であったことを考えれば、獣の帰還の際の態度が、バビロンの獣への恩義の無さに対する怒りからの「憎悪」に満ちたものであり、それが十人の王の嫉妬からくる「憎悪」と混じり合ったとしても不思議ではありません。

反キリストとその十人の支配者はその手段であって、この裁き自体は直接神の御手から発し、完全に神の御計画の中にあります(理由は後ほど明らかになります)。 しかし17節には、この裁きの過程と方法についても多くの情報が与えられています。まず、バビロンは同盟国や支援から孤立させられ(獣と十人の王によって「惨めなものにされ」)、次にすべての防御を剥奪されます(「裸にされる」)。バビロンが完全に無防備になると、「彼らはその肉を食べ、火で焼き尽くし」ます。このバビロンがまず略奪され(「その肉を食べる」)、次に破壊的な大火にさらされる(下記Ⅱ.5 項参照)という二つの過程での、この恐ろしい裁きのすべては、反キリストとその部下から発せられていますが、起源は神なのです。「神はご自分の目的を実行するために、彼らの心にそれを入れられたからです」[32]

[32] 参照:イザヤ 48 章 14 節 に、バビロンの滅亡において反キリストが、主の「選ばれた同盟者」として記載されています。

18 節: 以前(第 3 部 B.Ⅱ-Ⅲ)述べたように、バビロンは宗教的、文化的、技術的な力を象徴していますが、何よりもまず地理的に独立した国家であり、「地の王たちを支配する」大きな「都市国家」(ギリシヤ語でポリス、πόλις)なのです。反キリストが権力を握る前のこの支配、統治、影響力は、主に彼女の政治力、軍事力、経済力の結果でした(そして、略奪と破壊の前に、彼女はこれらの資産と防衛力を剥ぎ取られるのです)。 バビロンは、サタンの王冠の宝石を象徴しています。古代ローマを除けば、世界の歴史の中で、これほど体系的で目に見える力(政治、軍事、経済)が、体系的で無形の影響力(宗教、文化、技術)に包まれた国は他にありません。 しかし、バビロンが力を誇示する国家であろうと、影響力を誇示するシステムであろうと、結局、バビロンは人間で構成されていることを忘れてはいけません。そして、その人間の集団的堕落が、将来の終末の日に、この極限の神の裁きを呼び起こすのです。

バビロンの城壁に向かって旗を立て、見張りを強固にし、番兵を置き、伏兵を備えよ。主がバビロンに**住む者**を攻めようと図り、その言われたことを、いま行われるからだ。(エレミヤ 51 章 12 節)

3. バビロンは滅びた 黙示録 18 章 1-3 節

(1)この後、わたしは、もうひとりの御使が、大いなる権威を持って、天から降りて来るのを見た。地は彼の栄光によって明るくされた。(2)彼は力強い声で叫んで言った、「倒れた、大いなるバビロンは倒れた。そして、それは悪魔の住む所、あらゆる汚れた霊の巣くつ、また、あらゆる汚れた憎むべき鳥の巣くつとなった。(3)すべての国民は、彼女の姦淫に対する[神の]激しい怒りのぶどう酒を飲み、地の王たちは彼女と姦淫を行い、地上の商人たちは、彼女の極度のぜいたくによって富を得たからである」。(黙示録 18 章 1-3 節)

1 節: 黙示録第 10 章の小さな巻物を持つ天使と同様に、この天使もまた、キリストの予型と見るのが最も適切です[33]。黙示録第 10 章の天使の場合と同じように、この天使も「天から降りてくる」姿で描かれています(これは再臨の象徴です)。この天使は、また「大きな力」を持っているとされ(参照.1 節と黙示録 10 章 1 節)、また「力強い声」を持っているとされています(参照. 2 節と黙示録 10 章 3 節)。また、黙示録第 10 章に登場する、髪と顔が「太陽のようだった」(黙示録 10 章 1 節)力強い天使と類似して、この天

[33] このシリーズの第 3 部 A.Ⅳ.1.「強力な天使はキリストの予型です」を参照。

使の場合は「地は彼の栄光によって明るくされた」(1 節)とも言われています。バビロンの陥落は、預言的には「主の日」の最後の出来事と密接な関係があり、メシヤであり、私たちの主、また救い主であるイエス・キリストの千年王国をもたらし、大艱難期を終わらせる一連の最後の裁きの一部を構成しているので、差し迫ったバビロン陥落に関するこの予言が別の強力な天使に与えられたことは、同様に、今差し迫った主の帰還を予見させ[34]、その帰還が即時であるという事実を強調しています。バビロンが滅ぼされると、ハルマゲドンと再臨が立て続けに起こることになるのです。

2 節: 黙示録の第 10 章に登場する天使の場合と同様に、ここで告げられた「大いなるバビロンは倒れた！」という宣言は、予言的なものですが、間もなくその通りになるものです。「バビロンから逃げよ」という命令は、この予言の直後に発せられます(黙示録 18 章 4 節)。実際の破壊は、ほとんど間を置かずに続いて起こります(その描写は黙示録 18 章 5 節から始まります)。

裁きの後のバビロンが、悪霊ども、汚れた霊、汚れた鳥の住処と化すことは、この裁きが神からのものであり、第一級の呪いであることを象徴的に表しています[35]。

神の手によって完全無欠に創造された光と喜びの楽園である原初の地球(創世記 1 章 1 節)は、創世記 1 章 2 節に記されているように、サタンの反逆に対する神の裁きの、暗闇にされるという壊滅的な呪いにより[36]、完全な荒廃と廃墟となって「形なく、むなしく」破壊されるまでの状態となったように、またソドムとゴモラが火と硫黄で完全に滅ぼされて今日に至るまでも呪いの対象となっているように、バビロンの裁きも破滅的なものとなり、その終末は、唯一の生ける神ではなくサタンに仕えた愚かさの記念碑となるでしょう(参照. 黙示録 18 章 22-23 節; 19 章 3 節)。

3 節: 獣とその十人の副王がバビロンを憎む理由(それぞれ報復と嫉妬)はすでに考察してきましたが、ここでは、バビロンが神からこのような壊滅的な裁きを受けた二つの理由のうちの一つが述べられています。 第一の理由は、バビロンが世界(主に不信仰者)に及ぼした悪影響に関するもので、艱難期を通じて人間の生活を特徴づけ、その時代の世界を支配することになる霊的「売春」制度を促進、支援し、事実、ほとんどを創出したことです。この堕落させる影響力には、主に三つの領域があると説明されています。

---

[34] このシリーズの第 6 部. I「再臨の裁き」を参照。＜未翻訳＞

[35] 不浄な鳥の存在と悪霊どもがバビロンに閉じ込められることが文字通りの意味である限り、それは短期間に過ぎないでしょう。なぜなら、一方では千年王国は世界中に想像を絶する祝福がもたらされる時代であり、他方では、私たちの主が再臨されるときに、すべての堕天使が地上から永久に追放され、千年の終わりに悪魔だけが一時的に解放されるからです(黙示録 20 章 7-10 節)。 このシリーズの第 6 部.I.4「サタンとその悪霊どもの投獄」<未翻訳＞を参照。

[36] 「サタンの反乱」の第 2 部「創世記の空白期」を参照。

1) 他の国々、2) 世界中の「王」または支配階層、3) 「商人」です。 ここでバビロンとその腐敗した価値観や習慣が、いかに広く浸透していたかを知ることができます。バビロンの文化的・宗教的影響、政治的・軍事的影響、経済的・技術的影響が、この三つのグループに及んでいることがわかるからです。神から離れて解決策を求めるという売春の精神(そして、その代わりにサタンに傾倒し、獣に従うことで明確にそうなる)は、その将来の日の世界におけるあらゆる重要な権力集団の根底に深く浸透していくでしょう。このようなレベルの罪責を負い、艱難期に反キリストとその父である悪魔が世界全般で「成し遂げた」すべてのことに自ら不可欠な存在となったバビロンが、これほど異常な神の怒りを招いても不思議ではありません。

4. バビロンから離れ去れ: 黙示録 18 章 4 節

わたしはまた、もうひとつの声が天から出るのを聞いた、「わたしの民よ。彼女から離れ去って、その罪[罰に]にあずからないようにし、[下されようとしている]その災害に巻き込まれないようにせよ。(黙示録 18 章 4 節)

前にも述べたように、この時点まで、バビロンは獣の艱難期の支配の厳しい局面を免れてきました。この 4 節の命令は、バビロンが信者にとってある種の「安全な避難所」であったことを明確に示しています。もちろん、バビロンとその周辺に住む信者が、艱難期の試練(例えば、二つの世界的な神の裁きと反キリストの政策による一般的な苦しみ)や大迫害から、それまで完全に免除されてきたと期待すべきではありませんが、しかし、黙示録のこの章の残りの部分では、バビロンが過剰な贅沢を特徴としていることが明確に描かれているので、黙示録 18 章 4-24 節の記述から判断すると、少なくともその特権階級はほとんど不足を知らず、この時点まで、世界の他の国々よりもはるかにうまくやってきたことがわかります。 第二にこの聖句は、1) 大迫害にもかかわらず、まだバビロンに住んでいる相当数の信者がいること、2) 現時点では、少なくともこの「バビロンから逃げよ」という命令に応じるための行動の自由と機会があることを確実に想定しているのです。 ある人はバビロンが反逆した時点で、獣とその帝国軍がその王国に下された超自然的な暗闇の幕の中に一時的に消えて、それまでの監禁、拘束、制限が解かれたことは間違いないでしょう。 また、世界中のイエスにある兄弟姉妹が耐えているような、深刻な問題から免れている人もいるかもしれません。 しかし、この時の大地震でエルサレムが破壊され、特にエルサレムが反キリストの首都となっていることを考えると、エルサレム**に**は誰も逃げ込むことはないように思われるでしょう。 しかし、これまでの経験や人間の理屈に関係なく、この命令が下ったら、信者はそれに応じることが絶対的に重要です。そうしないと、「バビロンに降りかかろうとしている災害に巻き

込まれる」ことになります(黙示録 18 章 4 節)。艱難期の他の天の命令、しるし、合図(例えば、黙示録 8 章 5 節; 10 章 3-7 節; 11 章 15 節; 11 章 19 節)を考えると、このバビロン脱出の命令は、少なくともバビロンの国境内にいるすべての信者に聞こえ、理解できる命令であると理解するとよいでしょう。 イエス・キリストへの信仰を保っている人たちは、この命令に直ちに応答することが絶対必要です。この特に明確な警告に従わない言い訳はできないからです(第二ペテロ 3 章 1-13 節参照)。

(28)ロトの時にも同じようなことが起った。人々は食い、飲み、買い、売り、[果樹を]植え、[家を]建てなどしていたが、(29)ロトがソドムから出て行った日に、天から火と硫黄とが降ってきて、[裁きが下って、立ち去ることをしなかった]彼らをことごとく滅ぼした。(30)人の子が現れる日も、ちょうどそれと同様であろう。(31)その日には、屋上にいる者は、自分の持ち物が家の中にあっても、取りにおりるな。畑にいる者も同じように、あとへもどるな。(32)**ロトの妻のことを思い出しなさい。**(33)自分の命を救おうとするものは、それを失い、それを失うもの(すなわち、失ったものとして扱っている者)は、保つのである。(ルカ 17 章 28-33 節)

人々が平和だ無事だと言っているその矢先に、ちょうど妊婦に産みの苦しみが臨むように、突如として滅びが彼らをおそって来る(すなわち、ハルマゲドンで頂点に達する艱難の裁きが始まる)。そして、それからのがれることは決してできない。(第一テサロニケ 5 章 3 節)

上記の聖句は、厳密にはこの状況を説明しているわけではありませんが、確かに当てはまります。最初の聖句は、その時の私たちの対応は、後ろを振り返らず、優柔不断にならず、迅速かつ決定的でなければならないという教訓を教えており、二番目の聖句は、逃げる必要性が全く直感に反するものであることを示唆しています。世俗の世界では、獣の王国を暗闇に陥れた第五の鉢の裁きとそれに続く不安定な状況、そして反キリストが一時的に暗闇に消えることは、長い悪夢の終わりを示すように見えますが、実際にはバビロン滅亡までの非常に短いカウントダウンが始まるのです。自分の問題は完全に解決したと誤った結論を下した者は、バビロンの滅亡前に反キリストが闇から再出現した後、自分の過ちに気づいたとしても、おそらくは逃げ遅れてしまうでしょう。黙示録のこの一節は、逃亡のチャンスは実に限られているものであることをはっきりと示しています。

あなたがたはバビロンから出、カルデヤからのがれよ。(イザヤ 48 章 20 節前半)＜歴史的に、カルデヤ人がバビロニア王国を建設した。ここで言われているカルデヤはバビロンを指す＞

(8) バビロンのうちから逃げよ。カルデヤびとの地から出よ。群れの前に行く雄やぎのようにせよ。(9)見よ、わたしは大きい国々を起し集めて、北の地からバビロンに攻めこさせる。彼らはこれに向かって勢ぞろいをし、これをその所から取る。彼らの矢はむなしく帰らない老練な勇士のようである。(10)カルデヤは人にかすめられる。これをかすめる者はみな飽くことができると、主は言われる。(エレミヤ 50 章 8-10 節)

種まく者と、刈入れどきに、かまを取る者をバビロンに絶やせ。滅ぼす者のつるぎを恐れて、人はおのおの自分の民の所に帰り、そのふるさとに逃げて行く。(エレミヤ 50 章 16 節)

(6) バビロンのうちからのがれ出て、おのおのその命を救え。その罰にまきこまれて断ち滅ぼされてはならない。今は主があだを返される時だから、それに報復をされるのである。(7)バビロンは主の手のうちにある金の杯であって、すべての地を酔わせた。国々はその酒を飲んだので、国々は狂った。(8)バビロンはたちまち倒れて破れた。これがために嘆け。その傷のために乳香を取れ。あるいは、いえるかも知れない。(9)われわれはバビロンをいやそうとしたが、これはいえなかった。われわれはこれを捨てて、おのおの自分の国に帰ろう。その罰が天に達し、雲にまで及んでいるからだ。(エレミヤ 51 章 6-9 節)

(6) 主は仰せられる、さあ、北の地(すなわち、バビロン)から逃げて来なさい。わたしはあなたがたを、天の四方の風のように散らしたからである。(7)さあ、バビロンの娘と共にいる者よ、シオンにのがれなさい。(ゼカリヤ 2 章 6-7 節)

上記の聖句はすべて、バビロン捕囚の後、ユダヤ人がイスラエルに帰還する歴史的な状況を指すと同時に、終末論的バビロンから信者が滅亡前に脱出する状況も指す、二重の意味を持つ聖句です。このように終末の日の最終的な成就を理解し、それを適用しなければ、これらの箇所や他の同様の箇所の詳細の多くは理解できません。上記の引用から、この脱出に関するいくつかの重要な疑問に対する答えが明らかになります。

意味するところ: 歴史的なバビロンからの帰還のほかに、三つの「脱出」が終末に関する預言の中で言及されています。 1) イスラエル国内の信者が荒野の聖域へ急速に逃避する。これは艱難期の中期に反キリストが全世界を支配するときに起こります(参照:黙示録 12 章 6 節, 12 章 13-16 節;本シリーズ第 4 部.2.「女と龍」で取り上げて

います)。 2)艱難期が終わった再臨後、世界のすべての国からイスラエルに戻る、ユダヤ人の大規模な計画的な移動(例えば、イザヤ 60 章 4 節～, 66 章 20 節)。 3)ハルマゲドンに先立つバビロン破壊直前の信者たちの急速な出国(今私たちが取り上げているこの聖句、黙示録 18 章 4 節はこのことを言っています)です。

どこに逃げるか: これまで見てきたように、この時、反キリストの支配下にない唯一の場所は、バビロンの他にイスラエルしかありません。聖書は、この時、バビロンから逃れる信者たちは、唯一の安全な避難場所、つまりエルサレムを唯一の目的地として逃れることを示しています。

門よ、泣きわめけ。町よ、叫べ。ペリシテの全地よ、恐れのあまり消えうせよ、北から煙が来るからだ。その隊列からは、ひとりも脱落する者はない」。 その国の使者たちになんと答えようか。「主はシオンの基をおかれた、その民の苦しむ者はこの(エルサレムの)中に避け所を得る」と答えよ。(イザヤ 14 章 31-32 節)

聞けよ、バビロンの地から逃げ、のがれてきた者の声がする[響く]。われわれの神、主の報復、その宮(すなわち、信者ら; 参照.第一コリント 3 章 16-17 節, 6 章 19 節; 第二コリント 6 章 16 節; エペソ 2 章 21 節; 第一ペテロ 2 章 4 節～)の報復の事をシオン(すなわち、エルサレム)に告げ示す。(エレミヤ 50 章 28 節)

(9)われわれはバビロンをいやそうとしたが、これはいえなかった。われわれはこれを捨てて、おのおの自分の国に帰ろう。その罰が天に達し、雲にまで及んでいるからだ。(10)主はわれわれの正しいことを明らかにされた(黙示録 19 章 8 節後半参照)。さあ、われわれはシオン(すなわち、エルサレム)で、われわれの神、主のみわざを告げ示そう。

(44)わたしはバビロンでベルを罰し、そののみこんだもの(すなわち、「ベル」に代表される反キリストの宗教的迫害から解放された信者)を口から取り出す。国々が川のように彼に流れ入ることはなくなる。バビロンの城壁(すなわち、軍事的な保護)は倒れた。(45)わが民よ、あなたがたはその中から出て、おのおの主の激しい怒りを免れ、その命を救え。(エレミヤ 51 章 44-45 節)

つるぎをのがれてきたあなたがたは、行け、立ちとどまってはならない。遠く(すなわち、バビロン)から主を覚え、エルサレムを心にとめよ(すなわち、エルサレムに思いを向けよ)。(エレミヤ 51 章 50 節)

(2)しかしベツレヘム・エフラタよ、あなたはユダの氏族のうちで小さい者だが、イスラエルを治める者があなたのうちからわたしのために出る。その出るのは昔から、いにしえの日からである。(3)それゆえ、産婦の産みおとす時まで、主は彼らを[抑圧者に]渡しおかれる。その後その**兄弟たちの残れる者は**イスラエルの子らのもとに帰る。(ミカ 5 章 2-3 節)

(6)主は仰せられる、さあ、北の地(すなわち、バビロン)から逃げて来なさい。わたしはあなたがたを、天の四方の風のように散らしたからである。(7)さあ、バビロンの娘と共にいる者よ、**シオンにのがれなさい。**(ゼカリヤ 2 章 6-7 節)

いつ逃げるか: 鉢の裁きが始まる前に、反キリストがサタンの世界執政官としてエルサレムで統治し、世界全体が程度の差はあるものの、直接支配されていることを考えると、獣が第五の鉢の裁きの暗闇の中に出て行き、それに伴うイスラエルとバビロンでの反乱が、信者がバビロンを離れる、またはシオンに逃れる最初の機会であると思われます。上に見たように反キリストは、敵対者の驚くことにその後すぐに再登場し、世界中の連合軍にハルマゲドンに集合するように指令を発します。この命令は、(イスラエルとバビロンのわずかな軍隊を除く)彼の指揮下にある全世界の軍隊に対して出され、獣が消えてからわずか 1 ヶ月後に起こる第六の鉢の裁きを構成しています(図 1 参照)。獣の再出現の直後にハルマゲドンの宣言が出されるだろうと推測できますが、それまでの出来事によってこの指揮系統が著しく混乱しているため、この命令の有効な実施と彼の全世界に対する支配の再確立には、ある程度遅れが生じるでしょう。それでもこの時点から、逃亡は困難になるだろうと結論付けることができます。したがってこの狭い機会が最初に開かれた時点で、**直ちに**逃げる必要性についての上記の指示は、主が「急いで逃げ、後ろを振り返ってはならない」と警告されているとおり、厳格に守られなければなりません(マタイ 24 章 18 節; マルコ 13 章 16 節; ルカ 17 章 28-33 節; 参照:第一テサロニケ 5 章 3 節)。これは獣が(一時的に)不在であるため、世俗的な目には完全に直感に反するように見えるにも関わらず守らなければなりません(参照:バビロンが「安全にくつろいでいる」と描写されている裁きの前の状況:イザヤ 47 章 8 節)。また、急いで逃げなければならないので、あらゆる種類の広範な準備も不可能でしょう。これまで投獄されたり、個人の自由が著しく制限された生活を送ってきた信者たちは、主が「紅海に道を開く」、つまりイスラエルへの必要な輸送手段を用意してくださることを信頼しなければなりません。空路であれ海路であれ時間は限られており、物質的な財産はほとんど持っていくことはできないでしょう。ロトがソドムを去り、イスラエル人がエジプトを去ったように、私たちも持てるものを持って、大急ぎで出発しなければなりません(エレミヤ 21 章 9 節参照)。

なぜ、この時に逃げることが必要で、それ以前に逃げることは賢明でないかもしれないのか： バビロンから逃げなさいという命令は、明らかに信者（すなわち、「私の民」）に対して与えられています。ですからこの命令から、この時点でもバビロンに神の民がいることが、そしてこの命令が聖書で強調されていることから、かなりの人数がいることが想像されます。 ですから少なくともこれらの事実は、バビロンからの早期脱出を禁じているわけではありませんが、信者が艱難期の後半にバビロンの支配領域の内側に住んでいても、罪にはならないと結論づけなければなりません。上記のように、大多数の者でなかったとしても、少なくとも多くの信者にとって、早期の脱出は不可能かもしれません。大迫害の間、バビロンに住んでいる人が、獣の印と反キリストの崇拝を拒むことから、処刑を免れたとしても、厳しい制限（刑務所や強制収容所への投獄、財産の差し押さえ、旅行や移動の制限など）を受けることが予想されるからです。ですから獣に屈服する代わりに、小羊が導くところならどこへでもついて行くことを選ぶ人たちにとって、この以前にバビロンを去るという問題は、まったく無意味なことかもしれません。その理由は、1）クリスチャンとしての奉仕と働きを続けるため、2）危機に対する霊的準備を続けるため、3）主のために証しを続けるため、4）早く出発できない人、したくない人に指導と支援を提供するため、などです。 まとめると、バビロンにいる多くの信者にとって、主は私たちが撤退の最終指令まで、ここにいる目的を持っていると考えなければなりません。そして、この黙示録 18 章 4 節の指令の前に立ち去ることは、明確で決定的な神のメッセージがないままに行動することになるということで、これは取るに足りないことではありません（たとえ、預言によって、まさにこのメッセージが来るだろうと言われていたとしてもです）。最後に、この重要な最後の命令の前にバビロンから離れようとする人たちに、「どんな避難場所を見つけることができるだろうか」という重大な問いを投げかけるとよいでしょう。この瞬間まで、全世界は反キリストの支配下にあり、バビロンだけが信者にある程度の聖域を提供していました（もちろん、大艱難期が始まる直前にイスラエルからの信者の難民に提供された荒野の避難所は例外で、完全にアクセスできないものでした）。ですからこの命令を予期して、自分で選んだ避難所に早く逃げ込もうとする人は、辛抱強く主の時を待っていた場合よりも、はるかに悪い状況に追い込まれる可能性が非常に高いのです。 獣の支配が一時的に中断されたこの時点でのみ、出発する明確な機会と、神によって預言された明確な目的地を求めることができるのです。それがエルサレムです。

どのように？： 大迫害において獣の裁判にかけられるとき、何を話すか前もって考えないようにと指示されているように（マタイ 10 章 19-20 節; マルコ 13 章 11 節; ルカ 21 章 14-15 節）、この脱出のための事前準備はほとんど役に立たないように思えますが、それはその将来の状況の詳細が、＜逃れる＞機会の枠が狭いという事実以外にはわからないからです。この最後の点は、事前の綿密な計画は実行不可能であり、少なくと

もその計画を立てた人々が「すべてが解決するまで」実行を遅らせる原因となる限り、障害となる可能性があることを示唆しています。家、財産、持ち物、資産、金、そして何らかの理由で急いで逃げ出そうとしない愛する人たちまで、主の断固とした命令に従うために、私たちは皆、多くのものを置き去りにしなければならない可能性が高いからです。ひどく遅れる者は、ロトの義理の息子たちのような末路をたどるでしょう。後ろを振り返る者は、ロトの妻のような末路をたどるでしょう。この原則の結論として、具体的な事前の準備は、その場になったときに役に立たない可能性が高いので、それを行う意味はほとんどないということです。聖書は「サバイバル主義の考え方」を持つこと、食料や武器を蓄え、人里離れた場所に避難することを支持していません。実際、七年間の艱難期の間、反キリストは、真に「キリストの者」であるすべての人々を識別し、探し出し、迫害することに、ほとんど何の問題もないでしょう。このことを否定的に捉えるのではなく、肯定的に捉えることもできます。時が来れば、主はバビロンから脱出するための方法を与えてくださるので、その前に起こる大迫害ですべての財宝を失うことは、心に留めないようにすべきです。神がそう定められているので、必ず道は開けるでしょう。一方、その「道」を確保するために所有物を手放さず、それに頼っている場合、その所有物がむしろ「錨」となって、私たちが時機を得た旅に出ることを妨げる可能性もあります。「バビロンから逃げろ！」という命令を聞く時には、私たちの多くはそこに留まっても得るものはほとんどなく、逃げなければならないことは不幸中の幸いであることが分かるかもしれません。上記のように、反キリストが一時的にイスラエルから離れ、バビロンがイスラエルの反乱に同調することで、エルサレムへの旅の機会が生まれます。イザヤ書 43 章 14 節は、後にバビロンから不信仰の逃亡者が脱出したことを述べていますが、これは、この時の移動手段は海路であることを少なくとも示唆しています（ただし、イザヤ書 21 章 6 節～には、様々な移動手段が可能であることが示されています）。エルサレムが獣の世界的な宗教的・政治的本拠地となり、世界中の人々が反キリストへの忠誠を示すために神殿を巡礼するようになると、イスラム教徒をメッカに移送するのと同じような大規模なフェリー便が発展することは想像に難くありません（ただしこの場合には、さらに大規模で世界のあらゆる地域、特にバビロンに運航することになるでしょう）。このような巡礼が一時的に停止されるので、巡礼に使われていたフェリーが、信者をエルサレムに運ぶために利用されることになるでしょう。牢獄や収容所から解放されたばかりの人たちは、ほとんど、あるいは全く物的手段を持っていないかもしれませんが、主が私たちの出発のための物的手段を与えてくださると、完全に信頼することができます。ちょうど主が、イスラエル人に対して「エジプト人の目に好意」を与え、イスラエル人をエジプトから急いで脱出させ豊かにされたように（出エジプト 12 章 35-36 節; 参照. 出エジプト 3 章 21-22 節, 11 章 2-3 節; 詩篇 105 篇 37 節参照）、主の命令に喜んで従う者が、船賃（または他のもの）が無くて取り残されてしまうようなことはないと絶対に確信してよいのです。

(33) そして、民のうちで洞察力のある者たちは、剣(すなわち殉教)と炎(すなわち殉教に至る拷問)と捕囚(すなわち投獄)と略奪(すなわち財産の没収)によって迫害される民を、しばらくの間、教えるでしょう。(34) そして、彼らが迫害を受ける時、彼らは少しの助けを受けるでしょう……(ESVからの訳　ダニエル 11 章 33-34 節前半)

出エジプト記との類似:　出エジプト中のイスラエルの子供たちの体験は、艱難期を通る信者の体験全体と、預言的に重要で詳細な類似関係を示しており、私たちはこのシリーズの第 7 部で詳しく考察することになります。しかし、エジプトからの実際の出発には、この時点で留意すべき重要な比較点がいくつかあります:

- 解放された人々の出自と性質: イスラエル人がエジプトに行ったように、アメリカに神の種がもたらされ、それ以来、養われ、拡大し続けています。しかし、神がご自分の民とそうでない民を区別し、エジプトからご自分の民を呼び出す時があったように、バビロンの場合もそのようになるでしょう(参照. ヘブル 11 章 7-8 節)。

- 神の代理人による圧政からの解放: エジプトがはじめは、神の民にとても親切であったように、バビロンの場合も同様です。 しかし、イスラエルがその地に滞在していた最後の時代に、厳しい支配者がイスラエルの民を激しく圧迫しました。そのようにバビロンの場合も、艱難期の日々が神の民に重くのしかかり、信者がこの国でますます大きな抑圧に直面することが予想されます。 しかし、イスラエルの民が神の力によってパロの手から救い出されたように、報復の鉢の裁きは、神が牢獄の扉を開いて、私たちが安全にバビロンから離れることができる状況を作り出します。ちょうど、初子の災いと脱出の前に、エジプト人に暗闇があり、イスラエルの民には光があったように、来たるべき日には、反キリストの王国には闇があり、バビロンから脱出する信者には光があるのです。

- 神の備え:　前述したように、主はイスラエル人が手ぶらでエジプトを去ることを許さず、エジプト人の目に恵みを与え、彼らが「奪い取る」ようにされました(出エジプト 12 章 35-36 節; 参照.出エジプト 3 章 21-22 節, 11 章 2-3 節; 詩篇 105 篇 37 節)。 ですから私たちも、どんなに弾圧されても、どんなに長く牢獄に閉じ込められても、どんなに徹底的に所有物を没収されても、バビロンからエルサレムへ出発するために、必要な手段が与えられることを確信することができるのです。

- 迅速な出発 ： 神はアブラハムを、適切な時期に彼の国から約束の地へ導かれました(ヘブル 11 章 8 節)。神はノアが当時の世界の滅亡から「逃げる」ために、洪水が来た日に世界と一緒に滅ぼされないように、(ノアが)神の指示に従うことによって備えられるようにされました(ヘブル 11 章 7 節)。また、神はイスラエルの民を同じように迅速かつ決定的な方法で連れ出し、出発の時が来たら急いで行進できるように、たそがれ時に出発させました(出エジプト 12 章 11 節, 12 章 31 節, 12 章 34 節, 申命記 16 章 6 節)。ちょうどそのように、将来の日に神の命令を明確に受け取った信者は、急いでそれを実行することが義務付けられるのです。

- 海を越えて約束の地へ解放される ： ＜イスラエルの民が＞約束の地と彼らの間に紅海という一見不可能な障害に直面し、神の力強い手によって奇跡的に海を渡って救われたように、私たちも主があらゆる困難、試練、苦難を乗り越えて、エルサレムで主の帰りを待つ場所(その後の新エルサレムでは永遠に主を喜ぶ場所)に、無事に連れて行ってくださると信じてよいでしょう。

5. バビロンが滅ぼされる: 黙示録 18 章 5-8 節

(5)彼女の[バビロンの]罪は積り積って天に達しており、神はその不義の行いを覚えておられる。(6)彼女がしたとおりに彼女にし返し、そのしわざに応じて二倍に報復をし、彼女が混ぜて入れた杯の中に、その倍の量を、入れてやれ。(7)彼女が自ら高ぶり、ぜいたくをほしいままにしたので、それに対して、同じほどの苦しみと悲しみとを味わわせてやれ。彼女は心の中で『わたしは女王の位についている者であって、やもめではないのだから、悲しみを知らない』と言っている。(8)それゆえ、さまざまの災害が、死と悲しみとききんとが、一日のうちに彼女を襲い、そして、彼女は火で焼かれてしまう(獣とその連合軍が行う侵略)。彼女をさばく主なる神は、力強いかたなのである。(黙示録 18 章 5-8 節)

物質的に豊かな社会では、謙虚さや死に対する感覚を失ってしまうことは、＜物質的豊かさに伴う＞職業病のようなものとも言えるでしょう。これは、個人としても、国家としても当てはまることです。

あなたは食べて飽き、あなたの神、主がその良い地を賜わったことを感謝するであろう。 あなたは、きょう、わたしが命じる主の命令と、おきてと、定めとを守らず、あなたの神、主を忘れることのないように慎まなければならない。あな

たは食べて飽き、麗しい家を建てて住み、 また牛や羊がふえ、金銀が増し、持ち物がみな増し加わるとき、おそらく心にたかぶり、あなたの神、主を忘れるであろう。主はあなたをエジプトの地、奴隷の家から導き出し、あなたを導いて、あの大きな恐ろしい荒野、すなわち火のへびや、さそりがいて、水のない、かわいた地を通り、あなたのために堅い岩から水を出し、先祖たちも知らなかったマナを荒野であなたに食べさせられた。それはあなたを苦しめ、あなたを試みて、ついにはあなたをさいわいにするためであった。あなたは心のうちに『自分の力と自分の手の働きで、わたしはこの富を得た』と言ってはならない。[むしろ]あなたはあなたの神、主を覚えなければならない。主はあなたの先祖たちに誓われた契約を今日のように行うために、あなたに富を得る力を与えられるからである。(申命記 8 章 10-18 節)(参照. ホセア 13 章 6 節)

しかるにエシュルンは肥え太って、足でけった。[そうだ]あなたは肥え太って、つややかになり、自分を造った神を捨て、救の岩を侮った。(申命記 32 章 15 節)

わたしは二つのことをあなたに求めます、わたしの死なないうちに、これをかなえてください。うそ、偽りをわたしから遠ざけ、貧しくもなく、また富みもせず、ただなくてならぬ食物でわたしを養ってください。 飽き足りて、あなたを知らないといい、「主とはだれか」と言うことのないため、また貧しくて盗みをし、わたしの神の名を汚すことのないためです。(箴言 30 章 7-9 節)

しかし、ここで描かれているバビロンは、この原則を歴史上でも極限と言えるほどの段階まで押し進めてしまった存在として描かれています。そのため、神の知恵に基づく裁きにおいて、彼女の罰は、彼女自身が何よりも大切にし、誇りとしてきたものをすべて奪われることとなります。それらは、彼女が「決して失うことはない」と思い込んでいたものであり、それを失うことは、剣が心臓を貫くような致命的な打撃となるのです。この裁きは、「倍返し」「二重の裁き」と表現される徹底的な破壊であり、それによってバビロンは、自らが傲慢にも誇ってきたすべてのものを完全に失うことになります(参照.エゼキエル 7 章)。

(5) カルデヤびとの娘よ、黙してすわれ、
また暗い所にはいれ。
あなたはもはや、
もろもろの国の女王ととなえられることはない。

(6)わたしはわが民を憤り、わが嗣業を汚して、

これをあなたの手に渡した。
あなたはこれに、あわれみを施さず、
年老いた者の上に、はなはだ重いくびきを負わせた。

(7)あなたは言った、「わたしは、とこしえに女王となる」と。
そして、あなたはこれらの事を心にとめず、
またその終りを思わなかった。

(8)楽しみにふけり、安らかにおり、
心のうちに「ただわたしだけで、わたしのほかにだれもなく、
わたしは寡婦となることはない、また子を失うことはない」と言う者よ、
今この事を聞け。

(9)これらの二つの事は一日のうちに、
またたくまにあなたに臨む。
すなわち子を失い、寡婦となる事は
たといあなたが多くの魔術を行い、
魔法の大いなる力をもってしてもことごとくあなたに臨む。

(10)あなたは自分の悪に寄り頼んで言う、
「わたしを見る者はない」と。
あなたの知恵と、あなたの知識とはあなたを惑わした。
あなたは心のうちに言った、
「ただわたしだけで、わたしのほかにだれもない」と。

(11)しかし、わざわいが、あなたに臨む、
あなたは、それをあがなうことができない。
なやみが、あなたを襲う、あなたは、それをつぐなうことができない。
滅びが、にわかにあなたに臨む、あなたは、それについて何も知らない。

(12)あなたが若い時から勤め行ったあなたの魔法と、
多くの魔術とをもって立ちむかってみよ、
あるいは成功するかもしれない、
あるいは敵を恐れさせるかもしれない。

(13)あなたは多くの計りごとによってうみ疲れた。

かの天を分かつ者、星を見る者、新月によって、
あなたに臨む事を告げる者を立ちあがらせて、
あなたを救わせてみよ。

(14)見よ、彼らはわらのようになって、火に焼き滅ぼされ、
自分の身を炎の勢いから、救い出すことができない。
その火は身を暖める炭火ではない、
またその前にすわるべき火でもない。

(15)あなたが勤めて行ったものと、
あなたの若い時からあなたと売り買いした者とは、
ついにこのようになる。
彼らはめいめい自分の方向にさすらいゆき、
ひとりもあなたを救う者はない。

(イザヤ書 47 章 5-15 節)

バビロンが侵攻される: 黙示録 17 章 15-18 節の翻訳で見たように、バビロンは神の意志に従って滅ぼされますが、神の裁きの執行者は、獣とそれに従う王たちです。「神は彼らの心の中に、御旨を行う思いを与えられた」(17 節)のです。 主は人間であれ天使であれ、悪魔とその手先を利用して、包括的な目的を達成されることはよくあることです(参照. パウロは、問題のあるコリントの信徒を「その肉を滅ぼすためにサタンに渡した」第一コリント 5 章 4-5 節)[37]。

バビロンの実際の滅亡は、多くの略奪を伴う軍事侵攻に続いて起こり、その後、バビロン、あるいは少なくともその主要な都市や町は、この侵攻軍によって焼き払われるでしょう。この一連の出来事は、黙示録 17 章 16 節に書かれているように、獣の手下たちが(1)バビロンをみじめな者にし、裸にし、(2)彼女の肉を食い、(3)火で焼き尽します(この黙示録 18 章 8 節の文脈と比較してください)という文脈で明確に見ることができます。「死と嘆きと飢えという災いが、一日でやってくる。 そして、火で焼き尽くされるのです」)。黙示録 17 章 16 節の「みじめな姿にし、裸にし」という表現は、バビロンのすべての防御が取り除かれることを意味し、「肉を食い」は、獣の侵略軍によるバビロンの略奪、「火で焼く」は、この作戦の終結時に、バビロンが文字通り物理的に破壊されること

[37] 参照. 聖書の基礎知識第 2 部 A:天使学. II.9.7「神による悪霊の利用」<英文。未翻訳>

を表しています。

1)バビロンの武装解除: この時まで獣は幾年もの間、世界を支配し、そのすべての軍事力を(直接または間接的に)彼の指揮下に置いていましたが、この時バビロンが、その国境内に大規模な軍隊を持っているかどうかは、非常に疑わしいところです。一方では、外国の攻撃に対する防衛の必要性は消滅するでしょう(少なくともそう見えるでしょう)。他方で、この時期に軍隊が使えるとすれば、獣の王国がその支配を維持するためでしょう。さらに、第五の鉢の裁きによる暗闇によって引き起こされた、北を完全な服従に導く作戦は、バビロンの残りの主要な軍事力を、彼の援軍として召集することになる可能性が高いです(そしてこれはバビロンの反乱に先立って起こるでしょう)。要するにこの時点までに、バビロンが保有する軍事力の大部分は、獣の統一世界軍に完全に統合され、地理的にはバビロンの外に配置されるでしょう。最後に聖書には、この頃にはバビロンの軍隊の多くは外国人、あるいは「傭兵」で構成されるようになる(この傾向はすでに今日でも顕著です)という兆候が見られます。そのためバビロンは、この時点でまだ表向きは「バビロンの軍隊」に所属している者たちから、忠誠を期待することはできないでしょう。(エゼキエル 27 章 3 節後半-11 節)。[38] バビロンを「荒廃させ、裸にする」ためには、わずかに残った軍隊に、バビロンへの誓いよりも獣への忠誠を優先させることを要求するだけでよく、その結果、忠誠を貫くことを選んだ少数の在住軍では、バビロンの破壊を防ぐには情けないほど不十分なものになることでしょう[39]。

> 見よ、あなたのうちにいる兵士は女のようだ。あなたの国の門はあなたの敵の前に広く開かれ、火はあなたの貫の木を焼いた。(ナホム 3 章 13 節)

> おまえの廷臣(ていしん)たちは、いなごのよう。
> 司令官たちは、群がるいなごのようだ。
> 寒い日には城壁の上でたむろし、
> 日が昇ると逃げ去って、

---

[38] バビロンに代わる名称としてのツロについては、黙示録 18 章 11-24 節 とエゼキエル書 26-27 章、および本シリーズ第 3B 部の各所を参照してください。また、反キリストであるバビロンの王は、エゼキエル書 28 章 11-19 節 (「来たる艱難期」第 3B 部.II.1.c.1)においても、ツロの王として表現されていることを思い出してください。パロ/反キリストとエジプト/獣の王国との類似した比較は、この時代における先住民の軍事力の衰退と、獣である「バビロンの王」(エゼキエル 32 章 11-12 節)の手によるその破壊を暗示しています。

[39] このセクションにおける、現代のツロ、エジプト、アッシリアに関する引用は、「主の日パラダイム」の下での究極の終末論的参照対象である反キリストの領域としてのバビロンに対する二次的な予言的適用があります(このシリーズの第 1 部. IV.1.b を参照してください)。

どこへ行くか、行く先をだれも知らない。(新改訳Ⅳ ナホム 3 章 17 節)

その地は震い、かつもだえ苦しむ、主がその思い図ることをバビロンにおこない、バビロンの地を、住む人なき荒れ地とされるからだ。 **バビロンの勇士たちは戦いをやめて、その城にこもり、力はうせて、女のようになる。**その家は焼け、その貫の木は砕かれる。 飛脚は走って飛脚に会い、使者は走って使者に会い、バビロンの王に告げて、町はことごとく取られ、 渡し場は奪われ、とりでは火で焼かれ、**兵士はおびえている**と言う。(エレミヤ 51 章 29-32 節)

あなたの財宝、あなたの貨物、あなたの商品、あなたの船員、あなたのかじ取り、あなたの漏りを繕う者、あなたの商品を商う者、あなたの中にいる**すべての軍人**、あなたの中にいるすべての仲間は皆、あなたの破滅の日に海の中に沈む。(エゼキエル 27 章 27 節)

2)バビロンへの侵攻 ： 上記の歴史的バビロンと終末的バビロンの陥落を記述した箇所からわかるように、征服の戦いは、ほとんど戦いとは呼べないものになるでしょう。実際この攻撃は、基本的に無防備な国を「電撃戦」のように素早く占領することに過ぎないのです。 それを予言する聖句と、反キリストの全軍がハルマゲドンに集結するまでの残り時間の短さから、バビロンに残っている小軍は、北(エレミヤ 25 章 9 節, 50 章 3 節; 50 章 9 節; 50 章 41 節～; 参照. 黙示録 17 章 16 節)、東(参照. エゼキエル 27 章 26 節)、荒野(イザヤ 21 章 1-10 節)、海(エゼキエル 27 章 34 節)、つまり、あらゆる方面から攻めて来る圧倒的な敵の集結に直面し、散発的な、形だけの抵抗しかできないでしょう(エレミヤ 51 章 1-2 節)。

見よ、わたしは、もろもろの国民の最も恐れている異邦人をあなたに攻めこさせる。彼らはつるぎを抜いて、あなたが知恵をもって得た麗しいものに向かい、あなたの輝きを汚し、(エゼキエル 28 章 7 節)

あなた(すなわち、獣の反抗的な摂政であるツロの支配者)は**異邦人**(すなわち、バビロンを滅ぼすために反キリストが送った多国籍の侵略軍)**の手によって**割礼を受けない者の暴力的な死を遂げる。これはわたしが言うのであると、主なる神は言われる」。[40](エゼキエル 28 章 10 節/ESV)

(4)聞け、多くの民のような騒ぎ声が山々に聞える。聞け、もろもろの国々、寄

[40] 文字通り「死」ですが、ここでは複数形が激しさを表しているため、「暴力的な死」と訳しました。

りつどえるもろもろの国民のざわめく声が聞える。これは万軍の主が戦いのために軍勢を集められるのだ。(5)**彼らは遠い国から、天の果**＜引用されている ESV 訳では「地の果て」＞**から来る。**これは、主とその憤りの器で、全地(バビロン(1 節参照))を滅ぼすために来るのだ。(イザヤ書 13 章 4-5 節)

バビロンの艱難期中の行動が、世界中で引き起こした怒りは過小視できません。主に、これまで何らかの形でバビロンの帝国領土であった世界の他の諸国において、そしてまたバビロン国内における、おそらく大多数を占める国内の住民、奴隷、そして貧困に陥って債務奴隷にされた人々の間において、激しい反発や不満が沸き起こっているでしょう[41]。同様に、バビロンの過剰な富と、大艱難期の暗黒時代の信じられないほどの世界的な貧困と欠乏との極端な対照を考えると、この時期にバビロンを略奪する魅力は、過小視できません。このように、バビロン内の不穏な情勢と侵略軍の動機は、嫉妬と復讐の二重構造になるでしょう。

あなたの破れは、いえることがなく、あなたの傷は重い。あなたのうわさを聞く者は皆、あなたの事について手を打つ。あなたの悪を常に身に受けなかったような者が、だれひとりあるか。(ナホム 3 章 19 節)

これらは皆ことわざをもって彼をあざけり、あざけりのなぞをもって彼をあざ笑わないだろうか。すなわち言う、「わざわいなるかな、おのれに属さないものを増し加える者(すなわち、反キリストのバビロン)よ。いつまでこのようであろうか。質物でおのれを重くする者よ」。(ハバクク 2 章 6 節)

(16)あなたの見た十の角と獣とは、この淫婦(バビロン)を憎み、みじめな者にし、裸にし、彼女の肉を食い、火で焼き尽すであろう。(17)神は、御言が成就する時まで、彼らの心の中に、御旨を行い、思いをひとつにし、彼らの支配権を獣に与える思いを持つようにされたからである。(黙示録 17 章 16-17 節)

. .他方では貪欲と略奪[42]:

カルデヤは人にかすめられる。これをかすめる者はみな飽くことができると、

---

[41] この二つの点、すなわち、獣の下でのその残酷な経済的・政治的帝国主義の性質と、奴隷制および事実上の債務奴隷制の再導入において、私たちは、反キリストの終末論的なバビロンと今現在のアメリカとの間に重要な違いを見ることができます。

[42] 反キリストの軍勢の特徴である略奪行為については、エゼキエル 38 章 11-13 節を参照のこと。

主は言われる。(エレミヤ 50 章 10 節)

あなたがたを略奪した国々に
主[御父]の栄光が私を遣わした後、
万軍の主がこう言われたからだ。
『あなたがたに触れる者は、
わたしの瞳に触れる者、
見よ、わたしは彼らに手を振り上げる。
彼らは自分に仕えた者たちに略奪される』と。
このときあなたがたは、
万軍の主が私を遣わされたことを知る。(ゼカリヤ 2 章 8-9 節)

わたしは[バビロンの運命についての]一つのきびしい幻を示された。かすめ奪う者はかすめ奪い、滅ぼす者は滅ぼす。エラムよ、のぼれ、メデアよ、囲め。わたしはすべての嘆きをやめさせる。(参照:イザヤ 33 章 1 節)

銀を奪え、金を奪え。その宝は限りなく、もろもろの尊い物はおびただしい。消えうせ、むなしくなり、荒れはてた。心は消え、ひざは震え、すべての腰には痛みがあり、すべての顔は色を失った。(ナホム 2 章 9-10 節)

その馬の上と、その車の上につるぎが臨み、またそのうちにあるすべての雇兵の上に臨み、彼らは女のようになる。その財宝の上につるぎが臨み、それはかすめられる。(エレミヤ 50 章 37 節)

ツロは海の中にあって、網をはる場所になる。これはわたしが言ったのであると、主なる神は言われる。ツロは、もろもろの民にかすめられ、 その本土におる娘たちは、つるぎで殺される。そして彼らは、わたしが主であることを知るようになる。(エゼキエル 26 章 5-6 節)

彼らはあなたの財宝を奪い、商品をかすめ、城壁をくずし、楽しい家をこわし、石と木と土とを水の中に投げ込む。(エゼキエル 26 章 12 節)

(7) あなたがたに[法外な]利子を払う者たちは、突然起き上がり、あなたがたに[支払いのために]ゆすられた者たちは、目を覚ますではないか。 あなたは彼らにとって略奪物となるからだ。 (8) あなたは多くの国々を略奪したので、地上に残るすべての民は、あなたが血を流し、地とその町とそこに住む者に対して暴

力をふるったゆえに、あなたを略奪するようになるだろう。(9) 自分の帝国(文字通りには「家」)のために不当な利益を積み重ね、高い所に巣を作り、災いから救われようとする者に災いあれ。(10) しかし、あなたは多くの民を切り倒すことによって、自分の帝国(文字通りには「家」)の恥ばかりを考え、自分の命に対して罪深い愚かな行いをしたのだ。(11) あなたの城壁の石は叫び、その木組みの梁は答え、あなたの行いを非難するのだ。(12) 流血の上に自分の町(すなわち、帝国)を建てる者は災いだ。(ハバクク 2 章 7-12 節/ESV)

3)バビロンの滅亡 : 歴史上のバビロンは、紀元前 529 年頃に「北」から侵攻してきたペルシヤによって破壊されましたが、バビロン州は完全に廃墟となったわけではありませんでした(参照.ダニエル 5 章 31～9 章 1 節)。都市バビロンは、その後衰退の一途をたどりましたが、ペルシャ帝国の州都として、そして後にアレクサンダーの東方首都として存続しました。キリストの時代、この都市はかつての面影を完全に失っており、最近では完全に無人化しています(ただし、サダム政権下では観光地として復活しました)。これらの歴史的事実は、反キリストとその軍勢による終末のバビロンにもたらされる壊滅的な破壊が、まさに現代の一般的な意味での「完全な」破壊と言えるものなのかどうか、という問いを私たちに投げかけます。なぜなら、というのも、多くの箇所が、ありとあらゆる意味で「完全な破壊」を示唆しているからです。(イザヤ 13 章 5 節, 13 章 19 節, 47 章 3 節; エレミヤ 40 章 12-13 節, 50 章 29 節, 50 章 39-40 節; 51 章 29 節, 51 章 13 節; エゼキエル 26 章 17-21 節, 27 章 26-36 節; この最後の二つの箇所は黙示録 18 章-19 章と類似しています)。

バビロンは「火で焼かれ」、「裸でみじめな者にされ」、「その肉が食われる」状態になります。

(16)あなたの見た十の角と獣とは、この淫婦(バビロン)を憎み、みじめな者にし、裸にし、彼女の肉を食い、火で焼き尽すであろう。(17)神は、御言が成就する時まで、彼らの心の中に、御旨を行い、思いをひとつにし、彼らの支配権を獣に与える思いを持つようにされたからである。(黙示録 17 章 16-17 節)

彼らは頭にちりをかぶり、泣き悲しんで叫ぶ、『ああ、わざわいだ、この大いなる都は、わざわいだ。そのおごりによって、海に舟を持つすべての人が富を得ていたのに、この都も一瞬にして無に帰してしまった』。(黙示録 18 章 19 節)

(21)すると、ひとりの力強い御使が、大きなひきうすのような石を持ちあげ、それを海に投げ込んで言った、「大いなる都バビロンは、このように激しく打ち

倒され、そして、全く姿を消してしまう。(22)また、おまえの中では、立琴をひく者、歌を歌う者、笛を吹く者、ラッパを吹き鳴らす者の楽の音は全く聞かれず、あらゆる仕事の職人たちも全く姿を消し、また、ひきうすの音も、全く聞かれない。(23)また、おまえの中では、あかりもともされず、花婿、花嫁の[喜びの]声も聞かれない。(黙示録 18 章 21-23 節前半)

(1)この後、わたしは天の大群衆が大声で唱えるような声を聞いた、「ハレルヤ、救と栄光と力とは、われらの神のものであり、(2)そのさばきは、真実で正しい。神は、姦淫で地を汚した大淫婦をさばき、神の僕たちの血の報復を彼女になさったからである」。(3)再び声があって、「ハレルヤ、彼女が焼かれる火の煙は、世々限りなく立ちのぼる」と言った。(黙示録 19 章 1-3 節)

国々の誉であり、カルデヤびとの誇である麗しいバビロンは、神に滅ぼされたソドム、ゴモラのようになる。 ここにはながく住む者が絶え、世々にいたるまで住みつく者がなく、アラビヤびともそこに天幕を張らず、羊飼もそこに群れを伏させることがない。 ただ、野の獣がそこに伏し、ほえる獣がその家に満ち、だちょうがそこに住み、鬼神がそこに踊る。 ハイエナはその城の中で鳴き、山犬は楽しい宮殿でほえる。その時の来るのは近い、その日は延びることがない。(イザヤ書 13 章 19-22 節)

(3)主があなたの苦労と不安とを除き、またあなたが服した苦役を除いて、安息をお与えになるとき、(4)あなたはこのあざけりの歌をとなえ、バビロンの王(＝反キリスト)をののしって言う、「あの、しえたげる者(＝反キリスト)は全く絶えてしまった。あの、黄金の都(すなわち、バビロン)は全く絶えてしまった。(イクシスサイトに引用されている ESV 訳 イザヤ 14 章 3-4 節)

先祖のよこしまのゆえに、その子孫のためにほふり場を備えよ。これは彼らが起って地を取り、世界のおもてに町々を満たすことのないためである」。 万軍の主は言われる、「わたしは立って彼らを攻め、バビロンからその名と、残れる者、その子と孫とを断ち滅ぼす、と主は言う。 わたしはこれをはりねずみのすみかとし、水の池とし、滅びのほうきをもって、これを払い除く、と万軍の主は言う」。(イザヤ 14 章 21-23 節)

混乱せる町は破られ、すべての家は閉ざされて、はいることができない。 ちまたには酒の不足のために叫ぶ声があり、すべての喜びは暗くなり、地の楽しみは追いやられた。 町には荒れすたれた所のみ残り、その門もこわされて破れた。

(イザヤ 24 章 10-12 節)

堅固な町は荒れてさびしく、捨て去られたすまいは荒野のようだ。子牛はそこに草を食い、そこに伏して、その木の枝を裸にする。(イザヤ 27 章 10 節)

主は言われる、上って行って、メラタイムの地を攻め、ペコデの民を攻め、彼らを殺して全く滅ぼし、わたしがあなたがたに命じたことを皆、行いなさい。(エレミヤ 50 章 21 節)

あらゆる方面からきて、これを攻め、その穀倉を開き、これを穀物の山のように積み上げ、完全に滅ぼし尽し、そこに残る者のないようにせよ。(エレミヤ 50 章 26 節)

その地は震え、身動きできない。バビロンに対する主の目的が、バビロンの地を荒廃させて、だれもそこに住まないようにすることである。(イクシスに引用されている NIV の訳 エレミヤ 51 章 29 節) (参照. 36-37 節, 25-26 節参照)

わたしがバビロンの偶像を罰する時は必ず来る。その国全体は汚され、その殺戮者はみなその中に倒れる。(イクシスに引用されている NIV 訳 エレミヤ 51 章 4 節)

ツロは(すなわちバビロンと終末論的に並列するものとして; 上記注#38 と#39 参照のこと)自分のために、とりでを築き、銀をちりのように積み、金を道ばたの泥のように積んだ。 しかし見よ、主はこれを攻め取り、その富を海の中に投げ入れられる。これは火で焼き滅ぼされる。(ゼカリヤ 9 章 3-4 節)

明らかに、バビロンに対する今後の裁きは、それが彼女の完全かつ徹底的な人口絶滅と、将来にわたる体系的な破壊を伴うかどうかに関わらず、恐ろしいものとなるでしょう。

バビロンの苦難は、その非先住民人口の劇的な流出をもたらす:

彼らは追われた、かもしかのように、あるいは集める者のない羊のようになって、おのおの自分の民に帰り、自分の国に逃げて行く。(イザヤ 13 章 14 節)

バビロンはたちまち倒れて破れた。これがために嘆け。その傷のために乳香を

取れ。あるいは、いえるかも知れない。 われわれはバビロンをいやそうとしたが、これはいえなかった。われわれはこれを捨てて、おのおの自分の国に帰ろう。その罰が天に達し、雲にまで及んでいるからだ。(エレミヤ 51 章 8-9 節)

バビロンの住民はひどく虐待され、その人口は激減する:

すべて見いだされる者は刺され、すべて捕えられる者はつるぎによって倒され、彼らのみどりごはその目の前で投げ砕かれ、その家はかすめ奪われ、その妻は汚される。(イザヤ 13 章 15-16 節)

わたしは他国の者をバビロンに送る。彼らはその地を吹き払って裸にする。彼らは災いの日に四方からこれを包囲する。(フランシスコ会訳 エレミヤ 51 章 2 節)

バビロンがかつての栄光を取り戻すことはない:

あなたは(主よ)、[バビロンを]町から石の山に変え、城塞都市から廃墟に変え、町を外国人のための城塞に変えたからです。それは永久に再建されることはありません。(イザヤ 25 章 2 節)

カルデヤびとの娘よ、黙してすわれ、また暗い所にはいれ。あなたはもはや、もろもろの国の女王ととなえられることはない。(イザヤ 47 章 5 節)

多くの点で、この侵略とその余波によって荒廃したバビロンの領土が、重要な千年王国の定住地となるかどうかは無意味な論点でしょう。[43] なぜなら、一方では私たちの主の来たるべき王国では、バビロンの名、名声、権力、威信は、その軍事力とともに完全に滅ぼされ、永遠に失われるからです。他方、聖書の教えによって「時代のしるし」を悟った理性ある者は誰も、一般の人々やバビロンの住民が誤って反キリストの恐怖の支配が終焉したと考えるこの限られた期間に、逃れるチャンスを放棄することはないでしょう。

---

[43] 終末論的なバビロンの同義語であるツロが、同様に完全な破壊の運命にあっても、象徴的な 70 年の空白期間を置いて後に再建されることも予想されることから、そのようなシナリオの可能性は少なくとも存在します(イザヤ 23 章 17 節と詩篇 45 篇 12 節 をエゼキエル 26 章-28 章と比較してください)。また、ゼパニヤ 1 章 3 節と 1 章 18 節を比較してください。ここでは世界的な破壊が完全な破壊として描かれていますが、私たちは、大艱難期を生き延びて千年王国の住民の主要部分となる者たちがいることを確実に知っています(このシリーズの次回で説明するイスラエルの再集結を参照)。 また、オバデヤ 1 章 21 節を、この書全体と対比してご覧ください。そこでは、エドムの運命が同様の表現で描かれています。また、エレミヤ 4 章 27 節もご覧ください。

全体として、完全な破壊に関する多くの記述は、反キリストによる大規模な侵略とそれに続く意図的な焼き討ちという二重の攻撃によって、バビロンが修復不可能なほど破壊されることは、ほぼ間違いありません。主はバビロンを非常に明確な見せしめとしており、その教訓は千年王国(そして第 18 章の残りの部分で詳しく説明されている内容も、この印象を裏付けています)にも引き継がれることは明らかです。他の条件がすべて同じだと仮定するなら、こう考える人もいるでしょう。

つまり、この嵐(=バビロンへの最終的な裁き)が来る前の静かな期間にエルサレムへ逃げる機会を利用しなかった人々は、その嵐に巻き込まれて滅んでしまうのではないか、という考えです。もちろん、あとになって何とか逃げ切る人がいる可能性はありますが(例えばイザヤ 47 章 2 節が示すように)、基本的にはそう思われがちです。しかし、この考えに疑問を投げかける情報が一つあります。これまでの考察で指摘してきたように、バビロンは反キリストの出身地であり、本拠地でもあるため、この時点までは、彼による最も過酷な迫害や破壊から、かなり守られてきた可能性があるのです。言い換えれば、バビロンはある程度、「安全地帯」のような役割を果たしていたのかもしれません。しかもその安全は、熱心なクリスチャンだけに限られていたとは限りません。信仰が弱いクリスチャンや、まだキリストを信じていないユダヤ人たちも、そこにとどまっていた可能性があります。特に、彼らが反キリストの「刻印」を避けようとする点では、信仰の有無にかかわらず強い動機を持っていたはずです(参照. 申命記 11 章 18 節; エレミヤ 30 章 11 節)。さて、キリストの千年王国での最初の仕事は、世界の隅々から、残っているすべてのユダヤ人を評価のために再集結させることです(参照. イザヤ 11 章 11-12 節, 48 章 20-21 節, 52 章 12 節を参照)。モーセとエリヤの働きと 144,000 人の働きによって、世界中の多くのユダヤ人が、決して多数派ではありませんが、救われます。この時点では、その信仰を保つ残された人々は、キリストの再臨まで大艱難期のすべての問題から神の力によって守られ、荒野での安息の期間を過ごしています(黙示録 12 章 13-17 節; このシリーズの前回のセクション IV を参照)。 この国にはもともと多くのユダヤ人が住んでいます。そして、大患難の時代が本格化し、世界中で危険が増していくにつれて、安全を求めてさらに多くのユダヤ人がこの地に集まってくる可能性は非常に高いと考えられます。そうであるなら、この時期にバビロンに住んでいるユダヤ人たちは、少なくとも命だけは守られて生き延びると考えるのが自然です。なぜなら、彼らは、主イエスが再臨され、千年王国の支配を始められた後に行われる「大規模なイスラエルの再集結」に参加するために生き残っている必要があるからです。さらに言えば、その再集結に加わる人々の中で、このバビロンから戻るユダヤ人たちが、最大の集団になる可能性すらあると考えられます。

シオンの娘よ、産婦のように苦しんでうめけ。あなたは今、町を出て野にやどり、**バビロンに行かなければならない。その所であなたは救われる。**主はその所で

あなたを敵の手からあがなわれる。(ミカ 4 章 10 節)

あなたがたはバビロンから出、カルデヤからのがれよ。喜びの声をもってこれをのべ聞かせ、地の果にまで語り伝え、「主はそのしもべヤコブをあがなわれた」と言え。 主が彼らを導いて、**さばくを**通らせられたとき、彼らは、かわいたことがなかった。主は彼らのために岩から水を流れさせ、また岩を裂かれると、水がほとばしり出た。(イザヤ 48 章 20-21 節)

わたしはわが強い手と伸べた腕と注がれた憤りとをもって、あなたがたをもろもろの民の中から導き出し、その散らされた国々から集め、 **もろもろの民の荒野に**導き入れ、その所で顔と顔とを合わせて、あなたがたをさばく。 すなわち、エジプトの地の荒野で、あなたがたの先祖をさばいたように、わたしはあなたがたをさばくと、主なる神は言われる。(エゼキエル 20 章 34-36 節)

(3)御使は、わたしを御霊に感じたまま、**荒野**へ連れて行った。わたしは、そこでひとりの女が赤い獣に乗っているのを見た。その獣は神を汚すかずかずの名でおおわれ、また、それに七つの頭と十の角とがあった。(4)この女は紫と赤の衣をまとい、金と宝石と真珠とで身を飾り、憎むべきものと自分の姦淫の汚れとで満ちている金の杯を手に持ち、(5)その額には、一つの名がしるされていた。それは奥義であって、「**大いなるバビロン**、淫婦どもと地の憎むべきものらとの母」というのであった。(黙示録 17 章 3-5 節)

このようなことの後のバビロンからの救出は、歴史上のバビロンが滅亡した後、ユダヤ人が故郷の土地に戻った時と類似するでしょう。したがって、上記の聖書の記述と矛盾することなく、バビロンが徹底的に略奪され、意図的に焼き払われ、今後永遠にほとんど居住不能となるような状況を想定することは、完全に可能で、人命の損失は甚大であり、財産の損失は甚だしいものと予想されますが、しかし、その時点でその領土内に住んでいた人々が、生命を完全に失い、財産をほぼすべて失うような、完全かつ即時の破壊は起こらないでしょう。この解釈によれば、破壊されたバビロンの領土からの人口の移動は、キリストの再臨後に起こり、その時点まで人々は、廃墟の中で最低限の生活(バビロンのかつての空前の贅沢とはまったく対照的な生活)を送ることになります。

これは、あなたの贖い主、イスラエルの聖なるお方である主が言われることである。「あなたのために、わたしはバビロンに行き、バビロン人をすべて逃亡者として、彼らが自慢した船で引きずり下ろす。(イザヤ 43 章 14 節/NIV)

6. バビロンのための哀歌 ：黙示録 18 章 9-19 節

(9)彼女と姦淫を行い、ぜいたくをほしいままにしていた地の王たちは、彼女が焼かれる火の煙を見て、彼女のために胸を打って泣き悲しみ、(10)彼女の苦しみに恐れをいだき、遠くに立って言うであろう、『ああ、わざわいだ、大いなる都、不落の都、バビロンは、わざわいだ。おまえに対するさばきは、一瞬にしてきた』。(11)また、地の商人たちも彼女のために泣き悲しむ。もはや、彼らの商品を買う者が、ひとりもないからである。(12)その商品は、金、銀、宝石、真珠、麻布、紫布、絹、緋布、各種の香木、各種の象牙細工、高価な木材、銅、鉄、大理石などの器、(13)肉桂、香料、香、におい油、乳香、ぶどう酒、オリブ油、麦粉、麦、牛、羊、馬、車、奴隷、そして人身(奴隷または年季奉公者)などである。(14)おまえの心の喜びであったくだものはなくなり、あらゆるはでな、はなやかな物はおまえから消え去った。それらのものはもはや見られない。(15)これらの品々を売って、彼女から富を得た商人は、彼女の苦しみに恐れをいだいて(バビロンから離れて)遠くに立ち、泣き悲しんで言う、(16)『ああ、わざわいだ、麻布と紫布と緋布をまとい、金や宝石や真珠で身を飾っていた大いなる都は、わざわいだ。(17)これほどの富が、一瞬にして無に帰してしまうとは』。また、すべての船長、航海者、水夫、すべて海で働いている人たちは、遠くに立ち、(18)彼女が焼かれる火の煙を見て、叫んで言う、『これほどの大いなる都は、どこにあろう』。(19)彼らは頭にちりをかぶり、泣き悲しんで叫ぶ、『ああ、わざわいだ、この大いなる都は、わざわいだ。そのおごりによって、海に舟を持つすべての人が[高価な嗜好品によって]富を得ていたのに、この都も一瞬にして無に帰してしまった』。(黙示録 18 章 9-19 節)

この箇所は、エゼキエルのツロに対する嘆き(第 27 章;参照:イザヤ 33 章 1 節の「災い」も参照)と多くの明らかな類似点を想起させ、バビロンの滅亡が、以前の他の世界帝国と同様で完全な滅亡であることを描いています。しかし、バビロンが他者を犠牲にして、例外的な前例のない贅沢を享受し、自らの放埒な行為に対して、主の意向を完全に無視し拒絶した事に対する後の非難は、その完全な滅亡を正当化する驚くべき厳しさを持っています(ゼカリヤ 5 章 5-11 節参照)。彼女の傲慢さが、記録的な高みに達したことは疑いの余地がありません。そして、それに応じた彼女の急落は、当然の報いであるだけでなく、物質的な贅沢にふけった共犯者たちにとっては嘆き悲しむべき出来事であり、義人にとっては喜び祝うこととなります。反キリストの勢力がバビロンに降り立ったのと同じくらい早く、私たちは彼らがいなくなるのを見るでしょう。彼らはハルマゲドンの戦いに集結する呼びかけに応え、その跡には焼け焦げた残骸を残して去っていくのです(すなわち、黙示録 18 章 10 節:「一瞬にして」とは、その作戦の迅速さを指します;参照.エレミヤ 51 章 8 節)。バビロンの滅亡に先立つ神の警告に従って、バ

ビロンから逃れる信者たちは、その出発がどれほど辛く、物質的にどれほど多くのものを失ったように見えたとしても、その致命的な打撃を受けた国から主によって救い出されたことを、感謝するようになるでしょう。その国に留まったならば、彼らはすべてを失い、おそらくは命も失っていたからです。イエスは、私たち信者は「地の塩」である(マタイ 5 章 13 節; マルコ 9 章 50 節; ルカ 14 章 34 節; 参照. レビ 2 章 13 節; 民数記 18 章 19 節; コロサイ 4 章 6 節)と教えておられます。塩の防腐効果は、真の信仰を持つ神に従う信者の残りの者の防腐効果を表現する象徴的な比喩です。神はその信者がどこにいても、たとえ大淫婦の真ん中にいても、その存在を祝福されます。しかし今、すべての応答する信者が主の命令に従ってバビロンから撤退したため、この淫乱な生き物は、自分には一片の保護もないことに気づきます。人間の目で見ると、バビロンに軍事的な守りがほとんどないことは致命的に思えるでしょう(これは前に述べたとおりです)。しかし、自分たちの神を本当に知っている人々は、もっと深い意味に気づきます。それは、ロトがソドムから退去したことによって、ソドムの滅びが避けられなくなったのと同じように、バビロンから信仰者の残りの者(レムナント)が去ることによって、バビロンが裁きを受ける最後の妨げが取り除かれるということです。言い換えれば、信仰者の存在そのものが、これまでバビロンに対する神の裁きを食い止めていたのです。しかし、その信仰者たちが取り去られると、バビロンは自分が蒔いてきた悪の結果を、そのまま刈り取ることになるのです。これは、かつてイスラエルにおいて、信仰の残りの者が堕落し、その結果として民が土地から追い出された出来事と同じ原理です(レビ記 26 章参照)。

黙示録 18 章 11 節(シナイ写本原典)にある二人称単数代名詞 sou(σ ο υ)の所有格は、黙示録 18 章 11-13 節で言及されている商人たちが、「バビロンの」商人たち(明らかに彼らは裁きを受ける者たち)ではなく、世界中の他の国々の商人たちであることを明らかにしています。その文脈における広範な商品のリストは、高級輸入品であり、この章におけるギリシヤ語のストレニオ streniao(黙示録 18 章 7 節; 18 章 9 節)およびストレニオス strenios(18 章 3 節)の意味から、世界が苦難の厳しい貧困に苦しんでいるにもかかわらず、バビロンが「ほしいままに」贅沢にふけることを強調しています。バビロンは、麻布(経済的支配と贅沢を意味する)と紫(専制的支配を意味する)と緋(売春と血の色)を身にまとい、金箔と宝石(これら三つの反神的行為の結果)で飾られています(黙示録 18 章 16 節)。 あらゆる点で、バビロンは諸国の女王となりましたが、それは彼女にとって何の益になったのでしょうか？世界全体を手に入れるところまでたどり着いたにもかかわらず、彼女は今や、所有していたすべてのものを奪われ、略奪され、焼き払われてしまったのです。

見よ、万軍の主によるのではないか。諸国の民が、ただ火で焼かれるために労し、国々が、ただ無駄に疲れ果てるのは。(ハバクク 2 章 13 節)

(3)主があなたの苦労と不安とを除き、またあなたが服した苦役を除いて、安息をお与えになるとき、(4)あなたはこのあざけりの歌をとなえ、バビロンの王(すなわち、反キリスト)をののしって言う、「あの、しえたげる者(すなわち、反キリスト)は全く絶えてしまった。あの、おごる者[黄金の都](すなわち、バビロン)は全く絶えてしまった。(イザヤ 14 章 3-4 節)

7.　バビロンに対する天の歓喜　黙示録 18 章 20 節-19 章 4 節

(20)「天よ、聖徒、使徒、預言者たちよ、彼女のことで喜べ。神が、あなたがたにふさわしい報いを、彼女から下されたのだから。(21) すると、力のある天使が大きな石に似たものを持ち上げて海に投げ入れ、言った。「こうして、瞬く間に大いなる都バビロンは投げ落とされ、二度とその中に琴奏者や楽師や笛吹きやラッパの音を聞くことはないだろう。また、二度とあなたがたの中に熟練した技術者が見いだされることはなく、(23) また二度とあなたがたの中に灯火の光が見られることはなく、二度とあなたがたの中に花婿と花嫁の[喜びの]声が聞かれることはないであろう」。 あなたと商取引していたのは地上で権力ある者たちであり、[そうする]のは、すべての国々があなたの魔術に欺かれたからである。(24)その中には、預言者、聖徒、および地上で殺されたすべての者の血があった」。(1) これらのことの後、わたしは天で大群衆が「ハレルヤ！」と言うような声を聞いた。 救いと力は私たちの神のものであり、(2) 神のさばきは真実で正しいからである。 売春で地を堕落させていた大淫婦を裁き、その手からしもべの血の報いを受けさせたからである。」(3) 彼らは「ハレルヤ!　そして彼女の煙は永遠に立ち昇る！」と再び言った。(4) すると、二十四人の長老と四つの生き物とがひれ伏し、御座に座っておられる神を拝して、「アーメン！　ハレルヤ！」と言った。(黙示録 18 章 20 節～19 章 4 節/ESV)

この世の商人たちがバビロンの滅亡を嘆き、地上の物質的な関心に基づいているのに対して、この聖句では、バビロンの滅亡を正しい神の視点から見る天上の勝利の歌によって答えが示されています:世界がどう考えようと、バビロンの滅亡は本当に重要な唯一の視点である神の視点からは明らかに良いことです(彼女は本来悪だからです:第 3 部 B.II.1.c.5.e 参照)。

バビロンに対する厳しい裁きの永遠性を強調する過程で、ここでは、バビロンが滅ぼされる二つ目の神聖な理由が示されています。18 章 3 節で見たように、最初の神の理由は、バビロンが世界、特に不信者たちに及ぼした堕落させる影響に関するものでした。バビロンは、反キリストによって悪用された霊的な「売春」の制度を促進し、支持し、

そして実際にかなり広範囲にその制度を普及させたのです。ヨハネが聞いた天の群衆の声は、この判断の最初の根拠である黙示録 19 章 2 節(「神は、姦淫で地を汚した大淫婦をさばかれた」)を再度確認した後、彼女を滅ぼす理由となった二つ目の罪状をヨハネに伝えます、「＜主は、＞神の僕たちの血の報復を彼女になさった」。このように、大迫害の間、イエス・キリストを信じるすべての人々を地上から追放しようとする反キリストの試みにおいて、バビロンは極めて重要な役割を果たし、その行動が彼女の運命を決定づけたのです。なぜなら、バビロンは悪魔と獣が世界をさらに腐敗させることを支援しただけでなく、信者を地球上からほぼ全滅させるという、最も傲慢な方法で神に逆らったからです。この点に関するバビロンの具体的な関与は、このシリーズの前回で示唆したように、バビロンの商業的、政治的、軍事的、技術的、宗教的な支配力であり、これらはすべて、サタンとその反キリストが世界中の信者を滅ぼすために用いられたのです。(黙示録17 章6 節, 18 章20 節, 18 章24 節, 19 章2 節; 参照. 黙示録16 章6 節)[44]。

(5)その額には、一つの名がしるされていた。それは奥義であって、「大いなるバビロン、淫婦どもと地の憎むべきものらとの母」というのであった。⑹わたしは、この女が聖徒の血とイエスの証人の血に酔いしれているのを見た。(黙示録17 章5-6 節前半)

聞けよ、バビロンの地から逃げ、のがれてきた者の声[響き]がする。われわれの神、主の報復、その宮(すなわち、信者たち;参照. 第一コリント 3 章 16-17 節, 6 章 19 節; 第二コリント 6 章 16 節; エペソ 2 章 21 節; 第一ペテロ 2 章 4 節～)の報復の事をシオン(すなわち、エルサレム)に告げ示す。(エレミヤ 50 章 28 節)

エレミヤはセラヤに言った、「あなたはバビロンへ行ったならば、忘れることなくこのすべての言葉を読み、 そして言いなさい、『主よ、あなたはこの所を滅ぼし、人と獣とを問わず、すべてここに住む者のないようにし、永久にここを荒れ地としようと、この所について語られました』と。 あなたがこの巻物を読み終ったならば、これに石をむすびつけてユフラテ川の中に投げこみ、 そして言いなさい、『バビロンはこのように沈んで、二度と上がってこない。わたしがこれに災を下すからである』と」。(エレミヤ 51 章 61-64 節前半)

イスラエルの神、主はわたしにこう仰せられた、「わたしの手から、この怒りの杯を受けて、わたしがあなたをつかわす国々の民に飲ませなさい。 彼らは飲んで、よろめき狂う。これはわたしが彼らのうちに、つるぎをつかわそうとしてい

---

[44] 参照.「来たる艱難期」第 4 部「大艱難期」VII.9 節「バビロンの役割」

るからである」。こうしてわたしは主の手から杯を受け、主がわたしをつかわされた国々の民に飲ませた。すなわちエルサレムとユダのすべての町と、その王たちおよびそのつかさたちに飲ませて、それらを滅ぼし、荒れ地とし、人の笑いものとし、のろわれるものとした。今日のとおりである。またエジプトの王パロとその家来たち、その君たち、そのすべての民と、もろもろの寄留の異邦人、およびウズの地のすべての王たち、およびペリシテびとの地のすべての王たち、(アシケロン、ガザ、エクロン、アシドドの残りの者)、エドム、モアブ、アンモンの子孫、ツロのすべての王たち、シドンのすべての王たち、海のかなたの海沿いの地の王たち、デダン、テマ、ブズおよびすべて髪の毛のすみずみをそる者、アラビヤのすべての王たち、荒野の雑種の民のすべての王たち、ジムリのすべての王たち、エラムのすべての王たち、メデアのすべての王たち、北のすべての王たちの遠き者、近き者もつぎつぎに、またすべて地のおもてにある世の国々の王たちもこの杯を飲む。そして彼らの次にバビロンの王もこれを飲む。(エレミヤ 25 章 15-26 節)

III.　獣のハルマゲドンの十字軍

バビロンが破壊された後、黙示録の物語は艱難期の終わりに向かって急速に進みます。ハルマゲドンの戦いがすぐにでも行われることを示す最初の兆しは、19 章の後半、11 節以降の白馬に乗った騎手の記述の中に見られます。しかしこの箇所では、獣が世界中の軍隊をイスラエルに集結させてイスラエルを滅ぼし、王の帰還に反抗する活動についての詳細な情報は与えられていません。この苦難の出来事に関する物語が、このように急速に結論に至っている理由は、間違いなく二つあります 1)この時点から、メシヤとその勝利の帰還、そして新たに復活した花嫁である教会が、黙示録で次に語られることの、真に正しい焦点を形成すること、そして 2)反キリストのハルマゲドン「聖戦」の詳細は、すでに聖書の他の箇所に十分に記述されているからです。したがって、黙示録の本編(19 章 5 節以降の次の記述は、再臨の入り口の出来事だけを扱い、その直後に再臨そのものを扱います)に進む前に、まず、そこに至るまでの出来事に関する聖書の証言、つまり、反キリストが世界中の軍隊を集めてイスラエルを侵略し破壊し、再臨のイエス・キリストに対抗しようとすることに関する聖句をまとめることにします。

北方が再び自分の支配下に戻り、東の諸王が集結するのを妨げていた制約もすべて取り除かれ、さらにバビロンもすでに排除され、その破壊に使われていた軍事力も自由に使えるようになったことで、獣(反キリスト)は、イスラエルを攻撃するために世界中の軍隊を本格的に集め始めます。反キリストは、その支配の最初からずっと、真理を偽りとして退け、悪を「善」であるかのように見せるというやり方を続けてきました。神に逆らうその姿勢は、いつもはっきりと表れていました。そしてその欺きは、大艱難期の最後、ハルマゲドンの戦いで頂点に達します。このとき反キリストは、再臨される主イエス・キリストを「不法な侵入者」「排除すべき敵」として描き出し、どんな犠牲を払ってでも立ち向かうべき存在だと宣伝するのです(第二テサロニケ 2 章 4 節参照)。この最終段階で反キリストは、この戦いを「善」と「悪」の戦いであるかのように装います。しかし実際には、善とされるのは反キリスト側で、悪とされるのが神とそのご計画なのです(エゼキエル 38～39 章; 黙示録 16 章 12-16 節, 19 章 19-21 節参照)。その中で、ユダヤ人は「最後に消し去るべき汚点」のように扱われます。反キリストにとっては、彼らを完全に滅ぼすことが、自分の支配を完成させるための「最後の一手」だと考えられるからです。さらに言えば、もしイスラエルが滅ぼされてしまえば、もはや救い出される民は誰も残らない、反キリストはそう信じて行動することになります。 このようにして反キリストは、イスラエルを滅ぼすために諸国の軍隊をエルサレムに集めることが、主なる神を追い詰める最良の方法だと考えます。それは反キリスト自身だけでなく、彼の背後にいる父である悪魔

にとっても同じです。彼らは、神がユダヤ国家とユダヤ民族の抹殺を阻止できるのかどうか、あえて神に挑戦する形に持ち込もうとしているのです。反キリストは偽メシアですから、ユダヤ人の反乱が起こる前までは、預言で「千年王国の首都」とされているエルサレムに自分の軍事的な本拠地を置けたことを、内心では非常に誇らしく感じていたに違いありません。この数年間、エルサレムは、反キリストを拝まなければ命を奪われる「死の都」となっていました。多くの人々が、処刑の脅しのもとで、そこへ来ることを強制されていたのです。しかしエルサレムは、本来、やがて来る「いのちの都」でもあります。

将来、真のメシアである主イエス・キリストが支配される時、世界中の人々が主を求めてエルサレムに集まるようになるからです（ゼカリヤ 8 章 23 節; イザヤ 2 章 3 節以下参照）。その大きな人々の訪れは、神が千年王国において、全地に祝福を注ぎ始めることへの応答として起こるものです。しかし今はまだその時ではありません。今、私たちが見ているのは、鉢のさばきによって地上が揺さぶられている状態であり、ハルマゲドンはその最後の苦しみの頂点なのです。この正しい神のさばきに対して、反キリストに導かれた不信仰な世界は、かつてのファラオと全く同じ反応を示しています。すなわち、自分たちの過ちを認めて学ぶのではなく、神の民を攻撃することで事態を打開しようとするのです。本来なら、このように明白な神の不承認を前にして取るべきなのは悔い改めです。しかし世界はそれを選ばず、反キリストの狂気じみた「聖戦」に喜んで加わり、神ご自身に戦いを挑もうとしているのです。

> これらは、しるしを行う悪霊の霊であって、全世界の王たちのところに行き、彼らを召集したが、それは、全能なる神の大いなる日に、戦いをするためであった。（黙示録 16 章 14 節）

> (1)なにゆえ、もろもろの国びとは騒ぎたち、もろもろの民はむなしい事をたくらむのか。(2)地のもろもろの王は立ち構え、もろもろのつかさはともに、はかり、主とその油そそがれた者とに逆らって言う、(3)「われらは彼らのかせをこわし、彼らのきずなを解き捨てるであろう」と。（詩篇 2 篇 1-3 節）

獣はユダヤ人の反乱に対して、その特徴である迅速な対応（参照. ダニエル書 7 章 6 節, 黙示録 13 章 2 節参照）を見せますが、その素早さの中にも、イスラエル全土を「洪水のように」襲う、圧倒的な力を持って臨みます（イザヤ 8 章 6-8 節; ダニエル 9 章 26 節, 11 章 22 節 [ヘブル語]）。[45] 反キリストは地球の残りのすべての地域から、悪の

[45] 今回の侵攻は、反キリストにとって北からイスラエルへ行う三度目の侵略になります。そのため、これまでに南方同盟との二度の戦争で築かれてきた兵站（へいたん：物資の補給や輸送の仕組み）や補給ルートが、この三度目の侵攻では大いに役立つと考えられます。つまり、すでに整えられている輸送経路・補給体制を使えるため、今回の侵攻は非常に素早く、効率的に進められる可

連合軍を猛烈な勢いで集結させ、エルサレムを標的として数えきれない多様な大群を、世界の真の中心に攻め込ませるでしょう。 しかし、主は「夜明けに」(詩篇 46 篇 5 節)彼女を助けるでしょう。実際、反キリストとそのすべての軍勢を一つに集め、シオンの岩で彼らを破滅させることは、主のご計画だったのです。

> (9)もろもろの国民の中に宣べ伝えよ。戦いの備えをなし、勇士をふるい立たせ、兵士をことごとく近づかせ、[エルサレムに]のぼらせよ。(10)あなたがたのすきを、つるぎに、あなたがたのかまを、やりに打ちかえよ。弱い者に[も]「わたしは[軍務にふさわしい]勇士である」と言わせよ。(11)周囲のすべての国民よ、急ぎ来て、集まれ。主よ、あなたの勇士をかしこに[エルサレムに]お下しください。(12)もろもろの国民をふるい立たせ、ヨシャパテの谷にのぼらせよ。わたしはそこに座して、周囲のすべての国民をさばく。(13)かまを入れよ、作物は熟した。来て踏め、酒ぶねは満ち、石がめはあふれている。彼らの悪が大きいからだ。(14)群衆また群衆は、さばきの谷におる。主の日がさばきの谷に近いからである。(15)日も月も暗くなり、星もその光を失う。(16)主はシオンから大声で叫び、エルサレムから声を出される。天も地もふるい動く。しかし主はその民の避け所、イスラエルの人々のとりでである。(ヨエル 3 章 9-16 節)

上記の黙示録 16 章 12-16 節(すなわち、ハルマゲドンへの招集を伴う第六の鉢の裁き)で見たように、これは地上のすべての国に対して普遍的に宣言され、すべての動員可能な人員をエルサレムで戦わせることになるのです。ヨエル 3 章 9 節の第二命令文のヘブル語の動詞は単に「準備する」ではなく、「聖別する」(qdsh, קדשの語源)という意味であることは、この箇所の翻訳で広く見落とされている点です。これはまさに「聖戦」であり、真のメシヤが**真に**聖なる正しい再臨の時に来られることに対する、サタンとその反キリストの最後の「十字軍」になるのです。この大規模な動員は、上記の 10 節の記述から見ることができます。この神の民に対する最後の攻撃のために、平和の道具さえも戦争の武器に急速に作り変えられます。この命令は、イザヤ 2 章 4 節とミカ 4 章 3 節の千年の預言で有名かつ驚くほど逆になっており、偽メシヤとこれから来られる本物のメシヤとの違いをはっきりと示しています。 また上記の箇所から、兵役に就くことに消極的な人でも、エルサレムにある神の陣営に対して、目視可能、不可能なものを含めて、悪魔の力が働くこの最後の「総力戦」に参加することに、熱意を持つように

能性が高いということです。また前に取り扱った、南方との第二次戦役において、イスラエル沿岸への大規模な上陸作戦が、反キリストの勝利に決定的な役割を果たしたという点です。海から兵力を送り込む作戦が成功の鍵だったのです。このことを考えると、今回の侵攻においても、反キリストが持つ強大な海軍を使って、多くの部隊を海路でイスラエルへ送り込む可能性を否定することはできません。特に、つい最近までバビロン攻撃に投入されていた部隊については、そのまま海軍によってイスラエル方面へ転用される可能性が高いでしょう。

なることが分かります。

> イスラエルの神、主はわたしにこう仰せられた、「わたしの手から、この怒りの杯を受けて、わたしがあなたをつかわす国々の民に飲ませなさい。 彼らは飲んで、よろめき狂う。これはわたしが彼らのうちに、つるぎをつかわそうとしているからである」。 こうしてわたしは主の手から杯を受け、主がわたしをつかわされた国々の民に飲ませた。 すなわちエルサレムとユダのすべての町と、その王たちおよびそのつかさたちに飲ませて、それらを滅ぼし、荒れ地とし、人の笑いものとし、のろわれるものとした。今日のとおりである。 またエジプトの王パロとその家来たち、その君たち、そのすべての民と、 もろもろの寄留の異邦人、およびウズの地のすべての王たち、およびペリシテびとの地のすべての王たち、（アシケロン、ガザ、エクロン、アシドドの残りの者）、 エドム、モアブ、アンモンの子孫、 ツロのすべての王たち、シドンのすべての王たち、**海のかなたの海沿いの地の王たち**、 デダン、テマ、ブズおよびすべて髪の毛のすみずみをそる者、 アラビヤのすべての王たち、荒野の雑種の民のすべての王たち、 ジムリのすべての王たち、エラムのすべての王たち、メデアのすべての王たち、 **北のすべての王たちの遠き者、近き者も**つぎつぎに、**またすべて地のおもてにある世の国々の王たち**もこの杯を飲む。そして彼らの次にバビロンの王もこれを飲む。「それであなたは彼らに言いなさい、『万軍の主、イスラエルの神はこう仰せられる、飲め、酔って吐け、倒れて再び立つな、わたしがあなたがたのうちに、つるぎをつかわすからである』」。「もし彼らがあなたの手から杯を受けて飲むことをしないならば、あなたは彼らに言いなさい、『万軍の主はこう仰せられる、あなたがたは必ず飲まなければならない。 見よ、わたしの名をもって呼ばれるこの町にさえ災を下すのだ。どうしてあなたがたが罰を免れることができようか。あなたがたは罰を免れることはできない。**わたしがつるぎを呼び寄せて、地に住むすべての者を攻めるからである**と、万軍の主は仰せられる』。（エレミヤ 25 章 15-29 節）

上記のエレミヤ書の一節は、バビロン捕囚に至るまでが主な適用範囲ですが、強調されている箇所は、終末論的な適用も意図していることを明確に示しています。エレミヤと同時代の人々に、ハルマゲドンに例えて、これから起こることの恐ろしさ（すなわち「主の日」パラダイム；本シリーズ第一部、Ⅳ.1.b を参照）を実感させています。 一方、エゼキエル書 38-39 章は、完全に終末論的です。 この二章は、獣が世界の軍隊を集め、ハルマゲドンに先立ってイスラエルに侵攻する様子を最も詳細に描いているので、この時点で、エゼキエル書の「マゴグのゴグ」についての記述を、徹底的に検討する必要があります。

マゴグのゴグ

(1)人の子よ、ゴグに向かって預言して言え。主なる神はこう言われる、メセクとトバルの大君であるゴグ(すなわち、反キリスト)よ、見よ、わたしはあなたの敵となる。(2)わたしはあなたを引きもどし、あなたを押しやり、北の果から上らせ、イスラエルの山々に導き、(3)あなたの左の手から弓を打ち落し、右の手から矢を落させる。(エゼキエル 39 章 1-3 節)

エゼキエルによるマゴグのゴグに関する記述(本シリーズ第 3 部 B「反キリスト」II.1.c.1)については、前回、ゴグは獣と同義であり、マゴグは「ゴグのいる場所」を意味することを見ました。つまり、預言の文脈では、マゴグはバビロンの奥義(ヘブル語の暗号法アトバシュを用いた MGG(マゴグ)は LBB＝BBL＝バベル Babel を意味する)です[46]。確かに暗号では子音が逆になっています(つまり、直接適用するには、バビロンの暗号名は「ゴーガム(Gogam)」でなければなりません)。 しかし、「マゴグ(Magog)」は歴史上の名前であり(彼はヤペテの息子の一人:創世記 10 章 2 節)、したがって、この置き換え表現法は、歴史的な名称を変更して類似性を失うことをせずに、謎のバビロンとの関連性を維持するために使用されていることは間違いありません[47]。というのも、「マゴグ」という歴史的な名前を使うことで、将来イスラエルを侵略することになるマゴグの権力中枢が、ヤペテの次男の歴史的な出身地である北の果てにあることが、読者にはっきりとわかるからです[48]。 終末論的バビロンは厳密に言えば西に位置しますが、歴史的バビロンは聖書の地理的観点から「北」に位置し、艱難期の終わりに滅びるまでは、反キリストの権力の二重基盤の一部として、復活したローマ帝国と区別がつかないほどです。このように、エゼキエルの聞き手にとって、将来この地を侵略する「ゴグ」と、北方諸国の中でも最も遠い国の一つである「マゴグ」との関連は、実際に起こることの

---

46 「アトバシュ」は、暗号化された文字がアルファベットの逆順で同じ番号の文字を表すアルファベット暗号です(例えば、アルファベットの一番最後の文字である「タウ」は、アルファベットの最初の文字である「アレフ」を表し、最後から 2 番目の文字である「シン」は、最初から 2 番目の文字である「ベト」を表します。- そのため、名前は「a=th-ba=sh」＜a(「アレフ」の「ア」=th(「タウ」の「タ(ト)」)-ba(「ベト」の「ベ(バ)」)=sh(「シン」の「シ(シュ)」)＞、**א=ת**、**ב=ש**となります。

47 さらに、ヘブライ文字の m- [-מ] は、「マゴグ」という名前のように、この種の名詞形成において頻繁に位置を表す意味を持つ文字ですが、この意味では常に接頭辞として使用され、接尾辞としては決して使用されません。

48 学問的には一般に、マゴグは北はロシアの草原(ヨセフスによれば「スキタイ人」)から、南はリディア・カパドキア(現在のトルコ;「ゴグ」／「ギュゲス」参照)からメディア(現在のイラン;「マダイ」はヤペテの次男)まで、コーカサス山脈を「重心」とする地名とされています。 辞書参照 sub voc. (BDB、Gesenius、KB)、Keil and Delitzsch、S.R.Driver『sGenesis(London 1904)、J.Skinner』sI.C.C. Genesis(Edinburgh 1910)を参照。

完璧なイメージを当時の用語で伝えるだけでなく、私たちは後の詳細な預言によって、さらに一歩進んで、(すでに述べた理由から、)「マゴグ」を預言されているバビロンと同一視することができるのです。さらに、「ゴグ／マゴグ」という名前の語源に、異邦人を意味するヘブル語(ゴイ goy, **גוי**)の二重表現を見るなら、「マゴグ」は「典型的な異邦人国家」というような意味になります。そして、終末論的なバビロンは、民族的な観点から、一方では他のどの単一国家よりもヤペテ系の諸民族を最もよく代表する存在であり、他方、他のどの国家よりも多民族の国家の特徴があることから、「マゴグ」を、獣の故郷とする謎のバビロン(彼はマゴグの「**大君(おおぎみ)**」です)として、またマゴグが統治する(メセクとトバルという二つで構成されている)二重連合の要として表現していることは完全に理にかなっています。さらに、エゼキエルが 38-39 章の遠い将来の出来事、また**特に**ハルマゲドンの出来事についてだけ語っていることを確実に示す、多くの示唆が文脈全体から得られます。

1)この最終決戦とその破壊のために世界中の**全て**の敵を集めることは、主御自身の働きであることを繰り返し強調しています(エゼキエル 38 章 3-4 節, 38 章 7 節, 38 章 16 節, 39 章 2 節)。これはハルマゲドン以前に、決して起こらないことです(もちろん、反キリストと南の同盟との前の二つの作戦でも起こりませんでした)。

2) ゴグの連合軍には、世界中の民族が含まれていることは明らかであり、北だけでなく南の民族も一致団結して行動していることは明らかで、これは世界中からの軍事行動であって、以前のイスラエルの、また艱難期中のどんな軍事行動とも、類を持たないものであることが明白です。

3) 39 章にあるハルマゲドンの後、主の敵の死体を埋葬することは、その後の悪魔の活動はなく、空前の平和と繁栄の時代が来ることを示唆しています(特にエゼキエル 39 章 25-27,28-29 節)。エデン以降の人類史の中で、このような状況に当てはまるのは千年王国だけです。さらに、この浄化に必要な時間の長さ(特にエゼキエル 39 章 9 節の「七年」を参照)は、千年王国の終わりに新エルサレムが直ちに到着する場面には(メシヤの支配に反対するゴグ・マゴグのエルサレム襲撃の後)明らかに適合しません。千年王国後のゴグ・マゴグの反乱の終わりの場合には、この最後の反乱者たちが「天から火が下ってきて焼き尽くした」と言われており、その場合には埋めるべき遺体はありません(黙示録 20 章 9 節)。

4) エゼキエル 39 章 26 節の「彼らは、安全の中で暮らしていたときに、私に対して示した恥とすべての不誠実さを忘れてしまう」という言葉は、千年王国におけるキリストの完全な支配の時代(そのような「恥」も「不忠実」もない時代;例えば、エレミヤ 31 章 33-34

節など)を振り返ってではなく、苦難の時代の状況を振り返っているのに違いありません。さらに次の聖句、エゼキエル 39 章 27 節では、その時期がまだ未来であるとされています:「わたしが彼らを諸国民の中から帰らせ」というのは、すなわち、ハルマゲドンの戦いの終結後の再臨の後に、神の働きによってイスラエルが再集結するということです(現在の政治的状況のことではありません; 参照. イザヤ 60 章 8 節～; ゼカリヤ 8 章 23 節)。

5) この文脈で言及されている大地震は、再臨に先立つ出来事です(すなわち、第七の鉢の裁きの頃の出来事:エゼキエル 38 章 19 節と黙示録 16 章 18 節を比較してください)。

6) ここに描写されている人間の軍隊は反キリストのもの一つだけで、これは南方に対する反キリストの以前の作戦や以前の歴史的侵略ではなく、ハルマゲドンで主とその油注がれた者に対して、一つになって立ち上がる、諸国の預言であることを示しています(詩篇 2 篇)。

7) 獣の戦士たちが狂乱して互いに殺し合う様子は、他の再臨・ハルマゲドンの記述とも一致しています(参照. エゼキエル 38 章 21-22 節とゼカリヤ 14 章 13 節を比較してください)。

8) エゼキエル 38 章 22 節の雹の災いは、私たちが見たように、ハルマゲドンの第二の前兆として知られています(参照:黙示録 16 章 21 節)。

9) 主はゴグ軍の破壊を利用して、ご自分とその力を世界に知らせます(エゼキエル 38 章 16 節, 38 章 23 節, 39 章 6 節)。このことはハルマゲドンの戦いにおける再臨においてのみ、最も顕著に起こることです(黙示録 1 章 7 節;19 章 11-16 節を参照)。

10) 死者の死体が鳥の餌になることも、再臨-ハルマゲドンに関連しています(エゼキエル 39 章 17 節～と黙示録 19 章 17-18 節を比較してください)。

11) マゴグに注がれる火(エゼキエル 39 章 6 節)は、黙示録 17-18 章でバビロンが火で滅ぼされる出来事の一部を指しています。(ただし、「海沿いの国々に安らかに住む者」という表現でわかるように、ハルマゲドン後の裁きがより西に拡大されています;このシリーズの第 6 部を参照してください)。

12) エゼキエル 39 章 26 節は侵略後のイスラエルの再集結について述べており、その

結果、もはや「彼らを恐れさせるものはいない」ことになり、これはメシヤの千年王国の平和と安全について明確に言及しています。

(2)「人の子よ、メセクとトバルの大君であるマゴグの地(すなわち、バビロン、獣の本国)のゴグ(すなわち、反キリスト)に、あなたの顔を向け、これに対して預言して、(3a)言え。主なる神はこう言われる、メセクとトバルの大君であるゴグよ、(エゼキエル 38 章 2-3 節前半)

エゼキエルが歴史上のマゴグに言及したのは、獣の故郷バビロンを預言的に指しているのと同様に、ヤペテの子であるメセクとトバルも、当時の出来事ではなく、将来の出来事に焦点を合わせています。この二つの古代国家の組み合わせは、反キリストが自らの「超国家」バビロンを支配するだけでなく、ここで挙げられている「メセクとトバル」という名の二つの主要な領土を統括する一つのより大きな複合帝国(別名「復活したローマ」)を支配していることを明らかにしています。[49] このように、これらの名前はマゴグの場合と同様に、将来の預言的現実を当時の読者に理解できる地理的用語で表現するために、聖霊によってエゼキエルに与えられたものです。 獣のハルマゲドン攻略を考察する目的から言えば、獣の侵攻軍の中核は、南方征服に用いたのと同じ軍隊、すなわち西方と北方の軍隊、すなわち(今は滅びた)バビロンとその同盟国、復活したローマとその同盟国の軍隊で構成されると言えるでしょう。 しかし、メセクとトバルの**両方**が言及されているので、反キリストの復活したローマ帝国の第二部、すなわち新たに征服された南の同盟国(すなわち、ダニエル 7 章 8 節で小さな角の前に倒れた十の角のうちの三つの角)も軍事力のすべてを提供することは確かでしょう(そして、黙示録 16 章 12 節から、東もまた貢献するとわかっています)。

(3)言え。主なる神はこう言われる、メセクとトバルの大君であるゴグよ、見よ、わたしはあなたの敵となる。(4)わたしはあなたを(再び、ハルマゲドンのために)引きもどし、あなたのあごにかぎをかけて、あなたと、あなたのすべての軍勢と、馬と、騎兵とを引き出す。彼らはみな武具をつけ、大盾、小盾を持ち、すべてつるぎをとる者で大軍である。(5)ペルシャ、エチオピヤ、プテは彼らと共におり、みな盾とかぶとを持つ。(6)ゴメルとそのすべての軍隊、北の果のベテ・トガルマ(すな

---

[49] このシリーズの第 3 部 B「反キリストとその王国」. III「獣の王国」を参照ください。復活したローマの二つの別々の部分を表現するためにメセクとトバルが使用されていることは、特に適切です。なぜなら、この二つの部族は、聖書だけでなく、古代の世俗の歴史においても、しばしば関連付けられているからです(参照:創世記 10 章 2 節; 歴代誌上 1 章 5 節; イザヤ 66 章 19 節;エゼキエル 27 章 13 節, 32 章 26 節, 39 章 1 節)例えば、ヘロドトス(Hist. 3.94;7:78)やアッシリアの記録など。 Unger's Bible Dictionary および The Interpreter's Dictionary of the Bible の「メセク」および「トバル」"Meshech" and "Tubhal"の項を参照してください。

わち、トガルマの家）と、そのすべての軍隊など、多くの民もあなたと共におる。(7)あなた[ゴグ]は備えをなせ。あなた[ゴグ]とあなたの所に集まった[連合諸国の]軍隊は、みな備えをなせ。そしてあなたは彼らの保護者となれ。（エゼキエル 38 章 3-7 節）

この箇所は、獣とその軍勢を完全に破壊するためにエルサレムに連れてくることが、紛れもなく「神から」であることを示しています。一方、4 節にある、主がゴグとその軍勢に釣り針を突き刺してハルマゲドンの虐殺に引きずり込むイメージは、この悪魔と悪魔の選んだ者たちの最後の攻勢を打ち破り、前例のない決定的な方法でそれを行う神の計画の抗しがたい性質を最も明確に述べているのです。なぜなら、主が「あなたがたを連れ戻す」からです。ここでのヘブル語の動詞（シャバブ、שבב 引き戻す）は、ゴグが以前にイスラエルにいたことをはっきりと示しています（反キリストが以前にエルサレムに住んでいたことを指している）。パロのように主によってゴグが滅ぼされるというこのテーマは、先に引用した 39 章 1-3 節の冒頭でも強調されて繰り返されます。ここでは主はイスラエルに「ゴグを引き**戻す**」という誓約を新たにし、主ご自身が「あなたを**率いる**」（すなわち、反キリストの軍勢がエルサレムに迅速かつ完全に到着することを主が成し遂げられる）とあり[50]、「北の果てからあなたがたを**引き**上げて」（「引き上げ」; エルサレムの相対的な標高のため、いつものように「上」となります。「北」は、まさに反キリストが戦いを開始する地域です）、最終的に「来**させる**」のです。この最後の言葉は、獣と悪魔がこの邪悪な十字軍に熱中しているにもかかわらず、主は彼らを神のご計画の中で、すでに固く決められた完全な消滅に導く方であることを示しています。まさに、パロを紅海に導き、同様に完全かつ奇跡的な方法で彼とその軍隊を始末したようにです。

次の聖句ではこの遠征の規模が、世界史上、一つの目的に対して投入された最大かつ最強の軍隊となることが、生き生きと描写されています（4 節「大軍」、また章末の召集名簿を参照）。 また、その兵力の多さから、これらの部隊の質が劣ると想定すべきではありません： 1）完全に軍事化された軍隊であること（4 節「すべての軍勢と、馬と、騎兵」）、2）非常によく装備された軍隊であること（4 節「全員が（戦闘装備で）完全武装し」、「全員が盾と小盾を持ち、剣を携えていた」）、3） これは、「第一軍」の正規兵とベテラン兵、各国が誇る最高の兵士たちで構成される部隊となります。（5 節「みな盾とかぶとを持つ」）。そして、その迅速な召集と作戦地での迅速な集合にもかかわらず、無秩序であったり、準備不足であったり、適切な計画や命令なしに活動することはないでしょう。主ご自身がこのように命令を下し、獣とその参謀にこの点でも最大限の努力を

[50] 「私はあなたを徹底的に欺きます」という訳も可能です。この動詞は、他に例のない shasha（ששא）から派生したものではなく、nasha'（נשא）から shaphel 形成とみなして、このかなり長い形では前例のないシンコペーションで nun が同化されていると解釈するものです。

するよう激励しているからです(7 節「あなた[ゴグ]は備えをなせ。あなた[ゴグ]とあなたの所に集まった軍隊は、みな備えをなせ」)。要するに、これは世界史上最も大きく、最も良い装備、最も良い訓練と準備、最もプロフェッショナルな戦闘部隊が最も効果的な作戦を行うことになるのですが、まさにそれが要点なのです。守備側が単なる人間の力に頼らざるを得なくなった場合、反キリストとその抗うことのできない電撃戦の前では、まったく勝ち目はありません。しかし、彼らがハルマゲドンで待ち受けるのは主であり、栄光に満ちたメシヤ、人の子、私たちの救い主イエス・キリストの口から出る鋭い剣なのです。(黙示録 19 章 15 節; 参照.イザヤ 1 章 20 節, 49 章 2 節; ヘブル 4 章 12 節; 黙示録 1 章 16 節, 2 章 12 節, 2 章 16 節) 。

上記の 3-7 節に挙げられている国々は、三つの主要なグループに分けることができます。1) ペルシャ、エチオピヤ、プテ、2) 「ゴメルとそのすべての軍勢」と「ゴメルとそのすべての軍隊、北の果のベテ・トガルマ」、3) 「(連合した)すべての軍勢」です。最初のグループについては、これらの国々は南の国々を代表しており、特に、その時獣に服従している南の同盟の三つの地域勢力(すなわち、復活したローマ帝国を形成する 10 の角のうちの三つ; 参照. ダニエル 7 章 7 節, 7 章 20 節; 黙示録 12 章 3 節, 13 章 1 節, 17 章 3-16 節)を表しています。ペルシャはイランと中央アジアの勢力圏(トルコからカザフスタンまで)を表していると思われます。 プテはリビアを指し、北アフリカを表しています。クシは聖書では通常エチオピアを指しますが、時にはメソポタミアも指します(参照:ニムロデの父クシはこの地域で活動していました:創世記 10 章 8 節)。この文脈ではどちらの意味をも含んでおり、エチオピアとスーダンから紅海を超えて、アラビアとイラクを指しているでしょう。エジプトがこの記述から明らかに欠落しているのは、南方同盟の首領として、特に敗北後に反キリストの手によって痛めつけられたからでしょう(エゼキエル 30 章 2-26 節, 32 章 11-15 節を参照)。

> (2)わたしはエジプトびとを奮いたたせて、エジプトびとに逆らわせる。彼らはおのおのその兄弟に敵して戦い、おのおのその隣に敵し、町は町を攻め、国は国を攻める(すなわち、三国同盟の分裂)。(3)エジプトびとの魂は、彼らのうちにうせて、むなしくなる。わたしはその計りごとを破る。彼らは偶像および魔術師、巫子および魔法使に尋ね求める。(4)わたしはエジプトびとをきびしい主人(すなわち、反キリスト)の手に渡す、荒々しい王(すなわち、反キリスト;ダニエル 8 章 23 節参照)が彼らを治めると、主、万軍の主は言われる。(イザヤ 19 章 2-4 節)(参照. イザヤ 19 章 5-17 節とイザヤ 19 章 18-24 節の比較)

第二のグループ分けでは、ゴメルと「トガルマの家」の二つの下位区分しか見あたりません。 それは、このヤペテの二人の息子が、艱難期の前半に獣の力を支える二本

の柱、すなわち獣が生まれた西側（つい少し前まで、この時点では滅びてしまったバビロンが支配していた）と、艱難期の初期に征服した北側（つまり、復活したローマ帝国の最初の七王国）を表しているからです。 ゴメルとトガルマは、しばしば北のステップのテラ・インコグニタ＜ラテン語で、「未知の土地」の意＞に住むキンメリア人や、やや離れたアルメニア人と見なされており[51]、聖書の観点からは、世界のより神秘的な象限、すなわち（エゼキエルの時代には）未知の西方と比べて、神秘性の少ない北をそれぞれ表現しています。6 節の最後の要素である「そのすべての軍隊など、多くの民もあなた（ゴグ）と共におる（同盟国）」を考慮すると、世界の四つの象限の最後である東の象限が、黙示録 16 章 12 節の第六の鉢の裁きにおいて「東から来る王たちに対して道を備える」ためにユーフラテスが「干上がる」という特定の神の介入によって、この最終的な「ハルマゲドン」の戦いに巻き込まれていきます（参照：黙示録 16 章 16 節）。 エゼキエルは、同時代の人々が理解できる最も明確な言葉で、反キリストの召集を描くことによって、この動員はその範囲において世界的であり、その実施において大規模であることを聖霊を通して示しているのです。

> (8)**多くの日の後、あなたは集められ、終りの年**（ハルマゲドン直前の人類史 6000 年の終わり）**にあなたは戦いから回復された地、すなわち多くの民の中から、人々が集められた地に向かい、**（以前は）**久しく荒れすたれたイスラエルの山々に向かって進む。その人々は国々から導き出されて、みな安らかに住んでいる。**
> (9)**あなたはそのすべての軍隊および多くの民を率いて**[イスラエルの地に]**上り、暴風のように進み、雲のように地をおおう。**（エゼキエル 38 章 8-9 節）

すでに述べた多くの理由（すなわち、前述の 12 のリスト）から、ここで述べられているのは、千年王国の終わりではなく、ハルマゲドン直前の政治的状況です。この箇所は、この地の住民が「主によって」再び集められたとは言って**いません**（もちろん、この艱難期前に必ず起こるべき預言的な帰還の過程は、私たちの時代にすでにかなり進んでいます）。さらに、獣による侵攻の瀬戸際にあるイスラエルの状況は「剣からの回復」と表現されていますが、この言葉が意味するのは、あくまで戦争や他国による支配からの一時的な休息にすぎません（そして決して、千年王国で期待されるような豊かな繁栄ではありません）。反キリストが第五の鉢の裁きで闇の中に消えたことで、世界全体も、そして同盟国バビロンとともにあるイスラエル政府も、軽率にも彼の滅亡を予期していました。しかしその短い休息が、やがていっそう落胆をもたらすことになります。なぜなら、獣の支配と大艱難期のあらゆる悪が終わると期待していたのに、その新たに得られた平和と静けさが、迫りくる嵐の大災害の中で一瞬にして崩れ去るからです。

---

[51] 脚注 49 で引用されている参考文献をご覧ください。

(10)主なる神はこう言われる、その日に、あなたの心に思いが起り、悪い計りごとを企てて、(11)言う、『わたしは無防備の村々の地に上り、穏やかにして安らか[偽りの安全の内に]に住む民、すべて石がきもなく、貫の木も門もない地に住む者どもを攻めよう』と。(12)そしてあなたは物を奪い、物をかすめ、いま人の住むようになっている[以前の]荒れ跡を攻め、また国々から集まってきて、地の中央に住み、家畜と貨財とを持つ民を[あなたは]攻めようとする。(13)シバ、デダン、タルシシの商人、およびそのもろもろの村々はあなたに言う、『あなたは物を奪うために来たのか。物をかすめるために軍隊を集めたのか。あなたは金銀を持ち去り、家畜と貨財とを取りあげ、大いに物を奪おうとするのか』と。(エゼキエル38章10-13節)

ユダヤ国家をこれ以上必要とせず、彼らの不忠実さを罰しようとする反キリストは、父である悪魔の命令を受け、その時この一か所に集中しているユダヤ民族を、今こそ全滅させるという「邪悪な計画」を企てるのです。現在もそうですが、艱難期においても、ユダヤ国家は固定防衛よりも、反撃と機動防御を主体とする戦略に引き続き依存する兆候が見られます。それは高度な技術を持つ軍隊にとってはふつう優れた戦略ですが、あらゆる方向から同時に攻め寄せる、圧倒的多数かつ同等の技量を持つ敵を相手にする場合には、大規模で堅固な要塞がないことが深刻な弱点となり、上記の聖句が示唆するように、イスラエル軍はかなり不利な状況に立たされることになることでしょう。獣が再び出現し、ハルマゲドンに向けて世界中の軍隊を召集しているという知らせがイスラエルに届くと、イスラエル全土、特に首都エルサレム周辺で、急ごしらえの要塞や塹壕を築くための必死な努力が行われることが予想されます。しかし世界の他の国々にとっては、ユダヤ国家の滅亡がほぼ確実に思われ、そのため、シバ、デダン、タルシシュの商人たち(エゼキエルの時代における著名な交易国で、それぞれイスラエルから見て南、西、北の商業勢力を代表する)は、反キリストの作戦が完了し次第、ユダヤ国家の領土内にある全財産を一括して売却・処分できる絶好の機会が訪れることを心待ちにすることでしょう。上記の聖句に見られる彼らの熱意は、七年間の苦難が世界とその富に深刻な損失を与えた事実(彼らの最良の顧客であるバビロンが最近滅ぼされたことは言うまでもありません)によって、いっそう強まっているに違いありません。しかしイスラエルは、その時までの三年間、獣とその宗教の本部として、他のどの国よりも経済的に著しく恩恵を受けてきました。ただし、その「恩恵」は、他のどの国よりも直接的に反キリストとその反神的な支配を経験しなければならないという、極めて高い代償を伴っています。

(14)それゆえ、人の子よ、ゴグに預言して言え。主なる神はこう言われる、わ

が民イスラエルの安らかに[偽りの安心感のうちに]住むその日に、あなたは立ちあがり、(15)北の果のあなたの所から来る。多くの民はあなたと共におり、みな馬に乗り、その軍隊は大きく、その兵士は強い。(16)あなたはわが民イスラエルに攻めのぼり、雲のように地をおおう。ゴグよ、終りの日(すなわち、最後の日、艱難期:参照. イザヤ 2 章 2 節)にわたしはあなたを、わが国に攻めきたらせ、あなた[ゴグ]を[滅ぼすことを]とおして、わたしの聖なることを諸国民の目の前にあらわして、彼らにわたしを知らせる(すなわち、彼らはわたしが誰であるかを知るようになる)。(エゼキエル 38 章 14-16 節)

最後に、ここで指摘しておかなければならないのは、ハルマゲドンの本質的な戦略はサタンによって考案されたものであり、イスラエルは実際には標的というより、むしろ餌に過ぎないということです。なぜなら、サタンの狂った計画の真の目的は、人間と天使のすべての力を結集し、主ご自身との最終決戦で、一か所で一挙に決着をつけることにあるからです(例えば、詩篇 2 篇 1-3 節; 黙示録 16 章 14 節など)。とはいえ、被造物がどれほど力を尽くそうとも、神の力がほんのわずか現されるだけでも、その前では取るに足らぬ微々たるものにすぎません。主がパロを立てられたのは、ご自身の力を示し、その御名を全地に告げ知らせるためであったように(出エジプト 9 章 16 節; ローマ 9 章 17 節参照)、悪魔が人類史上かつてないほどの兵力を一か所に集結させても、それは結局、「ゴグよ、わたしはおまえを滅ぼすことによって、彼らの目の前でわたしの聖なることを示す」(エゼキエル 38 章 16 節)ために用いられるだけでしょう。

ユダヤ人の抵抗(レジスタンス):

反キリストが「イスラエルの聖なる者」と自らを称し、さらに偽メシヤの契約(ダニエル 9 章 27 節; このシリーズの第 3B 部、第 IV 章「反キリストのイスラエルとの同盟」を参照)を破棄したことから、反キリストを最も憎む者として、すなわち宗教的保守派や民族主義的な熱狂者たちが、獣に対する抵抗運動の先頭に立つと予想されます。彼らの最初の注目対象であるエルサレムは、この時までにはおそらく完全に彼らの支配下にある(あるいは、ほぼそうなっている: 参照. 黙示録 11 章 2 節)一方で、前に述べたことを踏まえるなら、次のようにも考えられます。

反キリストが北方に臨んだ暗闇(超自然的な闇)から再び姿を現し、ハルマゲドンへの総動員を呼びかけるその時点でも、イスラエルの国内には、なおいくつかの拠点(要塞・砦)が残っているということです。それらの拠点には、・反キリストに忠実な世俗派(反信仰的・反神的な勢力)の人々・当時なおイスラエル国内に駐留していた、比較的少数の反キリスト軍の部隊が、身の安全を確保するために逃げ込んでいると考えられ

ます。つまり、反キリストが一時的にイスラエルを離れた後も、国内のすべてが完全に解放されたわけではなく、彼に忠誠を誓う勢力と軍事的拠点が点在的に残存している状況が続いている、ということです。とてつもなく巨大な侵略が迫る中、イスラエル全土にこうした敵の要塞が散在することは、ユダヤ人レジスタンス（抵抗勢力）の指導者にとって大きな難題となり、防衛を著しく困難にすることでしょう。聖書が示唆するのは、イスラエル全土の防衛を試みることは、最良の状況下でも非常に困難であり、この状況では客観的に不可能であるため、ユダヤ人の将軍たちはエルサレムに後退し、利用可能なすべての兵士と手段を投入して首都を要塞化することでしょう（古代の例として、紀元前 586 年のバビロニアとの戦い、紀元 70 年のローマとの戦いが挙げられます）。このように、ハルマゲドンとして知られる「召集の山」であるエルサレムで、艱難期の最後の戦いが行われるのです。これは最初から主のご計画であり、真にこの目的のために物事を導いておられるのは主です。（エゼキエル 38 章 16 節）。

反キリストの侵略に対するユダヤ人の英雄的な、しかし一見無益な抵抗に関する箇所を検討する際に心に留めておくべきことは、これらの防衛者がいかに高潔で勇敢であっても、この状況に陥ることになった共通の特徴があるということです：それは彼らはみな艱難期の前半に、モーセとエリヤの働きを拒否したことです。もし彼らがこの二人の偉大な預言者の証言と 14 万 4 千人の殉教者の働きを受け入れていたならば、この時にはエルサレムのはるか東の荒野で安全に過ごし、大艱難期とこの時の大災害の嵐を神の保護のもとに切り抜け、まだ生きているすべての信者と、その時までに亡くなって主と共にあるすべての者とともに、イエス・キリストの再臨の輝かしい勝利の日に復活して、王の帰還を待つことになっていたことでしょう。獣の襲撃に抵抗しているほとんどでなくても、多くの人々は、人の子のしるしを見、その再臨をその目で見て、改宗するようになるでしょう（マタイ 24 章 30 節； ゼカリヤ 12 章 10 節； 黙示録 1 章 7 節参照）。彼らは「花嫁の友」として復活し、不死のからだを得ます。これはキリストの勝利の褒賞の一部であり、主の栄光の分け前にあずかるものです。ただし、彼らがキリストの再臨前に信仰を持とうとしなかったために、この復活は千年王国の終わりまで待つことになります（第一コリント 15 章 24 節）。とはいえ、反キリストのあらゆる行為に心を痛め、その＜反キリストに対する＞抵抗の行動によって聖書的賞賛を受け、主の再臨によって明らかに改宗する勇気ある保守派の人々と、不信から獣を信奉してその刻印を受け入れる世俗的妥協者の間には、確かに区別すべき点があるのです。この区別は、前者のグループの高潔な戦いを描写する預言的聖句にも語られている一方、他の聖句では、この侵略の入り口に立つイスラエルの低俗な状態を描写しています。 艱難期は裁きの時で、主はこの侵略を最後の仕上げとして、悪との妥協（一方では善を選ばず、他方では悪を心から選ぶこと）は、いずれも神の裁きを招くことを示されるでしょう。

(1)あなたがたはシオンでラッパを吹け。わが聖なる山で警報を吹きならせ。国の民はみな、ふるいわななけ。主の日が来るからである。それは近い。(2)これは暗く、薄暗い日、雲の群がるまっくらな日である。多くの強い民が暗やみのようにもろもろの山をおおう。このようなことは昔からあったことがなく、後の代々の年にも再び起ることがないであろう。(3)火は彼らの前を焼き、炎は彼らの後に燃える。彼らのこない前には、地はエデンの園のようであるが、その去った後は荒れ果てた野のようになる。これをのがれうるものは一つもない。(4)そのかたちは馬のかたちのようであり、その走ることは軍馬のようである。(5)山の頂でとびおどる音は、戦車のとどろくようである。また刈り株を焼く火の炎の音のようであり、戦いの備えをした強い軍隊のようである。(6)その前にもろもろの民はなやみ、すべての顔は色を失う。(7)彼らは勇士のように走り、兵士のように城壁によじ登る。彼らはおのおの自分の道を進んで行って、その道を踏みはずさない。(8)彼らは互におしあわず、おのおのその道を進み行く。彼らは武器の中にとびこんでも、身をそこなわない。(9)彼らは町にとび入り、城壁の上を走り、家々によじ登り、盗びとのように窓からはいる。(10)地は彼らの前におののき、天はふるい、日も月も暗くなり、星はその光を失う。(11)主はその(**主の**)軍勢の前で声をあげられる。その(**主の**)軍隊は[＜主の軍隊も＞また]非常に多いからである。その(**主の**)み言葉をなし遂げる者は強い。**主の日**は大いにして、はなはだ恐ろしいゆえ、だれがこれに耐えることができよう。(ヨエル 2 章 1-11 節)

解説:　上記の箇所は、このシリーズの最初から議論してきた預言的聖句の二重適用を示す非常に明確な例です。「主の日パラダイム」を用いて、ヨエルは、自分の時代におけるイナゴの襲来について(参照:ヨエル 1 章 2-4 節)非常に明確に語っている一方で、その襲来をハルマゲドンの獣の侵略に例えることで、その侵略を象徴的に表現しています。ヨエルは、第 1 章 6 節でイナゴを「国」と呼ぶことで、読者に第 2 章でのより広範な比較に備えさせています。第 2 章では、イナゴの襲来が、ハルマゲドン前の獣の軍勢の侵略と意図的に比較されています。ハルマゲドンは、キリストが再臨し、反キリストの軍勢を文字通り滅ぼす「主の日」で終わります。ヨエルがこの「イナゴ」の侵入を「主の日」の直前に起こると明確に記述していることから(この記述の箇所は 1 節と 11 節の両方＜にある「主の日」の言葉＞でくくられています)、この比較は明白です。このような、預言的であり、かつ聖霊によって導かれた共通の表現方法によって、ヨエルの同時代の人々は、自分たちが裁きの中で経験している苦しみを理解するための、分かりやすい比較材料を与えられました。そして同時に、私たちもまた、大きな祝福を受けています。それは、獣(反キリスト)の侵攻が、どれほど速く、衝撃的で、そして人間の力では到底止められないものであるかを、非常に生々しく描いた、まったく同型の描写を与えられているからです。この箇所や他の多くの預言、さらには当時の状況全体が

持つ終末論的な意味は、信仰を持たないものの宗教的には熱心な保守派によって率いられている、ユダヤ人の反乱勢力にとって、決して見逃されてはいなかったはずです。過去に起こった他のユダヤ人反乱と同様に、彼らは自分たちの生き残りを神の直接的な介入に、そして具体的にはメシアの再臨に賭けている、と言ってよいでしょう。しかし、ここには大きな皮肉があります。というのも、これらの宗教的保守派の人々は、時代のしるしと預言的状況を正しく読み取ってはいるのですが、この一連の出来事における最も重要な点――すなわち、キリストへの信仰の必要性――を見失ってしまっているからです。彼らは、メシアの十字架につまずき、その代わりに王冠（栄光）だけを受け取ろうとしているのです。しかし、この戦役が終わる前に、イエスというお方のうちに与えられている神の憐れみの備えを受け入れない限り、どのような人間の努力も空しく、無意味であるということが、はっきりと明らかにされることになります。

> (6)「この民はゆるやかに流れるシロアの水を捨てて、レヂンとレマリヤの子の前に恐れくじける。(7)それゆえ見よ、主は勢いたけく、みなぎりわたる大川の水を彼らにむかってせき入れられる。これはアッスリヤの王と、そのもろもろの威勢とであって、そのすべての支流にはびこり、すべての岸を越え、(8)ユダに流れ入り、あふれみなぎって、首にまで及ぶ。**インマヌエルよ**、その広げた翼はあまねく、あなたの国に満ちわたる」。(9)もろもろの民よ、打ち破られて、驚きあわてよ。遠き国々のものよ、耳を傾けよ。腰に帯して、驚きあわてよ。腰に帯して、驚きあわてよ。(10)ともに計れ、しかし、成らない。言葉を出せ、しかし、行われない。**神がわれわれと共におられる**からである。（イザヤ書 8 章 6-10 節）

解説：「シロア“Shiloah”」という言葉は「遣わされた者」を意味し、真のメシヤ、すなわち私たちの主イエス・キリスト（ヨハネ 3 章 16 節，3 章 34 節，17章 1-5 節，17 章 18 節，17 章 20-22 節；ローマ 8 章 3 節；ガラテヤ 4 章 4-6 節；ヘブル 3 章 1 節；第一ヨハネ 4 章 9-10 節；参照．創世記 49 章 10 節；イザヤ 8 章 6 節；ゼカリヤ 2 章 9 節；2 章 11 節，4 章 9 節，6 章 15 節）を指し、水は安息と救いをもたらす福音の真理を指します（ヨハネ 3 章 5 節；第一コリント 10 章 4 節；黙示録 7 章 17 節，21 章 6 節，22 章 1 節，22 章 17 節）。イザヤの同時代の人々は、ハルマゲドンの瀬戸際に立つ宗教的保守派のように、神を正しい方法で求める者、すなわち神の御子イエス・キリストを通して求める者にのみ与えられる神の助けではなく、人間の力に頼っていました。 その結果、「ユーフラテス川の向こうから雇ったかみそり」（イザヤ 7 章 20 節）が、偶像崇拝の北王国を破壊し、罪深い南王国を懲らしめるために用いられ、後者を完全に滅ぼすのではなく、上記の箇所が言うように、（完全な破壊の直前で止まる）首まで達する洪水のように国を掃き清めるのです。この時、主はユダ王国を奇跡的な方法で救われたことが思い起こされます。主の天使（キリストの「クリストファニー」としての出現）が、エル

サレムの前で陣を張っていたアッシリアの兵士 18 万 5 千人を殺したのです（イザヤ 37 章 36 節）。[52] このように、現在の状況と過去の歴史的状況には多くの類似点が見られます。すなわち、インマヌエル、「私たちと**共に**おられる神」が、まさに世界統治のために戻ってこようとしている点です。当時、北王国が滅ぼされたように、この時にも、反キリストの攻撃に対して、エルサレムとその周辺地域だけが形だけの抵抗を示し、主がユダを徹底的に懲らしめ、人間の手段が完全に失敗した後に、予期しなかった奇跡的な方法で救い出したように、 私たちの主は、反乱の抵抗が破られた後にのみ、栄光のうちに帰って来られて、獣の軍勢を根絶されることでしょう（参照．ダニエル 12 章 7 節）。反乱者のメシヤ的な戦いの叫び「神、われらと共にいます！」、すなわち「インマヌエル」は、確かに真実であることが証明されるでしょう。しかし、彼らが思っていた理由によってではなく、また、彼らが望む時や方法で救いがもたらされるわけでもありません。彼らはまず、自らの力が打ち砕かれることを経験しなければならず、その後、すべての人が見ることができる天に刻まれた「人の子」のしるし、すなわちイエス・キリストの**十字架**（マタイ 24 章 30 節; ゼカリヤ 12 章 10 節; 黙示録 1 章 7 節参照）が明らかにされるでしょう。

> (9)主は言われた、「あなたは行って、この民にこう言いなさい、『あなたがたはくりかえし聞くがよい、しかし悟ってはならない。あなたがたはくりかえし見るがよい、しかしわかってはならない』と。(10)あなたはこの民の心を鈍くし、その耳を聞えにくくし、その目を閉ざしなさい。これは彼らがその目で見、その耳で聞き、その心で悟り、悔い改めていやされることのないためである」。(11)そこで、わたしは言った、「主よ、いつまでですか」。主は言われた、「町々は荒れすたれて、住む者もなく、家には人かげもなく、国は全く荒れ地となり、(12)人々は主によって遠くへ移され、荒れはてた所が［イスラエルの］国の中に多くなる時まで、こうなっている。（イザヤ 6 章 9-12 節）

解説：この箇所や他の多くの聖書箇所は、イスラエルの地に住む人々が、反キリストの手によってもたらされる最後の激しい裁きに抵抗することと、その裁きの内容とを、はっきりと結びつけています。つまり、その裁きを受ける人々が、反キリストに協力し仕える世俗的な同盟者たちであれ、あるいは真のメシアであるイエス・キリストをいまだに受け入れようとしない、宗教的には保守的なユダヤ人たちであれ、共通して言えることがあります。それは、反キリストの侵攻がこれほどまでに破壊的なものになる根本的な理由は、彼らが神の御心を拒み続けてきたことにある、という点です。神が彼らに与えようと

[52] キリスト顕現（クリストファニー）の教義については、「聖書の基礎知識 第 1 部：神学」.II.C.3「旧約聖書におけるキリストの出現」をご覧ください。

していた道、すなわちイエス・キリストを通して示された救いの御心を受け入れなかったことこそが、この恐るべき裁きを招いた決定的な原因なのです。（特に、この時のイスラエルの悲惨な状態とその根本的な理由を預言的に描写しているイザヤ 3 章 1 節- 4 章 1 節; 5 章 8-30 節, 17 章 4-14 節, 33 章 7-9 節, 51 章 17-20 節, 64 章 9-12 節を参照のこと）[53]。

(5)ユダに告げ、エルサレムに示して言え、「国中にラッパを吹き、大声に呼ばわって言え、『集まれ、**われわれは堅固な町々へ行こう**』と。(6)シオンの方を示す旗を立てよ。避難せよ、とどまってはならない、わたしが北から災と大いなる破滅をこさせるからだ。(7)**しし**（すなわち、獣）はその森から出てのぼり、**国々を滅ぼす者**（すなわち、反キリスト）は進んできた。彼はあなたの国を荒そうとして、すでにその所から出てきた。あなたの町々は滅ぼされて、住む者もなくなる。（エレミヤ 4 章 5-7 節）

(11)その時この民とエルサレムとはこう告げられる、「熱い風が荒野の裸の山からわたしの民の娘のほうに吹いてくる。これはあおぎ分けるためではなく、清めるためでもない。(12)これよりもなお激しい風がわたしのために吹く。いま**わたしは**彼らに**さばき**を告げる」。(13)見よ、彼は雲のように上ってくる。その戦車はつむじ風のよう、その馬はわしの飛ぶよりも速い。ああ、われわれはわざわいだ、われわれは滅ぼされる。（エレミヤ 4 章 11-13 節）

(15)ダンから告げる声がある、エフライムの山から災を知らせている。(16)国々の民に彼の来ることを告げ、またエルサレムに知らせよ。「攻めかこむ者が遠くの国から来て、ユダの町々にむかってその声をあげる。(17)彼らは畑を守る者のようにこれを攻めかこむ。それはわたしにそむいたからだと、主は言われる。（エレミヤ 4 章 15-17 節）

(29)どの町の人も、騎兵と射手の叫びのために逃げて森に入り、岩に上る。町はみな捨てられ、そこに住む人はない。（エレミヤ 4 章 29 節）

解説：エレミヤ書 4 章からの抜粋は、紀元前 6 世紀、差し迫るネブカデネザルのイスラエル侵攻という当時の状況を語っていますが、私たちが全体にわたって注目してき

[53] イザヤ書では、「主の日パラダイム」において、このような類似的な言及が特に多く用いられていますが、それはまさに、イザヤがユダに対して、ここで私たちが扱っているような、この裁きと滅びへと導く、来たるべき主への拒絶の型に陥らないように促していたからなのです。

た預言的適用もあります[54]。攻撃は「獅子」と「国々を滅ぼす者」によるとされており、獣を指していることは明らかであり、獣の手によって下されようとしている裁きは、神によるものであるというメッセージは見逃せません。この獣の攻撃の速さと破壊の凄まじさの驚くべき性質は、上記の引用とエレミヤ書 4 章の残りの部分からも明らかです。最後に、これらの箇所はまた、反乱軍の最後の戦略、すなわち、イスラエルの土地の中で最も人が近づけない、高度に要塞化された地域に退却すること、そして、最後まで戦う価値のある場所であり、神の救いが最も期待できる場所であるエルサレムに退却することを説明しています。

エルサレムを取り囲み、海岸へと下る谷間が複雑に入り組んだ地形へと交戦が急速に狭まっていくさまは、とりわけイザヤ書 22 章において明白に示されています。そこでは、北からの侵略に直面した際に、首都を防備しようとする必死の努力が記録されているのです。

> (1)幻の谷についての託宣。あなたがたはなぜ、みな屋根にのぼったのか。(2)叫び声で満ちている者、騒がしい都、喜びに酔っている町よ。あなたのうちの殺された者はつるぎで殺されたのではなく、また戦いに倒れたのでもない。(3)あなたのつかさたちは皆共にのがれて行ったが、弓を捨てて捕えられた。彼らは遠く逃げて行ったが、あなたのうちの見つかった者はみな捕えられた。(4)それゆえ、わたしは言った、「わたしを顧みてくれるな、わたしはいたく泣き悲しむ。わが民の娘の滅びのために、わたしを慰めようと努めてはならない」。(5)万軍の神、主は幻の谷に騒ぎと、踏みにじりと、混乱の日をこさせられる。城壁はくずれ落ち、叫び声は山に聞える。(6)エラムは箙を負い、戦車と騎兵とをもってきたり、キルは盾をあらわした。(7)あなたの最も美しい谷は戦車で満ち、騎兵はもろもろの門にむかって立った。(8)ユダを守るおおいは取り除かれた。その日あなたは林の家の武具を仰ぎ望んだ。(9)またあなたがたはダビデの町の破れの多いのを見、下の池の水を集め、(10)エルサレムの家を数え、またその家をこわして城壁を築き、(11)一つの貯水池を二つの城壁の間に造って古池の水をひいた。しかしあなたがたはこの事をなされた者を仰ぎ望まず、この事を昔から計画された者を顧みなかった。(イザヤ 22 章 1-11 節)

---

[54] 実際、チャールズ・ファインバーグ博士(Dr. Charles Feinberg)が指摘したように、ここに書かれている詳細の多くは、エレミヤの時代のバビロン侵攻とは実際には一致しません: エレミヤ書(グランドラピッズ 1982 (Grand Rapids 1982))50.　この明らかな矛盾に対する答えは、エレミヤの当時の聴衆を凍りつかせる比較対象として、反キリストの将来の侵略に言及する詳細が組み込まれていることです。

上で論じたすべての要素がここに見て取れます。すなわち、目前に迫る災厄の速さ、防衛の焦点が早い段階でエルサレムにのみ絞られていくこと、そして迫り来る攻撃に対するその場しのぎの措置です。しかも、都市の目前に整然と戦列を敷いた圧倒的な軍勢の力と、その進軍の抗しがたい勢いを目の当たりにしてなお、この裁きが主から来ており、それが真のメシヤを拒んだことの結果であると理解することを、頑なに拒み続けているのです[55]。

包囲が始まる:

しかし今、軍勢の都よ、**自らの軍を整えよ。**見よ、**彼らはわれわれを包囲した**［―その軍勢はおまえに対して召集されたのだ］。(ミカ 5 章 1 節前半/ ESV)

そして、彼(すなわち反キリスト)は〔イスラエルに戻ると〕、**海と海**(すなわち地中海と死海)**の間、聖なる麗しい山**(すなわちエルサレムの神殿の山)**の近くに**、自らの〔王の〕天幕を張ります。しかし〔ハルマゲドンの戦いでの勝利を望んでいたにもかかわらず〕、彼はその終わりに至り、その時には彼を助ける者は一人もいないのです。(ダニエル 11 章 45 節/ ESV)

(1) ああ、アリエル、アリエルよ、ダビデが宿営した都(すなわちエルサレム)よ。年を重ねよ、祭を巡らせよ。(2)しかし、わたしは**アリエルを包囲し**、嘆きと悲しみをもたらす。彼女はわたしにとって「アリエル」(すなわち「神の〔いけにえの〕祭壇」)のようになる。(3)**わたしは周囲を**柵で**取り巻き**、**城塞を築いてあなたを囲む**。(4)あなたは低くされ、地から声を発し、塵の中からへりくだって語る。あなたの声は地から幽霊のように響き、あなたの言葉は塵からささやく。(5)しかし、あなたの敵の群れは粉々に砕かれた塵のようになり、残忍な者どもの群れも風に吹き払われるもみがらのようになる。そしてそれは瞬く間に起こる。(6)あなたは万軍の主の訪れを経験する。雷と地震と大きな声、暴風とつむじ風、そして焼き尽くす炎と共に。(7)アリエルを攻め囲む国々の群れは、夜の幻の中の夢のようになる。すなわち、彼女を攻める者、砦を囲み包囲するすべての者が。(8)飢えた人が夢の中で食べていると思っても、目覚めれば欲求は満たされておらず、渇いた人が

---

[55] また、セブナが退けられエルアキムが立てられること(イザヤ書 22 章 20-23,24-25 節)に、反キリストが一時的に姿を消している間に起こる指導者交代を見いだすことができます。確かに、エルヤキムは恥ずべきセブナよりは明らかに優れていますが、それでも彼もまた、イスラエルに対して解き放たれる圧力の重みによって倒れることになります。なぜなら、獣の進撃は人間の努力によっては食い止めることができないからです。

夢の中で飲んでいると思っても、目覚めれば渇きはそのままである。これが、シオンの山に向かって自らを召集するすべての国々の群れの姿である。(イザヤ 29 章 1-8 節/ ESV)

これらの聖句は、間もなく起こるハルマゲドンの戦いにおける獣の敗北を予告しつつも、反キリストがエルサレムに対する大規模な総攻撃に備えて、抵抗勢力を追い詰めていく様子を示しています。主は再臨されるとき、防衛側に勇気と力を吹き込まれます(イザヤ 28 章 5-6 節; オバデヤ 1 章 18 節; ミカ 4 章 11-13 節; 5 章 5-9 節; ゼカリヤ 9 章 13-16 節; 10 章 3-7 節)。しかし、この時点では、自らの窮地の深刻さを悟った守り手たちは、神の奇跡的な介入なしには自分たちの戦いに全く希望がないことを理解し始めており、そのために、絶望と助けを求める切なる叫びとが入り混じった感情を吐き出しているのです。

刈入れの時は過ぎ、夏もはや終った(すなわち、贖罪の日が近づく時期)、しかしわれわれはまだ救われない。(エレミヤ 8 章 20)

(9)これを諸国の民の間に告げよ。「聖なる戦いの備えをせよ。勇士を奮い立たせよ。すべての戦士は近づき、[エルサレムへ]上って来るがよい。(10) 鋤を打ち直して剣とし、鎌を槍とせよ。弱い者すら『わたしもまた勇士である』と言うがよい。(11) 四方から急ぎ来て、そこに集まれ。**主よ、あなた[もまたご自分の]勇士たちを[エルサレムへ]お下しください。**」(ヨエル 3 章 9-11 節/ESV)

(1)神よ、あなたはわれらを捨て、われらを打ち破られました。あなたは憤られました。再びわれらをかえしてください。(2)あなたは国を震わせ、これを裂かれました。その破れをいやしてください。国が揺れ動くのです。(3)あなたはその民に耐えがたい事をさせ、人をよろめかす酒をわれらに飲ませられました。(4)あなたは弓の前からのがれた者を再び集めようとあなたを恐れる者のために一つの旗を立てられました。〔セラ(5)あなたの愛される者が助けを得るために、右の手をもって勝利を与え、われらに答えてください。(6)神はその聖所で言われた、「わたしは大いなる喜びをもってシケムを分かち、スコテの谷を分かち与えよう。(7)ギレアデはわたしのもの、マナセもわたしのものである。エフライムはわたしのかぶと、ユダはわたしのつえである。(8)モアブはわたしの足だらい、エドムにはわたしのくつを投げる。ペリシテについては、かちどきをあげる」と。(9)だれがわたしを堅固な町に至らせるでしょうか。だれがわたしをエドムに導くでしょうか。(10)神よ、あなたはわれらを捨てられたではありませんか。神よ、あなたはわれらの軍勢と共に出て行かれません。(11)われらに助けを与えて、あだにむかわ

せてください。人の助けはむなしいのです。(12)われらは神によって勇ましく働きます。われらのあだを踏みにじる者は神だからです。(詩篇 60 篇 1-12 節)

(5)この方(すなわちメシヤ)が私たちの平和となるためである。アッシリアびと(すなわち反キリストの世界的連合の予型)がわれわれの地に攻め込み、われわれの城塞を踏みにじるとき、われわれは彼に対抗して七人の将軍(直訳では「羊飼い」〔サムエル下 5 章 2 節; エゼキエル 34 章 2 節, エレミヤ 23 章 1 節 参照〕)を立て、さらに八人の君主(すなわち七人と、イザヤ 22 章 20-25 節に描かれるセブナに代表される最高の民政指導者)を立てる。(6) そしてアッシリアびとは剣をもってこの地を荒らし、ニムロデの民までも、[エルサレムの]入口に至るまで攻める。(ミカ 5 章 5-6 節前半/ ESV)

わたしは万国の民を集めて、エルサレムを攻め撃たせる。町は取られ、家はかすめられ、女は犯され、町の半ばは捕えられて行く。しかし残りの民は町から断たれることはない。(ゼカリヤ 14 章 2 節)

(6)わたしは、かの亜麻布を着て川の水の上にいる[空中に立っておられる]人にむかって言った、「この異常なできごとは、いつになって終るでしょうか」と。(7)かの亜麻布を着て、川の水の上にいた[空中に立っておられる]人が、天に向かって、その右の手と左の手をあげ、永遠に生ける者をさして誓い、それは、ひと時とふた時と半時(すなわち大艱難期の三年半)である。[彼らが](すなわち、獣の軍が)が聖なる民を打ち砕く力が消え去る時に、これらの事はみな成就するだろうと言うのを、わたしは聞いた。(ダニエル 12 章 6-7 節)

特に最後の二つの聖句が示しているように、すべての抵抗はむなしく終わります。なぜなら、それは神から出たものではないからです。主は「聖なる民の力」が打ち砕かれ、エルサレムが陥落し、完全に捕囚へと追いやられようとするのを許されます――そしてその時に、主ご自身が起ち上がり、ご自分の民を救い出されるのです。

IV.　再臨の兆し 黙示録 19 章 5 節

その時、御座から声が出て言った、「すべての神の僕たちよ、神をおそれる者たちよ。小さき者も大いなる者も、共に、われらの神をさんびせよ」。（黙示録 19 章 5 節）

この声は、バビロンに下された裁きについての長い記述が終わった直後に、ヨハネに向かって語られています。そしてそのすぐ後には、「小羊の婚宴」への招き、すなわち、教会の復活について語られます。この復活は、主イエス・キリストが地上に再臨される直前、そして同時に起こる出来事です（次に続く V の項参照）。したがって、ここで神に仕え、神を恐れるすべての人々――来たるべき御国において大きな地位を与えられる者であれ、いわば「かろうじて救われた」者であれ――に求められているこの賛美は、二つの方向を同時に見ています。一つは過去を振り返る方向であり、そこでは、主が反キリストを用いて諸国を打ち、教会を迫害してきた「全地を打ち砕く槌」（エレミヤ 50 章 23 節）を完全に滅ぼされたことへの感謝が込められています。もう一つは未来を見据える方向であり、それは、間近に迫ったキリストの花嫁である教会の復活を見つめています。その復活には、最近殉教した信者たちも、主イエスが再臨される時点でまだ生きている信者たちも、すべて含まれているのです。

しかし、天にいる信者にとっても地にいる信者にとっても、御子の光がこの過去七年間の闇を圧倒しようとしているその現実を待ち望む中で、ただ賛美と喜びと確信以外に求められるものはありません。他方、獣に従った者たちにとっては、まったく逆のことが起こります。すなわち、最後に残る反キリストの支配への抵抗の拠点であるエルサレムにおいて、その抵抗が打ち破られるその時点で、彼らのすべての期待は完全に覆されるのです（第二ペテロ 3 章 1-13 節参照）。

人々が平和だ無事だと言っているその矢先に、ちょうど妊婦に産みの苦しみが臨むように、突如として滅びが彼らをおそって来る。そして、それからのがれることは決してできない。（1 テサロニケ 5 章 3 節）

確かに、その大いなる日の正確な日時や、再臨が始まる正確な時刻を知る者は誰もいません。けれども、上に述べたような状況そのものが「あらかじめ示された歴史のしるし」であり、それは主に救いを求めるすべての者を励ますために与えられているのです。

また日と月と星とに、しるしが現れるであろう。そして、地上では、諸国民が[大いに]悩み、海と大波とのとどろきに[ひどく]おじ惑い、 人々は世界に起ろうとする事を思い、恐怖と不安で気絶するであろう。もろもろの天体が[激しく]揺り動かされるからである。 そのとき、大いなる力と栄光とをもって、人の子が雲に乗って来るのを、人々は見るであろう。 これらの事が起り**はじめたら**(すなわち、終わりにおける全体の状況と、上述の天と地の現象が一斉に生じたら)、身を起し頭をもたげなさい。あなたがたの救が近づいているのだから」。 それから一つの譬を話された、「**いちじくの木を、またすべての木を見なさい。** はや芽を出せば、あなたがたはそれを見て、夏がすでに近いと、自分で気づくのである。 このようにあなたがたも、これらの事が起るのを見たなら、神の国が近いのだとさとりなさい。(ルカ 21 章 25-31 節)

ここで主イエスご自身が、「このようにご自身の再臨が間近に迫っていることを示す明確なしるしを見るときには、頭をもたげなさい」と直接教えておられるのです(ルカ 21 章 28-31 節; 参照.マタイ 24 章 32-36 節; マルコ 13 章 28-32 節; 第一テサロニケ 1 章 10 節)。したがって、あの大いなる日の直前に私たちが持つべき態度は、イエス・キリストにあっての最終的な救いに対する完全な信仰であり、たとえ周囲の世界が象徴的にも現実的にも、世界が崩れ落ちるように見えたとしても、ついに御顔を直接拝するその時が近いという望みのゆえに、喜びすら抱くべきなのです。

(1)神はわれらの避け所また力である。悩める時のいと近き助けである。(2)このゆえに、たとい地は変り、山は海の真中に移るとも、われらは恐れない。(3)たといその水は鳴りとどろき、あわだつとも、そのさわぎによって山は震え動くとも、われらは恐れない。(詩篇 46 篇 1-3 節)

しかし、主の地上への再臨の直前の最後の幾時間においてのみ、彼の再臨の最終的で否定し得ないしるしが現れるのです。すなわち、その特別な日の超自然的な暗闇と、それに伴って起こる天と地の壊滅的な出来事です(ルカ 21 章 25-31 節 参照)。

(6)嘆け、主の日は近い。全能者からの滅びが来る。(7)それゆえ、すべての手は弱まり、すべての人の心は溶け、彼らは恐れに打たれる。(8)激しい苦痛と痛みが彼らを捕らえ、産む女のようにもだえ苦しむ。彼らは互いに驚きの目で見つめ合い、その顔は炎のように赤くなる。(9)見よ、主の日が来る。激しい怒りと燃える憤りの日が。地を荒れ果てさせ、その上から罪人を断ち滅ぼすために。(10)**天の星と星座はその光を放たず、太陽は昇る時に暗くなり、月もその光を輝かせない。**(11)わたしはこの世の悪を罰し、悪しき者の不義を罰する。高ぶる者の驕りを終

わらせ、暴虐な者の高慢を低くする。(12)わたしは人を金よりも、オフィルの純金よりも少なくする。(13)それゆえ、**わたしは天を震わせ、**主の怒りとその激しい憤りの日のゆえに、**地はその場所から揺り動かされる。**（イザヤ 13 章 6-13 節/ ESV）

(6)万軍の主はこう言われる。「しばらくして、**わたしはもう一度、天と地、海と陸とを揺り動かす。**(7)わたしはすべての国々を揺り動かし、すべての国々の宝がやって来る。そしてわたしはこの宮を栄光で満たす」と万軍の主は言われる。（ハガイ 2 章 6-7 節/NIV; 参照.ハガイ 2 章 21-22 節）

このような超自然的な暗闇に、天と地の大きな揺れ動きが同時に起こるという出来事は、神が世界に下された他の二つの大きな裁きとも共通点があります。第一の例は、人類の歴史が始まる前、サタンが神に反逆したときに、神がそれに応答して宇宙全体を暗闇に包まれた出来事です。第二の例は、未来に起こる出来事であり、今ある天と地が滅ぼされ、新しい天と新しい地――そこには義だけが住む永遠の世界――に置き換えられる時です。この二つと比べると、今ここで学んでいる主イエス・キリストの再臨に伴う裁きは、そのちょうど中間に位置するものだと言えます。つまり、神の全体的なご計画の中で見ると、最初の段階が「サタンの反逆に対する裁き」、最後の段階が「永遠の世界への移行のための裁き」、そして今扱っている再臨の裁きは、その間にある第二段階の裁きなのです。このように考えると、今回の暗闇と大変動は、単なる一時的な異変ではなく、神が歴史全体を導いてこられた大きな流れの中に位置づけられる重要な出来事であることがわかります。[56]。さらに、これらの出来事には、神のご計画の中心であり、人間と天使の歴史すべての焦点である、私たちの主イエスの十字架における出来事とも明確な類似が見られます。すなわち、主イエス・キリストが十字架につけられた日、正午に（アモス 8 章 9 節も同じく正午を言及）、同様の超自然的な暗闇が地を覆いました（ルカ 23 章 45 節は、ギリシヤ語本文ではそれを「太陽が光を失った」と表現しています）。そして三時間後の午後三時頃、罪が贖われ、御業が完成したとき、救い主はご自身の人間の霊を委ねられました（マタイ 27 章 50 節; マルコ 15 章 37 節; ルカ 23 章 46 節; ヨハネ 19 章 30 節）。主の肉体的な死には、直ちに至聖所を覆っていた神殿の垂れ幕が裂けるという超自然的な出来事が伴いました（マタイ 27 章 51 節; マルコ 15 章 38 節; ルカ 23 章 45 節）。これは、イエス・キリストを信じるすべての者に天への道が開かれたことを象徴しています（ヘブル 6 章 19 節; 9 章 3 節; 10 章 20 節）。しかし、内側の垂れ幕は、外側の垂れ幕が同じように裂けるか、取り除かれなければ見ることができません。この点から、ここで働いている象徴には、もう一つ重要な意味があ

[56] 神のご計画における三つの段階 ― 裁き・回復・置き換え ― の概要については、『サタンの反乱』第 5 部「裁き・回復・置き換え」第 IV 節「来たるべき事柄：裁き・回復・置き換えの第 II 段階と第 III 段階」を参照してください。

ります。それは、神の裁きが行われるたびに、天と天体そのものが揺り動かされるということを示している、という点です。この象徴を整理すると、次のようになります。外側の垂れ幕は、天そのもの、つまり聖書でいうところの「第二の天」を表しています。一方、内側の垂れ幕は、神ご自身の御座へ至る道、すなわち「第三の天」、神の玉座の間を表しています。ですから、垂れ幕が裂けるという出来事は、単に神殿の内部構造に関する象徴ではなく、神の裁きの段階ごとに、天全体が揺さぶられ、神の臨在が直接あらわになることを示しているのです。つまりここでは、地上だけでなく、天の世界そのものが神の裁きによって動かされるという、非常に大きなスケールの出来事が象徴的に表現されている、ということになります[57]。この対応関係は、同時に起こった地震（マタイ 27 章 51 節）と、その直後に起こった死んでいた信者たちの蘇生に見られます（マタイ 27 章 52-53 節）。これは、創世記の六日間に見られる命の回復、特に人間の創造、またキリストの再臨における復活、さらには新しい天と新しい地の創造と、それに伴う復活の最終段階を象徴する出来事です。すべては「時代の交接期」（ヘブル 9 章 26 節）における、イエス・キリストご自身の復活に依存しているのです。最後に、三つの裁きの各段階の終わりにおいて、救われた者も救われなかった者も同様に、何らかの認識を持つという点にも注目すべきです。再創造の時には堕落した天使と選ばれた天使たちが（ヨブ 38 章 7 節）、キリストの再臨の時にはイスラエルが悲しむことによって（後述の第 VI 節参照）、そして永遠が始まる時にはすべての人が完全に認識するのです（第一コリント 13 章 12 節，黙示録 20 章 11-15 節）。十字架の出来事においても、百人隊長が「まことに、この人は神の子であった！」と叫び（マルコ 15 章 39 節，マタイ 27 章 54 節，ルカ 23 章 47 節）、また群衆が嘆き悲しみました（ルカ 23 章 48 節）。このように、私たちの主の十字架の死の記録には、神のご計画における三段階の裁きすべてに正確に対応する出来事が見られると同時に、特に再臨直前に起こるしるしと、きわめて強く一致しているのです。すなわち、大地の揺れ、天体の破滅的な混乱、そしてすべてを覆う超自然的な暗闇です（イザヤ 2 章 10 節，2 章 19-21 節，5 章 30 節，24 章 1-6 節；エレミヤ 4 章 23 節，25 章 32 節，30 章 7 節；エゼキエル 38 章 18-19 節；ホセア 10 章 8 節；アモス 5 章 18-20 節，8 章 9 節〔正午に〕；マラキ 3 章 2 節；マタイ 24 章 7 節；マルコ 13 章 8 節；ルカ 21 章 11 節；ヘブル 12 章 26 節；第二ペテロ 3 章 7-13 節；参照．エゼキエル 32 章 7 節）。

(17)地に住む者よ、恐れと、落し穴と、わなとはあなたの上にある。(18)恐れの声をのがれる者は落し穴に陥り、落し穴から出る者はわなに捕えられる。天の窓は開け、地の基が震い動くからである。(19)地は全く砕け、地は裂け、地は激しく震い、(20)地は酔いどれのようによろめき、仮小屋のようにゆり動く。そのとが

[57] 本シリーズ第 2B 部.I「地上の幕屋と神殿は天の神殿の予型である」を参照してください。

はその上に重く、ついに倒れて再び起きあがることはない。(イザヤ 24 章 17-20 節)

すなわち万軍の主[ご自身]は雷、地震、大いなる叫び、つむじ風、暴風および焼きつくす火の炎をもって臨まれる(ハルマゲドンの裁き)。(イザヤ 29 章 6 節)

(2)主はすべての国にむかって怒り、そのすべての軍勢にむかって憤り、彼らをことごとく滅ぼし、彼らをわたして、ほふらせられた。(3)彼らは殺されて投げすてられ、その死体の悪臭は立ちのぼり、山々はその血で溶けて流れる。(4)**天の万象は衰え、もろもろの天は巻物のように巻かれ、その万象はぶどうの木から葉の落ちるように、いちじくの木から葉の落ちるように落ちる。**(イザヤ 34 章 2-4 節)

(1)あなたがたはシオンでラッパを吹け。わが聖なる山で警報を吹きならせ。国の民はみな、ふるいわななけ。主の日が来るからである。それは近い。(2)これは暗く、薄暗い日、雲の群がるまっくらな日である。(ヨエル 2 章 1-2 節前半)

(30)わたしはまた、天と地とにしるしを示す。すなわち血と、火と、煙の柱とがあるであろう。(31)主の大いなる恐るべき日が来る前に、日は暗く、月は血に変る。(32)すべて主の名を呼ぶ者は救われる。それは主が言われたように、シオンの山とエルサレムとに、のがれる者があるからである。その残った者のうちに、主のお召しになる者がある。(ヨエル 2 章 30-32 節)

(12)もろもろの国民を(自分たちの場所から)ふるい立たせ、ヨシャパテの谷(すなわち、「主が裁かれる」谷)にのぼらせよ。わたしはそこに座して、周囲のすべての国民をさばく。(13)かまを入れよ、作物は熟した。来て踏め、酒ぶねは満ち、石がめはあふれている。彼らの悪が大きいからだ。(14)群衆また群衆は、さばきの谷におる。主の日がさばきの谷に近いからである。(15)**日も月も暗くなり、星もその光を失う。**(16)主は**シオン**から大声で叫び、**エルサレム**から声を出される。天も**地もふるい動く。**しかし主はその民の避け所、イスラエルの人々のとりでである。(ヨエル 3 章 12-16 節)

(18)わざわいなるかな、主の日を望む者よ、あなたがたは何ゆえ主の日を望むのか。これは暗くて光がない。(19)人がししの前を逃れてもくまに出会い、また家にはいって、手を壁につけると、へびにかまれるようなものである。(20)主の日は暗くて、光がなく、薄暗くて輝きがないではないか。(アモス 5 章 18-20 節)

(14)主の大いなる日は近い、近づいて、すみやかに来る。主の日の声は耳にいたい。そこに、勇士もいたく叫ぶ。(15)その日は**怒りの日、なやみと苦しみの日、荒れ、また滅びる日、暗く、薄暗い日、雲と黒雲の日、**(16)ラッパとときの声の日、堅固な町と高いやぐらを攻める日である。(17)わたしは人々になやみを下して、盲人のように歩かせる。彼らが主に対して罪を犯したからである。彼らの血はちりのように流され、彼らの肉は糞土のように捨てられる。(18)彼らの銀も金も、主の怒りの日には彼らを救うことができない。全地は主のねたみの火にのまれる。主は地に住む人々をたちまち滅ぼし尽される。(ゼパニヤ 1 章 14-18 節)

小羊が第六の封印を解いた時、わたしが見ていると、大地震が起って、太陽は毛織の荒布のように黒くなり、月は全面、血のようになり、 天の星は、いちじくのまだ青い実が大風に揺られて振り落されるように、地に落ちた。 天は巻物が巻かれるように消えていき、すべての山と島とはその場所から移されてしまった。 地の王たち、高官、千卒長、富める者、勇者、奴隷、自由人らはみな、ほら穴や山の岩かげに、身をかくした。 そして、山と岩とにむかって言った、「さあ、われわれをおおって、御座にいますかたの御顔と小羊の怒りとから、かくまってくれ。 御怒りの大いなる日が、すでにきたのだ。だれが、その前に立つことができようか」。(黙示録 6 章 12-17 節)

このようにして、艱難期の最後の日であり、同時に主の日が本格的に始まる日、すなわちイエス・キリストが再臨される日は、ほかに例のない特別な一日となります。この日は、闇の中で始まり、光の中で終わる日です。これは、創世記に記されている再創造の最初の日とまったく同じ構図です。[58]最初は暗闇があり、そこに神の光が差し込みました。艱難期の最後の日も同じように、最初は超自然的な闇で始まり、最後には同じく超自然的な光へと変わっていきます。この闇から光への転換は、第二の来臨(再臨)のしるしとして、誰の目にも明らかなものとなります。しかしそれだけではありません。これは同時に、地上における神の支配が回復されることを示す、非常に力強いたとえでもあります。今の世界では、罪と反逆による闇が完全なかたちで広がっています。しかしその闇は、世の光である方、すなわち明けの明星であるイエス・キリストが来られることによって、光へと置き換えられます。(第二ペテロ 1 章 19 節; 黙示録 2 章 28 節, 22 章 16 節)。

---

[58] また、出エジプトの救出において光が闇から分け隔てられた出来事との並行関係にも注目すべきです(出エジプト記 14 章 19-20 節;同 10 章 21-22 節参照)。さらに、キリストの型であるヨシュアが約束の地へとイスラエルを導く際に起こった、ギベオンにおける比類なき一日についても同様です(ヨシュア記 10 章 12-13 節)。

さらに主がその民の傷を包み、その打たれた傷をいやされる日には、月の光は日の光のようになり、日の光は七倍となり、七つの日の光のようになる。（イザヤ 30 章 26 節）

見よ、**暗き**は地をおおい、やみはもろもろの民をおおう。**しかし、あなたの上には主が朝日のごとくのぼられ、主の栄光があなたの上にあらわれる。**（イザヤ 60 章 2 節）

（6）**その日には、光がなくなる**ことが起こる。天体の光は差し止められ（直訳：「凝り固まる」）、輝きを失う。（7）その日は、主[だけ]が知っておられる唯一無二の日であり、昼でも夜でもない。そして、夕暮れの時になると、**光が現れる**ことになる。（ゼカリヤ 14 章 6-7 節/ESV 訳）

いなずまが天の端からひかり出て天の端へとひらめき渡るように、人の子もその日には同じようであるだろう。（ルカ 17 章 24 節）

V. 小羊の花嫁の復活：黙示録 19 章 6-10 節

(6)わたしはまた、大群衆の声、多くの水の音、また激しい雷鳴のようなものを聞いた。それはこう言った、「ハレルヤ（すなわち『主をほめたたえよ』）、全能者にして主なるわれらの神は、王なる支配者であられる。(7)わたしたちは喜び楽しみ、神をあがめまつろう。小羊の婚姻の時がきて、花嫁（直訳「妻」〔黙示録 21 章 9 節参照〕）はその用意をしたからである。[59] (8)彼女は、光り輝く、汚れのない麻布の衣を着ることを許された。この麻布の衣は、聖徒たちの正しい行いである」。(9)それから、御使はわたしに言った、「書きしるせ。小羊の婚宴に招かれた者は、さいわいである」。またわたしに言った、「これらは、神の真実の言葉である」。(10)そこで、わたしは彼の足もとにひれ伏して、彼を拝そうとした。すると、彼は言った、「そのようなことをしてはいけない。わたしは、あなたと同じ僕仲間であり、また［堅く立っている］イエスのあかしびとであるあなたの兄弟たちと同じ僕仲間である。ただ神だけを拝しなさい。イエスのあかしは、すなわち［すべての神の］預言の霊である」。（黙示録 19 章 6-10 節）

メシアの栄光ある再臨と、「主の来臨の時に主のものとされている者たち」の復活という主題は、他の聖書箇所ですでによく知られているためであろうと思われます。そのため、ここでヨハネに示されているのは、イエスがまさに戻ろうとしておられ、復活したばかりの教会と迎え合おうとしているその瞬間における、天における喜びのみです[60]。この後、私たちは復活全体について、すなわち、すでに死んだ信者の復活だけでなく、その時点で地上に生きている信者たちが、生きたまま変えられることも含めて、時間をかけて考察していきます。しかし、ここで示されている天の視点こそが、実は最も**正しい**視点であるということを、まず理解しておくことが重要です。神から見れば、私たちの復活はすでに完了した現実であり、イエスはすでに実質的に御国を手中に収めているのです。ですから、この時点で誰が「ハレルヤ」と叫ばずにはいられるでしょうか？ 聖書のすべての預言は、このような出来事が起こることを予言していたのです（例えば、メシヤの戴冠式を祝う勝利の詩篇、特に詩篇 93 篇-100 篇、参照：詩篇 68 篇）。もはや、キリストの到来における勝利の成就を妨げるものは何ひとつありません。私たちはその

---

[59] 『サタンの反逆：第 5 部「さばき・回復・置換」』III.8.b.iv 節「花嫁」を参照してください。

[60] 20 章 4-6 節では、確かに教会が登場しますが、その時点ですでによみがえらされた姿として描かれています。4 節で「生き返って」と訳される動詞は、まさにここで扱っているキリストの再臨と教会の復活の瞬間を指しています。しかしそれは、私たちが今まさに考察している時点を「フラッシュバック」の形で示しているのです。なぜなら明らかなように、私たちが実際に裁きの座に着く前に、すでに教会は復活しているからです。

勝利において重要な一部をなす花嫁であり、主は十字架において私たちを贖い、その祝福された日に正式に迎え取ってくださるのです。艱難期の最も暗い日々において試練がいよいよ激しくなるとき、このことを思い起こすべきです。

(25)また日と月と星とに、しるしが現れるであろう。そして、地上では、諸国民が悩み、海と大波とのとどろきにおじ惑い、(26)人々は世界に起ろうとする事を思い、恐怖と不安で気絶するであろう。もろもろの天体が[激しく]揺り動かされるからである。(27)そのとき、大いなる力と栄光とをもって、人の子が雲に乗って来るのを、人々は見るであろう。(28)これらの事が起りはじめたら、身を起し頭をもたげなさい。**あなたがたの救**(贖い: すなわち、あなたがたの「復活」; 参照.ローマ 8 章 23 節; 第一テサロニケ 1 章 10 節)が近づいているのだから」。(29)それから一つの譬を話された、「いちじくの木を、またすべての木を見なさい。(30)はや芽を出せば、あなたがたはそれを見て、夏がすでに近いと、自分で気づくのである。(31)このようにあなたがたも、これらの事が起るのを見たなら、神の国が近いのだとさとりなさい。

地上の視点から見ると、黙示録第 19 章の残りの節で描かれ、また以下の第 VII 章で詳しく扱われる出来事、すなわちキリストの再臨と、そこで主がすべての敵を速やかに打ち滅ぼされるハルマゲドンの戦いに先立って、さらに二つの重要な出来事が起こります。これらは、ここで説明される必要があります。第一の出来事は、イスラエルの多くの人々の悔い改めです。彼らは、メシアの栄光ある再臨を目の当たりにすることによって、イエスこそが真に信仰を置くべきお方であることを理解するようになります(この出来事については、直後の第 VI 章で取り上げます)。もう一つの出来事は、すでに完成した教会の復活です。これは、黙示録第 19 章 6 節から 9 節に記されている、子羊とその花嫁との婚礼をめぐる天における喜びに対応する、地上での出来事です。またこの復活は、超自然的な闇に覆われていた地が、来臨されるメシアの輝きによって再び照らされることと同時に起こる出来事でもあります。

(29)しかし、その時に起る患難の後、たちまち日は暗くなり、月はその光を放つことをやめ、星は空から落ち、天体は揺り動かされるであろう。(30)そのとき、人の子のしるしが天に現れるであろう。またそのとき、地のすべての民族は嘆き、そして力と大いなる栄光とをもって、人の子が天の雲に乗って(すなわち、天の軍勢を率いて)来るのを、人々は見るであろう。(31)また、彼は大いなるラッパの音と共に御使たちをつかわして、天のはてからはてに至るまで、四方からその選民を呼び集めるであろう(つまり、これは私たちの「救出」のためではなく、復活したばかりの者たちと共に＜部隊として＞召集されることです)。(32)いちじくの木か

らこの譬を学びなさい。その枝が柔らかになり、葉が出るようになると、夏の近いことがわかる。(33)そのように、すべてこれらのこと(すなわち、マタイ 24 章 1-31 節に記された諸々の出来事)を見たならば、人の子が[すなわち、わたしの帰還が]戸口まで近づいていると知りなさい。(マタイ 24 章 29-33 節)(マルコ 13 章 24-27 節)

ちょうど夜明けが最も暗い夜の後に訪れるように、今の世の終わりにおいても同じことが起こります。勝利の主が再び来られ、私たちの闇を光へと変えてくださるのです(民数記 24 章 17 節; イザヤ書 9 章 2 節, 60 章 1 節, 60 章 19 節; マタイ 2 章 2 節, 2 章 9-10 節; ヨハネ 1 章 4-5 節, 8 章 12 節; 第二ペテロ 1 章 19 節; 黙示録 2 章 28 節, 21 章 23 節, 22 章 16 節)。その「真に新しくなられた方」、復活された主の再臨の驚くべき出来事は、それに先立つ艱難期の痛みと対照すると、いっそう驚異に満ちたものとして輝くでしょう。また、その帰還の栄光の輝きは、それに先立つ超自然的な闇夜に対比されて、いっそうまばゆいものとなるのです。このことは主の花嫁である教会、すなわち信じる私たちにとっていよいよ真実となります。その栄光の「満ちるその日」に、まだ「このからだ」にある私たちは、生きたまま復活へと移され、新しいからだに造り変えられて主を迎え、すでに先に眠りについたすべての聖徒とともに、主の再臨の行列に加わるのです。

パウロがコリント人への手紙第一で語っているように、復活は三つの段階で行われます。 1) 私たちの主イエス・キリスト、2) 教会、3) イエスの再臨後に信じるすべての人たち、です。

(23)ただ、各自はそれぞれの順序に従わねばならない。最初はキリスト、次に、主の来臨(すなわち、再臨)に際してキリストに属する者たち、(24)それから終末となって、その時に、キリストはすべての君たち、すべての権威と権力とを打ち滅ぼして、国を父なる神に渡されるのである。(25)なぜなら、キリストはあらゆる敵をその足もとに置く時までは、支配を続けることになっているからである。(26)最後の敵として滅ぼされるのが、死である。

キリストご自身の復活、すなわち御体なる教会の「かしら」の復活が、復活の最初の段階を成します。[61] そして「かしら」として、主はさらに二つの従属する段階を支配されます。その第一は「教会」、すなわちアダムとエバから始まり、再臨の前に最後にキリス

[61] 個々の信者の視点から見た復活についてのより詳細な議論については、『ペテロの手紙講解』第 20 課「復活」、および『聖書基礎講座(Bible Basics)』第 2B 部「終末論(Eschatology)」を参照のこと。

トを受け入れる者に至るまで、これまでに生きたすべての信者です。[62] この復活が、黙示録 19 章 6-8 節の文脈で扱われている復活です。キリストと教会とが復活において結び合わされることこそが、私たちを花婿であるイエス・キリストと永遠に結びつける「婚礼」であり、それは完全な経験的現実として実現します（マタイ 9 章 15 節, 25 章 1～13 節; マルコ 2 章 19 節; ルカ 5 章 34 節; ヨハネ 3 章 29 節; 第二コリント 11 章 2-3 節; エペソ 1 章 22-23 節, 5 章 22-33 節; 黙示録 21 章 2-4 節, 21 章 9 節以降; 22 章 17 節も参照）。私たちはここで今も「立場上」はすでにキリストのものですが、その最も偉大な日においては、もはや取り消されることなく、無条件に、永遠にキリストのものとされます。そして、「私たちはいつまでも主と共にいる」(第一テサロニケ 4 章 17 節)のです。私たちが復活してこそ、初めてこのような正式かつ永続的な方法で、彼の花嫁となるのです。黙示録第 19 章の文脈が示しているとおり、教会全体がキリストと結ばれるこの「婚礼」は、前触れとなる出来事であり、ハルマゲドンにおける勝利の直後に、私たちの主が地上において正当な王権をお取りになる、その直前に起こる出来事です。復活の最終段階は千年王国の終わり、すなわち最後の審判、現在の天と地の滅び、そして新しい天と新しい地の創造の直前に起こります。 この最終的に復活するグループは、当箇所黙示録 19 章 9 節で天使がヨハネに告げた言葉に従い、「花嫁の友」と呼ぶことができます。「子羊の婚礼に招かれた人々は幸いである」（参照：詩篇 45 篇 14 節、明らかにメシヤ的勝利を歌った詩篇におけるメシヤの花嫁の「処女の伴侶たち」）。黙示録 19 章 9 節が語るのは、キリストの再臨後に、神の国で開かれる盛大な宴に招かれる人々のことです（マタイ 8 章 11 節, 22 章 1-14 節, 25 章 1-13 節; ルカ 13 章 29 節; 参照.イザヤ 25 章 6-9 節）。この時、その大部分を占めるのは、悔い改めて信仰に入ったユダヤ人たちです（このすぐ後の第 VI 節を参照）。先の議論で説明したとおり、人類の歴史の終わりにおいては、復活における二つの下位の段階、すなわち教会と千年王国の信者たちに属する信者の数が、正確に同数になることを示す根拠があります。そして、その二つを合わせた総数は、選ばれた天使の数とも正確に等しくなると考えられます。[63] このように、イエスの再臨の時に完成する教会と、人類史の終わりに完成する千年王国の信者たちとがそろうことによって、悪魔とその堕落した天使たちは、単にその地位を置き換えられるだけでなく、はるかに豊かで驚くべき形で置き換えられることになります（その比は二対一です）。

---

[62] この時点までに信じてきたすべての者、すなわちユダヤ人も異邦人も、生者も死者も共にキリストの花嫁として復活するという事実は、しばしば主張される誤った区別、すなわち「教会」とは十字架以降の信者のみを指し、それ以前の信者を分けてしまおうとする考えを覆すものである（この異端はローマ人への手紙 11 章においてパウロによって実質的に論破されている）。『サタン的反逆（The Satanic Rebellion）』第 5 部「裁き・回復・交替」第 III 部 8 節 b.ii「教会（The Church）」を参照。

[63] 『サタン的反逆（The Satanic Rebellion）』第 5 部「裁き・回復・交替」第 III 部 8 節 c「ユダヤ人祭儀暦（The Jewish Ceremonial Calendar）」を参照。

そして、この時点――すなわち、現在の被造世界の終わりにおいて、すべての敵対する人間的・天使的反抗が打ち破られ（参照：黙示録 20 章 7-10 節）、新しく永遠の被造世界が始まるその時に――最後の敵である死（参照：詩篇 110 篇 1 節）そのものが、完全に、そして永遠に舞台から取り除かれるのです。その後は、私たちと、主に仕える仲間であるすべての者たちが、イエスと共に、言葉では言い尽くせないほど祝福された永遠の命を、いつまでも、限りなく生きることになります。

> (15)わたしたちは主の言葉によって言うが、生きながらえて主の来臨の時(大艱難を終結させる再臨)まで残るわたしたちが、眠った人々より先になることは、決してないであろう。(16)すなわち、主ご自身が天使のかしらの声と神のラッパの鳴り響くうちに、合図の声で、天から下ってこられる。その時、キリストにあって死んだ人々が、まず最初に（復活で）よみがえり、(17)それから生き残っているわたしたちが、彼らと共に雲に包まれて引き上げられ、空中で主に会い、こうして、いつも主と共にいるであろう。（第一テサロニケ 4 章 15-17 節）

上の箇所には、キリストの再臨における復活の核心が示されています。まず、主は現在おられる「第三の天」、すなわち御父の右に座して「わたしがあなたの敵をあなたの足台とするまで」（詩篇 110 篇 1 節; 使徒行伝 2 章 35 節; ヘブル 1 章 13 節, 10 章 13 節参照）待っておられる、その御座から戻って来られます。主は「世の光」にふさわしく、太陽よりも明るい輝きに満ちて（使徒行伝 26 章 13 節参照）、世界を覆っていた超自然的な闇を切り裂き、天に現れて地上のすべての人の目に見えるようになります（黙示録 1 章 7 節; マタイ 24 章 30 節参照）。その瞬間、イエスは復活の命令を発せられ（ヨハネ 11 章 43 節参照）、その傍らにいる大天使がラッパを吹き鳴らして集合を告げます（マタイ 24 章 31 節参照）。すると、それまでに地上の生を終えたすべての信者が、葬られていた場所から甦り、朽ちた肉体の塵は人の子ご自身と同じように栄光の体へと変えられます（ピリピ 3 章 20-21 節; 第一ヨハネ 3 章 2 節）。一方、その時点でなお地上に生きているすべての信者は、肉体の死を一度も経験することなく、直接「生きたままの復活」を迎え、永遠の姿へと変えられるのです。これは、艱難期を耐え抜いた者だけが受ける特別な祝福です（不信者は「取り残される」：マタイ 24 章 36-41 節、ルカ 17 章 34-35 節参照）。こうして復活の際には、すでに死んでいた者たちは新しい永遠の体と霊魂が再び結合され、生き残っていた者たちは霊がこの肉体に宿ったまま変容を受け、いずれも天における「集合の場」へと導かれます（マタイ 24 章 31 節参照）。そこにはすでに主がおられ、また御使いの軍勢が整列しており（すなわち、新たに蘇った信者たちの招集に関わっていない天使たち；マルコ 13 章 26 節参照）、そして、この地上を最終的に裁くハルマゲドンの戦いを開始するにあたり、その全軍勢が完全に揃うのを待っておられるのです（ダニエル 7 章 13 節; 第一テサロニケ 1 章 10 節, 4 章

13-18 節; 第二テサロニケ 1 章 7-10 節; 黙示録 17 章 14 節; ルカ 2 章 13 節; マタイ 16 章 27 節, 25 章 1-13 節参照)。

まず、イエスが再臨し、天使の軍団と共に地上に現れるからです。

しかし、その時に起る患難の後、たちまち日は暗くなり、月はその光を放つことをやめ、星は空から落ち、天体は揺り動かされるであろう。 そのとき、人の子のしるしが天に現れるであろう。またそのとき、地のすべての民族は嘆き、そして力と大いなる栄光とをもって、人の子が天の**雲**に乗って来る(すなわち、天使の軍勢を率いて来る)のを、人々は見るであろう。(マタイ 24 章 29-30 節)

「しかし、わたしは言っておく。あなたがたは、間もなく、人の子が力ある者の右に座し、天の**雲**に乗って(＝天使の群れを率いて)来るのを見るであろう」。(マタイ 26 章 64 節後半; 参照.マルコ 14 章 62 節; ルカ 21 章 27 節)

見よ、彼は、**雲に乗ってこられる**。すべての人の目、ことに、彼を刺しとおした者たちは、彼を仰ぎ見るであろう。また地上の諸族はみな、彼のゆえに胸を打って嘆くであろう。しかり、アァメン。(黙示録 1 章 7 節)

そして、主は死者がよみがえるように命じ、さらに生きたまま主に属している私たちも、肉体を持ったままで復活するようにお命じになります。こうして私たちは、大天使のラッパの響きに応えて復活の体を受けるのです。 (マタイ 24 章 31 節;参照.詩篇 50 篇 5 節)

(50)兄弟たちよ。わたしはこの事を言っておく。肉と血とは神の国を継ぐことができないし、朽ちるものは朽ちないものを継ぐことがない。(51)ここで、あなたがたに奥義を告げよう。わたしたちすべては、眠り続けるのではない。(主の再臨の時)終りのラッパの響きと共に、またたく間に、一瞬にして変えられる。(52)というのは、**ラッパが響いて**、死人は朽ちない者によみがえらされ、わたしたち(すなわち、まだ生きている信者)は変えられるのである。(第一コリント人への手紙 15 章 50-52 節)

(16)すなわち、主ご自身が天使のかしらの声と神の**ラッパの鳴り響く**うちに、合図の声で、天から下ってこられる。その時、キリストにあって死んだ人々が、まず最初に(復活で)よみがえり、(17)それから生き残っているわたしたちが、彼らと共に**雲に包まれて**引き上げられ、空中で主に会い、こうして、いつも主と共にい

るであろう。(第一テサロニケ 4 章 16-17 節)

最後に、キリストとそのすべての軍勢、すなわち選ばれた天使と復活した信者は、艱難期の最後の戦いに進みます。

そして、**天の軍勢**(すなわち、選ばれた天使と復活の召集が完了した後の教会)が、純白で、汚れのない麻布の衣を着て、白い馬に乗り、彼に従った。(黙示録 19 章 14 節; 参照.黙示録 19 章 8 節)

これは、私たちに与えられている将来の希望です(第二コリント 4 章 17-18 節; コロサイ 1 章 27 節, 3 章 1-4 節; 第一テモテ 1 章 1 節)。すなわち、それは主の息子・娘としての養子縁組が完全に実現することです(ヨハネ 1 章 12-13 節; ローマ 8 章 16-17 節; ガラテヤ 3 章 21 節-4 章 7 節; エペソ 3 章 15 節; ヘブル 12 章 4-11 節; 第一ヨハネ 3 章 1-2 節)。また、私たちの肉体が贖われることです(マタイ 6 章 12 節, 18 章 27-32 節, 20 章 28 節; ルカ 1 章 68 節, 24 章 21 節; ローマ 3 章 24 節; 第一コリント 1 章 30 節, 6 章 20 節, 7 章 23 節; ガラテヤ 3 章 13 節, 4 章 4-5 節; エペソ 1 章 7 節; コロサイ 1 章 14 節; 2 章 14 節; 第一テモテ 2 章 6 節; テトス 2 章 14 節; ヘブル 9 章 12-15 節; 第一ペテロ 1 章 18 節; 第二ペテロ 2 章 1 節; 黙示録 5 章 9 節; 14 章 3-4 節)。すなわち、それは完全で永遠の「復活の体」へと変えられることであり、その体において私たちは永遠に、愛する主であり救い主であるイエス・キリストの御前に住まい、甘美な交わりを新しいエルサレムでいつまでも楽しむのです(黙示録 2 章 7 節, 2 章 11 節, 2 章 17 節, 2 章 26-28 節, 3 章 4-5 節, 3 章 12-13 節, 3 章 21 節, 21 章 4 節, 21 章 27 節, 22 章 3-6 節, 22 章 14 節)。聖書は、私たちが永遠に住むことになるその体について、私たちが望むすべてのことを語っているわけではありません。しかし、確かに二つの重大な事実を教えています。第一に、それら永遠の「復活の体」は、私たちの主イエス・キリストが持っておられる体に匹敵するものであること。第二に、それらは「栄光」によって特徴づけられるということです。すなわち、「栄光」とは、私たちの神ご自身である純粋にして輝かしい光なのです。

しかし、わたしたちの国籍は天にある。そこから、救主、主イエス・キリストのこられるのを、わたしたちは待ち望んでいる。 彼は、万物をご自身に従わせうる力の働きによって、わたしたちの卑しいからだを、**ご自身の栄光のからだと同じかたちに変えて**下さるであろう。(ピリピ 3 章 20-21 節)

愛する者たちよ。わたしたちは今や神の子である。しかし、わたしたちがどうなるのか、まだ明らかではない。彼が[栄光のうちに]**現れる**時、わたしたちは、自

分たちが**彼に似る**ものとなることを知っている。そのまことの御姿を見るからである。（第一ヨハネ 3 章 2 節）

人の子が地上に戻り、天の上においてその軍勢を召集されるとき、その栄光は、想像し得る限り最も激しい稲妻の閃光のように、超自然的な暗闇を引き裂き、下の暗い世界を照らし出します。なぜなら、主こそが世の光であり、比喩的な意味においてだけでなく、文字通りあらゆる意味において光であられるからです（ヨハネ 1 章 4-9 節, 3 章 19 節, 8 章 12 節, 9 章 5 節, 12 章 46 節; 黙示録 21 章 23 節, 21 章 11 節, 22 章 5 節参照）。私たちは地より立ち上がり、空に集う鷲のように、この輝ける我らの救い主のもとに集まるのです。[64]

(26)だから、人々が『見よ、彼［メシヤ］は荒野にいる』と言っても、出て行くな。また『見よ、［メシヤは］へやの中にいる（すなわち、町のどこかに隠れている）』と言っても、信じるな。(27)ちょうど、いなずまが東から西にひらめき渡るように、人の子も現れるであろう。(28)死体のあるところには、はげたかが集まるものである。（マタイ 24 章 26-28 節）

(30)人の子が現れる日も、ちょうどそれと同様であろう。(31)その日には、屋上にいる者は、自分の持ち物が家の中にあっても、取りにおりるな。畑にいる者も同じように、あとへもどるな。(32)ロトの妻のことを思い出しなさい。(33)自分の命を救おうとするものは、それを失い、それを失うものは、保つのである。(34)あなたがたに言っておく。その**夜**（すなわち、再臨の日の夜明けを表す 30-33 節の直前）、ふたりの男が一つ寝床にいるならば、ひとりは取り去られ、他のひとりは残されるであろう。(35)ふたりの女が一緒にうすをひいているならば、ひとりは取り去られ、他のひとりは残されるであろう。〔(36)ふたりの男が畑におれば、ひとりは取り去られ、他のひとりは残されるであろう〕」。(37)弟子たちは「主よ、それはどこであるのですか」と尋ねた。するとイエスは言われた、「死体のある所には、またはげたかが集まるものである」。（ルカ 17 章 30-37 節；参照.マタイ 24 章 40-41 節）

ここに私がおり、主がお与えになった子供たちがいます。（イザヤ書 8 章 18 節

[64] 次に挙げる聖句において、屍体に引き寄せられる鷲、あるいは「はげ鷹」の比喩と、聖餐の比喩との間にある結びつきは、まさしく意図的なものであるに違いありません（ヨブ記 39 章 27-30 節参照）。

前半 NIV 訳; 参照. ヘブル 2 章 13 節)

今や私たちは主イエスと永遠に結び合わされ(ヨハネ 12 章 26 節, 14 章 1-3 節, 17 章 24 節;第二コリント 5 章 8 節;ピリピ 1 章 23 節;第一テサロニケ 4 章 17 節)、永遠の姿をまとって、もはや涙も苦しみも欠乏もない世界に永遠に生きるのです(黙示録 7 章 17 節, 21 章 4 節;参照.イザヤ 25 章 8 節, 35 章 10 節, 65 章 17-19 節;第一コリント 15 章 54-58 節; ヘブル 2 章 14 節; 黙示録 2 章 7 節, 2 章 11 節, 2 章 17 節, 2 章 26-28 節, 3 章 4-5 節, 3 章 12-13 節, 3 章 21 節, 21 章 4 節, 21 章 27 節, 22 章 3-6 節, 22 章 14 節)。

「彼らは大きな患難をとおってきた人たちであって、その衣を小羊の血で洗い、それを白くしたのである。 それだから彼らは、神の御座の前におり、昼も夜もその聖所で神に仕えているのである。御座にいますかたは、彼らの上に幕屋を張って共に住まわれるであろう。 彼らは、もはや飢えることがなく、かわくこともない。太陽も炎暑も、彼らを侵すことはない。 御座の正面にいます小羊は彼らの牧者となって、いのちの水の泉に導いて下さるであろう。また神は、彼らの目から涙をことごとくぬぐいとって下さるであろう」。(黙示録 7 章 13-17 節)

これは私たちに約束された祝福された将来の希望です。なぜなら、キリスト教の真の「良き知らせ(福音)」の重要な一部は、(無神論が主張するように)私たちが死後に無へと消滅してしまうことも、あるいは多くの異教的宗教が説くような「影のような存在」に移行することもなく、復活によって永遠に実体のある**現実の**体を持つという事実にあるからです。そしてその体は、今の私たちが想像できるどんなものよりも、はるかに優れたものとなるのです。

このように、わたしたちは、信仰によって義とされたのだから、わたしたちの主イエス・キリストにより、神に対して平和を得ている。 わたしたちは、さらに彼により、いま立っているこの恵みに信仰によって導き入れられ、そして、**神の栄光にあずかる希望をもって**(すなわち、復活を期待して)喜んでいる。(ローマ 5 章 1-2 節)

神は彼らに、異邦人の(信者の)受くべきこの奥義が、いかに栄光に富んだものであるかを、知らせようとされたのである。この奥義は、あなたがたのうちにいますキリストであり、栄光の望みである。(コロサイ 1 章 27 節)

祝福に満ちた望み、すなわち、大いなる神、わたしたちの救主キリスト・イエス

の栄光の出現（すなわち、キリストが現れるときに、私たちも栄光のうちに復活すること）を待ち望むようにと、教えている。（テトス 2 章 13 節）

上に引用した箇所からも明らかなように、「栄光」は私たちの至福の永遠の状態に対してしばしば使われる言葉であり、その祝福された未来の時を抽象的に表現したものではなく、逆に私たちの体が復活で変容した後、神の栄光の光を、非常にリアルで具体的に共有していることを生き生きと表現する言葉として、意図的に選ばれています。

(17)もし子であれば、相続人でもある。神の相続人であって、**キリストと栄光を共にする**ために苦難をも共にしている以上、キリストと共同の相続人なのである。(18)わたしは思う。今のこの時の苦しみは、やがて[再臨の時に]わたしたちに**現され**ようとする**栄光**に比べると、言うに足りない。(19)被造物は、実に、切なる思いで神の子たちの**出現**を待ち望んでいる。(20)なぜなら、被造物が虚無に服したのは、自分の意志によるのではなく、服従させたかたによるのであり、(21)かつ、被造物自身にも、滅びのなわめから解放されて、（すなわち、私たちの復活のときに、）神の子たちの**栄光の自由**に入る望みが残されているからである。(22)実に、被造物全体が、今に至るまで、共にうめき共に産みの苦しみを続けていることを、わたしたちは知っている。(23)それだけではなく、御霊の最初の実を持っているわたしたち自身も、心の内でうめきながら、子たる身分を授けられること、すなわち、からだのあがなわれること（復活）を待ち望んでいる。(24)わたしたちは、この**望み**によって救われているのである。（ローマ 8 章 17-24 節前半）

神の光のまばゆい栄光は、主の神性の本質的な特徴であるだけでなく（イザヤ 40 章 5 節; ヨハネ 12 章 41 節）、今や人性にも備わっています。なぜなら、主の人としての本性もすでに栄化されたからです（マタイ 24 章 30 節; 25 章 31 節; マルコ 8 章 38 節; 9 章 2-8 節; 13 章 26 節; ルカ 9 章 26 節; 21 章 27 節; ヨハネ 7 章 39 節後半）。ですから、私たちの確信に満ちた希望は、この同じ復活の栄光にあずかることですから、復活された永遠の人間の姿を特徴づける栄光を考えることによって、私たち自身の復活における栄光について多くを学ぶことができるのです。

人の子は**父の栄光のうちに**、御使たちを従えて来るが、その時には、実際のおこないに応じて、それぞれに報いるであろう。（マタイ 16 章 27 節）

ところが、[その変貌の山で]彼らの目の前でイエスの**姿が変り**、その顔は**日のように輝き**、その衣は**光**[そのもの]**のように白くなった**。（マタイ 17 章 2 節）

(29)祈っておられる間に、み顔の様が変り、み衣がまばゆいほどに**白く**[稲妻のように]**輝いた。**(30)すると見よ、ふたりの人がイエスと語り合っていた。それはモーセとエリヤであったが、(31) [二人は]**栄光の中に**現れて、イエスがエルサレムで遂げようとする最後のことについて話していたのである。(ルカ 9 章 29 節-31 節前半)

父よ、**世が造られる前に、わたしがみそばで持っていた栄光で**、今み前にわたしを**輝かせて**下さい。(ヨハネ 17 章 5 節)

確かに偉大なのは、この信心の奥義である、「キリストは肉において現れ、[聖]霊において義とせられ、御使たちに見られ、諸国民の間に伝えられ、世界の中で信じられ、**栄光のうちに天に上げられた**」。(第一テモテ 3 章 16 節)

御子[イエス]は神[御父]の**栄光の輝き**であり、神の本質の真の姿であって、その力ある言葉をもって万物を保っておられる。そして[私たちの]罪のきよめのわざをなし終えてから、いと高き所にいます大能者の右に、座(すなわち、幕の向こう側)につかれたのである。(ヘブル 1 章 3 節)

ただ、「しばらくの間、御使たちよりも低い者とされた」イエスが、死の苦しみのゆえに、**栄光とほまれとを冠として与えられた**のを見る。それは、彼が神の恵みによって、すべての人のために死を味わわれるためであった。(ヘブル 2 章 9 節)

むしろ、キリストの苦しみに[本当に]あずかればあずかるほど、喜ぶがよい。それは、**キリストの栄光が現れる際に**、よろこびにあふれるためである。(第一ペテロ 4 章 13 節)

(12)そこでわたしは、わたしに呼びかけたその声を見ようとしてふりむいた。ふりむくと、七つの金の燭台が目についた。(13)それらの燭台の間に、足までたれた上着を着、胸に金の帯をしめている人の子のような者がいた。(14)そのかしらと髪の毛とは、雪のように白い羊毛に似て真白であり、目は燃える炎のようであった。(15)その足は、炉で精錬されて光り輝くしんちゅうのようであり、声は大水のとどろきのようであった。(16)その右手に七つの星を持ち、口からは、鋭いもろ刃のつるぎがつき出ており、**顔は、強く照り輝く太陽のようであった**。(黙示録 1 章 12-16 節)

キリストのからだである花嫁、すなわち教会の一員として、私たちの永遠の人間の姿

にも栄光が宿ります。私たちは御子の神聖なまばゆい光を、ともに分かち合うことになるからです。この栄光こそ、私たちが主とともに永遠に生きる命の性質を、大いに説明してくれるものです（第一コリント 2 章 7 節; 第二コリント 3 章 11 節, 3 章 18 節; エペソ 5 章 8-14 節, 5 章 27 節; 第一テモテ 1 章 11 節; 第一ペテロ 5 章 10 節）。私たちは「光の子」（エペソ 5 章 8 節）として、死がもはやなく、あらゆる悪が新しい天と新しい地から、完全かつ永遠に取り除かれる永遠に生きることになります（黙示録 21-22 章; 第一ヨハネ 1 章 5 節参照）。光と命、すなわち永遠の体の栄光と、その体において私たちがいつまでも楽しむ永遠の命とは、切り離すことのできないものなのです。

聖なる部屋にて、**暁**（あかつき）**の胎**から、あなたの若き者たちは**露のように**あなたのもとに集まる（すなわち、新しく復活した者たちの軍勢）。（詩篇 110 篇 3 節後半/ESV 訳）

あなたの死者は生き、彼らのなきがらは起きる。ちりに伏す者よ、さめて喜びうたえ。あなたの**露は光の露であって、**それを亡霊の国の上に降らされるからである。（イザヤ 26 章 19 節）

(2)また地のちりの中に眠っている者のうち、多くの者は目をさますでしょう。そのうち永遠の生命にいたる者もあり、また恥と、限りなき恥辱をうける者もあるでしょう。(3)賢い者は、**大空の輝きのように輝き**、また多くの人を義に導く者は、星のようになって永遠にいたるでしょう。（ダニエル 12 章 2-3 節）

(6)神は、おのおのに、そのわざにしたがって報いられる。(7)すなわち、一方では、耐え忍んで善を行って、**光栄**とほまれと朽ちぬものとを求める人に、[神から]**永遠のいのち**が与えられ、（ローマ 2 章 6-7 節; 参照.ローマ 2 章 10 節, 3 章 23 節, 15 章 7 節）。

(29)神はあらかじめ知っておられる者たちを、更に御子のかたちに似たものとしようとして（すなわち、同じ復活の体を持つように）、あらかじめ定めて下さった。それは、御子を多くの兄弟[そして姉妹]の中で長子とならせるためであった。(30)そして、あらかじめ定めた者たちを更に[救いに]召し、召した者たちを更に義とし、義とした者たちには、更に**栄光を与えて下さった**のである（すなわち、私たちの復活と永遠の命は、この世ができる前から神の計画の中で決まっていたのです）。（ローマ 8 章 29-30 節）

(17)なぜなら、このしばらくの軽い患難は働いて、永遠の**重い栄光を**、あふれ

るばかりにわたしたちに得させるからである。(18)わたしたちは、見えるものにではなく、見えないものに目を注ぐ＜「注ごうではありませんか」- ESV 訳＞。見えるものは一時的であり、見えないものは永遠につづくのである。(第二コリント 4 章 17-18 節)

(1)このように、あなたがたはキリストと共によみがえらされたのだから、上にあるものを求めなさい。そこではキリストが神の右に座しておられるのである。(2)あなたがたは上にあるものを思うべきであって、地上のものに心を引かれてはならない。(3)あなたがたはすでに[位置的に:神の御前の立場としては]死んだものであって、あなたがたの[真の]いのちは、キリストと共に神のうちに隠されているのである。(4)わたしたちの[真の]いのちなるキリストが現れる時(すなわち、再臨の時)には、あなたがたも、キリストと共に**栄光のうちに現れる**であろう。(コロサイ 3 章 1-4 節)

そのため(すなわち、13 節で言われている御霊の聖別と真理への信仰による救いのため)に、わたしたちの福音によりあなたがたを召して、わたしたちの主イエス・キリストの**栄光**(すなわち、復活)**にあずからせて下さる**からである。(第二テサロニケ 2 章 14 節; 参照.エペソ 1 章 14 節; 第一テサロニケ 5 章 9 節; ヘブル 10 章 39 節; 第一ペテロ 2 章 9 節)

それだから、わたしは選ばれた人たちのために、いっさいのことを耐え忍ぶのである。それは、彼らもキリスト・イエスによる救を受け、また、**それと共に永遠の栄光**(すなわち、復活)を受けるためである。(第二テモテ 2 章 10 節)

なぜなら、万物の帰すべきかた、万物を造られたかた[御父]が、**多くの子らを栄光**(すなわち、復活)**に導く**のに、彼らの救の君〔わたしたちの主イエス・キリスト〕を、苦難をとおして全うされたのは、彼[御父]にふさわしいことであったからである。実に、きよめるかたも、きよめられる者たちも、皆ひとりのかたから出ている。それゆえに主は、彼らを兄弟と呼ぶことを恥とされない。 すなわち、「わたしは、御名をわたしの兄弟たちに告げ知らせ、教会の中で、あなたをほめ歌おう」と言い、 また、「わたしは、彼(すなわち、御父)により頼む」、また、「見よ、わたしと、神がわたしに賜わった子らとは」と言われた。(ヘブル 2 章 10-13 節)

私たちの主イエス・キリストの父なる神が讃えられますように。神はその豊かなあわれみにより、イエス・キリストが死から復活されたことによって、私たちを新しく生まれさせ、生ける希望へと導き、また決して滅びず、汚されず、色あせる

ことのない相続財産へと〔私たちを〕招いてくださいました。その相続財産は天にあって私たちのために守られており、私たち自身もまた、神の力とその御力を信じる信仰によって、時の終わりに現される備えられた最終的な救いへと守られているのです。この〔やがて実現する救い〕を喜びなさい。たとえ今しばらくの間、さまざまな試練によって苦しむことがあなたがたの定めであるとしても――それは、あなたがたの信仰が試され、その真実性が吟味される（文字通り「精錬される」）ことによって、**イエス・キリストが現れるときに、**あなたがたの**賞賛と栄光と誉れとなるためです**。なぜなら、この〔信仰が試されて真実であることの証明という〕過程は、火で精錬されながらも結局は滅びてしまう金よりも、〔あなたがたにとって〕はるかに大きな価値があるからです（試練を通して真実とされた信仰には、永遠の報いが約束されているのです）。（第一ペテロ 1 章 3-7 節/ ESV 訳）

⑴そこで、あなたがたのうちの長老たちに勧める。わたしも、長老のひとりで、キリストの苦難についての証人であり、また、**やがて現れようとする栄光**にあずかる者である。⑵あなたがたにゆだねられている神の羊の群れを牧しなさい。しいられてするのではなく、神に従って自ら進んでなし、恥ずべき利得のためではなく、本心から、それをしなさい。⑶また、ゆだねられた者たちの上に権力をふるうことをしないで、むしろ、群れの模範となるべきである。⑷そうすれば、大牧者が現れる時には、**しぼむことのない栄光の冠**を受けるであろう。（第一ペテロ 5 章 1-4 節）

上記の諸聖句からもわかるように、永遠の報いは復活における栄化の重要な一部であり、実際、永遠の報いは復活の時まで与えられません（ヘブル 11 章 39-40 節参照）。というのも、復活の体こそが永遠に栄光を帯びる存在であり、その栄化はこれらの報いと切り離せない形で結びついているからです（ダニエル書 12 章 3 節参照）。教会に対する評価の過程である「キリストの裁きの座」は、主イエスがエルサレムで世を支配する王として御座に着き、千年王国を開始されてから初めて行われます。この栄光に満ちた出来事については、本シリーズ第 6 部で詳しく扱う予定です（参照．マタイ 16 章 27 節，19 章 28 節，20 章 8 節；ルカ 14 章 14 節；ローマ 14 章 10-12 節；第一コリント 3 章 10-15 節；第二コリント 5 章 6-10 節；黙示録 2 章 7 節，2 章 10-11 節，2 章 17 節，3 章 5 節，3 章 11-12 節，2 章 26-27 節，3 章 21 節，11 章 18 節，20 章 4-6 節）。しかし、私たちが主の栄光を目にし、同じく栄光の体を得るその復活の日まで、すでにキリストにあって眠った兄弟姉妹たちが中間状態において、いささかでも不利な状況に置かれていると考えてはなりません。彼らが現在享受している状態は、私たちが地上で経験している状態よりもはるかに優れており、私たちにはかすかに想像することしかできないほどの祝福に満ちています――ただし、復活において私たちが永遠

に味わう栄光にはまだ及びません。

わたしたちの住んでいる地上の幕屋（すなわち、私たちの肉体）がこわれると、神からいただく建物、すなわち天にある、人の手によらない永遠の家（すなわち、復活の体）が備えてあることを、わたしたちは知っている。 そして、天から賜わるそのすみかを、上に着ようと切に望みながら、この幕屋の中で苦しみもだえている。それを着たなら、（私たちの霊は）裸のままではいないことになろう。（第二コリント 5 章 1-3 節）

復活の体――その本質と能力は、これまで見てきたように一貫して「栄光」という語で表現されていますが、最もよく理解するためには、主イエス・キリストご自身の復活の体を考察するのが最適です。ただし、これまでにも触れたように、主が昇天前に現れた時の姿は、まもなく受けられる最終的な栄化の後の姿ではなかった点に注意する必要があります（ヨハネ 7 章 39 節; 使徒行伝 9 章 1-6 節, 22 章 6-11 節, 26 章 12-18 節; 黙示 1 章 12-16 節参照）。復活の体は、今の肉体が何かを失う形ではなく、あらゆる面で現在の状態をはるかに上回る改良が施された存在となります。その栄光と益を、私たちは今完全には理解しきれません。しかし、復活の体はそれでも**実体ある本物の体**です。復活後のイエスは本人として認識可能であり、人格に少しも変わることはなく、まったく同じお方として振る舞われました（ルカ 24 章 31 節; ヨハネ 20 章 16 節; 20 章 20 節; 20 章 26-28 節; 21 章 12 節）。またその体は実体があり、触れることができ（マタイ 28 章 9 節; ルカ 24 章 39 節; ヨハネ 20 章 17 節; 20 章 27 節）、さらに通常の人間の行為すべてが可能です（マタイ 28 章 10 節; 28 章 18-20 節; ルカ 24 章 15 節; 24 章 43 節; ヨハネ 21 章 13-15 節）。しかも、主が昇天して完全に栄化される以前から、その復活の体は物質的利点を保持しつつ超物質的な能力を備えており、物理的空間を自由に移動し、物理的障壁を超越していました（マタイ 28 章 1-3 節; ルカ 24 章 31 節; 24 章 36 節; ヨハネ 20 章 19 節; 使徒行伝 1 章 9-10 節）。そして私たちが受け取る復活の体も、この主の体こそが模範であり型なのです（ローマ 6 章 5 節; ピリピ 3 章 20-21 節; 第一ヨハネ 3 章 2 節）。これらの具体的な特質について最も詳細に記しているのが、使徒パウロがコリントの信徒へ宛てた第一の手紙での説明です：

(35)しかし、ある人は言うだろう。「どんなふうにして、死人がよみがえるのか。どんなからだをして来るのか」。(36)おろかな人である。あなたのまくものは、死ななければ、生かされないではないか。(37)また、あなたのまくのは、やがて成るべきからだをまくのではない。麦であっても、ほかの種であっても、ただの種粒にすぎない。(38)ところが、神はみこころのままに、これにからだを与え、その一つ一つの種にそれぞれのからだをお与えになる。(39) [種子や植物がそうであるよ

うに、生物体も同じです。]すべての肉が、同じ肉なのではない。人の肉があり、獣の肉があり、鳥の肉があり、魚の肉がある。(40)天に属するからだもあれば、地に属するからだもある。天に属するものの栄光は、地に属するものの栄光と違っている。(41) [すべての天の身体が同じような輝きを持つわけではありません。]日の栄光があり、月の栄光があり、星の栄光がある。また、この星とあの星との間に、栄光の差がある。(42)死人の復活も、また同様である。朽ちるものでまかれ、朽ちないものによみがえり、(43)卑しいものでまかれ、**栄光ある**ものによみがえり、弱いものでまかれ、強いものによみがえり、(44)肉のからだでまかれ、霊のからだによみがえるのである。肉のからだが(明らかに)あるのだから、霊のからだもあるわけである。(45)聖書に「最初の人アダムは生きたものとなった」と書いてあるとおりである。しかし最後のアダムは命を与える霊となった。(46)最初にあったのは、霊のものではなく肉のものであって、その後に霊のものが来るのである。(47)第一の人は地から出て土に属し、第二の人は天から来る。(48)この土に属する人に、土に属している人々は等しく、この天に属する人に、天に属している人々は等しいのである。(49)すなわち、わたしたちは、土に属している形をとっているのと同様に、また天に属している形をとるであろう。（第一コリント 15 章 35-49 節）

上記の聖句が示しているように、「霊の体」すなわち復活の体は、いま私たちが住んでいる滅びゆく肉体よりも劣ったり、あいまいで非現実的なものでは決してありません。まったくその逆です。私たちは、あの栄光の日に受ける永遠の住まいにおいても、依然として自分自身であり続けます。ただその時には、神と永遠に共に生きる新しい生活に完全に調和した体を持つことになります。その体は、神ご自身と、神が愛する者たちのために備えてくださった永遠の祝福を余すところなく味わうことができる体です。これこそが、私たちに与えられている祝福された希望（ブレスト・ホープ）です。私たちはこの希望の成就を日々待ち望みながら生きています。主の再臨、贖い、そして子としての養子縁組（採用）、復活における体の栄光--これらすべてが成就する時、私たちは新しいエルサレムにおいて、愛する主イエス・キリストの御前で、永遠に報いと驚きに満ちた命を楽しむことになるのです。（マタイ 13 章 30 節，25 章 1-13 節；ヨハネ 5 章 29 節；使徒行伝 24 章 15 節；ローマ 6 章 5 節，6 章 9 節，8 章 11 節，8 章 23 節，8 章 29 節；第一コリント 6 章 12-14 節；第一テサロニケ 3 章 13 節；第二テサロニケ 2 章 1 節）。

(1)起きよ、光を放て。あなたの光が臨み、主の栄光があなたの上にのぼったから。(2)見よ、暗きは地をおおい、やみはもろもろの民をおおう。しかし、あなたの上には主が朝日のごとくのぼられ、主の栄光があなたの上にあらわれる。(3)

もろもろの国は、あなたの光に来、もろもろの王は、のぼるあなたの輝きに来る。立ち上がりましょう。(イザヤ書 60 章 1-3 節)

わたしの父のみこころは、子を見て信じる者が、ことごとく永遠の命を得ることなのである。そして、わたしはその人々を終りの日によみがえらせるであろう」。(ヨハネ 6 章 40 節)

(25)イエスは彼女に言われた、「わたしはよみがえりであり、命である。わたしを信じる者は、たとい死んでも生きる。(26)また、生きていて、わたしを信じる者は、いつまでも死なない。あなたはこれを信じるか」。(ヨハネ 11 章 25-26 節)

小羊の婚礼：

(7)わたしたちは喜び楽しみ、神をあがめまつろう。小羊の婚姻の時がきて、花嫁(直訳は「妻」、参照.黙示録 21 章 9 節)はその用意をしたからである。(8)彼女は、光り輝く、汚れのない麻布の衣[ガウン]を着ることを許された。この麻布の衣は、聖徒(信者)たちの正しい行いである」。(9)それから、御使はわたしに言った、「書きしるせ。小羊の婚宴に招かれた者は、さいわいである」。またわたしに言った、「これらは、神の真実の言葉である」。(黙示録 19 章 7-9 節)

これらの聖句は、復活の後、ハルマゲドンの後に続く出来事を、熱狂的な期待をもって見通しています。したがってこの点については、本シリーズの次回(第 6 部「最後のことがら」)で詳しく論じられることになります。私たちの主が地上の上の天に戻られたのち、その御命令によって「教会の復活」が起こります。すなわち、アダムとエバ以来イエス・キリストを信じてきたすべての人々がよみがえり、生き残っている信者たちが最後に変えられるのです。この栄光に満ちた出来事は、ここでは「小羊の婚宴」と呼ばれています。なぜなら、朽ちる肉体が不滅の復活のからだへと変えられることによって、私たちはついにイエスと完全に、そして実際的に、永遠に「一つ」とされるからです[65]。教会の復活に直ちに続いて、主はハルマゲドンにおいて反キリストとその軍勢を滅ぼし、その後、エルサレムから千年王国の支配を開始されます。キリストの再臨に伴う一連の七つの裁きのうち最後のものが、教会の評価、すなわち「キリストの裁きの座」と呼ばれる裁きです。この時、私たちは皆、地上にいる間に主とその教会に対する正当な

[65] 特にエペソ 5 章 22-33 節を参照してください。また、『雅歌』は全体を通して、教会とイエスとの関係を描いたたとえと見ることができます(雅歌全体; 詩篇 45 章 8-17 節; イザヤ 62 章 5 節; ヨハネ 3 章 29 節 参照)。さらに『サタン的反逆』第 5 部「裁き・回復・置き換え」の第 III 部 8 節 b 小節 iv「花嫁」もご覧ください。

奉仕に基づいて、永遠の報いを授かるために裁かれます。この奉仕はここで「正しい行い」と呼ばれており、重要な点として、私たちの義務をこの時空の中で遂行することによって（神が与えてくださった賜物や奉仕を通して霊的に成長し、他者の成長を助けることによって）、私たちは主イエスのために「ふさわしく備える」と言われているのです。真に「正しい」もの、すなわち神の完全な基準（神の真の御心への正しく動機づけられた応答）に従った行いはすべて報いを受けます（マタイ 10 章 42 節，25 章 31-46 節）。一方で、この基準を満たさないものはすべて、火によって焼き尽くされます（第一コリント 3 章 10 -15 節）。しかし、これは私たちの救いにはいかなる影響も及ぼしません。（なぜなら、キリストが私たちすべての罪のために死んでくださったからであり、信じる者にとって罪はもはや問題とならないからです。）ただし、動機が不純であったり、神の御心に従っていなかった行いは、しみやしわとして取り除かれます（エペソ 5 章 25-27 節）。その結果、私たちは白い衣をまとい、永遠に主とともに歩むことができるのです（黙示録第 3 章 4 節-5 節）。[66]

わたしは主を大いに喜び、わが魂はわが神を楽しむ。主がわたしに救の衣を着せ、義の上衣をまとわせて、花婿が冠をいただき、花嫁が宝玉をもって飾るようにされたからである。（イザヤ 61 章 10 節）

この評価の過程が完了し、私たち教会が永遠の報いを受け（第二コリント 5 章 10 節；ローマ 14 章 10 節）、冠をいただき（第一コリント 9 章 25-27 節；ピリピ 4 章 1 節；第一テサロニケ 2 章 19 節；第二テモテ 4 章 8 節；ヤコブ 1 章 12 節；第一ペテロ 5 章 4 節；黙示録 2 章 10 節，3 章 11 節）、さらに主であり救い主からの「よくやった」という称賛を受けたのち（マタイ 25 章 14-30 節）、主の勝利と私たちの婚宴は、かつて世界が見たことのない豊かさと祝福に満ちた盛大な宴で祝われるのです（マタイ 22 章 2-14 節，25 章 1-13 節；ルカ 13 章 28-29 節，14 章 16-24 節）。

(6) 万軍の主はこの山で、すべての民のために肥えたものをもって祝宴を設け、久しくたくわえたぶどう酒をもって祝宴を設けられる。すなわち髄の多い肥えた

---

[66] 黙示録 19 章 8 節は、黙示録 3 章 18 節や 16 章 15 節に出てくる白い衣のたとえ――つまり「恥」と「聖さ」の対比――から外れているわけではありません（ゼカリヤ 3 章 4 節；黙示録 3 章 4-5 節，7 章 9-14 節，19 章 14 節 参照）。ここで言う「正しい行い」（ギリシャ語 ディカイオーマ dikaiōma δ ι κ α ί ω μ α）とは、私たちが神の御心に応答して行う、功績によらない信仰の働きのことです。それは、「神があらかじめ備えてくださった業であって、私たちがその中を歩むためのもの」（エペソ 2 章 10 節）なのです。
教会全体が身にまとう輝く白い衣は、信じる者一人ひとりが地上での奉仕を通して、必ず何らかの永遠の報いを受けていることを示しています。なぜなら、「行いを伴わない信仰は死んでいる」からです（ヤコブ 2 章 14-26 節）。

ものと、よく澄んだ長くたくわえたぶどう酒をもって祝宴を設けられる。(7)また主はこの山で、すべての民のかぶっている顔おおいと、すべての国のおおっているおおい物とを破られる。(8)主はとこしえに死を滅ぼし、主なる神はすべての顔から涙をぬぐい、その民のはずかしめを全地の上から除かれる。これは主の語られたことである。(イザヤ 25 章 6-8 節)

なお、あなたがたに言うが、多くの人が東から西からきて、天国で、アブラハム、イサク、ヤコブと共に宴会の席につくが、(マタイ 8 章 11 節)

黙示録 19 章 9 節の「小羊の婚宴に招かれた者たちの祝福」とは、イエスを信じるすべての人々を指しています。つまり、主の栄光ある再臨とそれに続く出来事を目にして信じる者たちです。これは明らかに非常に大きなグループとなり、特に数多くの神の回復の約束に従ってイスラエルの地に連れ戻されたユダヤ人の信者たちが中心となり、さらに異邦人の信者たちも含まれることになります(ゼカリヤ 8 章 23 節)。一方、この婚宴に招かれない顕著な二つの集団があります。第一に、今なおイエスをメシヤとして受け入れることを拒む頑ななユダヤ人たちです(エゼキエル 20 章 37-38 節; マタイ 8 章 12-13 節)。第二に、大背教の時に信仰から離れ去った者たちです(マタイ 25 章 1-13 節; ルカ 13 章 24-30 節)。真に幸いなのは、メシヤが再臨されるときに応答する人々です。彼らはその大いなる日に、試練の時代にあっても信仰を守り、主の再臨の際によみがえって主に会ったすべての人々とともに、栄光に満ちた祝いに招かれるからです。これらの驚くべき祝福された出来事は、空虚な望みではなく、神の不動の御心によって定められた未来の現実であり、「神のまことの言葉」なのです。

イエス様についての証し (黙示録 19 章 10 節):

そこで、わたしは彼の足もとにひれ伏して、彼を拝そうとした。すると、彼は言った、「そのようなことをしてはいけない。わたしは、あなたと同じ僕仲間であり、またイエスのあかしびと(あかしを[堅く]守っている者)であるあなたの兄弟たちと同じ僕仲間である。ただ神だけを拝しなさい。イエスのあかしは、すなわち[すべての神の]預言の霊である」。(黙示録 19 章 10 節)

イエスの再臨に伴う驚くべき出来事への期待に圧倒され、さらに「これらは、神の真実の言葉である」(9 節)との確証に心を動かされて、ヨハネは地にひれ伏して御使いを礼拝しました。しかし彼に同行していた御使いはすぐにこれを戒めます。後でヨハネはこの圧倒的な感情に再び屈することになります(黙示録 22 章 8-9 節)。その二度目のときには、永遠と新しいエルサレムにおける言葉に尽くせぬ祝福を目前にして感情が高まり、そのときもまた「これらの言葉は信ずべき真実である」との確証と「見よ、わたし

はすぐに来る」という宣言を聞いたことに応じて、同じように御使いにひれ伏しますが、そこで再び同じ戒めを受けるのです。その二度目にヨハネは「ただ神だけを礼拝せよ」と告げられ、さらに与えられた書を封じないよう命じられます。ここでも同じく「神を拝せよ」と命じられ、加えてすべての預言と啓示の中心にあるのはイエス・キリストに関する証しであることが教えられます。なぜなら、イエスご自身こそがまことの御言葉だからです。

ここで用いられている接続詞「なぜなら」（ギリシヤ語 ガール gar, γάρ）は、天使や目に見える驚異に心を奪われずに、神を礼拝すべき理由をきわめて明確に示しており、それはまさにイエスこそが中心だからです。（すなわち、イエスは生ける神の言葉であり、彼に対する信仰を通して救いと霊的成長が与えられるからです。）イエス・キリストに関する証しと御言葉こそが、聖書全体、あらゆる啓示（特別啓示も自然啓示も）、そしてこの黙示録を含めたすべての啓示の目的と本質なのです。この場面でヨハネが感情に押し流されたことは、彼の過失ではありません。彼はすでに被造物を礼拝すること、たとえそれが栄光に満ちた御使いであっても誤りであることを十分に理解していました。しかし、それでも自制できなかったという事実は、神の御計画のうちにあったのです。私たちがこの場面（および黙示録 22 章の場面）を目にし、大切な教訓を学ぶためでした。すなわち、どれほど偉大な驚異を期待しようと、また将来私たちの目がいかに大きな奇跡を目撃しようと、さらには地上で反キリストがどれほど印象的な偽りの奇跡を行おうと、真の力・真の栄光・真の驚異は、ただイエス・キリストとその御言葉である聖書のうちにある、ということです。

VI. イスラエルの悔い改め

真のメシヤと気づかなかったために、すべての不信仰者たちが「嘆き」悲しむ過程は、メシヤが十字架のしるしを伴って、全地あまねく空を裂くまばゆい光で地上の天に戻るとすぐに始まります(マタイ 24 章 27-31 節)。 そして、復活の教会が栄光の復活の体によみがえり、亡くなった人が墓からよみがえり、生きている信者が皆の目の前で変身し、皆が空中で主に会うために舞い上がるのは、間違いなく想像を絶する驚くべき光景で、世の中の不信仰者らを驚愕させるに違いありません。このとき、多くの人々が主に立ち返ることでしょう。この復活の幹部となるには遅すぎますが、イエスに従う者としてイエスの千年王国支配の祝福を享受するには間に合います。 しかし、たとえ教会の復活がいかに驚異的であろうとも、少なくとも不信仰のイスラエルに関しては、聖書ははっきりと証言しています。すなわち、ユダヤの民を主の初臨以来特徴づけてきた「一部の頑なさ」を終わらせるのは、メシヤご自身の栄光に満ちた再臨そのものである、ということです。

> (25)兄弟たちよ。あなたがたが知者だと自負することのないために、この奥義を知らないでいてもらいたくない。一部のイスラエル人がかたくなになったのは、異邦人が全部救われるに至る時(すなわち、教会が再臨の時に完成するとき)までのことであって、(26)こうして(すなわち、メシヤの再臨を目の当たりにして信じることによって)、[真の]イスラエル人は、すべて救われるであろう。すなわち、次のように書いてある、「救う者がシオンからきて、ヤコブから不信心を追い払うであろう。(27)そして、これが、彼らの罪を除き去る時に、彼らに対して立てるわたしの契約である」。(ローマ 11 章 25-27 節)

> それゆえ、産婦の産みおとす時(すなわち、イエスの人としての誕生の母マリヤによる初臨)まで、主は彼らを渡しおかれる。その後その兄弟たちの残れる者はイスラエルの子らのもとに帰る(すなわち、再臨の時にユダヤ人が悔い改める)。(ミカ 5 章 3 節)

主への立ち返りは、主が現われるやいなや、直ちに始まります。主は全世界に御姿を現され、地上のあらゆる者の目に映り、御自身の天使の軍勢と、今や集結した復活の教会の先頭に堂々と現れるからです。そして、主が真のメシヤであり、神の子として世界にその姿を現されるこの瞬間まで、イエスをキリストとして認めなかったという彼らの過ちの現実が、全世界を「嘆き悲しませる」ことになるでしょう。

見よ、彼は、雲に乗ってこられる。**すべての人の目**、ことに、彼を刺しとおした者たちは、**彼を仰ぎ見るであろう。**また**地上の諸族はみな、彼のゆえに胸を打って嘆くであろう。**しかり、アァメン。（黙示録 1 章 7 節）

この悲しみは、多くの場合、今や出現された主イエス・キリストに立ち返る敬虔な悔い改めの一部となります。そしてこの現象は、特にイスラエルにおいて顕著に現れることでしょう[67]。

わたしは、ダビデの家とエルサレムの住民の上に、**恵みと悔い改めの霊**とを注ぐ。彼らはその刺したわたしを見る時、ひとり子のために嘆くように彼のために嘆き、ういごのために泣くように、彼のためにいたく泣く。（ゼカリヤ 12 章 10 節/ESV）

(4)イスラエルの子らは多くの日の間、王なく、君なく、犠牲なく、柱なく、エポデおよびテラピムもなく過ごす。(5)そしてその後イスラエルの子らは帰って来て、その神、主と、その王ダビデとをたずね求め、終りの日におののいて、主とその恵みに向かって来る。（ホセア 3 章 4-5 節）

さらに、天に現れて全世界に見える栄光のメシヤが、私たちの主イエス・キリストであることを、誰も説明する必要はありません。というのも、主のしるしである十字架のしるしが天空に大きく示され、イエスこそキリスト、神の子、唯一のまことのメシヤであることを否定する余地がまったくなくなるからです。[68]

(29)しかし、その時に起る患難の後、たちまち日は暗くなり、月はその光を放つことをやめ、星は空から落ち、天体は揺り動かされるであろう。(30)そのとき、**人**

---

[67] 贖罪の日「ヨム・キプル」は、この出来事を先取りしています。その日にイスラエル全体に命じられた「心を悩ますこと」（レビ 23 章 27 節, 29 節, 32 節; 民数 29 章 7 節）、そしてそれに伴う神の清めは、キリストの再臨の時にこの正しい応答をするイスラエルのすべての者に対する神の赦しを象徴しています（レビ 16 章 30 節; イザヤ 4 章 2-6 節, 59 章 20-21 節; エレミヤ 31 章 34 節, 50 章 20 節; エゼキエル 20 章 33-38 節, 36 章 24-38 節; ヨエル 2 章 30-32 節; ゼカリヤ 12 章 10 節-13 章 1 節; マラキ 3 章 2-4 節; ローマ 11 章 26 節）。

[68] 十字架こそがマタイ 24 章 30 節で言及されている「しるし」であることは疑いありません。というのも、十字架はイエス・キリストが私たちのために献げられた犠牲を示す、聖書全体における普遍的な象徴だからです（マタイ 10 章 38 節, 16 章 24 節; マルコ 8 章 34 節; ルカ 9 章 23 節, 14 章 27 節; 第一コリント 1 章 17-18 節; ガラテヤ 5 章 11 節, 6 章 12-14 節; エペソ 2 章 16 節; ピリピ 2 章 8 節, 3 章 18 節; コロサイ 1 章 20 節, 2 章 14 節; ヘブル 12 章 2 節）。したがって、主の栄光の再臨の際にこの十字架が現れることによって、かつての犠牲と将来の再臨とのつながりが、すべての人にとって明白になるのです。

の子のしるしが天に現れるであろう。またそのとき、地のすべての民族は嘆き、そして力と大いなる栄光とをもって、人の子が天の雲に乗って来るのを、人々は見るであろう。(マタイ 24 章 29-30 節)

その時、主はイスラエル全土、特に包囲されたエルサレムにいる悔い改める者達の心に応えてくださるのです。主は、「主の目の玉」(ゼカリヤ 2 章 8 節; 参照.申命記 32 章 10 節)に触れようとする者たちに対して、激しい怒りを解き放たれるからです。

(12)主は言われる、「今からでも、あなたがたは心をつくし、断食と嘆きと、悲しみとをもってわたしに帰れ。(13)あなたがたは衣服ではなく、心を裂け」。あなたがたの神、主に帰れ。主は恵みあり、あわれみあり、怒ることがおそく、いつくしみが豊かで、災を思いかえされるからである。(14)神があるいは立ち返り、思いかえして祝福をその後に残し、素祭と灌祭とをあなたがたの神、主にささげさせられる事はないとだれが知るだろうか。(15)シオンでラッパを吹きならせ。断食を聖別し、聖会を召集し、(16)民を集め、会衆を聖別し、老人たちを集め、幼な子、乳のみ子を集め、花婿をその家から呼びだし、花嫁をそのへやから呼びだせ。(17)主に仕える祭司たちは、廊と祭壇との間で泣いて言え、「主よ、あなたの民をゆるし、あなたの嗣業をもろもろの国民のうちに、そしりと笑い草にさせないでください。どうしてもろもろの国民に、『彼らの神はどこにいるのか』と言わせてよいでしょうか」。(18)その時主は自分の地のために、ねたみを起し、その民をあわれまれた。(19)主は答えて、その民に言われた、「見よ、わたしは穀物と新しい酒と油とをあなたがたに送る。あなたがたはこれを食べて飽きるであろう。わたしは重ねてあなたがたにもろもろの国民のうちでそしりを受けさせない。(20)わたしは北から来る者をあなたがたから遠ざけ、これをかわいた荒れ地に追いやり、その前の者を東の海に、その後の者を西の海に追いやる。その臭いにおいは起り、その悪しきにおいは上る。これは大いなる事をしたからである。(ヨエル 2 章 12-20 節)

(30)わたしはまた、天と地とにしるしを示す。すなわち血と、火と、煙の柱とがあるであろう。(31)主の大いなる恐るべき日が来る前に、日は暗く、月は血に変る。(32)**すべて主の名を呼ぶ者は救われる**。それは主が言われたように、シオンの山とエルサレムとに、のがれる者があるからである。その残った者のうちに、主のお召しになる者がある。(ヨエル 2 章 30-32 節)

主は言われる、「主は、あがなう者としてシオンにきたり、**ヤコブのうちの、とがを離れる者に至る**」と。(イザヤ 59 章 20 節)

VII. 再臨とハルマゲドン： 黙示録 19 章 11-21 節

はじめに：

裁きの日が今や到来しました。それは、まさに「主の日」――すなわちハルマゲドンであり、救いと怒りの日であり、無数の聖書の箇所がこの日を指し示し、この日に関して語っています。それは、主の来臨の日であり、[69] 神の民が希望を抱いてきた日、そしていつの時代も、神の民がその希望を注いできた日です。[70]

(7)門よ、こうべをあげよ。とこしえの戸よ、あがれ。栄光の王がはいられる。(8)栄光の王とはだれか。強く勇ましい主、戦いに勇ましい主である。(9)門よ、こうべをあげよ。とこしえの戸よ、あがれ。栄光の王がはいられる。(10)この栄光の王とはだれか。万軍の主、これこそ栄光の王である。

主はあだをかえす日をもち、シオンの訴えのために報いられる年をもたれるからである。(イザヤ 34 章 8 節)

(12)ああ、多くの民はなりどよめく、海のなりどよめくように、彼らはなりどよめく。ああ、もろもろの国はなりとどろく、大水のなりとどろくように、彼らはなりとどろく。(13)もろもろの国は多くの水のなりとどろくように、なりとどろく。しかし、神は彼らを懲しめられる。彼らは遠くのがれて、風に吹き去られる山の上のもみがらのように、また暴風にうず巻くちりのように追いやられる。(14)夕暮には、見よ、恐れがある。まだ夜の明けないうちに彼らはうせた。これはわれわれをかすめる者の受くべき分、われわれを奪う者の引くべきくじである。(イザヤ 17 章 12-14 節)

(9)よきおとずれをシオンに伝える者よ、高い山にのぼれ。よきおとずれをエルサレムに伝える者よ、強く声をあげよ、声をあげて恐れるな。

---

[69] これまで本論や『サタンの反乱』シリーズで用いてきた用語で言えば、これは「第二段階の裁き」にあたります。すなわち、ハルマゲドンの戦いと、それに続く再臨後の諸々の裁きの頂点です（本シリーズ第 6 部第 I 章参照）。そしてこの後すぐに続くのが「第二段階の回復」、すなわちイエス・キリストによる千年王国の支配です。

[70] たとえば、メシヤが再臨しイスラエルの敵を裁かれるという希望は、詩篇や預言書の中に広く見られます。たとえば詩篇 21 章 8 節, 98 章 1-9 節, 102 章 12-17 節などです。このことは、本研究の後半で引用・参照される多くの箇所からも明らかになるでしょう。

ユダのもろもろの町に言え、「あなたがたの神を見よ」と。(10)見よ、主なる神は大能をもってこられ、その腕は世を治める。見よ、その報いは主と共にあり、そのはたらきの報いは、そのみ前にある。(イザヤ 40 章 9-10 節)

主は勇士のように出て行き、いくさ人のように熱心を起し、ときの声をあげて呼ばわり、その敵にむかって大能をあらわされる。(イザヤ 42 章 13 節)

どうか、あなたが天を裂いて下り、あなたの前に山々が震い動くように。(イザヤ 64 章 1 節)

(23)見よ、主の暴風がくる。憤りと、つむじ風が出て、悪人のこうべをうつ。(24)主の激しい怒りは、み心に思い定められたことを行って、これを遂げるまで、退くことはない。末の日にあなたがたはこれを悟るのである。(エレミヤ 30 章 23-24 節)

マラナ・タ(われらの主よ、きたりませ)。(第一コリント 16 章 22 節後半)

1. 神の言葉の到来：黙示録 19 章 11-16 節

(11) またわたしが見ていると、天が開かれ、見よ、そこに白い馬がいた。それに乗っているかたは、「忠実で真実な者」と呼ばれ、義によってさばき、また、戦うかたである。(黙示録 19 章 11 節)

主が十字架にかかり、まさにご自身の体にこの世の罪を負わされようとされ、ゴルゴタに闇が降りかかろうとしていたとき、主の敵たちは、彼が裁かれる名目となった罪状をもってあざけりました。「神殿を打ちこわして三日のうちに建てる者よ。もし神の子なら、自分を救え。そして十字架からおりてこい！」(マタイ 27 章 39-40 節)しかし三日後、主はまさに約束されたとおりのことをなさったのです。死人の中からよみがえり、新しい復活のからだという「神殿」において立ち上がられたのです。これは、主の犠牲が＜天の父によって＞受け入れられた証拠であり、また、世界を裁く権威を持つことの証明でした(詩篇 110 篇 1 節； ローマ 1 章 3-4 節)。祭司長、律法学者、長老たちも同じように主をあざけり、こう言いました。「あれがイスラエルの王なのだ。いま十字架からおりてみよ。そうしたら信じよう！」(マタイ 27 章 41-42 節)やがて来るその時、主はまさにそうされるのです。十字架のしるしの中から栄光に輝いて現れ、多くの人が悲しみと悔い改めの中で、刺し貫いたその方を仰ぎ見、ついに彼こそがメシヤであり、唯一の神の御子であることを否応なく悟ることになるのです(ゼカリヤ 12 章 10 節； 黙示録 1 章 7 節)。

ここでヨハネに示されているのは、まさに再臨の瞬間です。教会はすでに復活し、集合させられたのち、イエスは栄光を帯びて天から実際に戻って来られます。万王の王、万主の主、真のメシヤとして、ご自身の血、すなわち全世界のための十字架の死という犠牲によって獲得された御国を受け継がれるためです。天が裂けると、暗闇に覆われた世界は、世のまことの光である方から放たれるまばゆい光に照らし出されます。そしてすべての人の目が、このお方を仰ぎ見るのです。

白い馬は、私たちの主の王としての地位を示すと同時に、戦いにおける力強さをも表しています。主が十字架に向かう道をよくご存知の上でエルサレムに入城されたとき、人々はその道を棕櫚（しゅろ）の枝で覆いました。そのとき主はろばの子に乗られましたが、同時に馬の子も従えておられました（マタイ 21 章 1-9 節）。これは、第一の来臨における謙遜を示すとともに、第二の来臨における栄光をも暗示しています。そして棕櫚（しゅろ）の枝は、仮庵の祭り――すなわち再臨の祝祭 ――を思い起こさせるものとして、真にふさわしいものでした。[71]

> シオンの娘よ。大いに喜べ。エルサレムの娘よ。喜び叫べ。見よ。あなたの王があなたのところに来られる。この方は正しい方で、救いを賜り、柔和で、ろばに乗られる。それも、雌ろばの子の子ろばに。（ゼカリヤ 9 章 9 節/新改訳Ⅲ）

上の聖句にも二重の意味を見ることができるように、主が十字架の前にエルサレムに入場されたその出来事には二重の意味がありました。メシヤがへりくだった者であり、同時に勝利者であるとはどういうことでしょうか。イスラエルの解放者である勝利の王が、どうしてろばに乗ってこられたのでしょうか。すでに主は、十字架において罪と死に対する決定的な勝利を得られました。そして今度は、ゼカリヤ書の預言のもう一方の側面――すなわち人々が「ホサナ」と叫んで待ち望んだ、栄光の勝利の成就が訪れるのです。白い軍馬にまたがって、主は義と勝利をもって再臨されます。そのときこそ、悔い改めて主に立ち返る者たちにとって、大いなる喜びと歓喜の時となります。この箇所で主は「忠実で、真実な方」と呼ばれています。主ご自身が真理であられ、神がイスラエルに約束されたすべてを成就される、完全に信頼できるお方だからです。その真理は、艱難期の闇を引き裂き、サタンと反キリストの偽りを退けます。そして、偽りを愛し受け入れたすべての者を滅ぼされるのです。主が取り去られるいのちはすべて、正しく義にかなって取り去られるものであり、再臨のその瞬間から千年王国の終わりに至るまで、主のすべての裁きは完全に正しく、義なるものとなります。

---

[71] 「サタンの反乱」シリーズ第 5 部「裁き、回復、置き換え」の II.8.c「ユダヤの祭儀暦」を参照

(12)その目は燃える炎であり、その頭には多くの冠があった。また、彼以外にはだれも知らない名がその身にしるされていた。(黙示録 19 章 12 節)

その燃えるような目は、いま栄光を受けておられる私たちの主に固有の特徴であり、すでに以前にも見たことのあるものです(黙示録 1 章 14 節, 2 章 18 節)。それは、主が人としておられる中にも神としての本性を持っておられることを示し、また、主があらゆることを完全に知り尽くしておられること――この場合で言えば、神の燃えるような裁きを必要とするすべての罪を見抜いておられることも――明らかにしています(歴代誌下 16 章 9 節; ゼカリヤ 3 章 9 節, 4 章 10 節; 黙示録 5 章 6 節)。ここでの、この鋭く燃えるような眼差しは、主がエルサレムを取り囲む侵攻軍に対して、恐るべき報復を下そうとしていることを示しています(例:イザヤ 34 章 8 節, 35 章 4 節)。主の頭にある冠に書かれた数々の名(※聖書の多くの版は誤って単数にしていますが、実際は複数です)は、それぞれの冠に一つずつ記されており、イエスがすべての王国の王であり、これまで存在してきたすべての民の主であられることを示しています。主は、十字架における勝利を通して、その支配の権利を獲得されたのです(詩篇 110 章 1 節; 参照: ヘブル 1 章 3 節)。これらの称号は、ただ主のみが知っておられるものです。神だけがすべての国と民の本質を真に理解しておられるからです。神はそれらを創造し、それぞれに固有の時代と住まいを定められたのです(使徒行伝 17 章 26 節; 参照: 創世記 11 章 6 節; 申命記 32 章 8 節; ヨブ記 12 章 23 節; 詩篇 74 章 17 節; エレミヤ 18 章 7-10 節)。そして、残された時のすべてにおいて彼らを統べ治めるのは、ただイエス・キリストお一人です。人類の歴史における七つの千年の時代がついに終わるとき、主は生きている者も死んだ者もすべてを裁かれるのです。(使徒行伝 10 章 42 節)これに関連して考えることができるのが、すべての信者が持つことになる「新しい名」です(それは、イエス・キリストの教会という永遠の建物に属するしるしとして、私たちが受け取る白い石に記されています(第一ペテロ 2 章 4-8 節; 参照: 第一コリント 3 章 9-15 節; エペソ 2 章 20-22 節)。この「新しい名」も、その信者本人と主御自身だけが知るものです(黙示録 2 章 17 節; 参照: イザヤ 56 章 5 節, 65 章 15 節)。ただし私たちは皆、主の名を身に帯びることにもなります(黙示録 3 章 12 節, 22 章 4 節)。なぜなら、諸国民においてそうであるように、個々の信者においても同じく、私たちを本当の意味で「知っておられる」のは主お一人だからです。主だけが、私たちの存在のすべてと、私たちが選び取ってきたすべてのことの本質を最もよくご存じであり、それを完全に表す固有の「名」を与えることがおできになります。そしてその本質的な名こそ、イエスとそれぞれの信者とのあいだにある、記念のような確かな信頼のしるしなのです。さらに、イエス・キリストこそが、その大いなる再臨の日の後に、私たち一人ひとりの生涯を評価できる唯一のお方です。(ローマ 14 章 10-12 節; 第二コリント 5 章 10 節)。

(13) また、血にまみれた衣を身にまとい、その名は『神のことば』と呼ばれている。(黙示録 19 章 13 節/ESV)

ここで言及されている血は、これから起こる殺りくを予示する象徴であり、その血によって、やがて主の白い衣が血に染まることをあらかじめ示しているのです。

(1)「このエドムから来る者、深紅の衣を着て、ボズラから来る者はだれか。その装いは、はなやかに、大いなる力をもって進み来る者はだれか」。「義をもって語り、救を施す力あるわたしがそれだ」。(2)「何ゆえあなたの装いは赤く、あなたの衣は酒ぶねを踏む者のように赤いのか」。(3)「わたしはひとりで酒ぶねを踏んだ。もろもろの民のなかに、わたしと事を共にする者はなかった。わたしは怒りによって彼らを踏み、憤りによって彼らを踏みにじったので、彼らの血がわが衣にふりかかり、わが装いをことごとく汚した。(4)報復の日がわが心のうちにあり、わがあがないの年が来たからである。(5)わたしは見たけれども、助ける者はなく、怪しんだけれども、ささえる者はなかった。それゆえ、わがかいながわたしを勝たせ、わが憤りがわたしをささえた。(6)わたしは怒りによって、もろもろの民を踏みにじり、憤りによって彼らを酔わせ、彼らの血を、地に流れさせた」。(イザヤ 63 章 1-6 節)

反キリストの軍勢に対するこれからの殺りくを告げ知らせることに加えて、その血はもちろん、イエスがハルマゲドンの裁きを行い、ご自身の王国を受け継ぐ権威の根拠をも思い起こさせます。すなわち、それは私たちすべての者のために、そして今まさに滅ぼされようとしている者たちのためにさえ、十字架の上でご自身の血を流されたということです。もし彼らが、主の再臨に逆らうために獣に従うという道を自ら選ぶ代わりに、この尊い犠牲が自分たちのためであることとして応えていたなら、彼らは今、私たちとともに栄光のうちによみがえっていたことでしょう。しかし、そうではなく、今や「神の言(ことば)」であられる方の怒りに直面しようとしているのです。

(14)そして、天の軍勢が、純白で、汚れのない麻布の衣を着て、白い馬に乗り、彼に従った。(黙示録 19 章 14 節)

上の第 V 章で説明したように、ここに描かれているのは復活した教会です。私たちは愛する主に従い、同じように白い馬に乗り、永遠に身にまとうことになる純白の衣をまとっています。私たちの衣に血がついていないのは、イザヤ書 63 章 3 節(すでに引用した箇所、また黙示録 19 章 15 節も参照)でイエスご自身が語られているように、「ぶどうの踏み場」を踏むのは主おひとりだからです。私たちは主に従って同行し、私たち

の主の勝利を見届けるのです[72]。

(15)その口からは、諸国民を打つために、鋭いつるぎが出ていた。彼は、鉄のつえをもって諸国民を治め、また、全能者なる神の激しい怒りの酒ぶねを踏む。(黙示録 19 章 15 節)

ヨハネの黙示録 19 章 11 節で「義によって裁きを行い、戦いをされる」と主について語られていたように、ここでも同じことが示されています。すなわち、メシヤが千年王国においてこの世界を支配されること(「鉄の杖をもって彼らを牧される」)と、王国を手にされるための差し迫った勝利が強調されています(「その口から諸国の民を打つために鋭い大剣が出て」おり、「全能の神の激しい怒りの酒ぶねを踏まれる」)。ここで言及される剣(ギリシヤ語 ῥομφαία [ロムファイア] rhomphaia)は、ヨハネが第 1 章の最初の幻で、主の口から出るのを見たものと同じ剣です(黙示録 1 章 16 節; 2 章 12 節, 16 節参照)。それは、他の箇所に登場するローマの小型の両刃の剣(ギリシヤ語 μάχαιρα [マカイラ] machaira)ではなく、大型のトラキアの大剣です。小型の剣は神の言葉の外科手術のような鋭さを表すのに用いられることがあります(エペソ 6 章 17 節; ヘブル 4 章 12 節)。しかし、ここで強調される大剣は、まさにこれから始まる激しく血なまぐさい戦いを象徴しています(黙示録 19 章 21 節参照)。また聖書の他の箇所では、この剣が「御霊」であると説明されているため、ここにも神の言葉の二重の働きが示されています。すなわち、それを受け入れる人には真理によって命を与え、傲慢にもそれを拒む人には死をもたらすということです。

その口のむちをもって国を撃ち、そのくちびるの息をもって悪しき者を殺す。(イザヤ 11 章 4 節後半)

主はわが口を鋭利なつるぎとなし、わたしをみ手の陰にかくし、とぎすました矢となして、箙<えびら＝矢筒>にわたしを隠された。(イザヤ 49 章 2 節)

しかし、敵(すなわち反キリスト)は、大河(ナイル川やユーフラテス川を意味します; ダニエル 11 章 22 節, 11 章 26 節参照)のように攻め寄せても、主の御霊が彼を退ける。(ESV 訳:イザヤ 59 章 19 節)

その時になると、不法の者(＝反キリスト)が現れる。この者を、主イエスは口の息をもって殺し、[栄光の]来臨の輝きによって滅ぼすであろう。(第二テサロニケ

[72] 私たちが天使たちと共に戦いに参加することについては、第 6 部で取り上げます。

2 章 8 節)

ヨハネに与えられているのは、ここ黙示録 19 章 15 節において、主の口から出る剣を見ることだけです。鉄の杖とぶどうの踏み場は、いずれも(近い)将来の出来事を象徴的に描いたものであり、それぞれ、メシヤの王国における千年の統治と、ハルマゲドンの裁きを表しています。これら二つの場合のいずれにおいても、強調されているのは厳しさです。「つえ」は、善き羊飼いの導きと支配のための道具であり(ヨハネ 10 章 11 節, ヘブル 13 章 20-21 節; 第一ペテロ 2 章 25 節; 黙示録 7 章 17 節)、また主が地上の正当な支配者であることを示す王権のしるしでもあります。

つえはユダを離れず、立法者のつえはその足の間を離れることなく、シロの来る時までに及ぶであろう。もろもろの民は彼に従う。(創世記 49 章 10 節)

(8)わたしに求めよ、わたしはもろもろの国を嗣業としておまえに与え、地のはてまでもおまえの所有として与える。(9)おまえは**鉄のつえ**をもって彼らを打ち破り、陶工の作る器物のように彼らを打ち砕くであろう」と。(詩篇 2 篇 8-9 節)

(26)勝利を得る者、わたしのわざを最後まで持ち続ける者には、諸国民を支配する権威を授ける。(27)彼は**鉄のつえ**をもって、ちょうど土の器を砕くように、彼らを治めるであろう。それは、わたし自身が父から権威を受けて治めるのと同様である。(黙示録 2 章 26-27 節)

女(＝イスラエル)は男の子を産んだが、彼は**鉄のつえ**をもってすべての国民を治めるべき者である。この子は、神のみもとに、その御座のところに、引き上げられた。(黙示録 12 章 5 節)

メシヤは、ご自身の王国の全領域において、律法の違反や弱者の搾取を一切お許しになりません。完全な義が、完全に行使されるのです。そしてその統治のもとで、イエス・キリストは、無実の者を弁護し正しいと認める一方で、悪しき者を同じく公正に罪ありとし、滅ぼされます(参照.箴言 17 章 15 節)。

(1)主はわが主に言われる、「わたしがあなたのもろもろの敵をあなたの足台とするまで、わたしの右に座せよ」と。(2)主はあなたの**力あるつえ**をシオンから出される。あなたはもろもろの敵のなかで治めよ。(詩篇 110 篇 1-2 節)

⑻御子については、「神よ、あなたの御座は、世々限りなく続き、あなたの支配のつえは、**公平のつえ**である。⑼あなたは義を愛し、不法を憎まれた。それゆえに、神、あなたの神は、喜びのあぶらを、あなたの友に注ぐよりも多く、あなたに注がれた(詩篇 45 篇 6-7 節)」と言い、(ヘブル 1 章 8-9 節)

15 節にある三つ目の象徴である「酒ぶね(ぶどう踏み)」は、反キリストの軍勢にこれから下される殺りくを、非常に生々しく描いたものです。これは獣の軍勢が、再臨される王による征服の中で、足の下に踏みしだかれるぶどうを象徴しています(黙示録 14 章 14-20 節; 詩篇 2 篇 1-2 節, 110 篇 5-7 節; イザヤ書 11 章 4 節, 29 章 5-8 節, 34 章 1-3 節, 52 章 10 節, 59 章 15-19 節, 63 章 1-6 節, 66 章 15-16 節; ヨエル 3 章 9-14 節; ハガイ書 2 章 21-22 節; ゼカリヤ書 12 章 3 節, 14 章 1-3 節参照)。この描写の中に私たちは、戦いを行う際のメシヤの義と、千年王国の御座に着かれた後に平和を治める際の義とが、並行して示されているのを見ることができます。後者の場合、それは主の王国の**内において**悪を行うすべての者に対し、迅速で厳格でありながら完全に正しい報いを与えることになります。一方、ハルマゲドンの「ぶどうの収穫」の場合、それは主の王国の始まりを**外から**阻み、滅ぼそうとするすべての者を、義にかなって完全に滅ぼすことになるのです。

⑵その(＝メシヤの)上に主の霊がとどまる。これは知恵と悟りの霊、深慮と才能の霊、主を知る知識と主を恐れる霊である。⑶彼は主を恐れることを楽しみとし、その目の見るところによって、さばきをなさず、その耳の聞くところによって、定めをなさず、⑷正義をもって貧しい者をさばき、公平をもって国のうちの柔和な者のために定めをなし、その口のむちをもって国を撃ち、そのくちびるの息をもって悪しき者を殺す。(イザヤ 11 章 2-4 節)

このように見ていくと、良い政府の二つの主要な役割、すなわち国内の法と秩序を守ることと、外からの脅威から国を守ることの両方において、私たちの主の統治は、完全な知識と完全な正義によってなされることがわかります。この事実は、国内であれ国外であれ、主の敵にとっては恐るべきものとなるはずです。

⑽その着物にも、そのももにも、「王の王、主の主」という名がしるされていた。(黙示録 19 章 16 節)

前に19章12節の箇所で説明したように、私たちの主には多くの名があります。それはかつて存在した、またこれから存在するあらゆる民族・種族・民・国の数ほど多いのです。なぜなら、主はそのすべての上に立つ主権者だからです。したがって、ここで与えられる名は、すべての人々が主を知るための共通の名であり、それが「王の王、主の主」です。この称号は、主がすべてを支配しておられることを要約して示しているものです（第一テモテ 6 章 15 節，黙示録 17 章 14 節；申命記 10 章 17 節；詩篇 136 篇 2-3 節；ダニエル書 2 章 47 節）。

(4)ヨハネからアジヤにある七つの教会へ。今いまし、昔いまし、やがてきたるべきかたから、また、その御座の前にある七つの霊から、(5)また、忠実な証人、死人の中から最初に生れた者、地上の諸王の支配者であるイエス・キリストから、恵みと平安とが、あなたがたにあるように。わたしたちを愛し、その血によってわたしたちを罪から解放し、（黙示録 1 章 4-5 節）

2. 殺戮への誘い 黙示録 19 章 17-18 節

(17)また見ていると、ひとりの御使が太陽の中に立っていた。彼は、中空を飛んでいるすべての鳥にむかって、大声で叫んだ、「さあ、神の大宴会に集まってこい。(18)そして、王たちの肉、将軍の肉、勇者の肉、馬の肉、馬に乗っている者の肉、また、すべての自由人と奴隷との肉、小さき者と大いなる者との肉をくらえ」。（黙示録 19 章 17-18 節）

この「神の大いなる宴」は、空を飛ぶ鳥たちが反キリストの追随者の死体を食らうために招かれる呪いの宴です。これは、キリストの再臨後に行われる「小羊とその花嫁の婚宴」という祝福の宴と、意図的かつ皮肉な対照をなしています。この鳥たちによる「宴」の実際の描写は、少し後の 19 章 21 節に記されています。また、エゼキエル書 39 章にも、ハルマゲドンの戦いに関する同様の記述が見られます。

(1)人の子よ、ゴグに向かって預言して言え。主なる神はこう言われる、メセクとトバルの大君であるゴグ（すなわち、反キリスト）よ、見よ、わたしはあなたの敵となる。(2)わたしはあなたを引きもどし、あなたを押しやり、北の果から上らせ、イスラエルの山々に導き、(3)あなたの左の手から弓を打ち落し、右の手から矢を落させる。(4)あなたとあなたのすべての軍隊およびあなたと共にいる民たちは、

イスラエルの山々に倒れる。わたしはあなたを、諸種の猛禽と野獣とに与えて食わせる。(5)あなたは野の面に倒れる。わたしがこれを言ったからであると、主なる神は言われる。(エゼキエル 39 章 1-5 節)

(17)主なる神はこう言われる、人の子よ、諸種の鳥と野の獣とに言え、みな集まってこい。わたしがおまえたちのために供えた犠牲、すなわちイスラエルの山々の上にある、大いなる犠牲に、四方から集まり、その肉を食い、その血を飲め。(18)おまえたちは勇士の肉を食い、地の君たちの血を飲め。雄羊、小羊、雄やぎ、雄牛などすべてバシャンの肥えた獣を食え。(19)わたしがおまえたちのために供えた犠牲は、飽きるまでその脂肪を食べ、酔うまで血を飲め。(20)おまえたちはわが食卓について馬と、騎手と、勇士と、もろもろの戦士とを飽きるほど食べると、主なる神は言われる。(エゼキエル 39 章 17-20)

この箇所も黙示録 19 章 17-18 節と同じく、その殺りくは完全なものとして描かれています。人だけでなく動物も滅び、また獣に従う者たちは身分を問わず、すべて滅ぼされます。「奴隷」との言及は、反キリストの兵士の多くが徴兵された者であるという現実を示しています。しかし、だからと言って彼らが容赦されるというわけではありません。彼らは確かに獣の刻印を受けており、また間違いなく、獣の怒りを恐れてではなく、神の民を滅ぼし、キリストご自身に敵対する意図をもって彼に従うことを選んだのです。これは大迫害の時代に、多くの信者が直面することになる選択と同じようなものです。どちらの場合も、獣の怒りを恐れる者たちは、やがて「王の王」であられる再臨の主の怒りに直面することになります。「馬」への言及は、ヨハネとエゼキエルがこの光景を、彼らの時代的理解の範囲内で記していることを示しています。実際、ハルマゲドンに集結する世界の軍勢には、多くの馬や輸送動物が用いられる可能性もありますし、艱難期の出来事が人類文明の技術的退行をもたらす可能性も否定できません。

さらに解釈的な観点から見れば、「戦いのために備えられた馬」と「装甲兵員輸送車(APC)」との違いは、それほど大きくありません。戦闘用の馬は多くの装具で飾られていますが、それら(鞍、飾り金具、防護や装飾のための器具など)は食べられません。ただし、その馬の死体自体は食用にできます。一方で、APC は文字どおり食べられないものの、その内部には多くの「食べられるもの」があります。たとえば、乗員たちの遺体(通常は一人の「乗り手」ではなく複数)や、彼らの糧食が積まれているのです。このように、獣に従う者たちとそのすべてのものは、単なる被造物のための「いけにえ」となるのです。というのも、彼らは創造主ではなく、被造物を拝み、これに従うことを選んだからです(ローマ 1 章 25 節)。

3. 反キリストとその軍勢　黙示録 19 章 19 節

(19)なお見ていると、獣と地の王たちと彼らの軍勢とが集まり、馬に乗っているかたとその軍勢とに対して、戦いをいどんだ。(黙示録 19 章 19 節)

ここで反キリストが「地の王たち」を率いる者として描かれていることから、私たちは、世界中のすべての常備軍がすでに彼の支配のもとにあり、イスラエルへと集められていることを理解すべきです。さらに本文は、この集結の真の、そして狂気じみた目的が「イエス・キリストと戦うこと」にあるとはっきり示しています。したがって、イスラエルを滅ぼすという直接の目的は、主を戦いの場へと引き出すための単なる「餌」にすぎないのです。―なんという高慢がもたらす狂気でしょうか！しかしこの目的において、獣は自分の父である悪魔の命令に従っているだけでなく、人類の歴史が始まる以前に神に反逆したサタン自身の行動を真似ているのです。その結果は同じく比較にならないほど劇的で、しかも同様に迅速なものとなるのです。

この全世界の軍勢の集結場所は、すでに前にハルマゲドン(Armageddon)を扱った第 I 部第 6 節<ひとしずく 4938>で述べたように、エルサレムです。その東側の谷に、反キリストの軍列の先頭部隊――おそらく最も精鋭の戦士たち――が配置されるでしょう。そこが彼の作戦全体の重心(ドイツ語：シュベルプンクト Schwerpunkt)となり、その他の軍勢はエルサレムを中心に、北から南にかけて展開していくことになります。

(45)それから彼(反キリスト)は、海と海(すなわち地中海と死海)の間、聖なる美の山(すなわちエルサレムの神殿の山)の近くに、自分の王の天幕(王の陣営の幕屋)を張る。しかし、(ハルマゲドンの戦いでの成功を望んでいたにもかかわらず)彼は自らの終わりに至り、そのとき彼を助ける者は一人もいない。(ESV 訳　ダニエル 11 章 45 節)

(1)見よ、その日、その時に、わたしがユダとエルサレムの捕らわれ人を元に戻すとき、(2)わたしはすべての国々を集めて、ヨシャパテの谷(すなわち「主がさばかれる」という意味)に連れて行く。そして、わたしの民、わたしのゆずりの民イスラエルのために、彼らとそこでさばき合う。彼らはわたしの民を諸国の間に散らし、その土地を分け合ったから。(3)彼らはわたしの民のためにくじを引き、少年を遊女と取り替え、少女を酒と交換して飲んだ。

(ESV 訳　ヨエル 3 章 1-3 節)

「それゆえ、わたしを待て」と主は言われる。
「わたしが立ち上がって獲物を奪うその日まで。
わたしの決意は、国々を集め、王国を呼び集めて、
わたしの憤り、激しい怒りのすべてを
彼らの上に注ぐことにある。
全地は、わたしのねたみの火によって
焼き尽くされる。」

(ESV 訳 ゼパニヤ 3 章 8 節)

「沈黙せよ、島々よ。
国々よ、力を新たにせよ。
彼らは近づいて語れ。
私たちは共に、さばきの場で顔を合わせよう。」

（NIV 訳　イザヤ 41 章 1 節）

4. 獣と偽預言者の捕縛 黙示録 19 章 20 節

(20)そして獣は捕らえられ、また彼とともに偽預言者も捕らえられた。この偽預言者は、獣の前でしるしを行い、そのしるしによって、獣の刻印を受けた者たち、またその像を拝んでいた者たちを惑わしていた者である。この二人は、生きたまま、硫黄で燃える火の湖に投げ込まれた。(ESV 訳 黙示録 19 章 20 節)

この節は、主とその方法がいかにためらいのない、直接的なものであるかをはっきりと示しています。ハルマゲドンの大虐殺が本格的に始まる前に、すでに主は反キリスト(獣)とその偽預言者を、軍勢の先頭から取り除かれます。こうしてエルサレムを包囲する軍の指導者たちは、戦いの最も重要な局面で指揮系統を失うことになり、そのことが彼らの地上での最後の瞬間の恐怖をさらに強めるでしょう。ここに、主と共に歩むことの価値、そして主を敵に回すことの愚かしさが明確に示されています(エレミヤ 30 章 16 節参照)。その日、主のさばきは、主に逆らうことを選んだすべての者に対して、迅速かつ厳しく下されるのです(イザヤ 10 章 22-23 節; ローマ 9 章 28 節参照)。

獣と偽預言者――後者は反キリストの追随者たちを惑わす上で中心的な役割を果たした者ですが――この二人はすぐさま「生きたまま」火と硫黄の湖に投げ込まれます。これは、すべての不信者と堕落した天使たちが最終的に行き着く場所です。反キリストの行った忌まわしい行為は、世界史の中でも極めて特異であり、その悪の極致があまりにも明らかであるため、聖句にはこの即時の捕縛と処分について、特別な説明を加える必要すらありません。この二人は、いわゆる「第二の死」を最初に経験する者たちです[73]。彼らの場合、そのような最終的な審判はまったく不要です。なぜなら、彼らはその極端な言動によって、神に応答する意志が全くなかったことを、疑いようもなく、また論じる余地もないほどに全世界に示してしまったからです。実際、彼らは神とその民に対して、これまでに例のないほどの激しい反逆を行ったため、もはや彼らが自らの自由意志によって、主ではなく悪魔を選んだことを証明するために、追加の手続きは必要ありません。堕落した御使いたちと同様に、彼らの選びは完全に確定されており、人類の歴史そのものが――そして反キリストと偽預言者の場合には、彼らの時代とその行為が――すでに彼らの「裁判」となっているのです。

[73] 第二の死と火の池については、このシリーズの第 6 部で詳しく取り上げます。

(32) 主が彼らに下す懲らしめの一撃ごとに、タンバリンと竪琴の音が響く中で、主は御腕をもって彼らと戦われる。(33) トフェテ(トフェテ:すなわち火の湖)はすでに昔から備えられている(マタイ 25 章 41 節参照)。それは王(すなわち反キリスト)のために整えられた。**火の穴は深く広く掘られ、多くの薪が積まれている。主の息が、燃える硫黄の流れのように、それに火をつける。**(イザヤ 30 章 32-33 節/NIV)

私は見続けていた。あの角(すなわち反キリスト)が傲慢な言葉を語る声のために見続けていた。すると彼は殺され、その体は滅ぼされて、燃える火に投げ込まれた。(ダニエル 7 章 11 節/ESV)

彼(反キリスト)は、自らの忌まわしい行いの極みによって、荒廃(すなわち神からの離反と疎外)を引き起こすことになる。そして、終わりの時までその状態が続き、定められたものが、この荒廃の者(すなわち獣)の上に注ぎかけられる。(ダニエル 9 章 27 節後半/ESV)

彼は海と海の間(すなわち地中海と死海の間)に、聖なる美の山(すなわちエルサレムの神殿の山)の近くに、自分の王の天幕を張る。しかし彼の終わりは来て、彼を助ける者はいない。(ダニエル 11 章 45 節/NIV)

(13)あなたはご自分の民を救うため、油注がれた者を救うために出て行かれた。あなたは悪の国のかしらを打ち砕き、その頭から足まで裸にされた。セラ。(14) あなたは彼の槍で彼自身の頭を刺し貫かれた。彼の戦士たちは私たちを散らすために突進し、隠れている弱者をむさぼり食らおうとして喜んでいた。(ハバクク 3 章 13-14 節/ESV)

(8)そして不法の者(すなわち反キリスト)が現れるだろう。その者を、主イエスは御口の息で殺し、その輝かしい現れによって滅ぼされる。(9)この不法の者の出現は、サタンの力によって行われ、あらゆる偽りの奇跡、しるし、不思議を伴う。(10)また、滅びつつある者たちを惑わす、あらゆる不義の欺きが伴う。彼らは真理を愛して救われることを望まなかったために、このようになるのだ。(第二テサロニケ 2 章 8-10 節/ESV)

5. ハルマゲドンの戦い 黙示録 19 章 21 節

(21)それ以外の者たち(すなわち獣の軍勢)は、馬に乗っておられるかたの口から出るつるぎで切り殺され、その肉を、すべての鳥が飽きるまで食べた。(黙示録 19 章 21 節)

この一節はとても簡潔ですが、黙示録の中で私たちが知っておくべきハルマゲドンの戦いの本質を、はっきりと伝えています。つまり、主イエスはほんのわずかな時間で、反キリストに従うすべての軍勢を完全に滅ぼされ、その死体を、神によって呼び集められた鳥たちの餌食とされるのです。ここでこのように短くまとめられているのは、この「メシヤが支配を始める前の最後の戦い」が、聖書の他の多くの場所にすでに詳しく書かれているからです。実際、このハルマゲドンの戦いは、聖書の中で最も多く言及されている終末の出来事です。聖書の中のさまざまな箇所には、この戦いがどのように起こり、終わりの日に何が起きるのかについて、さらに多くの情報が書かれています。これから私たちは、ゼカリヤ書 14 章 2-7 節を手がかりにして、この最後の出来事の流れを順に見ていくことにします。この箇所は、特に詳しく調べる価値があります。

a.イエス・キリストのオリーブ山での再臨(ゼカリヤ 14 章 2-7 節)。

(2)わたしは万国の民を集めて、エルサレムを攻め撃たせる。町は取られ、家はかすめられ、女は犯され、町の半ばは捕えられて行く。しかし残りの民は町から断たれることはない。(3)その時、主は出てきて、いくさの日にみずから戦われる時のように、それらの国びとと戦われる。(ゼカリヤ 14 章 2-3 節)

黙示録のこれまでの箇所で、すでに反キリストと偽預言者によって、全世界の国々がイスラエルに集められていることを見てきました。この 2 節の状況によれば、エルサレムをめぐる戦いはすでにかなりの期間続いており、少なくとも世界中の軍隊を中東に集め、エルサレムを守っていた反乱勢力の拠点のほとんど、あるいはすべてを陥落させるほどの時間が経過していると考えられます(イザヤ 22 章 8 節)。ハルマゲドンへの召集からキリストの再臨までの 7 か月の期間(図 1 参照:このシリーズの最初に掲載されているタイムラインの図<ひとしずくでは#4932>)を考えると、エルサレムでの戦闘はすでに数ヶ月にわたって続いていた可能性があります。メシヤの再臨が差し迫るこの時点で、状況は非常に深刻です。反乱軍の抵抗は崩壊寸前であり、西側の半分はすでに反キリストの軍勢の手に落ちています。捕らえられた人々はひどい扱いを受け、女たちは暴行され(2 節)、若者たちは奴隷として売られ(ヨエル 3 章 1-8 節参照)、生き残った者たちも獣の捕虜となっています。しかし、状況が最も絶望的になったそのと

き、イエス・キリストがご自身の民を救うために来られます（イザヤ 49 章 24-26 節参照：「捕らわれ人は強者から救い出される」）。主はしばしば、私たちを完全に助けのない状態にまで導かれてから救い出されます。それは主の力がどれほど偉大であり、救うことができる方であるかを示すためです（第二コリント 12 章 10 節参照）。

かの亜麻布を着て、川の水の上にいた人が、天に向かって、その右の手と左の手をあげ、永遠に生ける者をさして誓い、それは、ひと時とふた時と半時である。**聖なる民を打ち砕く力が消え去る時に**、これらの事はみな成就するだろうと言うのを、わたしは聞いた。（ダニエル 12 章 7 節）

まったく希望がないように見えるその時、希望の主である方が戻って来られます。天の上に現れ、ご自分の教会を集められた後、天の軍勢の先頭に立ってすぐに地上へ降り、聖なる民の残りの者たちを救われるのです。

(4)まことに、主は私にこう言われる。「獅子、大いなる獅子が獲物に向かって唸るように—たとえ牧者たちの群れが総出で立ち向かおうとも、その叫びの声に恐れおののくことも、騒ぎに同様することもない--そのように、万軍の主はシオンの山とその高き所どころにおいて戦いをされるために降りてこられる。(5)全能の主は、空を舞う鳥のようにエルサレムを守り、覆い、救い出される。主はエルサレムを『過ぎ越し』て、それを救い出される。」（イザヤ 31 章 4-5 節/NIV）

4 節:

(4)その日には彼の足が、東の方エルサレムの前にあるオリブ山の上に立つ。そしてオリブ山は、非常に広い一つの谷によって、東から西に二つに裂け、その山の半ばは北に、半ばは南に移り、（ゼカリヤ14章4節）

この節がはっきり語るように、主は敵を打ち滅ぼす前に、まずエルサレムに残っている人々を救い出されます。主は実際に、町の東にあるオリーブ山（神殿とシオンの山を見おろす高台）に降り立たれます。オリーブ山は南北に長くのびた尾根のような山で、東側からエルサレムに行くにも出るにも、上り下りしなければならないため障害となっています。この山を二つに裂くという奇跡によって、大きな地震が起こります。これはエゼキエルが預言していたことです。

(18)しかし主なる神は言われる、その日、すなわちゴグがイスラエルの地に攻め入る日に、わが怒りは現れる。(19)わたしは、わがねたみと、燃えたつ怒りとを

もって言う。その日には必ずイスラエルの地に、大いなる震動があり、(20)海の魚、空の鳥、野の獣、すべての地に這うもの、地のおもてにあるすべての人は、わが前に打ち震える。また山々はくずれ、がけは落ち、すべての石がきは地に倒れる。(エゼキエル 38 章 18-20 節)]

主がこの障害を二つに裂かれることで、エルサレムに追い詰められていた人々や防衛者たちは逃げ道を得て、休息を与えられます。そして主は引き続き、終末の最後の戦いを決着させられるのです。これによって「信仰による約束」が成就します。「よく聞いておくがよい。だれでもこの山に、動き出して、海の中にはいれと言い、その言ったことは必ず成ると、心に疑わないで信じるなら、そのとおりに成るであろう。」(マルコ 11 章 23 節; 参照:マタイ 21 章 21 節; 第一コリント 13 章 2 節)。オリーブ山が動かされるこの出来事は、メシヤがもたらす勝利と救いを前もって喜ぶ時となるでしょう。

(9)よきおとずれをシオンに伝える者よ、高い山にのぼれ。よきおとずれをエルサレムに伝える者よ、強く声をあげよ、声をあげて恐れるな。ユダのもろもろの町に言え、「あなたがたの神を見よ」と。(10)見よ、主なる神は大能をもってこられ、その腕(すなわちイエス・キリスト)は世を治める。見よ、その報いは主と共にあり、そのはたらきの報いは、そのみ前にある。(イザヤ 40 章 9-10 節; 参照.ナホム 1 章 15 節)

(7)よきおとずれを伝え、平和を告げ、よきおとずれを伝え、救を告げ、シオンにむかって「あなたの神は王となられた」と言う者の足は山の上にあって、なんと麗しいことだろう。(8)聞けよ、あなたの見張びとは声をあげて、共に喜び歌っている。彼らは目と目と相合わせて、主がシオンに帰られるのを見るからだ。(9)エルサレムの荒れすたれた所よ、声を放って共に歌え。主はその民を慰め、エルサレムをあがなわれたからだ。(10)主はその聖なるかいなを、もろもろの国びとの前にあらわされた。地のすべての果は、われわれの神の救を見る。(イザヤ 52 章 7-10 節)

5 節:

(5)あなたがたは、わたしの山々(新しく裂けた二つの山)の谷を通って逃げるでしょう。その谷はまっすぐエルサレムまで続くのです[74]。あなたがたはユダの

[74] ヘブル語の「アツェル(地名 Atzel)」を少し違う母音で読む(「エツェル:〜のそばへ/〜の方へ」)と、「エルサレムの方へ」という意味になります。ゼカリヤ書 14 章 8 節では、その谷がエルサレムからアラバ(ヨルダンの谷)へ水を運ぶとあるので、その谷はエルサレム**まで続いている**と考えるのが

王ウジヤの時代の地震のときに逃げたように（すばやく）逃げるでしょう。そして、主であるわたしの神が[戦いに]来られ、すべての聖なる者たちが主とともに来られるのです。（ゼカリヤ 14 章 5 節/ESV;参照.ルカ 17 章 28-33 節）

ユダの王ウジヤの時代（紀元前 792～740 年ごろ）に起こった地震は、敵の攻撃と関係なく起こったものでした。そのため当時、エルサレムの人々が逃げた方向は、おそらく東のオリーブ山を登るのではなく、西へ下り、町の西側の谷を通って逃れたと考えられます。しかしこの時、ハルマゲドンの戦いの最中では、獣（反キリスト）の軍勢がすでにエルサレムの西側を占領し、さらに北と南からも包囲しているでしょう。したがって、逃げることができる唯一の方向は東側です。主がこの時にオリーブ山を裂いて開かれる「逃れの道」（第一コリント 10 章 13 節参照）は、まさに時を得た救いの道であり、エジプトの軍勢（反キリストの予型）から逃れるために紅海を開かれたときのように、主によって備えられた奇跡の脱出路となるのです。

6-7 節：

(6)その日には、光がなくなり、天の光（太陽や星の光）が止められるでしょう（直訳：「凝固する」）。(7)その日は、主だけが知っておられる特別な日となり、昼でも夜でもなく、夕方のころに光が現れるのです。（ゼカリヤ 14 章 6-7 節/ESV）

この節は、主がオリーブ山に降り立たれる前の出来事を説明しています。山が裂かれて人々が救われる出来事が、昔、主がイスラエルをパロの軍勢から救うために紅海を分けられたことを思い起こさせるように、ここでの「光が止められる」という超自然的な闇もまた、イスラエルがかつてエジプトから逃げ出す直前の状況を、意図的に思い出させるものです（ヨシュア 24 章 7 節; 出エジプト 14 章 19-20 節; 詩篇 105 篇 39 節参照）。

(2)見よ、暗きは地をおおい、やみはもろもろの民をおおう。しかし、あなたの上には主が朝日のごとくのぼられ、主の栄光があなたの上にあらわれる。(3)もろもろの国は、あなたの光に来、もろもろの王は、のぼるあなたの輝きに来る。（イザヤ 60 章 2-3 節）

自然です。

b. 恐るべきしるしと驚異：

主イエス・キリストの輝かしく栄光に満ちた再臨と、オリーブ山への降臨にともなって、天と地のさまざまなしるしと不思議なことが起こります。これらの出来事は、神に敵対する者たちを恐れさせ、同時に神の民を力づけるものとなります。天と地は激しく揺れ動き、神の超越した力が現されるのです。このような出来事は、旧約・新約の多くの預言の中で、再臨に関してすでに詳しく語られています。

それゆえ、万軍の主の憤りにより、その激しい怒りの日に、**天は震い**、地は**揺り動いて**、その所をはなれる。(イザヤ 13 章 13 節; 参照.イザヤ 24 章 17-20 節; マタイ 24 章 29 節; マルコ 13 章 25 節; ルカ 21 章 25-26 節)

(6)万軍の主[ご自身]の訪れ(すなわちハルマゲドンのさばき)が、[地上で]**雷と地震**とともに、そして強い声、**暴風、つむじ風、焼き尽くす炎**とともに臨む。(7)アリエル(すなわち、エルサレム)に向かって集まる国々の軍勢は、夜に見る幻のように、ただ夢のようになる。彼女とその要塞に対して陣を張り、包囲する者たち、そのすべてが。(イザヤ 29 章 6-7 節/ESV)

(2)主は国々に対して怒り、その怒りは彼らの軍勢すべてに向けられる。主は彼らを全く滅ぼし、屠殺に渡される。(3)彼らの死体は投げ捨てられ、その腐敗の悪臭が立ち上り、山々は彼らの血で染まる。(4)**星々の軍勢はすべて、ぶどうの木から落ちた枯れ葉のように、いちじくの木から落ちたしぼんだいちじくのように、散り落ちる。**(イザヤ 34 章 2-4 節/NIV)

(30)わたしはまた、**天と地とにしるし**を示す。すなわち血と、火と、煙の柱とがあるであろう。(31)主の大いなる恐るべき日が来る前に、日は暗く、月は血に変る。(ヨエル 2 章 30-31 節)

(15)日も月も暗くなり、星もその光を失う。(16)主はシオンから大声で叫び、エルサレムから声を出される。**天も地もふるい動く。**(ヨエル 3 章 15-16 節前半)

「しばらくして、**もう一度、わたしは天と地、海と陸を揺り動かす。**(7)わたしはすべての国々を揺り動かし、すべての国々の宝がこの宮に来る。そしてこの宮を栄光で満たす」と万軍の主は言われる。(ハガイ 2 章 6-7 節/NIV〔参照:ハガイ 2 章 21-22 節; ヘブル 12 章 26 節〕)

(12)小羊が第六の封印を解いた時、わたしが見ていると、大地震が起って、太陽は毛織の荒布のように黒くなり、月は全面、血のようになり、(13)天の星は、いちじくのまだ青い実が大風に揺られて振り落されるように、地に落ちた。(14)天は巻物が巻かれるように消えていき、すべての山と島とはその場所から移されてしまった。(15)地の王たち、高官、千卒長、富める者、勇者、奴隷、自由人らはみな、ほら穴や山の岩かげに、身をかくした。(16)そして、山と岩とにむかって言った、「さあ、われわれをおおって、御座にいますかたの御顔と小羊の怒りとから、かくまってくれ。(17)御怒りの大いなる日が、すでにきたのだ。だれが、その前に立つことができようか」。(黙示録6章12-17節; 参照.イザヤ2章19-21節, 51章6節; 第二ペテロ3章14節)

c. イスラエルの戦い

(2)主はわが主に言われる、「わたしがあなたのもろもろの敵をあなたの足台とするまで、わたしの右に座せよ」と。(2)主はあなたの力あるつえをシオンから出される。あなたはもろもろの敵のなかで治めよ。(3)**あなたの民は、**あなたがその軍勢を(すなわち、イスラエルの軍勢を)聖なる山々に導く日に**心から喜んでおのれをささげる**であろう。あなたの若者[の軍隊]は朝の胎から出る露のように(すなわち、新たに復活した者の軍隊が)あなたに来るであろう。(4)主は誓いを立てて、み心を変えられることはない、「あなたはメルキゼデクの位にしたがってとこしえに祭司である」。(5)主はあなたの右におられて、その怒りの日に[それらの]王たちを打ち破られる。(6)主はもろもろの国のなかでさばきを行い、しかばねをもって満たし、広い地を治める首領たちを打ち破られる(創世記 3 章 15 節参照)。(7)彼**[主の軍勢]**は道のほとりの川からくんで飲み、それによって、そのこうべをあげるであろう(士師記 15 章参照)。(詩篇 110 篇 1-7 節)

この最もよく知られたメシヤ預言の詩篇の一つでは、主イエス・キリストが地上に戻って統治を始めるられることと、ハルマゲドンの戦いのさなかでイスラエルの軍勢を助け、力を与えられることが、非常に明確に示されています。簡単に言えば、キリストご自身で、ほとんどの反キリストの軍勢を滅ぼされます(その口から出る鋭い剣によって:第二テサロニケ 2 章 8 節; 黙示録 1 章 16 節, 2 章 12 節, 2 章 16 節, 19 章 15 節, 19 章 21 節; 参照:イザヤ 11 章 4 節, 49 章 2 節)。しかし、キリストの再臨の瞬間に悔い改めて主に立ち返るユダヤ人の兵士たちは、この最後の戦いにおいて、その勝利の栄誉を分かち合うことを許されるのです。彼らは詩篇 110 篇 3 節にある「進んで志願する

民」であり、主の旗のもとに集まり、反キリストの軍勢を滅ぼすために進み出る者たちです。詩篇 110 篇 7 節のとおり、彼らは道ばたの川の水を飲むように、主によって新たな力と勇気を与えられ、艱難期の最後の戦いにおいて自らの役割を果たすことになるのです。

> (9)もろもろの国民の中に宣べ伝えよ。戦いの備えをなし、勇士をふるい立たせ、兵士をことごとく近づかせ、[エルサレムに]のぼらせよ。(10)あなたがたのすきを、つるぎに、あなたがたのかまを、やりに打ちかえよ。弱い者に「わたしは勇士である」と言わせよ。(11)周囲のすべての国民よ、急ぎ来て、集まれ。主よ、**あなたの勇士をかしこ[エルサレム]にお下しください。**(12)もろもろの国民をふるい立たせ、ヨシャパテの谷にのぼらせよ。わたしはそこに座して、周囲のすべての国民をさばく。(13)かまを入れよ、作物は熟した。来て踏め、酒ぶねは満ち、石がめはあふれている。彼らの悪が大きいからだ。(14)群衆また群衆は、さばきの谷におる。主の日がさばきの谷に近いからである。(15)日も月も暗くなり、星もその光を失う。(16)主はシオンから大声で叫び、エルサレムから声を出される。天も地もふるい動く。(ヨエル 3 章 9-16 節前半)

戦いはまずエルサレムで、反キリストに対して始まります。このときユダヤ人の防衛者たちは、すでに市街地の大部分が陥落しているにもかかわらず、神殿の丘を奪い返そうとする反キリスト軍をなんとか食い止めています(ゼカリヤ 9 章 8 節「わたしは、わたしの家のために、行き来する者の見張りとして衛所に立つ＜新改訳Ⅳ＞」参照。次節 9 章 10 節にはメシヤの再臨が続く)。したがって上で見たように、エルサレムとその防衛者たちは、主が「主の日の救い」という偉大な出来事を打ち出すための「金床(かなとこ)」となるのです。ただし、主ご自身が「ハルマゲドンのぶどうのしぼり場」を踏み始めるのはここではなく、戦いが完全に終わった後にエルサレムに戻られ、神殿で王座に着かれる時です(マラキ 3 章 1 節)。旧約でヨシュアがカナンに入ったとき、最初に南部を攻め、その後北部へと進軍しました(ヨシュア記 10-12 章)。ヨシュアがキリストの予型であり、その戦いが再臨の予型であることを思い出してください。同じように、主もまず「ユダ」を救い、その後にエルサレムに向かわれるのです。つまり、戦いの開始は南から始まります。このとき、反キリストの軍勢は北から南にかけて何百キロにもわたる大弧状の陣形で展開し、エルサレムはその中央(凹の中心)に位置しています。主はまず南部の軍勢を滅ぼし、そこから北へ、そして再び東南に向かって進軍し、最後にエルサレムへ戻られるという、三角形あるいは時計回りのような経路で敵を徹底的に掃討されるのです。[75] これが、ゼカリヤ書 12 章の背後にある本質的な意味です。そこで

---

[75] このこと(主が南から来られると描かれる理由)も、主の再臨に関するいくつかの聖書箇所を理解

は、「エルサレムの栄誉」がユダのそれよりも大きくはならないと預言されています。これは、どちらかが優れているとか劣っているという理由によるものではありません。むしろ、主のハルマゲドンにおける戦いの進め方がそのようであるからです。すなわち、その戦いはオリーブ山の分裂とエルサレムの防護から始まり、そこから南へ進み、さらに南から北へ、そして再び南東へと戻ってエルサレムに至るのです。その経路は三角形、あるいは時計回りの形をしており、滅びの網の中に最後の敵までもすべて巻き込むように設計されているのです。

(2)「見よ、わたしはエルサレムを、その周囲にあるすべての民をよろめかす杯にしようとしている。これはエルサレムの攻め囲まれる時、ユダにも及ぶ。(3)その日には、わたしはエルサレムをすべての民に対して重い石とする。これを持ちあげる者はみな大傷を受ける。地の国々の民は皆集まって、これを攻める。(4)主は言われる、その日には、わたしはすべての馬を撃って驚かせ、その乗り手を撃って狂わせる。しかし、もろもろの民の馬を、ことごとく撃って、めくらとするとき、ユダの家に対しては、わたしの目を開く。(5)その時**ユダの諸族**は、その心の中に『エルサレムの住民は、その神、万軍の主によって力強くなった』と言う。(6)その日には、**わたしはユダの諸族を、たきぎの中の火皿のようにし、麦束の中のたいまつのようにする。**彼らは右に左に、その周囲にあるすべての民を、焼き滅ぼす。しかしエルサレムはなお、そのもとの所、すなわちエルサレムで、人の住む所となる。(すなわち、完全に滅ぼされることはない)(7)**主は**まず**ユダの幕屋を救われる。**これはダビデの家の光栄と、エルサレムの住民の光栄とが、ユダの光栄にまさることのないようにするためである。(8)その日、**主はエルサレムの住民を守られる。**彼らの中の弱い者も、その日には、ダビデのようになる。またダビデの家は神のように、彼らに先だつ主の使のようになる。(9)その日には、わたしはエルサレムに攻めて来る国民を、ことごとく滅ぼそうと努める。(ゼカリヤ 12 章 2-9 節)

上記の箇所からわかるように、私たちの主イエスが反キリストの軍隊を滅ぼすという御業を行っている間、主の霊はエルサレムのイスラエル軍を力づけ、保護します。 主の日にユダヤ軍を守り、鼓舞し、戦いに力を与えることは、実際、他の多くの聖句でも預言されています:

する手がかりになります。

主イエス・キリストの「報復の行軍(審きの進軍)」は南の方向から進むため、聖書では再臨がしばしば南から進軍する主として描かれています。たとえば:申命記 33 章 2-5 節; イザヤ 63 章 1-6 節; ハバクク 3 章 3-13 節(特に 13-14 節は反キリストへの言及; 参照.ゼカリヤ 9 章 14 節)。

上空を飛ぶ鳥のように、全能の主はエルサレムを守られ、救い出され、エルサレムの上を「過ぎ越されて」救われる。(イザヤ 31 章 4-5 節 NIV)

その日(ハルマゲドンの日)、万軍の主はその民の残った者のために、栄えの冠[のようなもの]となり、麗しい[髪飾りのような]冠となられる。 また、さばきの席に座する者(すなわち、政治的、軍事的な指導者)には[良い裁きを促す]さばきの霊となり、戦いを門まで追い返す者(すなわち、兵士ら)には力となられる。(イザヤ 28 章 5-6 節)[76]

(11)いま多くの国民はあなた[シオン]に逆らい、集まって言う、「どうかシオンが汚されるように、われわれの目がシオン[の敗北]を見てあざ笑うように」と。(12)しかし彼らは主の思いを知らず、またその計画を悟らない。すなわち主が麦束を打ち場に集めるように、彼らを[故意に]集められることを悟らない。(13)シオンの娘よ、**立って打ちこなせ。**わたしはあなたの角を鉄となし、あなたのひずめを青銅としよう。あなたは多くの民を打ち砕き、彼らのぶんどり物を主にささげ、彼らの富を全地の主にささげる。(ミカ 4 章 11-13 節)

(13)**わたしはユダを張って、わが弓となし、**エフライム(＝南と北＝イスラエルの全部を合わせたもの)をその[弓の弦を満たす]矢とした。シオン(＝エルサレム)よ、わたしはあなたの子らを[武器のように]呼び起して、ギリシヤの人々(すなわち、ヤワン;反キリストの「予型」であるアンティオコスの出自を指す)を攻めさせ、あなたを勇士のつるぎのようにさせる。(14)その時、主は彼らの上に現れて、その矢をいなずまのように射られる。主なる神はラッパを吹きならし、南のつむじ風に乗って出てこられる。(参照.イザヤ 21 章 1 節)(15)**万軍の主は彼らを守られる**ので、彼らは石投げども(敵)を食い尽し、踏みつける。彼らはまたぶどう酒のように彼らの血を飲み、鉢のようにそれで満たされ、祭壇のすみのように浸される。(16)その日、彼らの神、主は、彼らを救い、その民を羊のように養われる。(ゼカリヤ 9 章 13-16 節前半)

---

[76] この箇所の歴史的背景は、ハルマゲドンの恐怖とイスラエルの苦境を比較するために、主の日のパラダイムを用いた北王国の差し迫った滅亡です。 イザヤ書 28 章の 2 節は、反キリスト(主が「力づくで地に投げ捨てる 」人)についての預言的言及であることに注意してください。

(3)…万軍の主が、その群れの羊であるユダの家を顧み、これをみごとな軍馬のようにされるからである(4)隅石は彼ら[ユダの家]から出、天幕の杭も彼ら[ユダの家]から出、いくさ弓も彼ら[ユダの家]から出、支配者も皆彼ら[ユダの家]の中から出る。(5)**彼らが戦う時は勇士のようになって、道ばたの泥の中に敵を踏みにじる。**主が彼らと共におられるゆえに彼らは戦い、馬に乗る者どもを困らせる。(6)わたしはユダの家を強くし、ヨセフの家を救う。わたしは彼らをあわれんで、彼らを連れ帰る。彼らはわたしに捨てられたことのないようになる。わたしは彼らの神、主であって、彼らに答えるからである。(7)エフライムびとは勇士のようになり、その心は酒を飲んだように喜ぶ。その子供らはこれを見て喜び、その心は主によって楽しむ。(ゼカリヤ 10 章 3 節後半-7 節前半)

(5)これ(メシヤ)は平和である。アッスリヤびと(すなわち、反キリストの世界連合の予型)がわれわれの国に来て、われわれの土地を踏むとき、七人の牧者を起し、八人の君(すなわち、七人とイザヤ 22 章 20-25 節のセブナに代表される執事)を起してこれに当らせる。(6)彼らはつるぎをもってアッスリヤの地を治め、ぬきみのつるぎをもってニムロデの地を治める。アッスリヤびとがわれわれの地に来て、われわれの境を踏み荒すとき、<[私たちの平和である]主は ESV(口語では「彼らは」>アッスリヤびとから、われわれを救う。(7)その時ヤコブの残れる者は多くの民の中にあること、人によらず、また人の子らを待たずに主からくだる露のごとく、青草の上に降る夕立ちのようである。(8)またヤコブの残れる者が国々の中におり、多くの民の中にいること、林の獣の中のししのごとく、羊の群れの中の若いししのようである。それが過ぎるときは踏み、かつ裂いて救う者はない。(9)あなたの手はもろもろのあだの上にあげられ、あなたの敵はことごとく断たれる。(ミカ 5 章 5-9 節前半)

上の箇所では、「ユダの将軍たち」は七人であり、その上に全体の作戦を指揮する一人の司令官がいると示されています。暗闇で始まり、「夕方には光がある」(ゼカリヤ 14 章 6-7 節)と記される、この短く特定されない「日」においては(それはギベオンでのヨシュアの勝利の日が超自然的に延長されたように〔ヨシュア記 10 章 12-13 節〕)、ユダヤの軍勢は主ご自身によって鼓舞され、力づけられ、誰にも止められないものとなります。敵はエルサレムの前から恐れて逃げ去るでしょう。

ユダもエルサレムで戦う。(ゼカリヤ 14 章 14 節)

(9)もろもろの国民の中に宣べ伝えよ。戦いの備えをなし、勇士をふるい立たせ、兵士をことごとく近づかせ、(エルサレムに)のぼらせよ。(10)あなたがたのすきを、つるぎに、あなたがたのかまを、やりに打ちかえよ。弱い者に「わたしは勇士である」と言わせよ。(11)周囲のすべての国民よ、急ぎ来て、集まれ。主よ、あなたの勇士をかしこに(エルサレムに)お下しください。(12)もろもろの国民を[その場所から]ふるい立たせ、ヨシャパテの谷にのぼらせよ。わたしはそこに座して、周囲のすべての国民をさばく。(13)かまを入れよ、作物は熟した。来て踏め、酒ぶねは満ち、石がめはあふれている。彼らの悪が大きいからだ。(14)群衆また群衆は、さばきの谷におる。主の日がさばきの谷に近いからである。(15)日も月も暗くなり、星もその光を失う。(16)主はシオンから大声で叫び、エルサレムから声を出される。天も地もふるい動く。しかし主はその民の避け所、イスラエルの人々のとりでである。(ヨエル 3 章 9-16 節)

(9)もろもろの民よ、打ち破られて、驚きあわてよ。遠き国々のものよ、耳を傾けよ。腰に帯して、驚きあわてよ。腰に帯して、驚きあわてよ。(10)ともに計れ、しかし、成らない。言葉を出せ、しかし、行われない。神がわれわれと共におられる(すなわち、インマヌエル)からである。(イザヤ 8 章 9-10 節)

d. 大いなる殺戮 ：

主イエス・キリストはまず東(すなわち日の出の方向、幕屋や神殿が向けられていた方角:出エジプト記 27 章 12-13 節; エゼキエル書 11 章 23 節, 41 章 14 節, 43 章 1-4 節)からオリーブ山に降られます。オリーブ山を二つに裂かれたのち、エルサレムの神殿に入られるまでのあいだ、エルサレムに敵対する諸国民は、主の怒りの激しさと、主の民に対する熱いねたみの完全な表れを知ることになります。

1)ぶどうの収穫(裁き) ：

ハルマゲドンにおけるこの殺りく、すなわち「ぶどうの収穫(vintage)」は、私たちの主イエス・キリストご自身によって行われます。その手段は、主の口から出る恐ろしくも迅速な剣です(第二テサロニケ 2 章 8 節; 黙示録 1 章 16 節, 2 章 12 節, 2 章 16 節, 19 章 15 節, 19 章 21 節参照; イザヤ 11 章 4 節, 49 章 2 節比較)。というのも、「戦いは主のものだからです」(サムエル上 17 章 47 節; 歴代誌下 20 章 15 節)。かつてパロとエジプトの軍勢が、イスラエルを滅ぼそうとして紅海の干上がった海底に突き進み、結局は主の御手によって自ら滅びに至ったように、獣の率いるこの膨大な軍勢もまた、ま

さに同じような滅びの場へと導かれているのです。

(5)主はあなたの右におられ、その怒りの日に王たちを打ち砕かれる。(6)主は国々の間で裁きを行われる。[77] 地は屍で満たされ、主は広くその地でかしら(創世記 3 章 15 節参照)を打ち砕かれる。(詩編 110 章 5-6 節/ESV)

見よ、主は火をもって来られ、その戦車はつむじ風のようだ。主は激しい怒りをもって憤りを下し、火の炎をもって戒めを下される。主は火と剣をもってすべての人を裁かれ、主に殺される者は多い。(イザヤ 66 章 15-16 節/NIV)

(11)またわたしが見ていると、天が開かれ、見よ、そこに白い馬がいた。それに乗っているかたは、「忠実で真実な者」と呼ばれ、義によってさばき、また、戦うかたである。(12)その目は燃える炎であり、その頭には多くの[王]冠があった。また、彼以外にはだれも知らない名がその身にしるされていた。(13)**彼は血染めの衣をまとい、**その名は「神の言」と呼ばれた。(14)そして、天の軍勢が、純白で、汚れのない麻布の衣を着て、白い馬に乗り、彼に従った。(15)**その口からは、諸国民を打つために、鋭いつるぎが出ていた。彼は、**鉄のつえをもって諸国民を治め、また、全能者なる神の激しい怒りの**酒ぶねを踏む。**(16)その着物にも、そのももにも、「王の王、主の主」という名がしるされていた。(17)また見ていると、ひとりの御使が太陽の中に立っていた。彼は、中空を飛んでいるすべての鳥にむかって、大声で叫んだ、「さあ、神の大宴会に集まってこい。(18)そして、王たちの肉、将軍の肉、勇者の肉、馬の肉、馬に乗っている者の肉、また、すべての自由人と奴隷との肉、小さき者と大いなる者との(悪者どもの)肉をくらえ」。(19)なお見ていると、獣と地の王たちと彼らの軍勢とが集まり、[白い]馬に乗っているかたとその軍勢とに対して、戦いをいどんだ。(20)しかし、獣は捕えられ、また、この獣の前でしるしを行って、獣の刻印を受けた者とその像を拝む者とを惑わしたにせ預言者も、獣と共に捕えられた。そして、この両者とも、生きながら、硫黄の燃えている火の池に投げ込まれた。(21)それ以外の者たち[獣の軍勢]は、[白い]馬に乗っておられるかたの**口から出るつるぎで切り殺され**、その肉を、すべての鳥が飽きるまで食べた。(黙示録 19 章 11-21 節)

上に示された文脈全体が再び明らかにしているように、ハルマゲドンの戦いは、ぶど

[77] この「国々への裁き」は、まさにハルマゲドンを預言しているものであり、すべての国々がエルサレムに対して集まるときに成就する。このテーマは旧約の多くの預言書でも繰り返し現れており、「諸国に対する裁き」の預言として広く展開されている(参照:イザヤ書 14～27 章、エレミヤ書 46～51 章、エゼキエル書 25 章・35 章、アモス書 1～2 章、オバデヤ書、ゼパニヤ書 2 章)。

うの踏み場でぶどうを踏みしだく光景として描かれています。その過程で、踏みつける者が「ぶどうの血」を浴びずにはいられないのです。この非常に生々しい描写は、主が獣の軍勢を打ち滅ぼされるさまの凄まじさを、私たちの心に深く刻みつけるためのものです。イエス・キリストのハルマゲドンでの勝利は、主に逆らうことの愚かさを、もはや疑う余地のないほど明確に示すことになります。こうして、圧倒的な力によってもたらされた決定的な勝利の上に築かれる主の千年王国は、比類のない繁栄の時代の基礎を築くのです。その完全な統治のもとでは、不従順や反逆はいっさい許されず、義に生きる者たちは平和のうちに暮らすことができるようになります。

彼（すなわちユダ、ひいてはメシヤ）は、そのろばをぶどうの木につなぎ、その若い馬を最良の枝に結ぶ（マタイ21章1-8節参照）。彼はその衣をぶどう酒で洗い、その衣服をぶどうの血で洗う（創世記 49 章 11 節/NIV）。

(1)エドムから、ボツラから、紅く染まった衣をまとって来られるこの者は、いったい誰か。輝きに包まれ、御力の大いなるゆえに、堂々と進んでおられるこの者は誰なのか。――「それはわたしである。義をもって語り、救う力に富むわたしが、それだ。」(2)なぜ、あなたの衣は赤いのか。まるで、ぶどうの踏み場でぶどうを踏む者のように見える。(3)「わたしは、ひとりでぶどうの踏み場を踏んだ。諸国の民の中から、わたしと共にいる者はひとりもいなかった。わたしは怒りのうちに彼らを踏みつけ、憤りのうちに彼らを踏み倒した。その血はわたしの衣にふりかかり、わたしのすべての衣服を汚した。(4)復讐の日がわたしの心にあり、わたしの贖いの年が来たからである。(5)わたしは見渡したが、助ける者はひとりもおらず、支える者もいないことに驚いた。だから、わたしの腕（すなわちメシヤ）が自らのために救いをもたらし、わたしの憤りがわたしを支えた。(6)わたしは怒りのうちに諸国の民を踏みつけ、憤りのうちに彼らを酔わせ、その血を地に注ぎ出した」。（イザヤ 63 章 1-6 節/NIV）

(30)「それゆえ、あなたはこれらすべての言葉を彼らに預言して言え。『主は高い所からほえられ、聖なるすまいから声をあげられる。主はご自分の地に向かって力強くほえられ、**ぶどうを踏む**者のように叫ばれる。その叫びは地に住むすべての者に向けられる。(31)その騒ぎは地の果てまで響く。主は諸国の民に対して訴えを起こされるからである。主はすべての人にさばきを下され、悪しき者を剣に渡される』と――主の御告げ。(32)万軍の主はこう言われる。『見よ、わざわいが国から国へと広がり、力強い嵐が地の果てから起こる。』」（エレミヤ 25 章 30-32 節/NIV）

(12)もろもろの国民をふるい立たせ(その場所から)、ヨシャパテの谷(すなわち「主がさばかれる」という意味の谷)にのぼらせよ。わたしはそこに座して、周囲のすべての国民をさばく。(13)かまを入れよ、作物は熟した。来て踏め、酒ぶねは満ち、石がめはあふれている。彼らの悪が大きいからだ。(14)群衆また群衆は、さばきの谷におる。主の日がさばきの谷に近いからである。(15)日も月も暗くなり、星もその光を失う。(16)主はシオンから大声で叫び、エルサレムから声を出される。天も地もふるい動く。(ヨエル 3 章 12-16 節前半)

(17)また、もうひとりの御使が、天の聖所から出てきたが、彼もまた鋭いかまを持っていた。(18)さらに、もうひとりの御使で、火(すなわち、裁き)を支配する権威を持っている者[天使]が、祭壇から出てきて、鋭いかまを持つ御使にむかい、大声で言った、「その鋭いかまを地に入れて、**地のぶどうのふさを刈り集めなさい。ぶどうの実がすでに熟しているから**」。(19)そこで、御使はそのかまを地に投げ入れて、**地のぶどうを刈り集め、神の激しい怒りの大きな酒ぶねに投げ込んだ。**(20)そして、**その酒ぶね**が都の外で**踏まれた。**すると、**血が酒ぶねから流れ出て**、馬のくつわにとどくほどになり、一千六百丁(約一四三マイル＝230 キロメートル)にわたってひろがった。(黙示録 14 章 17-20 節)

パロの軍隊が滅んだ場合と同様に、この殺りくは完全なものであり、生き残る者は一人もいません。反キリストとその父である悪魔のために行動するすべての者は、自らの行為について完全に責任があると見なされ、命をもってその報いを受けることになります。

(2)主は諸国の民に対して怒られ、その憤りは彼らのすべての軍勢に注がれる。主は彼らを**ことごとく滅ぼし**、彼らを殺りくに渡される。(3)その殺された者たちは投げ捨てられ、その死体は悪臭を放ち、山々は彼らの血で満たされる。(イザヤ 34 章 2-3 節/NIV)

(21)「わたしはゴグに向かって、わたしのすべての山々の上に剣を呼び寄せる」と、主なる神は言われる。人はそれぞれ、その兄弟に向かって剣を向けるようになる。(22)わたしは疫病と流血をもって彼をさばく。また、**激しい雨と雹、燃える硫黄を**、彼とその軍勢、そして彼と共にいる多くの国々の上に**降らせる。**(23)こうして、わたしは自分の偉大さと聖さを示し、多くの国々の目の前で自らを知られるようにする。そのとき、彼らはわたしが主であることを知る。(エゼキエル 38 章 21-23 節/NIV)

2) 疫病と狂気

獣の軍勢の兵士たちのうち、主ご自身によって――その恐ろしくも迅速な剣、あるいは雹と燃える硫黄の疫病(エゼキエル 38 章 21-23 節; イザヤ 29 章 6 節参照)によって――滅ぼされなかった者たち、また新たに力を得たユダヤの軍によって倒されなかった者たちは、仲間の兵士たちの剣によって倒れることになります(士師記 7 章 22 節; サムエル上 14 章 20 節; 歴代誌下 20 章 23 節; イザヤ 19 章 2 節参照)。あるいは、足で立っているうちに、腐り果てるのです。こうして、主に敵対する者は、最後の一人に至るまで滅ぼされます。このような、神によってもたらされる狂気と恐るべき疫病の組み合わせは、人類の歴史の中で他に例を見ないものです。これこそメシでヤであり、私たちの主であり、救い主であるイエス・キリストに逆らうことの愚かさなのです。

(12)これは、主がエルサレムを攻めるどの民にも加えられる疫病である。**彼らの肉は、まだ足で立っているうちに腐る。彼らの目はまぶたの中で腐り、彼らの舌は口の中で腐る。**(13)その日、主からの**大いなる混乱**＜**狂気**-ESV＞が、彼らの間に起こる。彼らは互いに手でつかみ合い、互いに殴りかかる(つまり、互いに攻撃し合う)。(14)ユダもエルサレムで戦う。周りのすべての国々の財宝は、金、銀、衣服など非常に多く集められる。(15)馬、らば、らくだ、ろば、彼らの宿営にいるすべての[他の]家畜にも、[兵士らに降りかかるのと]同じような疫病が臨む。(新改訳Ⅳ　ゼカリヤ 14 章 12-15 節)

私は王座を覆し、外国の王国の力を砕く。戦車とその者を打ち破り、馬とその乗る者は、**それぞれ兄弟の剣によって倒れる。**(ハガイ 2 章 22 節/NIV)

その日、主は言われる。「**わたしはすべての馬を恐れと混乱で打ち、すべての乗り手を狂気で打つ。**しかし、ユダの家に対しては、わたしは目を開いて顧みる。それに対して、[彼女(イスラエル)に敵対して集まる]すべての民の馬の目を、わたしは盲目にする。」(ゼカリヤ書 12 章 4 節/ESV)

(24)勇士から獲物を奪い取ることができるでしょうか。また、強暴な者から捕らわれ人を救い出すことができるであろうか。(25)しかし、主はこう言われる。「できる。勇士らから捕らわれ人は奪い返され、強暴な者どもから獲物は取り戻される。わたしはあなたと争う者と争い、あなたの子らを救う。(26)**わたしはあなたを虐げる者たちに、自分の肉を食べさせる。彼らはぶどう酒を飲むように、自分の血に酔うようになる。**そのとき、すべての人が、わたしこそ主、あなた

の救い主、あなたを贖う者、ヤコブの力ある者であることを知るであろう。（イザヤ 49 章 24-26 節/NIV）

(21)「わたしはゴグに向かって、わたしのすべての山々の上に剣を呼び寄せる」と、主なる神は言われる。人はそれぞれ、その兄弟に向かって剣を向けるようになる。(22)**わたしは疫病と流血をもって彼をさばく。**また、激しい雨と雹、燃える硫黄を、彼とその軍勢、そして彼と共にいる多くの国々の上に降らせる。(23)こうして、わたしは自分の偉大さと聖さを示し、多くの国々の目の前で自らを知られるようにする。そのとき、彼らはわたしが主であることを知る。（エゼキエル 38 章 21-23 節/NIV）

3) ハルマゲドンの葡萄畑

(12)諸国の民を奮い立たせ、[自分たちのいた場所から]進み出させよ。彼らをヨシャパテの谷へ上らせよ。そこで、わたしは周囲のすべての国々をさばくために座す。(13)鎌を入れよ。収穫は熟している。**踏み場に下りよ。**踏み場はいっぱいで、酒ぶねはあふれている。彼らの悪は非常に大きいからだ。(14)群衆また群衆が、滅びの谷の中に！主の日は近い、滅びの谷において。(ヨエル書3章12-14節/ESV)

「ヨシャパテの谷」は、聖書の中でここにのみ言及されており、その名は「主が裁く」という意味です。これは、エルサレムから西に向かって下る一連の峡谷やワジ（涸れ川）の地形を指す詩的な表現です（北や南にも枝分かれしています）。[78] これらの谷は自然の進軍路となるため、反キリストの軍勢が、前線の戦闘部隊から後方の補給部隊に至るまで、そこにびっしりと満ちることになります。

(2)主は諸国の民に対して怒っておられ、その憤りは彼らのすべての軍勢に向けられている。主は彼らをことごとく滅ぼし、彼らを殺りくに渡される。(3)その殺された者たちは投げ捨てられ、その死体は悪臭を放ち、**山々は彼らの血で満たされる。**（イザヤ 34 章 2-3 節/NIV）

この箇所が示しているように、この殺りくはエルサレムの西側に広がる谷の連なりに限定されるものではなく、反キリストの軍勢が集結している全地域に及ぶことになります。

---

[78] ダビデの町とオリーブ山を隔てるケデロンの谷の東側の斜面については、ここで言及されている谷をそれとする推測がよくなされます。しかし、エルサレムの住民が割れて開かれたオリーブ山を通ってケデロンの谷を越えて逃げなければならないという事実は、その解釈にとって致命的な欠陥となります。

谷を隔てる尾根は防御のための高地であり、当然ながらエルサレムへの攻撃において無視することはできません。そのため、最精鋭の突撃部隊の一部がこれらの尾根を制圧し、エルサレムへと進む任務を担うものと思われます。世界中の軍隊を集結させ、ユダの丘陵地全域を攻撃するために必要な展開地域の総面積は、必然的に非常に広大なものとなるでしょう。黙示録そのものは、この「ぶどうの踏み場」あるいは「殺戮の地」と呼ばれる場所――すなわち、悪魔の子である獣のもとに集まった地上の軍勢が最後の戦いを迎える場所――について、きわめて具体的な範囲の詳細を示しています。

> (17)また、もうひとりの御使が、天の聖所から出てきたが、彼もまた鋭いかまを持っていた。(18)さらに、もうひとりの御使で、火(すなわち、裁き)を支配する権威を持っている者[天使]が、祭壇から出てきて、鋭いかまを持つ御使にむかい、大声で言った、「その鋭いかまを地に入れて、地のぶどうのふさを刈り集めなさい。ぶどうの実がすでに熟しているから」。(19)そこで、御使はそのかまを地に投げ入れて、地のぶどうを刈り集め、**神の激しい怒りの大きな酒ぶね**に投げ込んだ。(20)そして、**その酒ぶねが都の外で踏まれた。**すると、血が酒ぶねから流れ出て、馬のくつわにとどくほどになり、一千六百丁(約一四三マイル≒230キロメートル)にわたってひろがった。(黙示録 14 章 17-20 節)

その範囲はエルサレムを中心としており、現在のイスラエルの北部、ガリラヤ湖とほぼ同じ緯度に位置する地点から、死海の最南端からさらにおよそ三十二キロ南の地点にまで及びます。

> (3)神はテマンから来られ、聖なる方はパランの山から来られる。その栄光は天をおおい、その誉れは地に満ちる。(4)その輝きは光(そのもの)のように(すなわち太陽よりもまばゆく)放たれる。光[の光線]が主の御手から放たれ、そこに隠されていた御力が現れる。(5)疫病は主の前を進み、いなずまは主の後を従える。(6)主は立って大地の広さを測り、目を注いで国々を断ち切られる。(ハバクク書 3 章 3-6 節/ESV)

テマンとパランの山は、ネゲブ地方(または聖書的にはエドム)に位置しており、死海の南、すなわちエルサレムの南にあります。[79] そしてそれは、獣の主要な軍事展開の南端を示しています。これらの節において私たちは、反キリストの軍勢を滅ぼす主の戦いの様子を、これまでに引用した他の聖書箇所と完全に一致する形で見ることがで

---

[79] M.F.ウンガー『ウンガー旧約聖書注解 第 2 巻』(シカゴ:ムーディ出版社、1981 年)該当箇所参照。M.F. Unger, Unger's Commentary on the Old Testament vol. 2 (Chicago: Moody, 1981), in loc.

きます。ただし、ここではその攻撃の方向が明確に示されています。すなわち、攻撃は反キリストの軍の南側に対して始まり、北へと進んで終わるのです。これは、ヨシュアが約束の地を占領する際の戦いの進行とまったく同じであり(ヨシュア記 6 章～12 章参照)、詩篇 68 章 4-17 節およびイザヤ 40 章 3-5 節にも対応しています。

(20)わたしは北の軍勢をあなたがたから遠く追いやり、乾いた荒れ地へと押しやる。その先陣は東の海に、後陣は西の海に投げ込む。その悪臭は立ちのぼり、その悪臭は上がる。「まことに主は大いなることをなさいました」。(ヨエル書 2 章 20 節/NIV)

獣の軍勢はここで全体として「北の軍」と呼ばれています。これは、その大部分がイスラエルの地に北から進入してくるためです。[80] この箇所では栄光に満ちた主が、その軍のただ中を大きく切り裂きながら進まれるという、恐るべき光景に対する諸国の反応が描かれています。狂気に陥った彼らの多くは西方および北西へ逃れ、地中海で滅びます。また、他の多くは南東へ逃れ、死海で滅びます。これは、エジプト軍がパニックに陥り滅んだ出来事を思い起こさせるものです(出エジプト記 14 章 24-25 節参照)。

(27)見よ、主の名は遠い所から燃える怒りと、立ちあがる濃い煙をもって来る。そのくちびるは憤りで満ち、その舌は焼きつくす火のごとく、(28)その息はあふれて首にまで達する流れのようであって、滅びのふるいをもってもろもろの国をふるい、また**惑わす**手綱をもろもろの民のあごにつけるために来る。(イザヤ書 30 章 27-28 節)

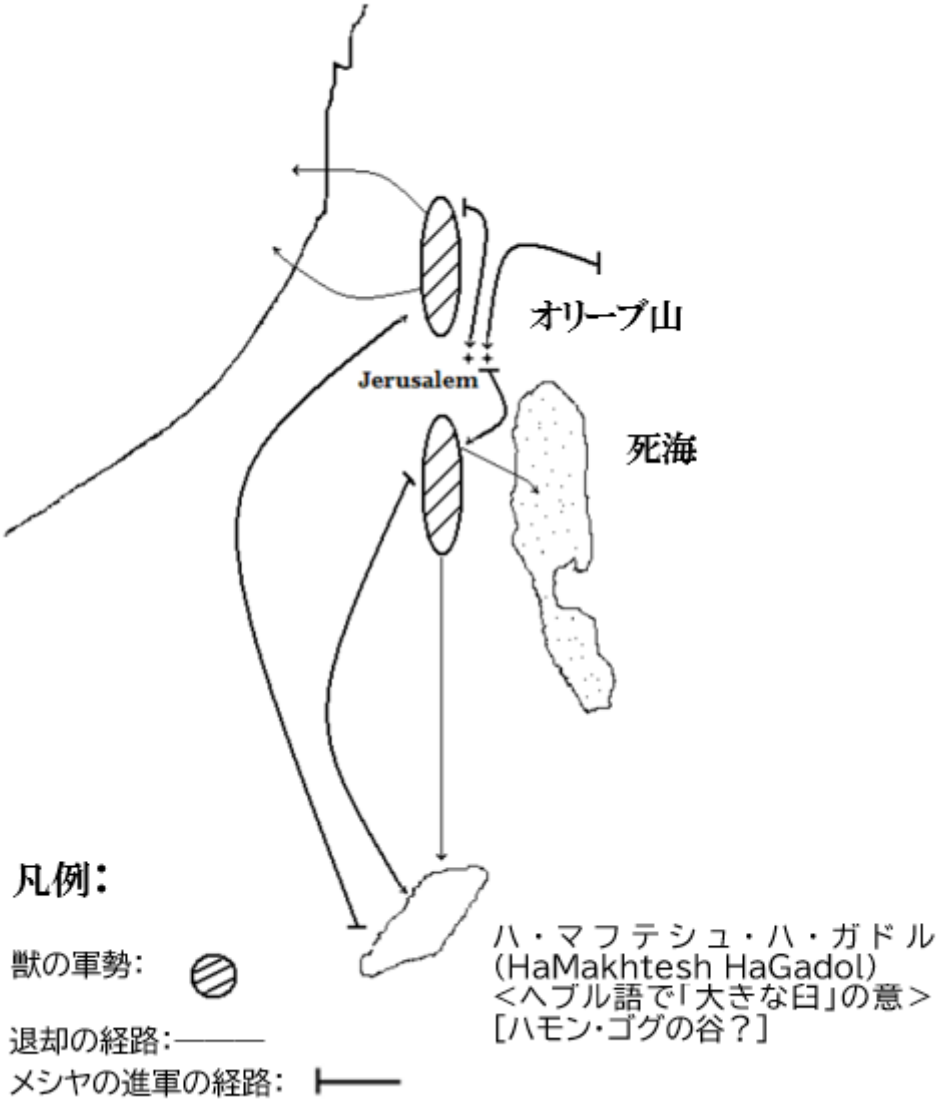
さらに別の者たちは、迫り来る恐怖から逃れようとして、エルサレムの南に広がるネゲブの荒れ果てた砂漠へと逃げ込みます。そこは人の住む地から遠く離れた、道もない不毛の地です。

エゼキエル書 39 章 11 節は、南側における殺りくの特定の集中地帯を示していると思われます。それは「ハモン・ゴグの谷」(すなわち「ゴグの群衆」)と呼ばれる場所であり、反キリストの兵士たちの遺骸を葬る地として定められ、地を儀式的汚れから清めるために用いられるとされています(エゼキエル書 39 章 12-16 節)。この、ぶどう踏み場

---

[80] 反キリストは、同じ理由によってダニエル書の中でも「北の王」と呼ばれています(ダニエル書 11 章 21-45 節)。私たちが今取り上げている箇所の前後の文脈、すなわちヨエル書 2 章 11 節では、いなごの描写から主の再臨を中心とするこの部分への急速な転換が見られます。これは、「主の日」という預言の枠組みにおいてよく見られる現象であり、私たちがこれまで「来たる艱難期」の研究の中で何度も確認してきたものです(第 1 部 第 IV 章 1 節 b 参照)。

（ワインプレス）のイメージと、この名の知られていない南部の谷の概念を結びつけると、一つの可能性として、これを現代のディモナ南方にある「大きなクレーター」（より文字通りには「大きな臼（うす）」）とみなすことができるでしょう。この地形は古代のぶどうの踏み場に似ており、その位置、方向、そして地形的特徴から見ても、獣の南側の軍勢の大部分が、この逃げ場のない殺戮の地にまっしぐらに突入し、死海へと突進して滅びた彼らの仲間たちと同じ運命をたどるという情景に、非常によく合致していると考えられます。以下の図は、メシヤの戦い――すなわちハルマゲドンの「ぶどうの踏み場」――について聖書が示している情報をまとめたものです。



ハルマゲドンの葡萄畑 ：

オリーブ山を真二つに裂き、エルサレムの住民の安全な退避を確保された後、主は「エルサレムの上を通られ」(イザヤ 31 章 4-5 節)、その守備者たちに勇気を吹き込み、攻め寄せる者たちの心には、激しい恐怖と混乱を植えつけられます。それから主は、裁きの戦いを開始されます。まず南へ向かい、南部の「ぶどうの踏み場」での殺戮を行い、その後、北へ転じて獣の軍勢の残りの部隊を討ち滅ぼされます。その間、恐怖に駆られた生き残りたちは狂乱状態で逃げ惑い、東と西の海へと追い込まれて死に至ります。こうして主は、空を翔ける裁きの戦いをエルサレムで締めくくられます。すべての敵を滅ぼされたのち、主はまことのメシヤとして神殿に座し、イスラエルと全世界を治められるのです。その祝福された千年の御国の時代が、ここから始まります。主の口から出る鋭い剣、霊感によって奮い立たされたユダヤの軍の反撃、その場に立ったまま肉が朽ち果てる者を打つ疫病、そして残る者たちを地中海と死海へと追い込む制御不能の狂気と恐慌――これらすべてによって、反キリストの軍勢は完全に滅ぼされます。生き残る者はひとりもいません。

> (12) ああ、多くの国々の騒ぎよ――その騒ぎは海の荒れ狂うようだ！ああ、諸国の民のどよめきよ――それは大水のとどろきのように鳴り響く！(13) たとえ民が押し寄せる水のとどろきのように鳴り響いても、主がこれを叱責されると、彼らは遠くへ逃げ去り、丘の上のもみがらのように風に吹き散らされ、嵐の前の草の実のように転がっていく。(14) 夕べには突然の恐怖が襲い、朝を迎える前に、**彼らは消え失せる。**これが、私たちを略奪する者の受ける分、私たちを奪い取る者に定められた報いである(イザヤ 17 章 12-14 節/NIV)

このようにしても主は、ハルマゲドンの殺戮によってイスラエルの地が完全に汚され、戦後に生きることができなくなるようなことがないようにされます。海や荒野に追い込まれず、また疫病で滅びなかった残りの敵の兵士たちは、全世界から天使によってこの目的のために召し集められた、死肉を食らう鳥たちの餌となります(エゼキエル書 39 章 1-5 節, 17-20 節; 黙示録 19 章 17-18 節参照)。その後、殺戮の残骸である死者の骨は、地を清めるために徹底的に取り除かれ、「ハモン・ゴグの谷」と呼ばれる、住民のいない地に埋葬されます。この軍勢は、人類史上かつて一箇所に集結した最大規模のものとなりますが、ほどなくして、何一つ残らなくなります。[81]

---

[81] 獣の海軍でさえ、この完全な破滅から免れることはできません(詩篇 48 篇 4-7 節〔ヘブル語聖書〕;イザヤ書 2 章 16-17 節参照;比較:詩篇 72 篇 10 節;イザヤ書33 章21-23 節, 43 章14 節)。

(7)そしてアリエルを攻めて戦う国々の群れ、すなわちアリエルとその城を攻めて戦い、これを悩ます者はみな夢のように、夜の幻のようになる。(8)飢えた者が食べることを夢みても、さめると、その飢えがいえないように、あるいは、かわいた者が飲むことを夢みても、さめると、疲れてそのかわきがとまらないように、シオンの山を攻めて戦う国々の群れもそのようになる。(イザヤ 29 章 7-8 節)

6.　悪者の屈辱と贖われた者の喜び

反キリストとその地上のすべての軍勢の完全な敗北と絶滅、またサタンとその軍団の敗北と彼らのこの世界からの除去(この点は本シリーズの次の第六部で扱われます)、さらにこの恐るべき勝利によって示される、神のすべての言葉と約束に対する主の正当化、そして真のメシヤとしてエルサレムの神殿に着座される主――これらすべての出来事は、残された悪しき者たちにとってはまったくの恐怖となります(黙示録 6 章 16-17 節; イザヤ 2 章 10-21 節; ホセア 10 章 8 節; マラキ 3 章 2 節; ルカ 21 章 25-27 節, 23 章 30 節)。また、獣に従うことを選んだ高慢な者たちにとっては、極度の屈辱となります(イザヤ 2 章 9-22 節, 5 章 15-16 節, 13 章 11-12 節, 23 章 9 節, 26 章 1-5 節; ゼパニヤ 3 章 11 節; マラキ 4 章 1 節; 第一サムエル 2 章 1-10 節; 第二サムエル 22 章 28 節; ルカ 1 章 51-53 節)。しかし、神の民にとってそれは、抑えきれない喜びと歓喜の時となります。聖書における多くの賛歌が、この大いなる「日々」のうちの「その来たる日」を待ち望んでいることによって、それが証しされています(詩篇 9 篇 7-8 節, 45 篇 1 節以降, 75 篇 1 節以降, 76 篇 1-3 節, 93 篇-100 篇; イザヤ 9 章 2-7 節, 12 章 1 節以降, 14 章 1 節以降, 25 章-27 章, 30 章 27-29 節, 35 章 1-9 節, 52 章 7-10 節)。

(1)万軍の主は言われる、見よ、炉のように燃える日が来る。その時**すべて高ぶる者と、悪を行う者**とは、わらのようになる。その来る日は、彼らを焼き尽して、根も枝も残さない。(2)**しかしわが名を恐れるあなたがた**には、義の太陽がのぼり、その翼には、いやす力を備えている。あなたがたは牛舎から出る子牛のように外に出て、とびはねる。(3)また、あなたがたは悪人を踏みつけ、わたしが事を行う日に、彼らはあなたがたの足の裏の下にあって、灰のようになると、万軍の主は言われる。(マラキ 4 章 1-3 節)

いまや、柔和な者たちが地を受け継ぐ時が来ました(マタイ 5 章 5 節; 詩篇 37 篇 11 節; ゼパニヤ 2 章 1-3 節)。そして、主イエス・キリストの驚くべき祝福に満ちた千年王国の統治は、激しい感情の奔流のうちに始まります。なぜなら、この世のあり方――そ

れがこれまで常であったように――が、いまや完全に覆されるからです(第二ペテロ 3 章 3-13 節)。多くの「先の者」が「後」となり、「後の者」が「先」となります。これは、神に逆らう悪しき者たちへの報いの約束が、ついに現実のものとして成就することを意味します(マタイ 19 章 30 節, 20 章 16 節; マルコ 10 章 31 節; ルカ 13 章 30 節)。一方で、謙遜と真理をもって神を求める者たちは、「われらと共におられる神」、すなわち救い主ご自身が義によって世を治められるその中で、安らぎと救い、そして喜びを経験するのです(イザヤ 51 章 14 節; 61 章 1-3 節)。

> (14)彼らは声を上げ、喜びの叫びをあげます。西の方から、主の威光をほめたたえます。(15)それゆえ、東の方でも主に栄光を帰し、海の島々において、イスラエルの神、主の御名をあがめなさい。(16)地の果てから、私たちはこの歌声を聞きます――「義なる方に栄光あれ」と。(イザヤ 24 章 14-16 節前半 NIV 準拠訳)

獣の驚くべき力と、そのあらゆる暴虐にもかかわらず、また、この傷ついた世界をおよそ六千年にわたって支配してきた獣の父である悪魔の苛酷な統治にもかかわらず、ついにその日が来ました――彼らのすべての要塞が崩れ落ちた日です(イザヤ 30 章 25 節; 31 章 9 節; ダニエル 11 章 38-39 節; ゼパニヤ 1 章 16 節; 3 章 6 節, 15 節; 参照: イザヤ 2 章 15 節; 23 章 11-14 節; 25 章 2 節, 12 節; アモス 1 章 10 節; 6 章 8 節; オバデヤ 1 章 3 節; ミカ 5 章 11 節; ゼカリヤ 9 章 3 節)。それは、私たちが主のために生きることができるように、私たちのために死んでくださったお方――その御手によってもたらされた勝利でした。

> (24)万軍の主は誓われた。「必ず、わたしが計画したとおりに事は起こり、わたしが定めたとおりにそれは立つ。(25)わたしはわが地でアッシリアを打ち砕き、わが山々の上で彼を踏みにじる。そのくびきはわが民から取り除かれ、彼らの肩から重荷は取り去られる。」(26)**これこそ、全世界のために定められた計画であり、すべての国々の上に伸ばされた御手である。**(27)万軍の主が御心に定められたことを、いったい誰がくつがえすことができようか。伸ばされたその御手を、誰が引き戻すことができようか。(イザヤ 14 章 24-27 節/NIV; 箴言 21 章 30 節参照)

[続く:来たる艱難期　第六部:　最後の出来事:千年王国と新エルサレム]

＜日本語のファイルは　https://darktolight.jp/ichthys/に掲載されています＞